バカと義弟と召喚獣

グラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと義弟と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ４０８２Ｔ

【作者名】
グラン

【あらすじ】
ある事件により家族を失い、心に深い傷を負った少年。
親戚である吉井家に引き取られて明久の義弟となり毎日を過ごしていくが、彼は今もなお苦しみ続ける。
少年が救われる日はくるのでしょうか？

プロローグ（前書き）

はじめまして、作者のグランです
他の方々の作品を見ているうちに自分でも書いてみたくなり投稿しました
僕は小説を書くのは初めてなので見苦しい駄文になってるとは思いますが、
まぁ読んでやってください・・・

プロローグ

文月学園始業式当日

ＳＩＤＥ和也

僕らは全力で走っていた
和也「兄さんがなかなか起きないからまた遅刻じゃないか！」
明久「ごめんごめん、明日から気をつけるよ」
和也「もう・・そのセリフ何度目だよ！」
明久「え～と・・・」
和也「数えなくていいから！！」

鉄人「遅刻だぞ！吉井兄弟！」
和也「すいません、おはようございます、西村先生」
明久「おはようございます、鉄Ｊ・・・西村先生」
鉄人「おい兄の方、今、鉄人と言わなかったか？」

言いましたよ

明久「気のせいですよ」

気のせいじゃないです

鉄人「まぁいい、振り分け試験の結果だ」
和也「僕は見なくてもわかりますけどね」
鉄人「まぁそうだが一応決まりなんでな、
しかし残念だったな、欠席でなければ確実にＡクラスだったのに」

振り分け試験の日はインフルエンザで欠席だったんだよね

和也「しかたないですよ、体調管理を怠った僕の責任ですから・・
　ところで兄さんは何クラスだったの？」

明久「今から開けるとこ、結構手ごたえあったから、ＢかＣじゃないかな？」

それはない！よくてもＤかＥだと思うよ。

まぁ多分・・・

『吉井明久Ｆクラス』
『吉井和也Ｆクラス』

・・・やっぱり・・

明久「バカな！！何かの間違いだ！！」

鉄人「間違いじゃない、お前はＦクラスだ」

明久「おかしいなぁ、結構埋めたはずなのに・・・」

その埋めた答えが違ったら意味ないんだよ・・

鉄人「じゃあ問題だ、三権分立は司法と立法もう一つは何で成り立つか？」

明久「え～と、憲法か漢方のどっちかだったはず・・・」

和也「行政だよ」

鉄人「さっさと教室へいけ！！このバカ者が！！」

Ｆクラスかぁ

知ってる人がいたらいいなぁ

主人公設定（前書き）

見切り発車なので、途中でネタが尽きて更新が遅くなるかもしれません
まぁできるだけ頑張りますが・・・
あと、昼頃の更新が多いと思いますが、
作者の仕事が夜勤というのが原因です。
ニートではありませんので、勘違いしないで下さいね

主人公設定

吉井　和也

身長１５１ｃｍ　体重４０ｋｇ

誕生日３月２６日

特技　空手　合気道

好きなもの　友達　家族

苦手なもの　水泳

容姿　童顔で中性的な顔立ちで小柄なのでよく中学生（女子）と間違われる
髪型は秀吉のを少し短くした感じで髪の色は茶色
二つ名は『伝説のショタ娘』（男の娘＋ショタ＝ショタ娘）

小説の主人公
６歳のときにある事件で家族を失い、親戚の吉井家に引き取られる
文武両道で学力は翔子と主席争いをするレベル
記憶力に自信があるので、暗記系の教科が得意。
武術は二度と家族や友人を失いたくないという思いから始める。
腕前はかなりの物で、空手の組み手で一度だけ鉄人に勝った事がある
また、相手の雰囲気でなんとなく強さがわかる為、
木下姉弟を一瞬で見分けることが可能。

性格は温厚で明るく誰にでも分け隔てなく優しいので、かなりモテるのだが、
義兄（明久）以上の鈍感の為全く気づいていない
本気で怒ると口調が変わる、「とても怖いです」（ＢＹ明久）

召喚獣は、羽織袴に刀という、ブリーチの死神のような服装
腕輪の能力は「瞬間移動」
点数の消費は移動距離１０ｃｍにつき３０点

主人公設定（後書き）

主要キャラとの出会いについてはいずれ書こうと思います

第一問

ＳＩＤＥ和也

明久　「何だろう、このばかでかい教室は」
和也　「これがＡクラスみたいだよ」

でも、こんなに広い必要はあるのかな？
逆に不便なんじゃ・・・
ノートパソコンに個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート
いったいいくらするんだろう？

？　「・・・クラス代表の霧島翔子です。よろしくお願いします」

あっ、翔子さんだ、やっぱり代表はあの人だったんだ。
よく見ると優子さんと利光君もいる
みんなＡクラスかぁ
あれ？瑞希さんがいないような・・・

明久　「そろそろ教室に行こうか？」
和也　「そうだね」

明&和　「・・・・」
明久　「・・・何だろう、この廃屋は・・・」
和也　「兄さん、目に見える現実から逃げないで、これがＦクラス
みたいだよ」
明久　「いくらなんでも差をつけ過ぎじゃないかな？」

和也　「仕方ないよ、それより早く中に入ろう？ただでさえ遅刻してるんだし・・・」
明久　「そうだね」

ガラッ

明久　「すいません、ちょっと遅れちゃいました♪」
？　「早く座れ！このウジ虫やろ・・・」
和也　「あっ、雄二君。おはよう」
雄二　「あ、ああ　おはよう。で？何で和也がいるんだ？」
和也　「兄さんから聞いてないの？僕は試験の日インフルエンザで欠席だったからFクラスだよ」
雄二　「そうだったのか？そりゃ災難だったな」
明久　「ところで雄二は何やってるの？」
雄二　「ん？いたのか？ウジ虫」
明久　「酷いっ！」
雄二　「冗談だ、先生が遅れてるんで代わりに教壇に上がってみた。一応オレがクラス代表だからな」

兄さん達が話してる間に知ってる人でも探そうかな？
え～と・・・秀吉君だ、康太君もいる。
他には、・・・あっ美波さんだ。帰国子女だし、漢字が読めなかったのかな？
・・・？なんか元気がないなぁ・・・声かけてみようかな？

ＳＩＤＥ美波

美波　「・・・はぁ・・・」

頑張ったのに結局Fクラスかぁ
アイツは多分Aクラスよね・・・
同じクラスになりたかったなぁ・・・

？「・・波・・ん？」

でもよく考えたら、ウチの学力じゃAクラスなんて夢のまた夢よね

？「・・波さ～ん？」

もう話す機会もないのかな？
・・・・・・・・・・うぅ

和也「ちょ、美波さん！？」
美波「ふぇ？」
和也「どうしたの！？なんで泣いてるの！？」
美波「えっ？えっ？」

え！？なんで！？どうして和也がここにいるの？

美波「☆○■▽♪×！！」
和也「と、とりあえず落ち着いて！」

☆　数分後☆

和也「落ち着いた？」
美波「・・・うん・・・」

泣いてるとこ見られちゃった・・・はずかしいなぁ・・・

・・・・・・・・・って！

美波　「そんなことよりなんで和也がここにいるのよ！？Ａクラスでしょ！？」

和也　「美波さんも兄さんから聞いてないんだね？僕は試験の日に欠席したから無得点扱いでＦクラスだよ」

美波　「そうだったんだ・・・・・・（よかった）」

和也　「？何か言った？」

美波　「な、何でもないわよ。／／／」

和也　「？まぁいいや、それより何で泣いてｔ」

美波　「忘れなさい！」

和也　「え？いや、でも・・・」

美波　「わ・す・れ・な・さ・い」

和也　「・・・はい」

美波　「よろしい」

和也　「ちなみに兄さんもこのクラスだよ」

美波　「でしょうね、アキはバカだし」

和也　「あはは、ひどいなぁ」

だってアキだし・・・

和也　「まぁ、今年一年よろしくね♪」ニコ

美波　「う、うん。よろしく／／／」

とりあえず今年は騒がしくなりそうね

第二問

ＳＩＤＥ和也

美波さんは元気になったみたいでよかった
最後ちょっと顔が赤かったけどどうしたんだろう？
何でもないって言ってたけど・・・大丈夫かな？
・・・そういえば僕の席はどこだろう？

和也　「雄二君、僕の席どこ？」
雄二　「空いてるところに適当に座ればいい」

自由席ですか！？

明久　「和也？何してんの？早く座りなよ」
和也　「う、うん」

あれ？この状況がおかしいと思ってるの僕だけ？
・・・兄さんの後ろでいいや
（ガラッ）
あっ先生が来た

？「え～Ｆクラス担任の福原です。よろしくお願いします」

ん？普通黒板に名前を書くものじゃ・・・
あぁチョークがないのか・・・

福原　「皆さんにはちゃぶ台と座布団が支給されてます。設備に不備があれば申し出てください」

F　「僕の座布団に綿が入ってないです」

それってただの布なんじゃ・・・

福原　「我慢してください」

えぇ～！？

F　「ちゃぶ台の足が折れてます」

それじゃ勉強できませんね

福原　「木工用ボンドが支給されてますので後で自分で直してください」

いやいや替えてあげましょうよ

F　「窓が割れていて風が寒いんですけど」

冬はつらいですね

福原　「わかりました。ビニール袋とセロハンテープを用意します」

・・・・・

福原　「必要なものは極力自分で調達してください」

・・・ではなぜ設備に不備はないかと確認したんですか？

福原　「では自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願い

します」
？「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

あれは秀吉君ですね、優子さんじゃありませんよ。
見た目はそっくりですが、『気』がまるで違います

秀吉　「・・・というわけじゃ。よろしくたのむぞい」

っと終わったみたいですね、次は・・・

？「・・・・・・土屋康太」

名前だけ！？短すぎませんか！？
そういえばこのクラス女子はいないんですかね？
って、美波さんがいましたね

美波　「・・・・・です。日本語の読み書きは苦手です」

噂をすればってやつですね

美波　「趣味は吉井兄弟を弄ることです」

・・・その趣味は今日限りでやめてください・・・

美波　「はろはろ～和也、アキよろしくね」
明久　「・・・あぅ。み、美波」
和也　「よろしく」

兄さん、顔色が悪いですよ
あっ兄さんの番だ

明久　「吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでください
いやです

F『『『ダーリン！！！』』』

・・・乗りの良い人たちですね～

明久　「・・・忘れてください、とにかくよろしくお願いします」

後悔するならやらなきゃいいのに・・・
っと僕の番だ

和也　「吉井和也です。先ほど紹介のあった吉井明久の弟です。兄弟共々よろしくお願いします」

まぁこんなものかな？

F　「すいません、質問いいですか？」
和也　「？はい、何ですか？」

何だろう？兄弟なのに外見が似てない事かな？
血が繋がってないから当然なんだけど、ちょっと説明しにくいな・・・
・

F　「彼氏はいますか？」

・・・・・・・・・・・・・・はい？？？？

和也　「・・・・僕は男です」
F　『『『なにぃ～！！！！』』』

いやいやいや、『なにぃ～』じゃないでしょう！？
名前『和也』だって言ったじゃん。
和也って名前の女の子みたことあります？？？

F　「なんてことだ」
F　「クラスに女の子が一人もいないなんて・・・」

いや、美波さんがいますから・・・・
・・・ってかさっきからこっちを睨んでますからそれ以上言わないでください
でも女の子は美波さんだけですか？
ちょっとかわいそ（ガラッ）
？誰か来ましたね？

？　「あの、遅れてすいません」

第三問（前書き）

基本的に和也の視点で物語は進みます
読んでくれた方々、評価してくれた方々本当にありがとうございます

第三問

ＳＩＤＥ和也

？「あの、遅れてすいません」

Ｆ　『『『えっ？』』』

みんな驚いてますね？

まぁ無理もないでしょうね

だって・・・

福原　「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

瑞希　「は、はい！姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

成績は常に上位一桁以内の美少女がＦクラスにいるんですから・・・

Ｆ　「はいっ！質問です！」

瑞希　「あ、は、はいっ。なんですか？」

・・・また「彼氏はいるんですか？」とか聞くんじゃないでしょうね？

Ｆ　「なんでここにいるんですか？」

・・・それはそれで聞きようによっては失礼な質問ですよ？

まぁ気持ちはわからんでもないですが・・・

でも、ここにいる理由も大体想像つきますよ？

さっきAクラスを覗いたときに姿が見えなかったですし、彼女の成績なら少々調子が悪くてもBクラスまで落ちるとは思えません。となると僕と同じで欠席か途中退席して無得点扱いってことじゃないですかね？

瑞希　「そ、その・・・振り分け試験の最中に、高熱を出してしまいまして・・・」

F　『『『あぁ、なるほど』』』

予想通りでしたね

F　「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

確かに化学で出ましたが中学生レベルの問題でしたよ？

F　「あぁ。化学だろ？アレは難しかったな」

マジですか！？

F　「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

だったら試験なんて受けてないで、病院に行ってあげてください

F　「黙れ一人っ子」

嘘なんですか！？そんな不謹慎な嘘つかないで下さい！！

F　「前の晩、彼女が寝かしてくれなくて」

試験前日に何をしてるんです！？まだ高校生なんですから、節度と

いうものを・・・

F　『『『異端者は殺せー！！！』』』

いや、そこまで怒らなくても・・・

F　「嘘です！調子こきました！すいませんでした！」

また嘘ですか！？後悔するなら何も言わなきゃいいのに・・・

瑞希　「で、ではっ、一年間よろしくお願いします！

あっ、こっちに来た
僕らの席の近くですね

瑞希　「き、緊張しましたぁ～」

・・・なるほど、成績優秀、容姿端麗、温厚な性格。
兄さんが好きになる気持ちもわかりますね。
仕草も女の子っぽくてとても可愛らし・・・？
・・・・！！殺気！？（キョロキョロ）

美波　「！！」（ササッ）

？？誰かに睨まれてた気がするんですが気のせいでしょうか？

明久　「あのさ、瑞・・・」
雄二　「姫路」

タイミングが悪かったね

瑞希　「は、はい。何ですか？えーっと・・・」
雄二　「坂本だ。坂本雄二。一応クラス代表だ、よろしく頼む」
瑞希　「あ、姫路です。よろしくお願いします」

僕も挨拶しておこう

和也　「久しぶり、瑞希さん。僕のこと覚えてる？」
瑞希　「か、和也くん！？なんでここに？」
和也　「理由はだいたい瑞希さんと同じだよ、欠席したからFクラス。ちなみに兄さんもいるよ」
瑞希　「えっ！ど、どこですか！！」（キョロキョロ）
和也　「雄二君の隣」
明久　「久しぶり、瑞希ちゃん」
瑞希　「あ、明久君！！！」

驚きすぎでは？

雄二　「姫路。明久がブサイクですまん」

言い過ぎでは？

瑞希　「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・」

必死ですね～
ってか、この二人多分両思いですよね～
ついに兄さんにも春が来ましたか（ニコニコ）
・・・！！また殺気！？（キョロキョロ）

美波　「！！」（ササッ）

？？？気のせいかな？今、美波さんがこっちを見てたような・・・

雄二　「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしてるかもしれないな。おれの知人にも明久に興味を持っている奴がいた気がするし」

雄二君が兄さんをフォロー？いや、それだけはありえない！

・・・！まさかあれを言うつもりか！？

明久　「え？それって誰・・・」

瑞希　「そ、それって誰ですか！？」

瑞希さん必死だね。そして兄さん、聞かないほうがいいと思うよ

雄二　「確か、久保・・・利光だったかな」

・・・あーあ、言っちゃった。

雄二　「九割本気の軽い冗談だ、安心しろ」

それってほとんど本気じゃないですか、安心できませんよ

明久　「もう僕、お婿にいけない・・・」

兄さん泣いてるし・・・まぁすぐ立ち直るだろうけど・・・

雄二　「ちなみに、弟の和也に興味を持ってる奴等も知ってるぞ」

おっと、矛先がこっちにきましたね
僕なんかに興味を持つ人なんて男にも女にもいるわけないですよ
さてさてどんな『落ち』を見せてくれるのでしょうか？

美波　「それって誰よ！！」
和也　「うわぁ！」

美波さん、いつの間に僕の背後に！？僕の背後を取るとは・・・
なかなかやるじゃないですかｗｗ
ってかずいぶん喰いついてきましたね？まぁ年頃の女の子ですし、
この手の話題には敏感なのかもしれませんね

雄二　「あ、ああ。えーとまずはＡクラ・・・」
福原　「はいはい。そこの人達、静かにしてくださいね」

（バキッ！バラバラバラ・・・）↑教卓が崩れた音

福原　「え～・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」
瑞希　「あ、あはは・・・」
明久　「・・・ねぇ雄二。ちょっといい？」
雄二　「ん？なんだ？」
明久　「ここじゃ話しにくいから廊下で」
雄二　「別に構わんが」

兄さんが雄二君連れて外に出て行きましたね？何かあったのでしょうか？
言ってくれれば僕にできることなら協力するのに・・・

美波　「ちょ、待ちなさいよ坂本！質問に答えなさい！」
和也　「まぁまぁ美波さん、落ち着いて」
美波　「う、うん・・・って、あんたのことでしょうが！気にならないわけ！？」
和也　「きっと、何かの間違いか冗談だよ、僕なんかに興味を持つ人なんているわけないよ」
美＆瑞＆Ｆ「・・・・・・（に、鈍い）」

？何だろう？みんなの視線が痛い・・・

第三問（後書き）

自己紹介を引っ張りすぎですかね？
できれば今日中にもう一話位投稿したいと思います

第四問（前書き）

何とか投稿できました
今回は原作主人公のあの人の視点で進めます

第四問

ＳＩＤＥ明久

雄二　「んで、話って？」
明久　「この教室についてなんだけど・・・・」
雄二　「Ｆクラスか。想像以上に酷いもんだな」
明久　「だよね。Ａクラスの設備は見た？」
雄二　「ああ。すごかったな。まるで高級ホテルだ」
明久　「そこで提案なんだけど、Ａクラス相手に『試召戦争』をやってみない？」
雄二　「そうくると思ったよ。目的は姫路の為か？」
明久　「う、うん。それもあるけど・・・」
雄二　「？・・あぁ、和也か？」
明久　「うん。たまたま試験の日にインフルエンザにかかっただけでＦクラスなんてあんまりだよ。ただでさえ人一倍辛い目にあってるのに・・・」
雄二　「まぁ、な・・・」
明久　「でしょ？だからさ」
雄二　「落ち着けよ。お前に言われるまでもなく、俺自身Ａクラス相手に試召戦争をやろうと思っていたところだ」
明久　「え？雄二も？何で？」
雄二　「世の中学力が全てじゃないってことを証明したくてな。勝つ為の作戦も考えてある・・・おっと先生が戻ってきた。教室に入るぞ」
明久　「あ、うん」

福原　「それでは、自己紹介の続きをお願いします」
？　「須川亮です。趣味は・・・・」

・・・皆、淡々と自己紹介をしていき、雄二の番になった。

雄二　「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

じゃあバカ雄二と呼ぼうかな？

雄二　「さて、皆に一つ聞きたい。周りを見渡してこのクラスの設備を確認してくれ」

かび臭い教室、綿が入ってない座布団、足の折れたちゃぶ台に割れた窓。

よくここまで酷い設備を揃えたものだね

雄二　「Aクラスは冷暖房完備の上に座席はリクライニングシートらしいが・・・不満はないか？」

F　『『『大ありじゃぁっ！！』』』

２－F生徒の魂の叫び

乗りのいい人たちだなぁ

坂本　「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ」

F　「いくら学費が安いからと言ってこの設備はあんまりだ」

F　「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる」

みんな不満があるようだが、もっと勉強すればよかったとかは思わないのだろうか？

・・・思わないだろうな。そんな常識のある奴ならこんなとこにい

ないだろうし・・・

雄二　「みんなの意見はもっともだ。そこで代表としての提案だが・・・Ｆクラスはａクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う」

そう言って雄二は戦争の引き金を引いた。

第四問（後書き）

前話で中途半端なところで切ったので、少し短くなりましたね
次話は明日更新予定です。

第五問

ＳＩＤＥ和也

雄二君が戦争の引き金を引いた
さっき兄さんと廊下でコソコソ話してたことと関係あるのかな

Ｆ　「勝てるわけない」
Ｆ　「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」
Ｆ　「姫路さんと和也ちゃんがいたら何もいらない」

まぁ誰だって勝てないと思うよね
当然の反応で・・・・
・・・ってちょっと待て！誰が和也ちゃんだ！

雄二　「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」
Ｆ　「何を馬鹿なことを」（ザワザワ）
Ｆ　「できるわけないだろう」（ザワザワ）
Ｆ　「何の根拠があってそんなことを」（ザワザワ）

ん～、騒がしくて話どころじゃないですね
フォローしてあげようかな

和也　「まぁまぁ、皆さん。雄二君にも考えや根拠があるはずですからまずは聞いてみましょうよ。反論はそれからでも遅くないでしょう？」
Ｆ　『『『了解です！！』』』

・・・ずいぶん聞き分けがいいですね?それと先ほどから寒気がするんですが気のせいでしょうか?

雄二　「ナイスフォローだ。いま和也が言った通り根拠ならある、今からそれを説明してやる」

ずいぶん自信があるようですね

雄二　「おい、康太。姫路のスカートを覗いてないで前に来い」
康太　「・・・・・!!(ブンブン)」
瑞希　「は、はわっ」

・・・相変わらずですね康太君。
それにしても瑞希さんの仕草はいちいち可愛らしい・・・
・・・・!!またまた殺気!?(キョロキョロ)

美波　「・・・」(じとぉー)

?美波さんが睨んでる。スケベは女の敵ってことでしょうか?
でも、なぜ僕を睨むんです!?

雄二　「土屋康太。こいつがあの有名なムッツリーニだ」
康太　「・・・・・!!(ブンブン)」

確かに康太君は有名ですよ
悪いほうの意味で・・・

F　「ムッツリーニだと・・・・?」
F　「馬鹿な、ヤツがそうだというのか・・・・?」
F　「だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうと

してるぞ・・・」
F　「ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ・・・」
瑞希　「???」

瑞希さんはよくわかってないみたいですね?
いっそ知らないままの方がいいと思いますよ

雄二　「次に姫路瑞希。彼女の実力はみんなだって知ってるはずだ」
瑞希　「えっ?わ、私ですかっ?」
雄二　「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」
F　「そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった」
F　「彼女ならAクラスにも引けをとらない」
F　「ああ。彼女さえいれば何もいらないな」
F　「姫路さんもいいが、俺は和也ちゃんの方が・・・・」

確かに瑞希さんがいればAクラス相手でもそれなりに・・・
・・・イヤイヤイヤ、マテマテマテ。
最後のセリフはおかしいぞ?なんで僕が出てくるの!?僕は男だよ!?

雄二　「次に島田美波。」
美波　「・・・」（じとぉー）
雄二　「島田、和也の方見てないで、俺の話を聞いてくれ」（ニヤニヤ）
美波　「ふぇ!?ち、違うわよ!ちょっとぼんやりしてただけで、別に和也の方なんて見てないんだから!!」

まだこっちを睨んでたんですか?
ってか僕何か悪いことしました?

雄二　「島田は帰国子女で漢字の読み書きが苦手でFクラスにいるが、数学ならBクラス並だ」

F　「Bクラス並だと！？」

F　「それだけあれば十分な戦力だな」

F　「バカな！？このペッタンコにそんな実力が・・・」（グシャ）

あーあ、最後の人は死にましたね

全く女性の魅力は胸だけではないというのに・・・・

雄二　「木下秀吉だっている」

秀吉　「ワシもか？」

あれ？秀吉君ってそんなに成績良かったっけ？

まぁ兄さんほど悪くないだろうけど・・・

雄二　「当然俺も全力を尽くす」

F　「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

F　「坂本って小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

F　「それじゃあAクラスレベルが二人もいるってことだよな！」

皆の士気が最高値まで上がった

雄二　「それに、吉井明久だっている」

（シーン）

そして最低値まで下がった

明久　「このバカ雄二！なんでせっかく上がった士気を下げちゃう

のさ!?」
F　「誰だよ、吉井明久って」
F　「聞いたことないぞ」
雄二　「そうか。知らないなら教えてやる。こいつの肩書きは観察処分者だ」

あーあ、言っちゃった

F　「・・・それってバカの代名詞じゃなかったっけ?」

よく知ってますね。その通りです

明久　「ち、違うよっ!ちょっとお茶目な16歳につけられる愛称で・・・」
雄二　「そうだ。バカの代名詞だ」
明久　「肯定するな、バカ雄二!」

否定するのはかなり難しいよ

瑞希　「(和也君)」
和也　「(何)」

なんで小声で話すんだろう?
雄二君の話を邪魔しない為かな?

瑞希　「(観察処分者ってどういうものなんですか?)」
和也　「(簡単に言えば教師の雑用係だよ、力仕事とかを特例として物に触れるようになった召喚獣でこなすんだ)」

瑞希　「(そうなんですか、明久君凄いです)」(キラキラ)

瑞希さんの目がキラキラ輝いてる・・・
フィードバックについてまだ説明してなかったんだけど・・・
まぁいいか、どうせすぐ知ることになるだろうｓ・・・
・・・・（ゾクッ）！！な、何だこの寒気は！？（チラッ）

美波　「・・・・・」（ゴゴゴゴゴゴッ）

な、なんだあのドス黒いオーラは！？
西村先生以上の『気』を感じるぞ！！
って、なんでそんな激しい殺気を僕に向けるの！？
気づかないうちに何かしたのかな？
・・・・・今日生きて帰れるかな・・・

雄二　「まあ、こいつはいてもいなくても同じような雑魚だ」
明久　「酷いっ！！」
雄二　「だが、弟は雑魚じゃない。前に出ろ和也」
和也　「あ、うん」
Ｆ　「あっ！和也ちゃんだ」

和也ちゃん言うな！

雄二　「吉井和也。こいつの実力を知ってる奴はいるか？」
Ｆ　「さぁ？」
Ｆ　「？どっかで聞いたような・・・」
Ｆ　「たとえバカでも可愛いければそれでいい」

ほとんどの人は知らないみたいだね
基本女子にしか興味ないみたいだし・・・・
・・・最後の奴に関してはもうツッコミませんよ・・・

雄二　「ほとんどが知らないようだな、ならばこいつの『二つ名』を教えてやる！」

二つ名？何それ？僕、当事者なのに知らないんだけど・・・
どうせ変なあだ名みたいなもんだろうけど・・・
・・・もう何て言われてもツッコミませんよ

雄二　「こいつが『伝説のショタ娘』だ！！！
Ｆ　「「「な、何だってー！！！」」」

（ブチッ）
ちょっと待て！！！なんだそのふざけた呼び名は！？
僕は伝説になった覚えはないし、ショタでも娘でもねぇ！！！

Ｆ　「あの霧島翔子を倒して主席の座を奪った奴か！？」
Ｆ　「組み手で鉄人相手に圧勝したとも聞いたぞ！？」

尾びれ背びれ付き過ぎだよ。
翔子さんには負け越してるし、西村先生には最初の一戦で向こうが様子見で油断してるところに、たまたま一本決めただけだし、勝ったのはその一回だけ。
・・・ふぅ、だいぶ落ち着いてきたぞ・・・

Ｆ　「実は飛び級した小学生だとか」
Ｆ　「見た目は子供、頭脳は大人ってやつか」
Ｆ　「念じるだけで性転換できるって聞いたぞ」
Ｆ　「永遠にあの姿から成長せずに一生を過ごすらしいぞ」

んなわけねーだろうが！！！

特に最後の奴はゆるさねぇ!!
人の一番気にしてること言いやがって!!!

明久　「ちょ、ちょっと皆。そろそろやめてよ。和也がキレちゃうよ」
和也　「大丈夫だよ兄さん、僕は怒ってないよ」

落ち着け、落ち着くんだ吉井和也

雄二　「脱線したが、こいつは暗記が得意で日本史と世界史は学年トップだ」
F　「これなら勝てるんじゃないか?」
雄二　「まずはDクラスを征服しようと思う。明久、Dクラスに宣戦布告して来い」
明久　「・・・下位勢力の使者ってたいてい酷い目に遭うよね?」

そうだね

和也　「じゃあ僕が行こうか?」
雄二　「いや、和也がいることはできるだけ隠したい」

まぁ、いずればれると思うけどね

明久　「・・・わかった。行ってくるよ」
雄二　「?ずいぶん素直だな?」
明久　「だって僕が行かなきゃ和也が行くんでしょ?そんなの危ないよ!」
雄二　「・・・そうだな、(相手が)危ないな」

二人ともやさしいなぁ

和也　「じゃあ気をつけてね」

明久　「うん、行ってきます」

さて、回復試験の準備しなくちゃ

第六問（前書き）

お気に入り登録１０件突破
皆様ありがとうございます

第六問

ＳＩＤＥ和也

さて、兄さんが戻ってくるまでちょっと勉強しとこうかな
戦争始まったら回復試験受けなきゃいけないし・・・

美波　「姫路さん、ちょっといいかしら？」
瑞希　「あ、はい。なんですか？」

美波さんに連れられて瑞希さんが外に出て行った
女の子同士交流を深めようってことかな？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ美波

・・・和也との関係を知りたくて呼んだのはいいけどなんて聞けばいいんだろ？
・・・・よし、率直に聞いてみよう！！

瑞希　「あの、島田さん？話って何ですか？」
美波　「え？え～と、・・・Ｆクラスには女子がウチと姫路さんしかいないから、女の子同士仲良くしたいな～って思って」

ウチのバカ！根性なし！

瑞希　「そうだったんですか。あ、わたしのことは瑞希って呼んでください」
美波　「じゃあウチのことも美波って呼んで」
瑞希　「はい。よろしくお願いします。美波ちゃん」
美波　「よろしくね。瑞希」

ライバル（？）と仲良くなってしまった・・・
き、聞いてみようかな？

美波　「あ、あのさ、和也とアキとは仲いいの？」
瑞希　「ふぇ！？え、え～と、二人とは小学校の頃から幼馴染で・・・その・・・」
美波　「・・・・・す、好きなの？」
瑞希　「・・・・・は、はい・・・」

終わった・・・成績が良くて、可愛くて、胸が大きくて・・・
ウチが勝ってるところなんて何一つないじゃない・・・

瑞希　「あの・・・ひょっとして美波ちゃんも？」
美波　「・・・うん・・・」

勝ってるとこがないかもしれないけど
でも・・・

美波　「・・・ない」
瑞希　「？？」
美波　「絶対負けない！ウチだって和也のことが好きなんだから！！」
瑞希　「えっ？和也君？」
美波　「・・・・へ？」

美波　「じゃあ、瑞希は和也じゃなくてアキが好きなの？」
瑞希　「は、はい／／／」

そっか、和也じゃなかったんだ・・・よかった
・・・ってか、さっき和也が好きって言っちゃったけど誰にも聞かれてないかな？
うぅ～思い出したら恥ずかしくなってきた

瑞希　「美波ちゃんは和也君が好きなんですね？」
美波　「・・・うん・・・／／／」

瑞希＆美波「・・・／／／」

瑞希　「そ、そろそろ教室に戻りましょうか」
美波　「そ、そうね」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ和也

あっ美波さんと瑞希さんが戻ってきた
？二人とも顔が赤いけどどうしたんだろう？
それにしても兄さん遅いなぁ

明久　「・・・た、ただいま」

・・・ボロボロだね。やっぱり僕が行けばよかったかな?

瑞希　「明久君、大丈夫ですか?」

明久　「うん、大丈夫。ほとんどかすり傷」

微笑ましい光景ですね

雄二　「明久、宣戦布告はしてきたな?」

明久　「うん、午後2時から開戦予定と告げてきたけど」

雄二　「そうか。丁度昼時だし、飯で食いながらミーティングするか」

明久　「じゃあ屋上にでも行こうか」

そう言って皆ぞろぞろと出て行った

美波　「和也?何してんの?早く行くわよ」

和也　「あ、うん」

美波さんまだいたんだ。待っててくれたのかな?

和也　「はい、兄さん。お弁当」

明久　「ありがとう」

瑞希　「明久君のお弁当って和也君が作ってるんですか?」

和也　「うん、そうだよ」

美波　「へ~和也って料理できるんだ」

雄二　「料理どころか家事は全部和也がやってるよな？」
和也　「まぁそうだね」
秀吉　「明久も少しは手伝わなきゃだめじゃぞ」
明久　「そうなんだけど、和也がしっかりやってくれるものだからつい・・・仕送りのお金の管理も和也がやってるし・・・」

ちなみに僕と兄さんは二人暮らしですよ

美波　「普通お金の管理は兄であるアキがやるものじゃないの？」
和也　「最初の一月はそうだったんだけど・・・兄さんが食費のほとんど趣味に使って、食事が水と塩になった」

雄&秀&康&美&瑞「・・・・・・・・・」

和也　「辛かった・・・死ぬかと思った・・・・」
明久　「・・・反省してます・・・・」
秀吉　「そ、それより家事を一人でやるのは大変じゃないかの？」
和也　「ん～もう慣れたし・・・」
瑞希　「あ、あのよかったら私が明久君のお弁当作ってきましょうか？」
明久　「ゑ？」

発音がおかしいですよ、兄さん
瑞希さんも意外と大胆ですね。
でも助かるなぁ、だったら僕は明日は軽くおにぎりでも・・・

美波　「だったら和也の分はウチが作ろうか？」
和也　「え？いいの？」
美波　「う、うん。いつも大変なんだしたまには休息も必要というか・・・」

あぁ～なるほど。家事を一人でやってるって言ったから気を使ってくれてるんですね
優しいんですね

和也　「ありがとう美波さん瑞希さん。おかげで久しぶりに5時間以上眠れそうだよ」

雄&秀&康&美&瑞&明「・・・・・・・・・」

あれ?なんでみんな黙るの?

雄二　「あ～・・・質問だがお前いつも何時間位寝てんだ?」
和也　「え～と、全部が終わるのが夜1時位で起きるのはあさ4時半位かな?」
瑞希　「それって3時間位しか寝てないんじゃ・・・」
康太　「・・・・早死にする」
秀吉　「そんな時間までいったい何をしておるのじゃ?」
和也　「えっと、掃除と洗い物と朝食の仕込みと明日の予習、それから・・・」

何だろう?皆から哀れむような視線が・・・

明久　「・・・ごめん和也・・・そんなに大変なんて知らなかったよ。今日から僕も手伝うから・・・」

何だろう?空気が重い・・・

瑞希　「あ、あの。お弁当ですけど、よろしければ皆さんにも・・・」

雄二　「お、俺たちにも？いいのか？」
瑞希　「はい、嫌じゃなかったら」
美波　「じゃ、じゃあ。ウチも多めに作ってくるわ」
秀吉　「そ、それは楽しみじゃのう」
康太　「・・・・・・（コクコク）」

何か皆さん無理やり話をそらしましたね？
空気が重くなったので気を使ってくれたのかな？
でも・・・

和也　「でも、七人分となると大変でしょう？僕も少し作って・・・」
美波　「アンタを休ます為に作るのにアンタが作ってきたら意味ないでしょうが！」
瑞希　「大丈夫ですから、たまにはゆっくり休んでください」

二人とも優しいですね

明久　「瑞希ちゃん、和也のお姉さんみたいだね」

兄さん、その発言の意味わかってますか？
瑞希さんが僕のお姉さんということは・・・

明久　「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと・・・」

おっと、告白する気ですか？でも、きっと何かとんでもない発言するでしょうからフォローを・・・

雄二　「今振られると弁当の話はなくなるぞ」
明久　「好きにしたいと思ってました」

・・・大変です。兄さんが変態になりました
っとフォローしなくちゃ

和也　「そ、それよりミーティング始めようよ雄二君」
秀吉　「そういえばどうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に行くならAクラスじゃろう？」
雄二　「もちろん考えがあっての行動だ。まずEクラスを攻めない理由だが、戦うまでもないからだ」
明久　「え？なんで？」
雄二　「お前の周りにいる面子をよく見てみろ」
明久　「えっと、美少女が二人と馬鹿が二人とムッツリが一人とショタが一人いるね」

・・・誰がショタだって？

雄二　「誰が美少女だと！？」
康太　「・・・・（ポッ）」
明久　「えぇっ君たちが美少女に反応するの！？和也、ツッコミ手伝って！」

・・・今回はフォローしませんよ
ここは秀吉君直伝の演技で・・・

和也　「兄さん、僕のこと馬鹿だと思ってたの？僕のこと嫌いになったの？」（ジワッ）

涙目でに上目遣いでこう言ってみた
さぁ、どんな反応をするんでしょう？
えっ？ショタって言われたの怒ってるかって？怒ッテマセンヨ？

明久　「か、和也まで!?違うんだ!違うんだよーーー!!!」

兄さんが走り去ってしまった

和也　「やりすぎたかな?」
秀吉　「いい演技じゃ。お主、演劇部に入る気はないかの?」
和也　「考えとくよ」

勧誘されてしまった

雄二　「続けるぞ。姫路と和也がいる以上Ｅクラスには正面からぶつかり合っても勝てるし戦っても意味が無いからな」

美波　「なるほどね。」
和也　「Ｄクラスとやるのはギリギリ勝てそうな相手に勝って味方の士気をあげる為ってとこかな?」
雄二　「そのとおりだ」
秀吉　「負けたらどうするのじゃ?」
雄二　「負けるわけないさ」

自信満々だね

雄二　「いいか、お前ら。ウチのクラスは・・・最強だ!」
美波　「いいわね。面白そうじゃない!」
秀吉　「Ａクラスの連中を引きずり落としてやるかの」
康太　「・・・・（グッ）」
瑞希　「が、頑張りますっ」

さてさて、皆の僕も足を引っ張らないように頑張らなくちゃ・・・・

・・・・・・何か忘れてるような・・・・・

・・・・・あっ兄さんのこと忘れてた・・・・・

第六問（後書き）

ちょっと長くなりましたね。
次回よりDクラス戦開始します

第七問（前書き）

グラムサイト2さん、唐笠さん感想をどうもありがとうございます
最近仕事が忙しくなってきたので毎日更新するのが難しいかもしれません。
できるだけ一日一話を心がけますが、もしかしたらできないかもしれませんが
そのときは暖かい御心で見守っていただけたら幸いです。
また、基本その場の思いつきで書いてますので文章がおかしい点があるかもしれませんが勘弁してやってください

第七問

ＳＩＤＥ和也

雄二　「さて、まずお前たちには回復試験を受けてもらう」

いま、教室には僕と雄二君と瑞希さんそれに近衛部隊の人が数名しかいません
他の皆は前線に出ています
今回の作戦はまず僕と瑞希さんが回復試験を受ける時間を稼いで、
それが終わり次第総攻撃を仕掛けるという流れです

瑞希　「じゃあ早く始めましょう！」
和也　「そうだね」

☆テスト開始☆

和也　「～♪」（サラサラサラッ）
瑞希　「和也君調子良さそうですね？」
和也　「日本史は得意だからね」

記憶力には自信がありますからね
ちなみに数学は苦手です
（ガラッ）
？誰か帰ってきましたね？

秀吉　「ただいま戻ったのじゃ」

秀吉君でしたか、確か前線部隊でしたね

雄二　「おかえり、戦況はどうだ？」

秀吉　「・・・ほとんど皆やられてしもうたのじゃ。今は前線は明久と島田の部隊が抑えておる」

あまり戦況はよくないようですね？

雄二　「予定より被害がでかいが・・・まぁ想定内だ。早く回復試験を受けてくれ」

秀吉　「了解なのじゃ」

雄二君も動揺してますね？僕も急がなくちゃ

美波　「・・ちょ・・・加減・・・・てよ！」

？この声は美波さんここまで聞こえるような声で何を言ってるんでしょう？

美波　「ウチは普通に男の子供が好きなの！！！」

・・・聞きようによってはかなりやばいですよ！？大声でショタコン宣言ですか！？

・・・回復試験に集中しよう・・・

☆数分後☆

美波　「・・・殺してやるんだからぁー！」

今度は何ですか!?一体どんな会話をすればショタコン宣言の後に殺人予告が始まるんですか!?
・・・集中できない・・・

☆更に数分後☆

（ガラガラッ）

美波　「うぅ～アキの奴ぅ～」

・・・殺気を纏った美波さんが帰ってきた
・・・正直言って怖い。兄さん何したの？

和也　「お、お疲れ様。美波さん」
美波　「あ、うん」
和也　「兄さんと何があったの？すごく怒ってたみたいだけど・・・声もここまで聞こえたよ？」
美波　「ふぇ？聞こえてたの？・・・どれぐらい？」
和也　「えっと、ショタコン宣言と殺人予告が聞こえた」
美波　「ちょ、ちょっと待って！ウチはショタコンじゃないし殺人予告もしてないわよ!?」

☆事情説明中☆

和也　「なるほど、つまり清水さんに言い寄られて、困って兄さんに助けを求めて見捨てられたってこと？」
美波　「うん、大体そんな感じ・・・」

全く兄さんは、困ってる女の子を見捨てるなんて何を考えてるんだ？

和也　「わかった、兄さんには僕から叱っとくから。・・・それより」
美波　「な、なによ？」
和也　「女の子が『殺してやる』なんて言っちゃ駄目だよ。せっかく可愛いのにそんな危険な言葉遣いしてたらもったいないよ」
美波　「！！（か、可愛い！？）」
和也　「わかった？」
美波　「・・・うん、わかった」
和也　「よし、えらいえらい」（ナデナデ）
美波　「・・・／／／」
瑞希　「美波ちゃん可愛いですぅ～」
雄二　「あ～・・・いちゃついてるとこ悪いが、さっさと回復試験受けて前線に戻ってくれないか？和也も試験を再開してくれ」
美波　「！い、いちゃついてなんかないわよ！すぐにやるわよ！」
和也　「ごめんごめん」

☆美波、回復試験終了☆

美波　「さてと、ウチは戻るけど、アンタ達はあとどれ位？」
和也　「あと、3科目」
瑞希　「私もです」
美波　「そ、じゃあ急ぎなさいよ」（ガラガラ）

集中できなくなった原因は、あなたのショタコン宣言です

☆和也、瑞希、回復試験終了☆

雄二　「おぅ、お疲れさん。」
和也　「で、これからどうするの？」

（ガラガラ）
？あっ兄さんだ

明久　「回復試験受けに戻ってきたよ。」
瑞希　「お疲れ様です、明久君」
雄二　「戦況はどうだ？」
明久　「秀吉の部隊が全滅した、僕の部隊と美波の部隊の残りがあわせて１５人位」
雄二　「相手はどうだ？」
明久　「数えてないけど２０人以上はいたよ」
雄二　「チッ、作戦決行にはちょっと厳しいな」
和也　「どういう作戦？」
雄二　「簡単に言えば騙まし討ちだ。本隊と交戦してる中、姫路がＤクラス代表の平賀のとこまで行き攻撃を仕掛けるつもりだった」
明久　「それじゃ近衛部隊に邪魔されない？」
雄二　「だから、姫路なんだ。こいつがＦクラスにいるなんて誰も思わないからな」
和也　「なるほど・・・ん？僕は？」
雄二　「あぁ、お前は・・・」

（ガラガラ）

康太　「・・・雄二」
雄二　「どうした？」

康太君だ。たしか隠密機動部隊だったかな？

康太　「・・・前線部隊が罠にかかって囲まれた。かなり劣勢」
雄二　「なんだと！やばい、これ以上人数が減ったら作戦決行は不

可能だ！」
明久　「え？なんで？」
雄二　「馬鹿かお前は！？交戦してる状態だから姫路が近づいても気づかないんだ！」
明久　「えっと・・・つまり？」
和也　「交戦してない時に近づいたら目立つし他の人にも気づかれるってことだよ」
雄二　「そのとおりだ、クソッ！どうする・・・」
和也　「康太君」
康太　「・・・なんだ？」
和也　「科目は何だった？」
康太　「・・・確か・・・・・・」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

美波　「ど、どうしよう・・」

相手は残り１２人
こっちはウチも含めてあと３人

笹島　「Ｄクラス笹島が行きます。試獣召喚！」
近藤　「くっ！Ｆクラス横溝が受けます。試獣召喚！」
須川　「Ｆクラス須川も受けます！試獣召喚！」

☆日本史☆

Ｄクラス　笹島圭吾　１０５点

ＶＳ

Ｆクラス　横溝浩二　５８点

＆

Ｆクラス　須川亮　７２点

笹島　「くらえ！」

横溝　「クッ！」

Ｄクラス　笹島圭吾　４６点

ＶＳ

Ｆクラス　横溝浩二　０点

＆

Ｆクラス　須川亮　７２点

横溝がやられた。

須川　「隙あり！」

笹島　「し、しまった」

Ｄクラス　笹島圭吾　０点

ＶＳ

Ｆクラス　須川亮　３５点

中野　「チッ、Ｄクラス中野健太行きます。試獣召喚！」

・・・もう限界。これ以上時間稼げない

ウチも戦うしかない

美波　「Ｆクラス島田美波も行きます。試獣召喚！」

Ｄクラス　中野健太　７２点
ＶＳ
Ｆクラス　須川亮　３５点
＆
Ｆクラス　島田美波　５２点

中野　「オラオラ！いくぜぇ！」
須川　「っ！クソッ」

Ｄクラス　中野健太　５２点
ＶＳ
Ｆクラス　須川亮　０点
＆
Ｆクラス　島田美波　５２点

中野　「次はお前だ！覚悟しろ！」

点数は互角。こいつを倒しても残りはあと１０人
どう考えても戦死は確実ね・・・
でも・・・・

美波　「最後まであきらめない！！」

一人でも多く倒す！
１点でも多く削る！
少しでもみんなの・・・和也の力になれるように！

中野　「往生際が悪いんだよ！」
美波　「・・・絶対に・・・」
中野　「クッ」
美波　「絶対にあきらめないんだからぁーっ！！」

Ｄクラス　中野健太　０点
ＶＳ
Ｆクラス　島田美波　２点

・・・終わったわね・・・
あと１０人。２点じゃどうしようもない
・・・ごめん皆・・・ごめん和也・・・

？？　「・・・・・がＤクラス１０名に日本史で勝負を申し込みます！」
美波　「え！？」

第七問（後書き）

さて、美波の援護に来たのは誰でしょうね～？（笑）
戦闘描写があまりうまく書けませんでした。
文才の無い作者で申し訳ございません

第八問（前書き）

唐笠さん感想どうもありがとうございます
今回は原作サブキャラのあの人が暴走します！

第八問

ＳＩＤＥ　和也

・・・間に合わなかった・・・
美波さん以外戦死してる、相手は１１人・・・
これじゃ・・・もう・・・

美波　「絶対にあきらめないんだからぁーっ！！」
和也　「！」

・・・僕は馬鹿だ・・・
美波さんはまだたった一人で戦ってるのに、何諦めてるんだ
まだ、終わったわけじゃない
最後まで諦めない！

和也　「吉井和也がＤクラス１０名に日本史で勝負を申し込みます！」
美波　「え！？」
和也　「試獣召喚！」

真っ黒な羽織袴に日本刀を持った僕の召喚獣が現れた
まず点数が表示されるよりも早く一番近くにいる人を切り裂く！（ズバッ）

Ｄクラス　鈴木一郎　０点

鈴木　「え！？」
美波　「か、和也？」

そして、僕の点数が表示された

Fクラス　吉井和也　７２６点

D　「な、何だあの点数は？」
D　「何であんな奴がFクラスに！？」
D　「・・・！あ、あいつ！元学年主席の吉井和也じゃないか！？」
D　「何！？あの噂の『ショタ娘』か！？」

皆さん動揺してますね？
今のうちにもう一人倒しちゃいましょう
もちろん最後のセリフを言った奴を・・・
え？怒ってるかって？オコッテマセンヨ？
（ズバズバズバッ！グチャ！ベチャベチャ！）
え？やりすぎ？気にしない気にしない

Fクラス　吉井和也　７２６点
　　ＶＳ
Dクラス　田中一久　０点

D　「！考えるのは後回し！相手は一人だ！全員で囲んで倒すぞ！」

あと８人か・・・ちょっと苦しいですね
でも・・・

和也　「もう諦めたりしない！！」

周りを囲んだ召喚獣が全員同時に突っ込んできた

・・・全員同時・・？いいこと思いついた♪

D　「「「くらえっ！！」」」

美波　「和也！」

心配無用！攻撃が僕に振り下ろされる

・・・直前で僕は腕輪の能力を発動させる！

D　「え！？消えた」

D　「や、やばい！よけてくれ！！」

D　「うわぁ！！」

Dクラス　小嶋晶　０点

ＶＳ

Dクラス　佐藤正弘　０点

ＶＳ

Dクラス　坂田俊文　０点

作戦通り♪

同士討ちは三人ですか。まぁまぁですね

え？僕はどこに消えたかって？それは・・・

D　「どこだ！？どこにいる！？」

上空ですよ♪

D　「う、上だ！上にいるぞ！」

あらら、ばれちゃった。でももう遅いですよ

重力を利用してそのままの勢いで刀を振り下ろし一人。（ズバッ）

着地と同時に近くにいるもう一人を切り刻む（ズバズバッ）

Ｆクラス　吉井和也　４２６点
ＶＳ
Ｄクラス　江藤美沙　０点
＆
Ｄクラス　後藤士郎　０点

あと３人か

Ｄ　「っ！塚本！お前は本隊に戻って吉井和也がＦクラスにいること、それと・・・多分お前以外全員戦死することを伝えろ！」

塚本　「わ、わかった」

自分を捨て、仲間を守りますか・・・
そういうの、嫌いじゃないですよ

安田　「Ｄクラス中堅部隊、安田淳！いくぞ」
谷川　「同じく中堅部隊、谷川朝美！行きます」

Ｆクラス　吉井和也　４２６点
ＶＳ
Ｄクラス　安田淳　１２１点
ＶＳ
Ｄクラス　谷川朝美　９６点

さて、どうしましょう
さっきと同じ作戦でいｋ

安田　「また消えるかもしれん！同士討ちには注意しろよ！」
谷川　「了解」

・・・は通用しそうにないですね・・・
仕方ない正攻法で行きましょう！
ふむ、安田君の武器は鉄球ですか・・・
当たるとダメージが大きそうですね
でも・・・

安田　「くらえっ！」（ブン）
和也　「おっと」（ヒラリ）
和也　「（いまだ！）」（ズバッ）

やっぱり攻撃の後の隙が大きいｄ

谷川　「今です！」（ヒュン）
和也　「！」（グサッ）
美波　「か、和也！！」

Ｆクラス　吉井和也　２０９点
ＶＳ
Ｄクラス　安田淳　０点
ＶＳ
Ｄクラス　谷川朝美　９６点

やられた、安田君は囮
本命は谷川さんの弓でしたか・・・

当たり所が悪かったら戦死してましたね・・・
運がよかったです

和也　「行け！」
谷川　「きゃっ！」

Ｆクラス　吉井和也　２０９点
ＶＳ
Ｄクラス　谷川朝美　０点

ふう・・・
美波さんを助けに来たのに危うく返り討ちにあうとこでしたね
さて、これで全員かな？

明久　「かずや～！」

？あっ兄さんだ、雄二君と康太君と瑞希さんもいる

和也　「ごめん。一人逃がしちゃったよ。多分僕がＦクラスにいることもバレた」
雄二　「構わん。（むしろ好都合だ）」
美波　「ごめん、ウチが罠にかかったりしなければ・・・」
雄二　「過ぎたことを言ってもしかたねぇ。それにまだ作戦はある」
和也　「どうするの？もう、むこうもこっちも残り人数少ないから瑞希さんが近づいたら目立つよ？」
雄二　「あぁ、それなんだが、交戦する必要がなくなりそうなんだ」
明久　「どうゆうこと」
雄二　「まぁ見てな。ムッツリーニ、あいつは本当に近衛部隊にいるんだな？」
康太　「・・・いる。間違いない」

雄二　「そうか、それと和也」
和也　「何？」
雄二　「なんていうか・・・その・・・ごめんな」
和也　「？？？」
雄二　「すぐにわかる」

ちょっと待って！！何に対して謝ったの！？
めちゃくちゃ怖いんだけど！！

美波　「か、和也・・」
和也　「ん？」
美波　「た、助けてくれてありがとう／／／」
和也　「気にしないで、仲間なんだから当然だよ」
美波　「一つ聞きたいんだけど、囲まれたときに消えたのは腕輪の能力？」
和也　「そうだよ。僕の腕輪の能力は『瞬間移動（テレポート）点数消費は１０ｃｍ３０点』」
美波　「ってことは１ｍで３００点か・・・燃費悪いわね」
和也　「しょうがないよ。この能力、燃費がよかったら反則だもん」
美波　「それもそうね。それにしても和也はすごいわね（点数が）」
和也　「そんなこと無いよ。・・・美波さんの方がよっぽどすごいよ（度胸が）」
美波　「？？？」
雄二　「そこの二人、いちゃついてないでさっさと行くぞ」（ニヤニヤ）
美波　「だ、だから。い、いちゃついてなんかないったら！／／／」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

☆Ｄクラス前☆

ＳＩＤＥ　美波

ウチの戦力は近衛部隊含めて残り１０人（瑞希は別行動）
向こうはもっと多いはず・・・
いったい坂本は何を考えているのかしら？

雄二　「島田、お前は和也のそばにいろ」
美波　「？いいけど何で？和也に守ってもらえってこと？」
雄二　「いや、逆だ。和也を守ってやれ」
美波＆和也　「？？？」

何言ってんだろ？点数は和也のほうが高いのに・・・
まぁいいや。とりあえず和也の隣に（テクテク）

雄二　「じゃ行くぞ」
和也　「？う、うん」
雄二　「Ｄクラス、玉野美紀！！吉井和也はここにいるぞ！！」
和也　「！！！！！！！！」

玉野さん？誰だろ？
・・・？？地震？？（キョロキョロ）

和也　「・・・」（ガタガタ）

！？なんか隣で和也が小刻みに震えてんだけど・・・

？「か～ず～ちゃ～ん」
和也「（ビクッ）」
玉野「私に会いに来てくれたの？」
和也「！！！」（ブンブン）

なんか土屋みたいになってる・・・

玉野「うれしい！さぁ私の愛を受け止めて！！」

人の話を全然聞かないのね・・・って！？こ、告白！？そんな！ここにもライバルが・・・
でも決めるのは和也だし、玉野さんはかわいいし、それで和也が幸せ・・・

玉野「そして毎日女装してその可愛い姿を私に見せて！！」
和也「ぜ、絶対に嫌です！！」

・・・にはなれそうもないわね・・・

和也「み、美波さん。何でもするから助けて！」
美波「（何でも！？）しょ、しょうがないわね～」
玉野「何ですか？あなたは？部外者は邪魔しないでください！！」
美波「もうやめなさいよ！和也が嫌がってるじゃない！！」
玉野「照れてるだけです！ねぇかずちゃん？」（ニヤァ）
和也「ビクゥ！！」（ブンブン）

私の後ろで小刻みに震えてる・・
・・・それにしても凄い怯え様ね。一体何があったのかしら

美波　「もうやめてよ！怯えてるじゃない！！」
玉野　「そこが可愛いんじゃない！」

どうしよう、否定できない・・・

玉野　「もういいです！邪魔するなら排除します！長谷川先生！こっちに来てください」

数学の長谷川先生・・・数学ならいける！！

玉野　「私は知ってるんですよ？和ちゃんは数学が苦手なんですよね？」
美波　「へ？そうなの？」
和也　「う、うん」
美波　「じゃあさがっててていいわよ。ウチがやるから」
和也　「そ、それはできないよ女の子に戦わせて自分だけ安全な所なんて・・・」

・・・アキとは大違いね・・・
同じ兄弟でもこんなに違うものなのね・・・
しかしやっぱりかっこいいなぁ／／／／
見た目は女のｋ・・・男の娘なのに・・・

玉野＆美波＆和也　「試獣召喚！」

Ｄクラス　玉野美紀　１０３点
ＶＳ
Ｆクラス　島田美波　１７１点
ＶＳ
Ｆクラス　吉井和也　４５点

玉野　「な、なんなのよ！？その点数は！？」
美波　「数学だったら漢字が読めなくても何とか解けるのよ」
和也　「すごい！」
美波　「にしても、あんたほんとに数学駄目なのね・・・」
和也　「・・・面目ない・・・」
美波　「・・・やっぱり下がってなさい」
和也　「・・・はい・・・」
玉野　「じゃ、行くわよ！エイッ」
美波　「負けない！！やぁっ！」

Ｄクラス　玉野美紀　０点
ＶＳ
Ｆクラス　島田美波　１３２点
ＶＳ
Ｆクラス　吉井和也　４５点

玉野　「クッ！私は諦めません！いつか必ずかずちゃんを私のものに・・・」

叫びながら西村先生に連れて行かれた・・・
Ｄクラスの人達も皆驚いてぽかーんとしてる・・・
・・・あっ！Ｄクラス代表の平賀君の後ろにピンクの悪魔が・・・

☆玉井美紀との出会い編☆

ＳＩＤＥ　和也

明久　「帰ろうか」
和也　「うん」

いつも通り帰ろうと下駄箱を開けると・・・

和也　「手紙？」
明久　「ラブレター？いいなぁ和也はモテて・・・」
和也　「まだそうと決まったわけじゃないよ・・・えっと、なになに『放課後、視聴覚室で待ってます』だって」
明久　「やっぱりラブレターじゃないか」
和也　「そうとは限らないって、でも放っとくわけにもいかないしちょっと行って来るね」
明久　「了解、先に帰るよ？」
和也　「うん」（タッタッタッ）
明久　「和也にも春が来たかな？どんな人だろ？・・・和也を・・・救ってくれる人だったらいいな」

えっと、ここだね（ガラガラッ）
？誰もいない？

和也　「誰かいますか？」

？奥の方かな？

（ガラガラッ！ピシャ！ガチャ！）

？振り返ると女の子が立ってた

？「あの私玉井美紀って言います」

和也「はぁ、どうも」

初対面だよね？なんで僕呼ばれたんだろ？

ってか何で鍵かけるんだろ？

玉井「あぁ、やっぱりかわいい」

和也「？」

玉井「あ、あの！私と付き合ってください！」

え？告白！？どうしよう！？できるだけ相手を傷つけないように断らなきゃ

玉井「そして私だけのものになって毎日女装してその可愛い姿を私に見せてください！！」

和也「絶対に嫌です」

はっ！つい本音が！

玉野「あぁ～可愛い！！もう我慢できません！！」

和也「ちょ、何するんですか！？」

急に抱きついてきて服を脱がそうとしてる

・・・そして抵抗してるときに見えてしまった・・・

彼女の足元にある紙袋の中に大量の女性物の服が入っているのを・・・

玉野　「かずちゃんかずちゃん、ハァハァ」
和也　「だ、誰か助けて～！！！！」

結局全部試着させられてしまった・・・
しかも・・・

和也　「た、ただいま」
明久　「おかえり～遅かったねってどうしたのその格好！？」

兄さんが驚いてる。
そりゃそうだろう
制服を没収されてセーラー服で帰ってきたんだから・・・

☆玉井美紀との出会い（トラウマ）編　完

第八問（後書き）

玉井美紀との出会いも書いてみました
主要キャラとの出会いも後々書いていくつもりです

次回更新はもしかしたら明後日になるかもしれません

第九問（前書き）

思ったよりすんなり話がまとまったので予定を変更して更新します
今回でDクラス戦終了です

第九問

ＳＩＤＥ　瑞希

雄二　「そろそろいいだろう。頼んだぞ」
瑞希　「は、はい」

皆の注目が和也君達にの方に向いてる隙に平賀君の背後に回りこんで攻撃でしたね・・・
・・・和也君、美波ちゃん・・・坂本君を止められなかった私を許してください・・・
（コソコソ）

瑞希　「あ、あの。平賀君」
平賀　「え？姫路さん、どうしたの？Ａクラスはこっちを通らなかったと思うけど・・・」
瑞希　「いえ、そうじゃなくて・・・Ｆクラス姫路瑞希、平賀君に現代国語勝負を申し込みます！試獣召喚です！」

Ｆクラス　姫路瑞希　３３９点
ＶＳ
Ｄクラス　平賀源二　１２９点

平賀　「え？あ、あれ？」
瑞希　「ご、ごめんなさいっ」（ズバッ）

大剣を素早く振り下ろすと平賀君の召喚獣は消滅し、この戦いの決着となった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

むこうは決着がついたみたいね

・・・さて・・・（チラ）

和也　「・・・」（ガタガタガタ）

・・・いくらなんでも怯えすぎでしょう？

一体何があったのかしら？

美波　「あのさ、和也。玉野さんｔ・・」

和也　「（ビクッ）」（ガクガクガク）

・・・だめだこりゃ・・・

アキに聞いてみよ

美波　「アキ、ちょっといい？」

明久　「（ビクッ）な、なに？」

美波　「なんでそんなに驚くのよ！」

明久　「えっと・・・見捨てたこと・・・まだ怒ってる？」

・・・忘れてた・・・ってかもうそれはどうでもいいんだけど・・・

美波　「ウチの質問に答えてくれたら許してあげる」

明久　「本当？何？」

美波　「和也と玉野さん、何があったの？怯え方が異常なんだけど・

・・」

明久　「・・・多分アレが原因かな？」

美波　「あれって？」

明久　「去年のある日の放課後、和也の下駄箱にラブレターが入ってて」

美波　「（ピクッ）へ、へぇ～、それで？」

明久　「僕は先に帰ったんだけど、夕方になってもなかなか和也が帰って来なくて」

美波　「ふんふん」

明久　「夜遅くにセーラー服着て泣きながら帰ってきた」

美波　「・・・はぁ！？」

明久　「話によると、視聴覚室で玉野さんに押し倒されて、女性物の服を無理矢理着せられて、制服没収されて、しかも帰り道に知らない人に連れて行かれそうになったんだって」

美波　「・・・」

どうしよう、かける言葉も見当たらない・・・

明久　「大変だったんだよ？『もう学校に行きたくない』って言い出すから・・・」

・・・色々とすごいわね・・・

美春以上の変態がこの世にいるなんて・・・

雄二　「お～い、話は終わった。詳しくは明日、説明するから解散していいぞ」

じゃあ帰ろうかな

美波　「ほら、和也。もう帰っていいってよ」

和也　「・・・うン、ジゃア帰ロうか？」

・・・まだ壊れてるわね・・・

☆　数分後☆

明久　「和也。もう大丈夫？」

和也　「うん、もう平気だよ。心配かけてごめんね」

ウチはアキと和也と帰っていた。

和也　「そういえばDクラスと設備入れ替えなかったんだって？」

明久　「うん。雄二が次のBクラス戦に必要なことやってもらうからって」

美波　「坂本の奴なに考えてんのかしらね～」

和也　「兄さんも今日くらい勉強しなよ？」

明久　「わかってるよ、教科書くらい読んで・・・あれ？・・・あ！教室に教科書忘れてきた！」

美波　「なにやってんのよ」

和也　「取ってきなよ。待っとくから」

明久　「・・・いいよ。先に帰ってて。和也、ちゃんと美波を家まで送ってあげるんだよ」（ニヤリ）

和也　「？わかった（何で笑ってんだろ）」

明久　「（美波、頑張ってね）」

美波　「っ！！な、なんの話よ」

まさか鈍感のアキにまで気づかれてんの？

ってか何で和也は気づかないのよ！

二人きり・・・緊張するな・・・
何か話さないと・・・

美波　「そういえば何でもしてくれるって言ったわよね？」

って馬鹿！いきなり脅迫してどうするのよ！！

和也　「あ、うん。僕にできることなら何でもやるよ」

ど、どうしよ・・・いまさら何も考えてないなんて言えない・・・
・・・ウチと付き合ってって言ったら付き合ってくれるかな？
でも断られたら・・・・

美波　「・・・『ラ・ペディス』のクレープが食べたい」

・・・うぅ・・・ウチの根性なし・・・

和也　「駅前にある店だっけ？いいよ、今度の休みに行こう。奢るからさ」

美波　「ほ、本当？」

これってデートよね／／／／

和也　「多分兄さんも来るだろうな、他には誰を誘う？」

美波　「・・・」

・・・この、鈍感野郎がぁーっ！

和也　「？どうしたの？」
美波　「・・・なんでもない」

はぁ・・・まぁいいか

和也　「それだけでいいの？」

・・・・・

美波　「じゃ、じゃあ。ウ、ウチのこと『愛してる』って言ってみて？」
和也　「？」

って何言ってんの？何言っちゃってんの？
やばい、和也が呆れてる

美波　「ご、ごめん。わすｒ」
和也　「愛してる」
美波　「ふぇ？」／／／

・・・幸せ（バタン）

和也　「ちょ、美波さん！？しっかりして！」
美波　「・・・もう死んでもいい」
和也　「死んじゃだめだって！しっかりして！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

美波さんが急に倒れてしまった
どうしよう・・・
とりあえずおぶって家まで送ってあげよう

和也　「よいしょっと」
美波　「・・・／／／」

でも、なんで美波さんはあんなこと言ったんだろ?
僕に恥ずかしいセリフ言わせて反応を見たかったのかな?
愛してる・・・か・・・
いま考えるとめちゃくちゃ恥ずかしいな／／／
でも・・・
美波さんになら愛してるって言ってもいいって思ったのはなんでだろう?

家に帰るとなぜか兄さんの元気がなかった

第九問（後書き）

和也は超鈍感の為自分自身の気持ちに気づいてません（笑）
明久の元気の無い理由は原作を読んでる人ならわかるはず・・・？
次回は必殺料理人による食物兵器を更新予定ですｗｗ

第十問（前書き）

お気に入り登録件数２０件突破！
ありがとうございます！
ちょっと長くなりました

第十問

ＳＩＤＥ　？？？

真っ白な空間

少女　「・・・どうして・・・」

４、５歳位の少女が言う

少女　「どうして助けてくれなかったの？」

目の前の少年に対してつぶやく

少女　「何があっても守ってくれるって言ったのに・・・『助けて』って言ったのに・・・」

少女は悲しそうに語りかける

少女　「ねぇ？どうして？」

少女は泣きながらつぶやく

そして・・・

少女　「ウソツキ」

少女は少年に対して冷たく言い放った

和也　「・・・！ハァッ！ハァッ！」

少年は目を覚ます

和也　「・・・またあの夢か・・・」

誰にも聞こえないような声で・・・

和也　「・・・・して・・・」

少年は・・・

和也　「・・・もう・・・許して・・・誰か・・・助けて・・・・」

涙を流しながらそうつぶやいた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

☆ＡＭ６：３０☆

・・・そろそろ準備しなきゃ・・・

えっとまずは朝食を作って、お弁当を・・・

？あれ？ご飯炊き忘れた？
・・・あっ！そうか、美波さん達がお弁当作ってくれるんだったっけ
楽しみだな～♪
じゃあ朝食はトーストにしよう

☆ＡＭ７：３０☆

和也　「兄さん。ご飯できたよ～そろそろ起きて！」
明久　「もう起きてるよ。おはよう」

？珍しく早起きですね？

明久　「・・・うなされてたみたいだけど・・・大丈夫？」
和也　「あっ！ごめん、起こしちゃった？」
明久　「いや、それはいいんだけど・・・」
和也　「・・・大丈夫だよ。心配しないで」
明久　「・・・ならいいけど・・・」
和也　「ほら、早く食べて。遅刻するよ」
明久　「あ、うん。いただきます」

☆ＡＭ８：３０☆

和也＆明久　「おはよう」
瑞希　「おはようございます」
雄二　「おぅ、おはよう」
康太　「・・・おはよう」

？秀吉君と美波さんは？

そういえば秀吉君は昨日の途中から見てないような・・・

秀吉　「・・わしの趣味は勉強なのじゃ・・・二宮金次郎を尊敬してるのじゃ」

ＯＫ、よくわかった。戦死してたんだね
ってかこれは補習っていうより洗脳なんじゃ・・・
えっと美波さんは・・・

美波　「か、和也」
和也　「ふぁ！」

いつの間に後ろに・・・
またしても僕の背後を取るとは・・・

美波　「あ、あのさ。昨日は変なこと言わせてごめん」
和也　「あ～気にしないで。驚いたけど別に嫌じゃなかったし」
美波　「そ、そう？（嫌じゃないって・・／／／）そ、それと。家まで運んでくれたんでしょ？ありがとう」
和也　「どういたしまして」
美波　「お礼も兼ねてお弁当たくさん作ってきたからたくさん食べてね」
和也　「うん、楽しみにしてるよ」

☆昼休み☆

雄二　「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーとピラフと餃子にすっかな」

いやいや、どう考えても食べすぎですよ
どんだけ食べる気ですか？
ってか炒飯食べるんだったらピラフはいらないでしょう？
・・・って

和也　「今日は美波さん達がお弁当作ってきてくれるって言ってなかった？」
瑞希　「はい、作ってきましたよ」
雄二　「おぉ、すっかり忘れてたぜ」

でもお弁当で雄二君の胃袋（宇宙）は満たされるのでしょうか

瑞希　「たくさん作ったきたので大丈夫ですよ」

・・・今、僕の心の声を読みました？
気のせいですよね・・・気を取り直して
どれどれ・・・かばんから重箱が１つ・・・２つ・・・３つ・・・４つ・・・・って
どう考えても作りすぎでしょ！！
てかどっから出した！？
どう見てもかばんに入るサイズじゃないぞ・・・

美波　「じゃあ、ウチも」

そう言って美波さんもかばんから弁当箱を取り出した
５個・・・１０個・・・１５個・・・って
あなたもですか！？だから作りすぎですって
てかどう見てもかばんに・・・（以下略）

和也　「じゃあ僕はお礼に飲み物買ってくるよ」

雄二　「俺も行こう、一人じゃ持てねぇだろ？」
秀吉　「それではせっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上でも行くかの？」
明久　「そうだね、じゃあ先に行ってるから早く来なよ」
和也　「了解」

あれ？秀吉君いつの間に復活したんだろ？
まぁいいや、早く買いに行こう

和也　「何にしよう？お茶でいいかな？」
雄二　「いいんじゃないか？それよりさっさと戻ろうぜ」
？　「あら？和也じゃない？」
和也　「？」

？誰だろ？
あっ優子さんだ

雄二　「秀吉？何でここに？」
和也　「違うよ。姉の優子さんだよ。なんで間違えるのかなぁ？」
？　「逆に聞きたいんだけどなんでキミは一瞬で区別が付くのかな？そっくりなのに」

この人誰だろ？

和也　「だって『気』（オーラ）が全然違うじゃないですか」
？　「・・・」
優子　「それでわかるのはあなたと西村先生くらいよ・・・」
和也　「そうかな？じゃ、改めてこんにちは優子さん」
優子　「こんにちは、相変わらず可愛・・・ゲフンゲフン・・・元気そうね」

和也　「はい、ところでそちらの方は？」
？　「あっ、はじめまして一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」
和也　「よろしくお願いします、工藤さん」
愛子　「愛子でいいよ」
和也　「わかりました、愛子さん。じゃあみんなを待たせてるんでこれで・・・」
愛子　「うん、またね～」
優子　「じゃあね。あっ、和也、いつか必ずあの日のリベンジするから覚悟してなさいよ」
和也　「はい、じゃあ失礼します」

まだ覚えてたんだな～
意外と執念深いんだな

和也　「で？なんで雄二君は隠れてんの？」
雄二　「あいつらAクラスの連中だろ？近くに翔子はいなかったか？」
和也　「いなかったよ。」
雄二　「そうか、ならいいんだ」

そんなに怯えなくても・・・

和也　「それより早く行こう。遅くなっちゃったし」
雄二　「あぁ」

和也　「お待たせ～」

明久　「おそいよ～待ちくたびれたよ」
雄二　「悪い悪い」
和也　「待っててくれたの？」
美波　「当たり前じゃない」
瑞希　「じゃあさっそく食べましょう」
（パカッ）

「「「「「おおっ～！」」」」」

とってもおいしそう
二人とも料理上手なんですね
じゃあさっそく食べようかな

瑞希　「あっ和也君は先に美波ちゃんの作ったの食べなきゃだめですよ」

？？どういうことだろ？？
まぁいいけどさ

和也　「じゃ、美波さん。いただくね？」
美波　「う、うん」
（パクッ、モグモグ・・・！！）

和也　「すごくおいしいよ！これ全部手作り？」
美波　「そ、そうよ。ウチだってやればできるんだから！」

なんで動揺してんだろ？・・・！！指に絆創膏・・・
きっと包丁で切ったんだな
てことはあんまり料理しないのかな？
なのに一生懸命作ってくれたのか・・・

なんか嬉しいな・・・
美波さんが頑張って作ってくれた料理に文句なんて言えるわけｇ・・・

（バタン・・・ガタガタガタガタ）
？何だろ？
！！康太君が倒れてる！？

雄二　「何やってんだよ？（パク）」
（バタン・・・ガタガタガタガタ）

和＆美＆明＆秀「「「「・・・・・」」」」

明久　「（今のどう思う？）」
秀吉　「（とても演技には見えん）」
美波　「（ま、まさかあの料理が原因！？）」
和也　「（・・・多分）」
瑞希　「土屋君、坂本君どうしたんですか？」

和＆美＆明＆秀（（（（本人気づいてないし！！））））

和也　「（どうする？）」
明久　「（正直に話す？）」
美波　「（だめよ、瑞希が傷つくじゃない）」
秀吉　「（・・・ワシが行こう）」
明久　「（だめだよ！死んじゃうよ！）」
秀吉　「（大丈夫じゃ、ワシの胃袋は頑丈じゃから、ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせんのじゃ）」

ジャガイモの芽には毒があります。よい子の皆さんは絶対に食べな

いように・・・

和也　「（僕が行くよ！）」
明久　「（和也！？）」
和也　「（友達を危険な目に遭わせるなんてできないよ）」
美波　「（大丈夫なの！？）」
和也　「（多分大丈夫だよ。もし死んだらたまには墓参りに来てね）」
美波　「（縁起でもない事言わないで！）」
和也　「（兄さん、よろしく）」
明久　「（うん）瑞希ちゃん！あれはなんだ！！」
瑞希　「え？どれですか？」

なんて古典的な・・・それに引っかかる瑞希さんも瑞希さんですが・・・
っと今のうちに（モグモグモグ）
・・・あ・・・意識が遠のいていく（パタン）

美波　「か、和也！！」

☆数分後☆

和也　「・・・んん～・・・」
美波　「気が付いた？よかった」

ん？美波さんが近い・・・
それに後頭部に何か柔らかいものが・・・

・・・状況確認・・・

なんだ美波さんが僕に膝枕してるのか・・・

・・・って

和也　「ご、ごめん。すぐにどくかｒ・・・」

あ、あれ?身体が動かない・・・

明久　「どうしたの?」

和也　「・・・身体が動かない・・・」

美波　「だ、だったらしょうがないわね～ほら、じっとしてなさい」

和也　「う、うん。ごめんね」

瑞希　「ごめんなさい和也君ちょっと失敗しちゃったみたいで・・・」

ちょっと!?気絶して身体の自由を奪う料理（兵器）をちょっとの失敗と申すか!?

和也　「ちなみに何か変わったもの入れたりした?」

瑞希　「えっと、隠し味に少しだけ硫酸を・・・」

Ｗｈａｔ!?硫酸?硫酸ってたしか・・・

☆硫酸☆

化学式Ｈ２ＳＯ４

酸性無色の液体で化学薬品として最も大量に生産されている

主に工業用に使用され、皮膚に付くと火傷する恐れがあり非常に危険

って駄目じゃん！やばいじゃん！僕食べちゃったよ！？
てかどこで手に入れたの！？

和也　「えっと・・・なんで硫酸？」
瑞希　「ちょっと酸味が欲しくて・・・」

確かに酸味は出るだろうけどちょっとじゃ済まないんだけど！？
大体エビフライのどこに酸味が必要なの！？

和也　「・・・料理に化学薬品は入れないようにしようね・・・」
瑞希　「・・・はい」

結局、美波さんが作ってきたお弁当をみんなで食べた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

数分後、和也も復活してミーティングが始まった
・・・ちょっと残念・・・

美波　「じゃあ次の相手はＢクラスなの？」
雄二　「あぁそうだ」
明久　「どうして？目標はＡクラスなのに？」
雄二　「正直に言えばどんな作戦を使ってもうちの戦力じゃＡクラスには勝てない」

確かに、和也は数学でこられたら秒殺されるし、そうなるとまともに戦えるのは瑞希一人
どう考えても勝てないわね

雄二　「設備の交換のルールは知ってるな?下位クラスが負けたらランクを一つ落とされる、上位クラスが負けたら相手クラスと設備を入れ替えられる。このルールを利用する」

和也　「わかった!Bクラスを倒したら設備を交換しないで代わりにBクラスとDクラスをAクラスに攻め込ませて弱ったところを僕らが叩くってことかな?」

雄二　「半分正解、半分はずれだ。クラス単位では相手が弱ってても勝てない。だからAクラスに一騎打ちを申し込み断ったらB、Dクラスを攻め込ませると脅s・・・交渉する」

いま『脅す』って言ったわよね?

雄二　「というわけで和也、Bクラスに宣戦布告してきてくれ」

・・・何言ってんの?この赤毛ゴリラは・・・

美波　「ちょっと坂本!何考えてんのよ!危ないじゃない!そういうのはアキに行かせなさい!」

明久　「ちょっと待って、僕は危険な目に遭ってもいいって言うの!?」

何を当たり前のことを・・・

雄二　「大丈夫だ、Bクラスの代表はあの根本恭二だ」

☆根本恭二☆
卑怯の代名詞、目的の為なら手段は選ばない

美波　「なおさら危ないじゃない！そんなこともわからないの！？この赤ゴリラ！」
雄二　「誰が赤ゴリラだ！根本だから大丈夫なんだよ！なぁ和也？」
和也　「うん、大丈夫だよ。心配してくれてありがとう美波さん」
美波　「和也がそういうならいいけど・・・危なくなったら逃げるのよ」
和也　「うん、じゃ行って来るね」

大丈夫かな・・・心配だな・・・
・・・ってかさっきからこっち見てニヤニヤしてるこいつらがムカツク

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

さてと行きますかね・・・
（ガラッ）

和也　「こんにちは、根本君」
根本　「ん？なんだ和也か。どうした？・・・って用件は大体わかってるけどな」
和也　「え？」

根本　「宣戦布告だろ？」
和也　「う、うん」

その瞬間周りから激しい殺気を感じた
ヤッパリ喧嘩になるんですかね～
やだな～

根本　「いつだ？」
和也　「明日の午後から」
根本　「わかった」
和也　「へ？」
根本　「なんだ？」
和也　「いや、てっきり喧嘩になると思ってたから」
根本　「このクラス全員でかかっていってもお前に勝つ自信がないからな・・・」
和也　「それは買いかぶりすぎだよ」
根本　「よく言うぜ、鉄人にタイマンで勝った事があるくせに・・・」
和也　「まぁいいや、じゃあ僕はこれで・・・」
根本　「ああ」

（ガラガラ）

ずいぶんあっさり終わったなぁ
まぁ喧嘩にならなくてよかったよ

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　Ｂクラス

Ｂ　「よかったのか？おとなしく帰して・・・」
根本　「・・・お前らはあいつの恐ろしさを知らないからそんなこと言えるんだよ」
Ｂ　「まぁいい、で？今回はどんな手を使うんだ？また誰かを脅すか？」
根本　「・・・いや、今回は真っ向勝負だ」
Ｂ　「？珍しいな？お前が卑怯な手を使わないなんて」
根本　「何とでも言え。俺はまだ・・・死にたくないんだよ・・・」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第十問（後書き）

この話ではあえて卑怯じゃない根本君を書いてみようと思います
そのため後半の展開が若干変わります
あらかじめご了承ください

第十一問（前書き）

グラムサイト2様、感想をどうもありがとうございました
Bクラス戦開幕
今回、和也がちょっとキレますｗｗ

第十一問

☆Ｂクラス戦当日☆

ＳＩＤＥ　和也

さて、現在Ｂクラスと交戦中だ
今回、僕は秀吉君と一緒に先行部隊で美波さんと兄さんが中堅部隊。
瑞希さんが総指揮官だ
作戦としては僕たちが先行してできるだけ敵をたくさん倒し、点数を消耗してきたら中堅部隊と交代して回復に向かい、戻ってきたら交代といった感じだ

秀吉　「和也！よろしくなのじゃ」

和也　「ずいぶん気合が入ってるね」

秀吉　「前回は補習室に送られたからの・・・汚名挽回するのじゃ」

汚名は返上してください
定番のネタをどうもありがとうございます
・・・さて

和也　「吉井和也、行きます！試獣召喚！」

秀吉　「木下秀吉、行くのじゃ！試獣召喚！」

物理

Fクラス　吉井和也　２５０点
＆
Fクラス　木下秀吉　７５点
ＶＳ
Bクラス　野中長男　１６２点
＆
Bクラス　金田一裕子　１５９点
＆
Bクラス　里井真由子　１３２点

和也　「みんな！一対一じゃ勝ち目は無いから必ず一人に対して二人以上でかかるようにして！」

F　「「了解！！！」」

こっちは１０人（１部隊５人）
向こうの先行部隊は３人か・・・

？ずいぶん少ないな？
油断してんのかな？

野中　「余所見してんじゃねぇ！」

和也　「おっと」

Fクラス　吉井和也　１５１点
ＶＳ

Ｂクラス　野中長男　０点

ちょっとかすっちゃった。
危ない危ない。集中しなくｔ・・・
？召喚獣が消えた？
あぁ召喚フィールドから出てたのか・・・
・・・！ちょっと待ておかしいぞ！？
僕は一歩も動いてないのに・・・

岩下　「長谷川先生、Ｂクラス岩下律子です。Ｆクラス吉井和也君に数学勝負を申し込みます」

菊入　「私もやります」

しまった！
いつの間にか物理の布施先生があんなに遠くに・・・

岩下＆菊入　「試獣召喚！」

数学

Ｆクラス　吉井和也　５２点
ＶＳ
Ｂクラス　岩下律子　１８９点
＆
Ｂクラス　菊入真由美　１５１点

まずい！孤立させられた！他のみんなは・・・
・・・駄目だ・・遠すぎる・・・・

瑞希　「試獣召喚！」

瑞希さんの声が聞こえて何かが光った・・・
するとビームみたいなものが岩下さんの召喚獣を焼き払った

岩下　「きゃあぁぁーっ！」

菊入　「り、律子！」

美波　「ウチもいるわよ！！」

Ｆクラス　島田美波　１８０点
ＶＳ
Ｂクラス　菊入真由美　０点

和也　「美波さん！瑞希さん！」

瑞希　「和也君、大丈夫ですか？」

和也　「助かったよ。ありがとう」

美波　「アンタが戦死したら一気に劣勢になるんだから気をつけなさいよ」

和也　「うん、ごめん」

瑞希　「今のところ優勢なので今のうちに木下君と物理の回復試験受けてきてください」

和也　「わかった」

僕は一回教室に戻ることにした・・・

☆Fクラス教室☆

（ガラッ）あれ？誰もいない

秀吉　「む？雄二はどこへ行ったのじゃ？」

和也　「近衛部隊もいないね？」

（ガラッ）

雄二　「ん？お前らなにしてんだ？」

和也　「物理の回復試験を受けに戻ってきたんだよ」

秀吉　「それよりお主はどこに行ってたのじゃ？」

雄二　「Bクラスが協定を結びたいって言うから行ってきたんだ」

和也　「協定？」

雄二　「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままに

して続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関する一切の行為を禁止する。ってな」

？妙だな？

和也　「・・・」

雄二　「・・・やはりお前もそう思うか？」

秀吉　「？どういうことじゃ？」

和也　「確かに体力勝負に持ち込んだ方がこちらには有利だけど、こっちには体力のない瑞希さんがいる。瑞希さんの体調が万全になることを考えるとむしろこっちにとってかなり都合がいい。そうなるとこの協定を提案してきたＢクラスの考えがわからないってことだよ」

何か罠を張っているのかもしれないな

雄二　「まぁこっちは俺が調べとく。お前らは回復試験を受けて前線に戻ってくれ」

和也＆秀吉　「「了解（じゃ）」」

☆回復試験終了☆

和也　「じゃ、戻ろうか」

秀吉　「そうじゃの」

（ガラッ）

須川　「和也！」

和也　「どうしたの？そんなに慌てて？」

須川　「島田が人質にとられた」

和也　「なっ！？」

自分でも頭に血が上っていくのがわかる
こんなに苛立つのはひさしぶりだ

和也　「それで場所は？」

須川　（ビクッ）「さ、３階の東階段の前だ」

和也　「わかったすぐに行く。それと秀吉君」

秀吉　（ビクッ）「な、なんじゃ？」

和也　「頼みたいことがあるんだ」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

ウチは・・・馬鹿だ・・・
あんな嘘に騙されて、捕まって、皆に迷惑かけて・・・

鈴木　「おい、いいのか？こんなことして」

吉田　「しかたねぇだろ！こうでもしないと戦死しちまうよ！」

鈴木　「でも根本は今回は相手を傷つけることはするなって・・・」

吉田　「あいつが何を恐れてんのかしらねぇが、用は勝ちゃいいんだよ！」

鈴木　「そ、そうだよな！勝てば官軍って言うしな」

・・・和也も・・・呆れてるよね・・・
・・・もう・・・愛想尽かしたよね・・・
・・ウチのことなんか・・嫌いになったよね・・・
・・・和也に嫌われる・・・・・
・・嫌だ・・・ひっく・・・いやだ・・・嫌われたくない・・・ひっく

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

和也「瑞希さん、兄さん、状況は？」

明久「和也！」

瑞希「和也君！美波ちゃんが・・・」

二人組みの男が見える

一人が美波さんを押さえつけて、もう一人の召喚獣が美波さんの召喚獣に剣を突きつけｔ・・・

美波「・・・ひっく・・・」

和也「！！！（泣いてる！？）」

・・・コイツラ、ナニ、シヤガッタ？

瑞希「か、和也君？できれば・・その・・穏便に・・・」

和也「あぁ？」

瑞希「ひっ！な、何でもないです」（ガタガタガタ）

明久「（か、和也がキレた）」（ガタガタガタ）

僕は二人に近づく・・・

吉田「おい、そこで止まれ！」

鈴木「それ以上近づいたらこの女を補習室送りにしてやるぞ」

美波「か、かずや・・・ひっく・・・」

和也「・・・で？」

鈴木「え？」

和也「『え？』じゃねーよ。お前ら馬鹿か？んなことして何がしたいのかって聞いてんだよ」

吉田「くっ、てめえ今の状況わかってんのか！？口の聞き方には気を・・・」

和也「わかってるから言ってんだよ！馬鹿が！お前らこそ状況わかってんのか？今俺らがお前らに突撃したらどうなると思う？戦死はFクラス一人とBクラス二人だ。どっちが得するか・・・そんなこともわかんねーか？」

鈴木&吉田　「・・・」

和也「ようやく状況を理解したらしいな、おまけに女の子の腕掴み上げて泣かせて・・・そんな問題行為すりゃ教師の目も厳しくなるよなぁ？」

二人の顔が青ざめる・・・

和也「そんな脳みそがミジンコより少ない可愛そうな馬鹿どもにチャンスをやろう。今すぐ美波さんを離して逃げるんならこの場は逃がしてやろう。」

鈴木「ほ、本当か？」

和也「あぁ、なんならこの条件を受けたあとに教師に言って召喚フィールドを解除すればいい」

吉田「で、でもそれじゃ・・・」

和也「俺が言ってる言葉の意味がわからねーか？」

和也「美波を離してとっとと失せろっつってんだよ！！！このド三流が！！！！！」

鈴木&吉田　「は、はいっ！！」

屑どもが階段を降りて逃げていく
美波さんはその場に座り込んでしまった

和也「ふぅ。美波さん、大丈夫？」

美波「・・・わ・・いで・・・」

和也「え？」

美波「嫌わないで・・・ひっく・・・もっと頑張るから！足手まといにならないように頑張るから！役に立てるように頑張るからお願い！嫌いにならないで・・・ひっく」

和也「美波さん、落ち着いて」

美波「・・・ひっく・・・」

和也「嫌いになんてならないよ。それに足手まといにならないようにって言ってたけど、僕はそんな風に思ったことなんて一度も無い。役に立つから友達で使えないから友達じゃないなんてそんなのおかしいよ」

美波「・・・でも・・・」

和也「それじゃあさ、美波さんが困ってるときは僕が助ける。そのかわり僕が困ったときは手を貸してよ。それならどう?」

美波「・・・うん、わかった。ところでほんとによかったの?」

和也「何が?」

美波「あの二人逃がして。突撃して倒した方がよかったんじゃ・・・」

和也「それなら大丈夫。そろそろ・・・」

そう言った瞬間、下の階から声が聞こえる

秀吉「総員突撃なのじゃ!」

和也「・・・ほらね、あらかじめ秀吉君たちに下の階に待機してもらってたから・・・」

美波「いいの?逃がすって言ったのに・・・」

和也「僕は『この場は』見逃してやるって言ったんだよ?そして『偶然』下の階にいた秀吉君にやられただけだよ」

美波「なるほど、色々考えてんのね（やっぱりすごいな）」

和也「さて皆のところに行こう。立てる?」

僕は手を差し伸べた
そして美波さんは僕の手を・・・掴まない?

和也「?どうしたの?」

美波「え、えっと、その・・・安心したら腰が抜けちゃって・・・」

和也「そっか、じゃあ・・・よっと」

美波「きゃ、ちょ、ちょっと和也!?」

僕は美波さんを抱え上げる
いわゆる『お姫様抱っこ』である

美波「ちょ、ちょっと!降ろして!さすがに恥ずかしいから!」

和也「歩けないんだからしょうがないでしょ?気にしない気にしない」

瑞希「あっ!美波ちゃん!大丈夫ですか?」

美波「／／／」

明久「美波、どうしたの？」

和也「腰が抜けちゃったんだって、いったん教室に戻ろう」

顔色がちょっと赤くなってる美波さんを抱えたまま教室へ歩く

・・・そういえば・・・

和也「そういえばなんで美波さん捕まったの？」

美波「ふぇ！？そ、それは・・その・・・」

？どうしたんだろ？顔が更に赤くなった

そして瑞希さんと兄さんはなんでニヤニヤしてんだろ？

瑞希「美波ちゃんは和也君が怪我して保健室に運ばれたって聞いて凄い勢いで飛んで行ったんですよ」

和也「！！」

美波「ちょ、ちょっと瑞希！」

和也「美波さん」

美波「な、なによ？」

和也「心配してくれてありがとう」

美波「う、うん／／／」

そう言うと美波さんの顔はまっ赤になった

瑞希「美波ちゃん、可愛いですぅ～」

そして僕らは教室へと戻って行った

☆Fクラス教室☆

雄二「さて、午後四時になった。協定どおり明日の朝9時まで休戦だ。解散していいぞ」

明久「戦況は？」

雄二「和也と姫路がだいぶ倒したがそれでもこっちの被害の方が大きいな」

まぁ戦力差があるから仕方ないですね

康太「・・・（トントン）」

雄二「ん？Cクラスの様子が怪しいだと？」

秀吉「漁夫の利をねらっておるのかの？」

雄二「たぶんそうだろうな・・Cクラスと協定でも結ぶか」

・・・おかしいな

美波「どうしたの？和也？」

和也「なんかひっかかるんだ」

明久「何が？」

和也「だって普通に考えたら勝つのはＢクラスで、代表は根本君だよね？小山さんが自分の彼氏に宣戦布告するとは思えなくって」

美波「小山さんって誰？」

和也「根本君の彼女だよ。たしかＣクラスの代表だったと思うけど」

雄二「！！おい和也！その話は本当か？」

和也「う、うん」

雄二「なるほどそういうことか」

瑞希「どういうことですか？」

雄二「罠ってことだ。Ｃクラスに行けばおそらく根本がいる。そして協定を結ぼうとしたら協定違反として襲い掛かってくるだろう」

秀吉「なるほどのう」

明久「でもどうするの？これじゃ勝ってもすぐにＣクラスと戦うことになるよ？」

雄二「それに関しては考えがある。とりあえず今日は解散して明日

に備えてくれ」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　根本

・・・ちっ、和也の奴。友香がＣクラス代表だと知ってやがったか・・・
・・・数学主体で真っ向勝負しかねぇな・・・
今回は小細工は使えねぇ・・・
・・・和也のアレはもう二度と見たくねぇからな・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

・・・和也はああ言ってくれたけど・・・
・・・本当にそれでいいの？
初めて会ったあの時から今まで助けられてばっかり・・・
ウチは和也に何もしてあげられない・・・
・・・・・やっぱりこのままじゃ・・・

美波「瑞希、ちょっといい？」

瑞希「はい、なんですか？美波ちゃん」

美波「ちょっと頼みたいことがあるんだけど・・・」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

第十一問（後書き）

ついに和也がキレました。
次回はＢクラス戦決着までを予定しています

第十二問（前書き）

前話で登場した美波を人質にとった二人組みですが、原作をよく読むとちゃんと名前があったので書き直しました
今回でＢクラス戦終結となります

第十二問

ＳＩＤＥ　和也

Ｂクラス戦二日目の朝
僕らは・・・走ってた・・・

和也＆明久「「はぁっ、はぁっ」」

美波「遅かったわね？」

雄二「また明久の寝坊に巻き込まれたのか？」

和也「雄二君正解」

明久「こら雄二！『また』ってなんだよ！それじゃまるで僕がいつも寝坊してるみたいじゃないか！」

その通りじゃないかな？

雄二「その通りだ」

言い切った！

明久「そんなことないよ！週４回位しかしてない！」

一週間の過半数だね
ってか週休二日だからほぼ毎日だ
・・・？

秀吉「『全く、Ｆクラスは本当に馬鹿ばっかりなのね』」

明久「あれ？木下さん？どうしてここに？」

和也「違うよ兄さん。これは秀吉君だよ」

なんで女装してんだろ？

秀吉「ふむ、やはり声を変えても和也は騙せんかったのう」

美波「よくわかったわね？服装まで変えてるのに」

和也「だって『気』（オーラ）が全然違うじゃん？」

秀吉「それでわかるのはお主だけじゃ」

和也「で？なんで変装してんの？」

雄二「これからＣクラスに行って挑発してもらって、敵意がＡクラ

スにいくように仕向ける」

なるほど、それで女装を・・・って

和也「それって相手を騙すってことでしょ?優子さんの姿でそんなことしたら優子さんの評判が悪くなっちゃうよ!」

雄二「お前がこういう手段が嫌いなのは知ってる。でも他に方法がないんだ」

和也「・・・」

雄二「・・・そろそろ行くがお前はどうする?」

和也「・・・僕はここで待ってるよ」

雄二「わかった」

美波「和也、木下のお姉さんとは知り合いなの?」

和也「一年の時クラスメートだったんだ」

美波「仲いいの?必死に庇おうとしてたみたいだけど?」(ギロッ)

？なんで睨むんだろ？

和也「人が傷つくのを見るは嫌なんだ」

美波「（ホント、誰にでも優しいのね）」

和也「？何か言った？」

美波「別に」

瑞希「・・・はぁ・・・」

？美波さんどうしたんだろ？
そして瑞希さんは何で溜息？
・・・でもまぁ優子さんも事情を話せばきっと許して・・・

秀吉「『静かにしなさい、この薄汚い豚ども！！』」

・・・はくれそうにないな・・・
ってか秀吉君、ちょっとやりすぎじゃない！？
・・・優子さんには今度ジュースでもおごってあげよう・・・

☆Ｂクラス戦再開☆

さて、雄二君の作戦は『敵を教室に閉じ込めろ』ですがここで問題が発生
右側出入り口にいるのは数学の長谷川先生
左側にいるのは同じく数学の木内先生
・・・つまり・・・

和也「僕・・・役立たず？」

雄二「弱点を突かれたな」

秀吉「ま、まぁ気を落とすでない。まだチャンスはあるのじゃ」

はぁ・・・僕はいつも肝心なときに・・・
おかげで瑞希さんの負担が増えちゃったな・・・
申し訳ないな・・・

B「姫路瑞希討ち取ったぞ!!」

F「「「「なっ!!!!」」」」

瑞希「うぅ、ごめんなさい・・・」

瑞希さんがやられた!?
ま、まずい!士気が下がる!!

雄二「落ち着け！まだ負けたわけじゃねぇ！とにかく出入り口を塞げ！」

さすがだ、士気の低下を抑えた
でもどうするんだろ？
右は秀吉君、左は美波さんの部隊が抑えてるけどそう長くはもたない

Ｆクラス　木下秀吉　７９点

Ｆクラス　島田美波　２１２点

あれ？美波さんの点数がいつもより高いような・・・

明久「和也、ちょっと作戦があるから手伝って」

和也「作戦？いいよ」

どうせここにいても役に立たないし・・・・
何するつもりなんだろ？
兄さん何するつもりなんだろ？
僕は兄さんに連れられて隣の教室に連れて行かれた

和也「どうするの？」

明久「観察処分者の召喚獣の物理干渉能力については知ってるよね？それを使って・・・」

？？どうするんだろ？？
見当もつかない・・・・
どうせまたとんでもないことなんだろうな・・・

明久「この壁をぶっ壊す！」

・・・予想よりはるかにとんでもないことでした
・・・・って

和也「危ないよ！フィードバックのこと忘れたの！？」

明久「わかってる。でもこのまま負けたら戦死した瑞希ちゃんが責任を感じちゃう、そんなの嫌なんだ」

・・・あいかわらず優しいんだな
まぁ兄さんがこうなったらもう止められないし・・・

和也「わかった、協力するよ。でも立会い教師がいないと召喚できないよ？」

明久「うん。だから・・・」

☆数分後☆

遠藤「本当にやるんですか？」

和也「はい、兄さんには一度☆Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩ☆しなきゃ気がすみません」

明久「兄としての威厳って奴を見せてやる！」

遠藤「わかりました。お互いを知る為の喧嘩も教育として重要かもしれませんね」

和也＆明久「「試獣召喚！！」」

そして僕と兄さんの戦いが始まった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

・・・まずいわね

ウチの部隊は残りわずか

（ドン！）

向こうの木下は・・・厳しそうね・・・

（ドンッ！）

さっきから何の音かしら？

根本「お前らいい加減諦めろよな。暑苦しいんだよ」

雄二「どうした？軟弱なＢクラス代表様はそろそろギブアップか？」

（ドゴン）

根本「はぁ？ギブアップするのはそっちだろ？」

雄二「無用な心配だ」

根本「そうか？お前らの主力の姫路は討ち取ったし和也は数学が苦手。もうお前らに勝ち目はないと思うがな」

雄二「確かに姫路の件は計算外だったが想定内だ。それに二人がいなくてもお前ら程度どうにでもなる」

根本「けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよぉ」

雄二「負け組？それがＦクラスのことならもうすぐお前が負け組代

表だな」

（ドン）

坂本の奴ずいぶん余裕ね
何を考えてんのかしら？

根本「さっきからドンドンと壁がうるせえな。何かやってんのか？」

雄二「さぁな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

根本「けっ。言ってろ。どうせもうすぐ決着だ。一気に押し出せ！」

雄二「・・・（時間だな）態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

根本「散々ふかしておきながら逃げるのか！全員で畳み掛けろ！誰一人生きて帰すな！」

？？今、坂本が何か言ったような・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

そろそろ時間だ

和也「兄さん！」

明久「わかってる。おおおおおっ！」

明久「だぁぁーーっ！！！」

（ドゴォッ！！）

根本「ンなっ！？」

僕らは壁を突き破って根本君に向かっていった

和也「遠藤先生！Ｆクラス吉井和也が・・・」

山本「Ｂクラス山本が受けます！試獣召喚！！」

和也「！近衛部隊！まだいたのか！？」

根本「残念だったな？和也。お前らの奇襲は失敗だ！」

・・・さて、それはどうかな

確かに僕らの奇襲は失敗だ

『僕ら』はね・・・

（ダン、ダンッ！）

根本君の背後の窓から二人分の着地音が響き渡る。
根本君が振り返るとそこには・・・

康太「・・・Ｆクラス土屋康太。Ｂクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

根本「キ、キサマ・・・！」

康太「・・・試獣召喚」

根本「ムッツリィニィーッ！」

Ｆクラス　土屋康太　４４１点
ＶＳ
Ｂクラス　根本恭二　２０３点

康太君の小太刀による一閃で敵を切り捨てる
そしてＢクラス戦は終結した。

第十二問（後書き）

卑怯じゃない根本を書くのに思ったより苦労しましたｗｗ
後半はほぼ原作どおりとなりました
次回、原作ブレイクしますｗｗ

第十三問（前書き）

原作ブレイクｗｗ

第十三問

ＳＩＤＥ　和也

なんとか勝てたね・・・でも

秀吉「お主ら、随分と思い切った行動にでたのう」

和也「やりすぎだったね」

明久「うぅ・・・。痛いよう、痛いよう・・・」

秀吉「なんとも・・・お主らしい作戦じゃったな」

明久「で、でしょ？もっと褒めてもいいと思うよ？」

兄さん？褒められてませんよ？

秀吉「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、誰も考えつかん作戦じゃな」

明久「・・・遠まわしに馬鹿って言ってない？」

結構、ストレートに馬鹿って言ってますよ

雄二「ま、それが明久の強みだからな」

馬鹿が強みですか・・・
どうしよう・・・否定できない

雄二「さて、それじゃ戦後対談といくか。な、負け組代表？」

根本「・・・」

床に座り込んでる根本君。
最低クラスに負けたんだからそりゃ落ち込むよね

雄二「本来ならお前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、俺が出す条件を飲めば特別に免除してやらんでもない」

？雄二君は何を考えてるんだろう？

根本「・・・条件はなんだ？」

雄二「それはお前だよ、負け組代表さん」

根本「俺、だと？」

!!!ま、まさか・・・そうだったのか・・・

和也「雄二君」

雄二「何だ?」

和也「僕たちは何があっても友達だからね!」

雄二「?何言ってんだ?」

和也「たとえ雄二君が同性愛者の変態でも僕は軽蔑したりしないよ!」(ジリジリ)

根本「!」(ゾクッ)

雄二「な!?ち、ちげーよ馬鹿野郎!俺はノーマルだ!ってか後退りしながら言うんじゃねえ!説得力が微塵にも感じられねえよ!根本も震えてんじゃねえ!そういう意味じゃねえよ!」

またまた、恥ずかしがらなくてもいいのに
性癖は人それぞれですよ

雄二「ゴホン、お前には散々好き勝手やってもらったし正直去年から目障りだったんだよ」

キツイ事言っちゃって・・・
ツンデレってやつですか？

雄二「Ａクラスに行って、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし宣戦布告はするな。戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

根本「・・・それだけでいいのか？」

雄二「ああ、お前がこれを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

！！こ、これは・・・女子の制服・・

和也「雄二君・・・そんな趣味まで・・・」

雄二「だから、ちげーつってんだろ！これはただの嫌がらせだ！」

・・・ふむ、嫌がらせか・・・
・・・！！いいこと思いついた！

根本「ば、馬鹿なこと言うな！何で俺がこｎ・・・」

和也「雄二君、ちょっといいかな？」

雄二「今度はなんだ？」

和也「今の内容、ちょっと変えてほしいんだ」

雄二「・・・まぁ内容にもよるが・・・」

和也「大丈夫、悪いようにはしないから。それと秀吉君、頼みたいことがあるんだけど」

秀吉「む？なんじゃ？」

和也「（ヒソヒソ）なんて用意できる？」

秀吉「できんことはないが、何に使うんじゃ？」

和也「えっとね（ヒソヒソヒソ）」

秀吉「・・・お主、存外鬼畜じゃな」

和也「とにかくお願い」

秀吉「うむ、心得た」

（ガラッ、タッタッタッ）

さて、いまのうちに・・・

和也「根本君、先に聞きたいことがあるんだけど」

根本「な、なんだ?（な、何だ・・この殺気は?）」

和也「戦争中にそこにいる島田さんが人質に捕られたんだけど、それは根本君の指示じゃないよね?」

根本「!?」

和也「・・・その反応を見るとどうやら違うみたいだね?」

根本「あ、ああ。初耳だ」

和也「そっか、ならいいんだ」

（ガラッ）

秀吉「和也、取ってきたのじゃ」

和也「ありがとう、えっと・・・鈴木君と吉田君だったかな?ちょっと前に出てきてね」

鈴木&吉田「!」（ビクッ）

和也「さっき雄二君が言った内容を君達二人にやってもらう。もちろん、この女子の制服と今持って来てもらったこれを着てね」

そういって僕は秀吉君の持ってきた紙袋からあるものを取り出す

・・・セーラー服?しかも、ミニスカ?

随分キツイ物を持ってきたね?

秀吉君も怒ってんのかな?
まあいいや

吉田「ふ、ふざけんな」

鈴木「い、嫌に決まってんだろ!」

和也「俺が言ってる言葉の意味を理解できないのか?嫌かどうかなんて聞いてない。やれって言ってんだよ!」

鈴木「ま、まだ島田を人質に捕ったこと怒ってるのか?」

吉田「で、でもあれはあの時・・・」

和也「何、都合よく勘違いしてんだ?俺は『この場は逃がす』って言ったんだ。許すなんて一言も言ってないし、大切な友達を傷つけた奴を許すわけないだろ?」

鈴木&吉田「・・・」

和也「雄二君これでいいよね?」

雄二「い、いや、しかし・・・」

和也「イ・イ・ヨ・ネ?」

雄二「もちろんだ!何の問題もない!」

和也「さて、Bクラスの皆さん!今の条件を飲むか、この下衆な卑

怯者二人を守る為に設備を落とすか・・・好きな方を・・・」

B「任せて！必ずやらせるから！」

B「それだけで教室を守れるならやらない手はないな」

・・・この二人、友達少ないのかな？
それにしても・・・

Fクラス全員「・・・」（ガタガタガタ）

なんでみんな震えてんだろ
それに・・・

美波「（た、大切って）」／／／

美波さんは何で顔を真っ赤にしてんだろ？

根本「ったく、鈍感なところは相変わらずだな」

和也「？？？」

根本「まぁいい、とりあえず助かったから礼は言っとく」

和也「もし根本君の指示だったら三人で仲良く行ってもらうところだったけどね」

根本「・・・考えただけでも恐ろしい」

和也「Aクラスへの件よろしくね」

根本「ああ、了解だ。それと、島田にもすまなかったと伝えておいてくれ」

和也「わかった」

さて、・・・兄さんと一緒に壁破壊の説教を受けに行こうかな・・・

第十三問（後書き）

以上、卑怯じゃない根本君でした

第十四問（前書き）

本日2話目、何とか書けました

第十四問

ＮＯ　ＳＩＤＥ

少女「助けて！」

男に押さえ込まれた少女が叫ぶ

少女「助けて！お兄ちゃん！」

同じく男に押さえつけられている少年に向かって叫ぶ

少年「やめて！・・・を離して！！」

動けない少年は男に向かって叫ぶ
だがその願いは聞き入れられず
そして・・・

少女「いやあぁぁーっ！！」

少女の胸にナイフが振り下ろされた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

☆Ａクラス戦当日、Ｆクラス☆

ＳＩＤＥ　和也

雄二「まず皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは皆のおかげだ。感謝している」

明久「どうしたのさ、雄二が礼を言うなんて・・・らしくないよ？」

兄さん、その言い方は失礼では？

雄二「自分でもそう思うが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

なんかはっきりそう言われるとうれしいですね

雄二「さて、残るＡクラス戦だが、一騎打ちで決着をつけようと思う」

？どうするつもりでしょう？
僕も瑞希さんもＡクラス代表より成績は下ですよ？

雄二「やるのは当然、俺と翔子だ」

明久「馬鹿の雄二が勝てるわけがなぁぁ！？」

雄二君の投げたカッターが兄さんの頬をかすめた
・・・とはいえ兄さんの言うことも最もだ
雄二君が翔子さんに勝てるとは思えない・・・

雄二「さて、具体的なやり方だがフィールドを限定しようと思う」

秀吉「何の教科でやるつもりじゃ？」

雄二「日本史だ」

明久「日本史なら和也がやった方がよくない」

確かに僕は日本史が得意ですが・・・
向こうもそれを知ってるんですよ？

だったら・・・

雄二「アホ、和也が日本史で勝負するって言って一騎打ちを受けてくれるわけないだろ」

そういうことです
でも、雄二君は勝てるんでしょうか？

雄二「内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限ありの点数勝負だ」

和也「これだけ細かく限定するって事は何か策があるんだね？」

雄二「あぁ、ある問題が出たらあいつは必ず間違える。その問題は大化の改新」

和也「大化の改新？えっと確か・・・『 聖徳太子の死後，蘇我氏が勢力を強め，太子の子の山背大兄王とその一族をほろぼすなど，天皇家をしのぐほどの力をもつようになった。中大兄皇子（のちの天智天皇）や中臣鎌足らは，隋や唐で政治や文化を学んで帰国した留学生とともに，天皇を中心とする中央集権国家の建設をめざし，６４５（大化１）年に蘇我氏をたおし，政治の改革に着手した』だったかな？」

雄二「・・・さ、さすがだな。だがそこまで詳しい内容じゃなくていい。もっと単純な問いだ」

秀吉「単純というと・・・何年に起きたとかかのう?」

雄二「おっ。ビンゴだ秀吉。いま和也が言った様に大化の改新が起きたのは６４５年だ」

和也「でも、そんなの間違えるかな?」

雄二「絶対に間違える、俺は昔アイツに嘘を教えた。そしてアイツは一度教えたことは忘れない。それを利用する」

なるほど、それで向こうが間違えればこっちは満点で僕らの勝ちというわけだね

・・・ん?何か大切なことを見落としてるような・・・

瑞希「あの、坂本君」

雄二「何だ、姫路」

瑞希「霧島さんとは仲がいいんですか?」

雄二「アイツとは幼馴染だ」

あれ?みんな知らなかったんだ

え?僕はなんで知ってるのかって?

去年クラスが同じだったから翔子さんから直接聞いたし、・・・

明久「総員、狙え！」

雄二「な！？なぜ明久の号令で上履きを構える！？」

明久「黙れ、男の敵！Ａクラスの前にキサマを殺す！」

雄二「俺が一体何をしたと！？」

全く・・・そろそろ止めたほうがいいかな

瑞希「あの、明久君」

明久「ん？何？」

瑞希「明久君は霧島さんが好みなんですか？」

明久「そりゃ、まぁ。美人だし」

瑞希「・・・・・」

明久「え？な、なんで僕に対して攻撃態勢とるの？」

兄さん・・・少しは瑞希さんの気持ちを考えｔ・・・

（トントン）

？ん？

和也「どうしたの?美波さん」

美波「アンタはあんまり驚いてないみたいだけど知ってたの?」

和也「うん。去年クラスメートだったから直接聞いた事がある」

美波「・・・アンタも霧島さんみたいなのがいいわけ?」（ギロッ）

?なんで睨むんだろ?

和也「美人だとは思うけど、別に好みってわけじゃないよ」

それに・・・僕には幸せになる資格なんてないんだから・・・

美波「そ、そう?ならいいの」

何がいいんだろ?

秀吉「まぁまぁおちつくのじゃ。相手はあの霧島翔子じゃぞ?雄二に興味があるとは思えんじゃろうが」

興味あるんだなーこれが・・・

毎日のようにノロケ話聞かされたし・・・

まぁ言ったらまたうるさくなるから黙っとこう

和也「そんなことより早くAクラスに行こうよ」

雄二「そ、そうだな。じゃあ何人かついてきてくれ」

僕たちはAクラスへ向かった

☆Aクラス☆

優子「一騎討ち？」

雄二「ああ、Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎討ちを申し込む」

雄二君、僕、兄さん、美波さん、瑞希さん、秀吉君、康太君はAクラスに来ていた
Aクラス側交渉役として出てきたのは優子さんだ

優子「却下よ。姫路さんが出てきたら万が一があるし、それに和也に日本史か世界史でこられたら勝ち目はないし」

雄二「安心してくれ、うちからは俺が出る」

優子「無理だよ。その言葉は鵜呑みにできない」

雄二「そうか、ところでBクラスとやりあう気はあるか？」

優子「Bクラスって・・・昨日来ていたあの・・・」

雄二「そう、あいつらがいるクラスだ。ちなみに、うちとの戦争は『和平交渉にて終結』ってことになってるから準備期間は必要ない。Dクラスも同じだ」

優子「それって脅迫？」

雄二「人聞きの悪い、ただのお願いだよ」

いや、どう考えても脅迫でしょ？

優子「でも・・うーん・・・」

翔子「・・・受けてもいい」

明久「うわっ！」

兄さん驚きすぎ・・・

翔子「・・・その代わり条件がある。負けた方は何でも一つ言うこ

とを聞く」

優子「ちょっと待って。こっちはクラスの設備がかかってんだから相手の条件そのまま飲んじゃ駄目。五人選んで一騎討ちを五回で三回勝った方の勝ちにして。科目選択権はそっちに三つこっちに二つ。これでどう？」

翔子「・・・わかった」

雄二「いいだろう」

明久「ゆ、雄二！まだ瑞希ちゃんが了承してないじゃないか！」

？兄さんはそんなに慌ててどうしたんでしょう？

雄二「大丈夫だ。姫路には絶対に迷惑はかけない」

翔子「・・・勝負はいつ？」

雄二「そうだな、十時からでいいか？」

翔子「・・・わかった」

雄二「よし、一旦教室に・・・」

優子「ちょっと待ちなさい」

雄二「まだ何かあるのか？」

優子「ええ。あなたたちCクラスの小山さんって知ってるかしら?」

全員「!!」

優子「その反応を見るとやっぱりあなたたちの仕業ね?秀吉、ちょっとこっちに・・」

和也「ちょ、ちょっとまって!今回の件は秀吉君だけが悪いわけじゃないんです!」

雄二「ああ、発案者は俺だ。戦争に勝つために必要だったんだ」

優子「全く・・・でも意外ね。他の人はともかく、和也はこういうの嫌がると思ってたんだけど・・・」

秀吉「そのとおりじゃ。他のみんなは賛成したんじゃが和也は最後まで反対しておった」

和也「でも結局止められなかったんだから僕も同罪です」(シュン)

優子「(か、可愛い)///じゃ、じゃあ今回は和也に免じて許してあげる。ただし一つ条件があるわ」

雄二「何だ?」

すると優子さんは僕の方を向いて・・・

優子「一騎討ちにアタシと和也の勝負を入れなさい。科目選択権はアタシが貰う。その条件が飲めるなら許してあげるわ」

和也「・・・いいかな?雄二君」

優子「ちなみに数学は選ばないから安心しなさい」

雄二「・・・仕方ない。その条件を飲もう」

優子「ふふ、ようやくアンタにリベンジできるわ」

・・・やっぱりあのことみたいだな・・・

雄二「じゃあ教室に戻るぞ」

僕たちはみんなへの説明の為教室へと戻った

第十四問（後書き）

和也と優子の間に一体何があったのでしょうか？
次回はＡクラス戦１，２回戦を予定しています

第十五問（前書き）

Aクラス戦開始しました

第十五問

ＳＩＤＥ　和也

高橋「では、両名共準備は良いですか？」

ついに一騎討ちが始まりました
場所はＡクラス、立会人は学年主任の高橋先生がやるみたいですね

雄二「ああ」

翔子「・・・問題ない」

高橋「それでは一人目の方どうぞ」

康太「・・・・（スクッ）」

こっちの一人目は康太君だ

愛子「じゃ、ボクが行こうかな」

向こうは愛子さんがでるみたいだ

高橋「教科は何にしますか？」

康太「・・・保健体育」

愛子「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？でも、ボクだってかなり得意なんだよ？・・・キミとは違って、実技で、ね♪」

？実技ってなんだろ？スポーツのことかな？

愛子「そっちのキミ、吉井明久君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で」

明久「フッ。望むところ・・・」

自信満々だね

瑞希「明久君にはそんな機会来ないから永遠に必要ありません！」

？いや、体育は週三回ありますよ？

愛子「じゃ、弟の和也君はどう？」

今度は僕ですか?でも僕運動得意だし・・・

和也「せっかくですが、水泳以外のスポーツには自信があるのでご遠慮します」

全員「・・・・・」

???なんでしょう?この空気は・・・

愛子「プッ、アハハ。和也君って面白いね」

和也「???」

高橋「そろそろ召喚を開始してください」

愛子「はーい。試獣召喚っと」

康太「・・・・試獣召喚」

康太君の召喚獣は小太刀の二刀流
愛子さんの召喚獣は大きい斧だ

保健体育

Ｆクラス　土屋康太　４７２点
ＶＳ
Ａクラス　工藤愛子　４６３点

点数は、ほぼ互角

康太「・・・加速」

愛子「甘いよ！土屋君！」

康太「・・・！？」

！康太君の攻撃をジャンプでかわし、そのまま背後から斧を振り下ろす
そして、康太君の召喚獣が消滅してしまった

高橋「勝者、Ａクラス」

雄二「ムッツリーニが・・負けただと！？」

雄二君も驚きを隠せないようだ

康太「・・・なかなかやる」

愛子「召喚獣の服装でスピード型だってわかったからね」

康太「・・・・次は負けない」

愛子「何回やってもボクの勝ちだよーだ」

高橋「では、次の方どうぞ」

佐藤「私が出ます、科目は物理でお願いします」

こっちは誰を出すんだろ？

雄二「チッ。姫路行ってくれ」

瑞希「え？あ、はい」

あれ、もう瑞希さん？
・・・って当然といえば当然か

美波「もう瑞希を出しちゃうの？」

雄二「ああ、俺の予定では、和也、姫路、ムッツリーニの三人で二勝して俺の一騎討ち、あわよくば三勝でウチの勝利って作戦だったんだ」

明久「で？」

雄二「少しは自分で考えろバカ久。ムッツリーニが負けてしまった以上、和也と姫路には必ず勝ってもらわなきゃならない。」

明久「？」

雄二「まだわからないのか！？工藤と佐藤が出てきて、翔子、木下はそれぞれ俺と和也が相手をすることになってる。となるとここで姫路を出さないとおそらく相手は学年次席の久保になる。」

和也「つまり瑞希さんと利光君の勝負はリスクが高すぎる。まぁ佐藤さんに勝てる保証もないけど利光君とやらせるよりはマシってことかな？」

雄二「そういうことだ。おっ、始まるぞ」

瑞希＆佐藤「試獣召喚！」

物理

Ｆクラス　姫路瑞希　４３７点
ＶＳ
Ａクラス　佐藤美穂　３８９点

瑞希「行きます！！」（キラッ）

瑞希さんの召喚獣の腕輪が光り

佐藤さんの召喚獣へ『熱線』を放ち・・・

佐藤「！きゃあああ」（キュボ）

一撃で焼き払った
ってか瑞希さん物理の点数こんなに高かったっけ？

高橋「勝者Ｆクラス」

明久「やった、勝った」

雄二「喜ぶのはまだ早いぞ、まだ一勝、和也が負けたらおしまいなんだ」

明久「でも、負けても一勝二敗だから次勝てば・・・」

雄二「残りのメンバーで誰が久保に勝てるんだ？」

和也「・・・わかった。絶対勝つよ！！」

優子「随分、自信があるみたいね？いいわ。次はアタシが行く。引導を渡してあげるわ！出てきなさい！和也！」

第十五問（後書き）

佐藤さんをあっさり倒してしまいました
佐藤さんのファンの皆様ごめんなさい
次回、和也ＶＳ優子

第十六問（前書き）

本日2話目。何とか書けました
今回、和也が・・・

第十六問

ＳＩＤＥ　和也

優子「さぁ、出てきなさい！和也！」

和也「じゃあ行ってくる！任せて！絶対勝つよ！」

雄二「頼んだぞ」

高橋「科目は何にしますか？」

優子「現代国語でお願いします」

高橋「わかりました」

雄二「おい、明久。和也は現代国語は苦手なのか？」

明久「そんなことないよ。文系科目は比較的得意のはずだよ」

瑞希「じゃあなんで？」

秀吉「現代国語は姉上の得意科目じゃ、じゃが一年のときに和也に負けたらしくての」

雄二「なるほど、リベンジってわけか」

美波「でも一回勝ってるって事は少なくとも互角以上ってことよね

？」

明久「そうだね、勝ち目はあるよ」

兄さんたちの会話が聞こえる
勝ったといっても半年以上前の話だしそれもたったの１４点差
今から戦って必ず勝つ自信なんてない
でも・・・・

和也「絶対に負けられない！！試獣召喚！」

優子「アタシは一番得意な現代国語でアンタに負けてから毎日ずっと勉強し続けたわ、アンタに勝つために！だから今度こそ絶対負けない！試獣召喚！！」

Ｆクラス　吉井和也　４３６点

明久「た、高い！！」

美波「瑞希より高いんじゃない！？」

瑞希「はい、私は３００ちょっとですから・・・やっぱり和也君はすごいです！」

雄二「よし！これならいける！」

Ａクラス　木下優子　５４９点

明＆美＆瑞＆雄「「「「「は？」」」」」

和也「・・・う・・・・そ・・・・」

優子「ふふ。さぁ、始めましょ」

和也「くっ、行きます！」

点数差１００点以上・・・

劣勢だ・・・でも・・

和也「・・・負けない」

僕が負けたらもう後がない

だから・・・

和也「負けられないんだ！！！！」

僕には兄さんほど細かい操作はできない

でも優子さんも操作に慣れてないのかさっきからミスが多い

そうだ、まだ負けたと決まったわけじゃない！

最後まで絶対に諦めない！！
激しく攻撃を打ち合う僕と優子さんの召喚獣
そして決着が着いた

Ｆクラス　吉井和也　０点
ＶＳ
Ａクラス　木下優子　１５点

・・・ま・・・け・・・た？
そんな・・・絶対負けられなかったのに
僕のせいで・・・負けた？
絶対勝つって言ったのに・・・
みんなきっと怒ってる
ふと夢の中で出てきたあの少女の言葉が頭をよぎった
『ウソツキ』
僕は目の前が真っ白になった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也の妄想

雄二「ったく、何が『任せて』だよ」

秀吉「期待はずれじゃ」

康太「・・・使えない」

明久「絶対勝つって言ったのに・・・」

瑞希「酷いです」

美波「ウソツキ」

「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」「ウソツキ」

和也「うわあああああああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

みんながこっちに向かってくる
どうしよう、きっと怒ってる
みんなに嫌われる
また・・・一人になる・・・
嫌だ・・・一人は嫌だ・・・

美波「和也・・・」

和也「・・・なさい」

美波「え？」

和也「ごめんなさい・・・えっく・・・ごめんなさい・・・」

美波「ちょ、何泣いてんのよ！？」

和也「だって・・・負けちゃった・・・絶対勝つって言ったのに・・・僕は・・・『ウソツキ』だ」

明久「和也、もしかして自分のせいでFクラスが負けちゃうとか考えてない？」

和也「・・・（コクン）」

瑞希「それは違います！和也君がいたからここまで来れたんです！」

秀吉「そうじゃ、Dクラス戦ではお主がいなければ勝てんかった」

明久「Bクラス戦だって和也が美波を助けてなかったら勝ち目はなかった」

康太「・・・そもそも、俺も一回戦で負けた」

雄二「それにFクラスで一番点の高いお前が負けたんだ。どうせ誰が出てても木下姉には勝てねぇ」

明久「だから気にしなくていいんだよ。何でも一人で背負い込まなくていい、何か悩みがあるなら相談して。だって僕たちは家族じゃ

ないか」

嬉しかった。こんな僕でも・・・『ウソツキ』な僕でも家族と呼んでくれる
居場所がある・・・友達がいる・・・ただそれが・・・
たまらなく嬉しかった

和也「兄さん・・・う、うわあああああん」

涙が止まらなかった
兄さんは僕が泣き止むまで優しく抱きしめてくれた
・・・それにしても

優子「・・・」（キラキラ）

なんで優子さんは目を輝かせながらこっちを見ているんだろう？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　雄二

次に出てくるのはまず間違いなく久保だ

久保に勝てる奴なんてウチにはもういない

・・・ムッツリーニと和也が負けたのはしかたねぇ

あいつらのせいじゃない

・・・結局、俺の考えが甘かったってことか・・・

くそっ!どうする?明久の操作技術で勝負か、それとも・・・

?「・・・が行く!」

第十六問（後書き）

和也は少しは救われたんでしょうか？
さて、久保君と戦うのは一体誰なんでしょう？

第十七問（前書き）

試験召喚戦争編は今回で終了となります
？？ＶＳ久保
終盤、明久のブラコン発動！！（笑）

第十七問

ＳＩＤＥ　明久

和也「もう大丈夫だよ。ありがとう、兄さん」

ようやく和也が泣き止んだ
和也が人前で泣くなんてあの時以来だな・・・
何か木下さんが目をキラキラさせてたけど、どうかしたのかな？

高橋「では４人目お願いします」

試合が再開される
さて・・・弟がこれだけ頑張ったんだし、兄である僕が高みの見物ってわけにはいかないな
それに点数で勝てない以上僕の操作技術しか勝ち目はないだろうし

明久「僕が行くよ」

雄二「頼んだぞ、明久」

美波「アキ、坂本。ちょっと待って」

？美波？どうしたんだろ？

美波「ウチに行かせて！」

明久＆雄二「「え？」」

確かに美波の数学はＢクラス並で久保君は文系だ。
でも、相手は学年次席。勝ち目はＢクラス並の成績じゃ勝ち目は・・
・・

美波「お願い」

まっすぐこっちを見て頭を下げる
美波が僕たちに頭を下げるなんて・・・
・・・美波にも思うところがあるのかもしれないな・・・

雄二「し、しかし・・」

明久「雄二、僕からも頼むよ」

雄二「あ、明久！？・・・ちっ、わかったよ。４人目島田美波だ！
たのんだぞ！」

美波「うん！」

瑞希「美波ちゃん。頑張ってください！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

４人目は美波さんが行くみたいだ
確かに科目選択権はこっちにある
数学を選んで、利光君が２００点以下なら勝算はある

高橋「科目はどうしますか？」

美波「数学でお願いします」

高橋「わかりました」

やっぱり数学でいくみたいだ
でも、確か美波さんの点数は１７０～１８０位だったはず
ちょっと厳しいんじゃ・・・

瑞希「大丈夫ですよ」

和也「え？」

瑞希「美波ちゃんならきっと大丈夫です。信じましょう」

瑞希さんの言葉はなぜかすごく説得力があった

久保「君の情報はこっちにも入ってきている。数学の成績はＢクラス並らしいね？そして確かに僕は文系だ。だが、学年次席の実力をなめないでもらいたい！試獣召喚！」

数学

Ａクラス　久保利光　２６１点

・・・だめだ・・・

さすが利光君。苦手科目でもちゃんとＡクラス並の成績をとってる

美波「・・・って」

久保「？」

美波「ウチだって、いままで何もしてこなかったわけじゃない！いつも足を引っ張って、みんなに助けられてばっかりで何も感じなかったわけじゃない！今度はウチがみんなを助けるんだ！試獣召喚！」

美波さん・・・ずっと気にしてたんだな・・・

力になれなくて悔しかったんだな・・・
二人の召喚獣が激しくぶつかり合い、砂煙のようなものが巻き起こる・・・
そして徐々に煙が晴れ、利光君の召喚獣が消滅しｔ・・・・・・・・・・え？

Ｆクラス　島田美波　３８６点

明＆雄＆和＆秀＆康「「「「「「ええええぇ！？」」」」」」

うそ！？何この点数！？Ａクラス上位並じゃん

瑞希「ふふ、驚きました？」

いたずらっぽい笑顔を見せながら瑞希さんが近づいてきた
そういえば瑞希さんは驚いてなかったような・・・

和也「もしかして、知ってたの？」

瑞希「はい。でもここまで高いとは思いませんでしたけど・・・」

和也「でも、何でこんなに点数が高くなってるの？」

瑞希「実はＢクラス戦初日終了後に美波ちゃんに『勉強教えて欲し

い』って頼まれて、それから毎日一緒に勉強してたんです。」

和也「そういえば瑞希さんの物理の点数も高くなってたような・・・
でも、美波さんのこの点数は一日や二日で取れるもんじゃないよ?」

瑞希「和也君はわかってないですね。いいですか?」

久保「ぐっ・・・・!島田さん、どうやってこんなに強くなったんだ・・・?」

美波「どうやって?理由は簡単よ。いい?」

美波&瑞希「「女の子は好きな人の為ならいくらでも頑張れるのよ(です)」」

久保「・・・そうか。僕は和也君と姫路さんの体調不良によって偶然手に入れた学年次席の座で満足して努力を怠ってしまった。それに対して君は努力を怠らず、ここまで強くなった。負けて当然だ。でも、次は負けない!いつか必ずリベンジさせてもらう!」

美波「のぞむところよ!何度きたって絶対負けないんだから!」

すごいなぁ美波さん
こんなに強くなるなんてちょっとやそっとの努力じゃ無理だ
・・・好きな人の為なら頑張れる・・・か・・・
美波さん好きな人いるんだ・・・誰だろう?気になるなぁ?
・・・・あれ?何で気になるんだろう?

美波「和也！今の見てた？」

和也「うん！すごいよ！あんな高得点」

美波「まあ和也の日本史の点数には全然かなわないけどね」

和也「そんなことない。たった2、3日であんなに成績上がったんだからそっちの方がよっぽどすごいよ」

美波「か、和也と一緒にいても恥ずかしくないように頑張ったんだから」

和也「そうなんだ。頑張ったんだね」（ナデナデ）

美波「／／／」

全員（何故、気づかない！？）

？なんだろう？みんなの視線が痛い

高橋「ゴホン、え、えーと。最後の一人。どうぞ」

翔子「・・・はい」

雄二「俺の出番だな」

教科はどうしますか？

雄二「教科は日本史、内容は小学生レベルで百点満点の上限ありだ！」

・・・なんだろう？
何か見落としてる気がする・・・

雄二「じゃ、行ってくる」

明久「雄二、あとは任せたよ」

和也「あ、がんばってね。雄二君」

雄二「ああ、任せとけ！」

そういって雄二君と翔子さんは視聴覚室に向かった
・・・やっぱり何か引っかかる・・・

高橋「皆さんはこのモニターで見ていてください」

壁のディスプレイに視聴覚室の様子が大きく映し出される
・・・これ、いくらかかってんだろう？・・・

先生「では問題を配ります。制限時間は５０分。不正行為は失格と

なります。いいですね？」

翔子「・・・・はい」

雄二「わかっている」

先生「では、始めてください」

瑞希「いよいよですね」

明久「うん。これであの問題が出ていたら・・・僕たちの勝ちだ！」

僕たちはディスプレイに映し出される問題を見つめる

・・・・・・！！あった！！

明久「あった！やった！これで僕たちの勝ちだ！」

雄二君の作戦通りならこの問題を翔子さんは間違える。

あとは雄二君が満点を取れば・・・

・・・満点を？・・・あっ！

和也「・・・あのさ、今、大変なことに気づいたんだけど・・・」

美波「どうしたのよ？勝ったってのにテンション低いわね」

和也「いや、それなんだけど。翔子さんが一問間違えたとして・・・

雄二君は満点取れるの？」

Ｆクラス全員「・・・・・あっ！」

そして・・・

日本史　１００点満点

Ａクラス　霧島翔子　９７点
ＶＳ
Ｆクラス　坂本雄二　５３点

僕たちの卓袱台はみかん箱になった

高橋「三対二でＡクラスの勝利です」

翔子「・・・雄二、私の勝ち」

雄二「・・・殺せ」

明久「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

和也「に、兄さん、落ち着いて」

明久「だいたい、５３点ってなんだよ！０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと・・・」

雄二「いかにも俺の全力だ」

明久「この阿呆がぁーっ！」

美波「アキ、落ち着きなさい！和也ならともかくアンタだったら３０点も取れないでしょうが！」

明久「それについては否定はしない！」

瑞希「それなら坂本君を責めちゃだめです！」

明久「くっ！なぜ止めるんだ瑞希ちゃんに美波！この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに」

美波「（ちょっと和也。アレなんとかしてよ）」

和也「（うん。わかった。ちょっと演技するからフォローして）」

美波「（了解）」

和也「兄さん・・・」

明久「和也まで止めｒ・・・」

和也「・・えっく・・・ごめんね・・・僕が負けたせいだよね・・・えっく・・・ごめんね」

美波「こらアキ!!なに自分の弟泣かせてんのよ!!」

明久「ち、違うんだ!僕はそんなつもりで言ったんじゃ・・・うわあああぁぁぁ」（ダッ）

兄さんがどこかへ走り去ってゆく

和也「こんなもんでどうかな」

雄二「助かった。しかしアイツは相変わらずブラコンだな」

秀吉「見事な嘘泣きじゃ。やはり諦めきれぬ。和也よ、やはりお主は演劇部に来るべきじゃ！」

和也「・・・まぁ・・・気が向いたらね」

また勧誘されてしまった

翔子「・・・・ところで約束」

そういえば『勝った方は何でも言うことを聞く』だっけ?

まぁ大体予想はついてるけど・・・

雄二「わかってる。何でも言え」

翔子「・・・雄二、私と付き合って」

・・・やっぱりね

雄二「・・・拒否権は？」

翔子「・・・ない。約束だから。今からデートに行く」

雄二「ぐぁっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに・・・」

・・・翔子さんは相変わらず一途だなぁ

鉄人「さて、Ｆクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ」

あれ？西村先生だ。どうしたんだろ？

鉄人「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年死に物狂いで勉強できるぞ」

Ｆ『なにぃっ！？』

みんな嫌そうですね・・・

まぁ無理もないかな

鉄人「吉井！お前と坂本は特に念入りに監視してやる。」

和也「え？僕ですか？」

鉄人「？あぁそうか。すまない。兄の方だ・・・って二人はどこに行ったんだ？」

和也「雄二君は拉致されました。兄さんは泣きながら走り去っていきました」

鉄人「？よくわからんがまぁいい。今の言葉を兄に伝えておいてくれ」

和也「わかりました」

戦争には負けたけど、僕は満足してる
だって・・・兄さんやみんなに少し心を開くことができたから・・・

第十七問（後書き）

美波がいつから勉強してたか・・・ヒントは第十一問の最後！
ってか美波をかっこよく書きすぎたかも・・・
さて、次回から二巻に入る前に番外編をはさもうと思います

第十八問　美波とデート！？前編（前書き）

仕事が長引いたのと話がうまくまとまらないのが原因で
一日空いてしまいました
結局なんかグダグダになっちゃいましたが・・・

第十八問　美波とデート！？前編

ＳＩＤＥ　美波

和也「美波さん。明日のことなんだけど・・」

美波「明日？」

和也「クレープ屋さん。でも、なんかみんな都合悪いみたいで僕達二人だけになりそうなんだけど・・・」

覚えててくれたんだ・・・嬉しいな・・・

・・・って二人きり！？

美波「みんな都合悪いの？」

和也「うん。康太君はカメラ屋にカメラの修理、秀吉君は優子さんの買い物の付き添い、雄二君はさっきそこで翔子さんに聞いたんだけど二人でデートするらしいよ」

美波「瑞希とアキは？」

和也「なぜか理由を教えてくれないけど二人とも用があるって。どうする？」

美波「ま、まあ用があるんじゃしょうがないわね。二人で行きまし

ょ」

和也「じゃあ、公園に１０時位でいいかな？」

美波「うん。わかった」

二人でお出かけ・・・これってデートよね！？／／／

・・・瑞希とアキが後ろで親指立てていい笑顔してんのがなんかムカツク

☆デート当日☆

美波「・・・ウチは・・・なにやってんだろ・・・」

公園に到着

待ち合わせは１０時。現在の時刻・・・８時半・・・

ウチはバカ！？いくらなんでも早すぎでしょ！

・・・ちょっとコンビニで時間潰そう・・・

・・・！

あれ？和也？なんで？

美波「和也？」

和也「あれ？美波さん早いね？」

美波「そ、それはこっちのセリフよ！早すぎない？」

和也「女の子を待たせるわけにはいかないから早めにきたんだ。美波さんは？」

美波「えっと、その・・・楽しみだったから・・・」／／／

和也「待ちきれなくて出てきちゃったんだ（やっぱり女の子は甘いものが好きなんだな）」

美波「で、でもどうする？まだクレープ屋さん開いてないよ？」

和也「う～ん。どっかで時間潰そうか？どこか行きたい所とかある？」

美波「じゃ、じゃあ映画でも見ない？ちょうど見たい映画があるの」

和也「うん。いいよ。じゃあ行こうか」

☆映画館☆

和也「さて、どれが見たいの？」

美波「え、えーと・・・」

・・・決まってないなんて言えない

と、とにかく決めなきゃ・・・えーと・・・

・・・読めない!!どうしよう・・
・・・!そうよ!適当に決めればいいんだ!
どうせウチが何見たいかなんて知らないんだし・・・

美波「これ」

一番手前のなんか変な男の人が映ってるやつを指差した

和也「これ?美波さんこういうのが好きなんだ」

美波「な、なによ。文句あるの?」

和也「いや、僕はこういうの苦手だけど頑張るよ」

?どういうことだろ?

和也「すいません、『本当にあった怖い話』を・・・」

ウチのバカぁぁ!!!!!

美波「ちょ、ちょっと待って和也!」

和也「どうしたの?チケット代なら僕が払うよ?」

美波「や、やっぱり無理強いはよくないわよね。二人で決めましょ」

和也「いいの？じゃあ二人で決めよう。どういうのがいいの？」

美波「えっとじゃあ・・・れ、恋愛映画とか」

和也「じゃあこれなんてどう？『世界の中心で愛を叫びましたか？』」

・・・なんで疑問系？

でも『本当にあった怖い話』よりはマシね

美波「うん。それにしましょ」

和也「すいません。『世界の中心で愛を叫びましたか？』を高校生二枚」

店員「はい、２０００円になります」

☆　二時間後☆

和也「いい映画だったね」

美波「ええ、ラストは感動しちゃったわ」

和也「じゃ、クレープ屋さんに行こうか？」

美波「ええ・・・・・？あれ、坂本と霧島さんじゃない？」

和也「あっ本当だ。でも何だろ？あの格好」

首輪に手錠・・・

たしかデートって言ってたはずだけど

あれは拉致って言うんじゃ・・・

翔子「・・・あ、和也、島田」

和也「雄二君。そんな趣味まで・・・」

雄二「・・・お前には俺が好きでこんな格好してるようにみえるのか？」

翔子「二人はデート？」

和也「あはは、違うよ。一緒に映画見て、クレープ食べに行くだけだよ」

雄二&翔子「「・・・（それはデートじゃないのか？）」」

・・・なんか仲良いみたい・・・

もしかして和也はやっぱり霧島さんが好きなのかな？

翔子「（・・・大丈夫）」

美波「（え？）」

翔子「（・・・確かに和也はいい人、でもそういうのじゃないし、私は雄二以外の男には興味ない）」

美波「（そういうのって？）」

翔子「（・・・好きなんでしょ？）」

美波「（なっ！ウ、ウチは別に・・・）／／／」

翔子「（・・・見ていればわかる。和也は鈍いから大変。でも私は島田を応援する）」

美波「（あ、ありがと。あとウチのことは美波でいいわ）」

翔子「（・・・じゃあ私も翔子でいい）」

和也「？二人とも何コソコソ話してんの？」

美波＆翔子「「なんでもない」」

雄二「お前らも映画見にきたんだよな？よかったら一緒に見ないか？」

美波「残念ながら今見て出てきた所よ」

和也「それに二人のデートの邪魔しちゃ悪いし・・・そろそろ行こうか？」

美波「そうね。じゃ、またね翔子」

翔子「・・・うん。また学校で」

美波「さてと、じゃあクレープ食べに行きましょ・・・あ、そういえばよかったの？チケット代出してもらって・・・お金大丈夫？」

和也「平気だよ。毎月お小遣いもらってるけど、ほとんど使わないし。持ってても兄さんが使うだけだし・・・」

美波「アンタ趣味とかないわけ？ってか何でアキがアンタの小遣い使うのよ！？」

和也「ん～趣味は特にないかな。兄さんは趣味にお金使いすぎるからすぐなくなるんだ」

美波「アキを甘やかしすぎよ」

和也「そうかなあ？」

美波「あんたたちって兄弟なのにホント似てないわね？」

？あれ？表情が曇った？

和也「・・・僕と兄さんは血が繋がってないんだ」

美波「え？」

和也「僕の家族はある事件で１０年前にみんな死んだんだ。で、親族の誰にも引き取ってもらえないで一人ぼっちになったところを遠い親戚の吉井家のみんなが引き取ってくれたんだ」

美波「そうだったんだ。ごめん・・・ウチ知らなくって・・・」

和也「気にしないで。それに兄さんには借りがたくさんあるし、これぐらいどうってことないよ」

美波「借り？」

和也「うん。例えば、引き取られてすぐの頃周りに馴染めなくて同級生数人に囲まれていじめられてたときに飛び込んできて『僕の弟をいじめる奴は許さないぞ』って」

美波「・・・」

和也「他にも、死んだ家族のこと思い出して泣いてるときは傍にいてくれたし・・・そもそも僕を引き取ってくれたのも兄さんが『あの子一人ぼっちなんてかわいそうだよ。助けてあげて』って両親に言ってくれたからしいんだ」

美波「そうなんだ。アキはその頃から優しかったのね」

和也がいなかったら惚れてたかもね

和也「それ聞いてからもう泣かない。強くなる。もう誰も失いたくないって決めたんだ。まぁＡクラス戦のとき泣いちゃったけど・・・」

美波「そうね。でも悔し泣きくらいいいんじゃない？」

和也「悔しくて泣いたんじゃないんだ。『絶対勝つ』って約束したのに勝てなかった、あの時と同じで嘘をついた。それで美波さんやみんなに嫌われる。また一人ぼっちになる。そう思うと怖くなって・・・」

美波「ばーか」

和也「え？」

美波「そんなことでウチは嫌いになったりしない。それに『役に立つから友達で使えないから友達じゃないなんてそんなのおかしい』って言ったのはアンタじゃない」

和也「・・・そう・・・だったね。ごめん。それと・・・ありがとう」

美波「どういたしまして。そういえばさっきの話みんなは知ってんの？」

和也「兄さんはもちろん、幼馴染の瑞希さんとよくうちに遊びに来

てた雄二君は知ってるよ。あとは誰も知らないはずだよ。あまり聞いてて気持ちいい話じゃないからね。変な話してごめんね」

美波「ううん。こっちこそ辛いこと思い出させてごめん」

和也「気にしないで。そろそろ行こう」

和也が心を開いてくれたような気がして嬉しかった
でも気になることもあった
和也は家族の死を『事故』じゃなくて『事件』って言った
それに『あの時と同じで嘘をついた』・・・あの時？
もしかしたらウチが考えてるよりずっと辛い過去なのかもしれない

第十八問　美波とデート！？前編（後書き）

う～ん。なんかおかしい気がする
文才のない作者でごめんなさい
後編につづく

第十九問　美波とデート！？後編

ＳＩＤＥ　和也

なんか美波さん嬉しそうだな
兄さんの話になったあたりから機嫌が良い気がするし・・・
ひょっとして兄さんのこと好きなのかな？
・・・なんでだろ？
応援してあげたいのに応援したくない・・・

美波「？どうしたの？」

和也「・・・あのさ、美波さんって兄さんのこと好きなの？」

美波「は？」

あっ！聞いちゃった！
なぜかわからないけどすごく気になる

美波「ち、違うわよ！なんでそうなるのよ！？」

和也「Ａクラス戦の時なんか好きな人がいるような言い方してたし、
今も兄さんの話題になったあたりから機嫌がよくなった気がするし・
・・」

美波「違う！好きな人はいるけどそれはアキじゃない」

そうなんだ・・・
良かった・・・
・・・？あれ？良かった？なんで？

美波「ウ、ウチが好きなのは・・・・」

美春「あっ！そこにいるのは美波お姉さま！」

美波「み、美春！？」

美春「それに、あなたは・・・吉井和也！」

和也「げっ！し、清水さん・・・」

美波「（『げっ』ってアンタ美春と何かあったの？）」

和也「（あの人はちょっと苦手なんだ）」

美波「（へぇ、玉野さん以外にも苦手な人いたんだ・・・・！まさかあの子、和也にも豚呼ばわりを！？）」

和也「（いや、そうじゃないんだけど・・・）」

美春「さあ、吉井和也！美春とお姉さまの養子になりなさい！」

美波「・・・だいたいわかったわ」

和也「・・・説明する手間が省けてよかったよ・・・ってか僕は同い年だってば！」

美春「問題ありません！あなたはもうこれ以上成長しないという情報を得ています」

（ブチッ）

和也「誰が永遠に童顔ドチビだ！！」

美波「和也、そこまで言ってないわ。美春ももうやめなさい！和也が嫌がってるじゃない」

美春「照れてるだけです！」

駄目だ、話が通じない・・・

和也「美波さん、逃げよう」

美波「え？あ！ちょっと」

僕は美波さんの手をつかんで走りだした

美春「あっ、お待ちなさい！愛しのお姉さまに我が娘よ！」

和也「誰が『娘』だ！『息子』の間違いだろ！息子でもないけど！」

美春「養子にしたあとすぐに性転換手術を受けさせて『娘』にするから問題ありません！」

な、なんて恐ろしいことを言うんだ・・・

とにかく逃げなきゃ・・・

☆数分後☆

美春「お姉さま、和美ちゃん！どこですか～！？」

・・・しつこい。まだ探してる・・・

ってか誰が和美ちゃんだ！！

このままじゃいつか見つかる

今僕たちは学校の近くに来ている・・・学校？

・・・！そうだ！

和也「美波さん、学校に逃げ込もう」

美波「・・・／／／」

和也「美波さん？」

美波「へ？あっ、な、何！？」

和也「？どうしたの？ぼーとして？」

美春「！そこですか！？」

和也「気づかれた！とにかく学校に逃げ込むよ」

美波「う、うん／／／」

僕は『握っている美波さんの手』を引いて再び走り出した

☆文月学園玄関前☆

和也「先生、清水さんと模擬試召戦争をしたいので許可お願いします」

先生「今からですか？休日だというのに勉強熱心ですね。わかりました」

和也「美波さんは下がってて。試獣召喚！」

美春「くっ。・・・！いいでしょう。勝ったら美春の子供になってもらいます。試獣召喚！」（ニヤリ）

？なんで笑って・・・

数学

Ｆクラス　吉井和也　５２点
ＶＳ
Ｄクラス　清水美春　１０８点

しまった！数学だ！

美春「さぁ観念なさ・・・」

美波「試獣召喚！」

Ｆクラス　島田美波　３６４点

美春「お姉さま！？なぜ邪魔をするんです！？」

美波「邪魔？ウチはただ大切な人を守りたいだけよ」（ズバッ）

Ｄクラス　清水美春　０点

鉄人「戦死者は補習！」

美春「美春は諦めませんからね！」

清水さんは西村先生に引きずられて行った
それにしても・・・

美波「全く、科目確認してから挑みなさいよね」

和也「・・・面目ない」

美波「まあいいわ。お腹すいたし、早く行きましょ」

結局、美波さんの好きな人聞けなかったな
まあいっか

秀吉「む？和也に島田ではないか？」

優子「あら、こんにちは」

和也「秀吉君に優子さん、こんなところで何してんの？」

秀吉「買い物の帰りじゃ。お主達こそどうしたんじゃ？たしかクレープ屋に行くと言ってなかったかの？」

和也「まあ色々あってね。あっ、優子さん。試召戦争の時はすいませんでした」

優子「そのことなら許すって言ったじゃない」

和也「あ、いや。それもなんですけど、負けて急に泣き出しちゃって・・・気を悪くしたんじゃないかと・・・」

優子「気にしなくていいわよ（おかげで良いもの見れたし）」

よかった。気にしてないみたいだ・・・

・・・？なんか美波さん元気ないな？

優子「（大丈夫よ）」

美波「（え？）」

優子「（和也のことは可愛いと思ってるけどそういうのじゃないから安心なさい）」

美波「（そういうのって？）」

優子「（好きなんでしょ？見てればわかるわよ）」

美波「（ウ、ウチは別に・・・）」

優子「（和也は結構人気あるわよ）」

美波「（う、嘘！？）」

優子「（ホントよ。成績優秀、運動神経抜群、おまけに優しくて可愛い。そんな良い人そうそういないもの）」

美波「（た、確かに・・）」

優子「（うかうかしてると、とられちゃうわよ？）」

美波「だ、駄目！」

優子「（ふふ、わかりやすいわね。頑張りなさい。アタシは島田さんを応援してるわ）」

美波「（ありがとう。あと、ウチのことは美波でいいわ）」

優子「（じゃ、アタシも優子でいいわ）」

和也「？なに話してんの？」

美波＆優子「「なんでもないわ」」

秀吉「姉上、そろそろ行くのじゃ。デートの邪魔しちゃ悪いしのう」

和也「あはは、デートじゃないよ。映画見に行ってクレープ食べに行くだけだって」

秀吉＆優子「「・・・（それはデートって言うんじゃ・・・）」」

？なんだろう？この冷たい視線は・・・

優子「・・・美波、頑張ってね」

美波「・・・うん。ありがと、優子」

美波「あっ！和也！あそこ、覚えてる？」

和也「うん。もちろん覚えてるよ」

美波さんが指差した先にあったのは小さなスーパーマーケットだった
そして・・・僕と美波さんが、初めて出会った場所だった・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

☆一方その頃『ラ・ペディス』☆

瑞希「・・・美波ちゃんたち遅いですね～」

明久「おかしいなぁ。確かにここだって言ってたんだけど・・・・」

奇妙な変装をした男女二人組が店内にいた・・・

第十九問　美波とデート！？後編（後書き）

泣き出しそうな少女、それに優しく手を差し伸べる少年。果たして二人の運命は！？

次回、バカと義弟と召喚獣第二十問『美波との出会い』ご期待下さい

和也「何ですか？このアニメみたいな次回予告は・・・」

美波「まあ、たまにはいいんじゃない？」

第二十問　美波との出会い（前書き）

本日2話目
なんとか書けました

第二十問　美波との出会い

ＳＩＤＥ　美波

美波「・・・はぁ」

溜息しか出ない・・・
入学式を終えて、私はスーパーまでお使いに来ていた
ドイツから帰ってきたばかりの私はクラスメートと仲良くできずにいた
友達もいない、言葉はわからない・・・
日本でうまくやっていけるのかな・・・
っと、とりあえず買うものはこれで全部ね
会計は大丈夫かな？

美波「こ、コレ、お願イシマス」

店員「はい、１２６３円になります」

なんて言ってるのかわからないけどレジに数字が出るから何とか支払いを済ませることができた
よかった・・安心して私はスーパーを出た
さて、早く家に・・・

美波「あ、アレ？」

私は・・・どっちから来たっけ・・・
わからない。
こっち？いや、こっちだったような・・・

美波「ドウシヨウ・・・」

帰り道がわからない・・・
・・・！近くに地図みたいなものがあった
・・・読めない・・・
誰かに聞く？
無理よ言葉が通じないもの
どうしよう・・・
・・・えっく・・・もう嫌だ・・・・帰りたい・・・えっく・・・
ドイツに帰りたい

？「君？どうしたの？」

美波「え？」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

和也「さて、こんなもんかな？」

僕はスーパーに買い物に来ていた
会計を済ませて・・・

和也「さて、帰って晩御飯の準備しなくちゃ」

そう思ってスーパーを出たところで、文月学園の制服を着ている一人のポニーテールの女の子が目に止まった
なぜかわからないけど妙にその子が気になった

和也「あんまりじろじろ見てたら失礼だよね」

そう思って帰ろうと思ったら・・・

女の子「・・・えっく・・」

！？泣いてる？どうしたんだろ？

和也「君？どうしたの？」

女の子「え？」

気が付くと僕は声をかけていた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

振り返るとそこには男の子が立っていた

見たところ同じ学校の生徒のようだ

・・・こう言っちゃ失礼だけど年上には決して見えないから、おそらく同級生だろう

男の子「何で泣いてるの？」

男の子は優しい笑顔でそう言ってきた

なぜかこの人は私を助けてくれる

そんな気がした

美波「ミチわからナイ、家カエリたい」

私はたどたどしい言葉でそう告げた

男の子「じゃあ僕が家まで連れて行ってあげるよ。住所わかる?」

美波「?」

なんて言ってんだろ?
連れて行ってくれるとか言ってたような
私はわからないという素振りをみせる
すると男の子は少し考えて
自分の生徒手帳を取り出し、それを指差す
あっそうか。生徒手帳には住所が書いてある
私は慌ててそれを取り出し男の子に渡す
すると男の子は・・・

男の子「島田美波さんって言うんだね?僕は吉井和也。家まで送ってあげるよ。一緒に帰ろう」

はっきりと聞き取りやすいように区切ってそう言い、私の手を握り歩き出した
・・・?ヨシイ?どっかで聞いたような・・・

美波「ねェ、ヨシイ」

和也「和也でいいよ。何？」

美波「カズヤは何デ優シクしてくレルの？」

和也「島田さんが困ってたからだよ。困ってる人がいたら助けるのは当たり前だよ」

どうやら私が日本語がわからないことに気づいたらしく、聞き取りやすいように言った
こんなに良い人いるんだなぁ
・・・！あっ、ここまで来たら帰り道はわかる。
・・・でも・・・（チラッ）
私は繋いだ手を見て

美波「（もう少しだけこのまま）／／／」

私は心の中でそう呟いた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

和也「えっと、こっちだな」

どうやら島田さんは日本語がわからないらしい
何語かわからないけど、生徒手帳に書き込みがあった
ん?あれは・・・

和也「兄さん」

明久「ん?和也と・・・島田さん?どうしたの?」

和也「帰り道がわからないって言うから送ってあげてるところ。って
てか兄さん島田さんのこと知ってるの?」

明久「うん、クラスメートだよ。ドイツからの帰国子女だって」

なるほど、それで日本語がわからなかったのか
ってことはあれはドイツ語か

明久「・・・」(じー)↑繋がれた手を見る

和也「?どうしたの?」

明久「何でもないよ。荷物は僕が持って帰るからちゃんと家まで送
ってあげるんだよ」(ニヤリ)

和也「あ、うん。わかった」

なんでニヤニヤしてんだろ？
僕は島田さんを連れて再び歩き出した

明久「（和也はああいうタイプが好みなのか）」

美波「カズヤ、ヨシイとは知り合いナノ？」

和也「うん、僕の兄さんだよ」

美波「似てナイね」

和也「そう？」

まあ当たり前だけどね
さて、住所通りだとこのあたりだけど・・・

少女『お姉ちゃん』

男性『美波』

美波『お父さん、葉月』

知り合いみたいだ
多分、父親と妹だろう

父『遅いから心配したぞ』

美波『ごめんなさい。道に迷っちゃって』

葉月『大丈夫だったの？』

美波『うん、この人が家まで送ってくれたから・・・』

・・・なんて言ってんだろ？
なんかみんなこっち見てんだけど・・・

父「娘を送ってくれてどうもありがとう」

和也「あ、いえ。たまたま通りかかっただけですから」

美波「カズヤありガトう」

和也「どういたしまして」

父「ところで君は美波の友人かね？」

和也「いえ、さっき会ったばっかりです。あ、申し遅れました。僕は吉井和也って言います」

父「初対面の人間にこんなに親切に？いまどき珍しい好青年だな」

和也「そうですか？困ってる人がいたら助けるのは当たり前ですよ」

葉月『お兄ちゃん、お姉ちゃんの友達ですか？』

和也「？」

父「こら葉月、ドイツ語で話してもわからないだろ？」

和也「！え？ハヅキ？」

父「？どうかしたのかね？」

和也「あ、いえ。僕の妹の名前も『羽月』だったので」

父「そうなのか（だった？）」

和也「はい。あ、僕はそろそろ帰ります」

父「和也くんだったね？娘と仲良くしてやってくれ」

和也「もちろんです。では、失礼します」

さてと・・・

僕は時間を確認する

和也「まだ大丈夫だな」

そして僕は家ではなくある場所へと向かった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

☆　翌日☆

美波「・・・はぁ」

教室ではもう誰も話しかけてこない
まあしょうがないよね
でも・・・寂しいな・・・
・・・昨日の子、和也だっけ？
優しい人だったなあ
また会いたいな

和也「島田さん」

美波「え?カズヤ?」

和也「Ｉｃｈ　ｗｉｌｌ　ｍｉｔ　Ｉｈｎｅｎ　Ｆｒｅｕｎｄｓｃｈａｆｔ　ｓｃｈｌｉｅ?ｅｎ」

美波「!!」

Ｉｃｈ　ｗｉｌｌ　ｍｉｔ　Ｉｈｎｅｎ　Ｆｒｅｕｎｄｓｃｈａｆｔ　ｓｃｈｌｉｅ?ｅｎ

（私はあなたと友人になりたい）

なんでドイツ語を知ってんの?

そんなことを考えていると和也は笑ってあるものを取り出した

『ドイツ語入門』と書かれた本だった。まだ新しい

嬉しかった。たった一言、言う為だけにわざわざ本まで買って調べてくれた

その優しさが嬉しかった

周りに知り合いがいない。一人ぼっちの私と友達になりたいって言ってくれる

手を差し伸べてくれる。たまらなく嬉しかった

美波「・・・う」

和也「島田さん?」

美波「うわあああああん」

和也「え!?ちょ、な、なんで泣くの!?」

明久「ちょ、ちょっと和也！何したのさ！？」

和也「友達になりたいってドイツ語で言っただけだよ」

明久「（ああ、嬉し泣きか）」

和也「ごめん。泣くほど嫌だった？」

美波「チガウの。嬉しいノデス」

和也「そうなの？じゃあ・・・」

美波「ハイ、よろシクお願いシマス／／／」

その日私は・・・初めて人を好きになりました

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

和也「美波さん？どうしたの？ぼーっとして」

美波「ちょっとはじめて和也とあったときのこと思い出してた」

和也「ああ。ちょうどこのあたりで泣いてたよね？」

美波「も、もう忘れてよ／／／」

和也「あはは」

美波「でも、次の日に和也が友達になりたいって言ってくれてすごく嬉しかった」

和也「その時も泣いてたよね」

美波「も、もう！！／／／」

その後、美波さんに日本語教えながら、ついでに僕はドイツ語を教わったんだっけ

美波さんが日本語しゃべれるようになってからも用もないのに遊びに行って・・・

・・・？あれ？なんで用もないのにわざわざ違うクラスに遊びに行ってたんだろ？

美波「さて、そろそろ行きましょ？」

和也「あ、うん」

・・・ま、いっか

『ラ・ペディス』に行くと妙な格好をした兄さんと瑞希さんが店員さんに怒られてた。話によると何も注文せずに店内に４時間もいたらしい
一体何がしたかったんだろう？
結局４人でクレープを食べて解散となった
（兄さんがお金を持ってなかったので僕が払いました）

第二十問　美波との出会い（後書き）

次回は主人公と主要人物の関係について書こうと思います

各キャラとの関係について

☆各キャラとの関係☆

吉井明久

和也の義兄
引き取られてすぐの頃は懐いておらず、『明久さん』と他人行儀な呼び方をしていたが、学校で同級生にいじめられてるところを助けられたことをきっかけに懐き『兄さん』と呼ぶようになる
明久は和也の過去の全てを知っているおり、今も彼がそのことで苦しんでいることに気づいている
彼を救ってくれる人が現れることを心から望んでいる
和也は人の為に全力を尽くすことのできる明久のことを尊敬しており、自分もこういう人間になりたいと思っている

島田美波

本作のヒロイン
入学式の日、言葉がわからないため周りに馴染めず寂しい思いをしていたが、その日の放課後、困っているところを和也に助けられ、少し元気を取り戻す
翌日、和也にドイツ語で『友達になりたい』と言われて、その優しさに惹かれて恋に落ちる
和也は、実は美波に一目惚れしたのだが、和也は自分自身の気持ち

に未だ気づいていない

姫路瑞希

引き取られた後の和也に最初にできた友達
小学校の頃から吉井兄弟とはよく遊んでいた
和也のことを弟のように可愛がっており、和也も姉のように慕っている
和也の家族が亡くなっていることを知っているが、死因までは知らない

坂本雄二

明久繋がりの友人
学校での成績や明久の家によく遊びに行ってた時に家事を全てやってる姿を見て『完璧超人』と評価している
冗談半分で『お前ら似てねえな。血繋がってないんじゃないか？』と言ったことにより和也の家族のことを聞いてしまい、彼を傷つけたことを後悔している
実は吉井兄弟とは小学校時代に一度会っているが、互いに名乗ってない為三人ともそのことに気づいてない

木下秀吉

同じ悩みを持つ友人
自分と優子の違いを『気』で見分けることが出来ると聞き、ためしに一度同じ服装、同じ髪型で並んでみたことがあるが、あっさり見破られる
また、二人とも『女顔』と言う共通の悩みを持っているということもあり、わりと仲が良い

土屋康太

モデルとカメラマン
和也とはあまり接点がなかったが和也の人気に目をつけ『・・・写真を撮らして欲しい』と頼み、その写真をムッツリ商会で売っている（全体の売り上げの三割以上を占める）
和也もそのことに気づいているが、特に被害があるわけではないのであまり気にしていない

霧島翔子

ライバル
一年の頃のクラスメートでテストの度に主席争いをしている
今のところ6勝1敗だが、最初の一回以外は全て数点差の僅差

木下優子

元クラスメート
和也に得意科目で負けたことによりリベンジを誓う
外見が幼い和也に興味津々だが、『今は』恋愛感情はない
また、一年の時の和也の様子を見て、彼の美波への気持ちに気づいている

根本恭二

和也を恐れる者
一年の頃、明久との喧嘩の際に刃物を使い、明久に怪我をさせたことにより、和也の逆鱗に触れ、その日の放課後、和也に呼び出され半殺しにされる（和也は本気で殺すつもりだったが、たまたま通りかかった鉄人に止められる）
後日、このままではいつか殺されると思い、吉井兄弟に土下座して謝り和解する

清水美春

和也を狙う者その１
美波と仲が良いと聞き、始めは排除するつもりだったが、小柄な体型、中性的で幼い顔立ちを見て、色々考えた結果、自分の娘にするという結論に至る

玉野美紀

和也を狙う者その２

たまたま見かけた和也の可愛らしさに一目惚れし、ストーカーに近いことをして名前、住所、得意科目、苦手科目などを調べあげる

ちなみにムッツリ商会で売られている和也の写真は全種類持っている

第二十一問　彼は意外と病弱！？前編（前書き）

いつの間にかお気に入り４０件突破
ご愛読ありがとうございます

第二十一問　彼は意外と病弱!?前編

ＳＩＤＥ　和也

和也「・・・ゲホッ、ゲホッ」

明久「３９．８度・・・ひどい熱だね・・・」

頭が痛い・・・クラクラする・・・

和也「・・・すぐ・・朝御飯作るから・・・」（フラフラ）

明久「何言ってんのさ!そんなのいいから寝てなきゃ駄目だよ!」

和也「・・・うん。ごめんね、兄さん」

明久「いいって。じゃ、僕は学校に行くけどおとなしく寝てなきゃ駄目だよ」

和也「うん。いってらっしゃい。ゲホゲホッ」

はぁ・・・また風邪引いちゃった・・・

一年の時も結構休んでるけど出席日数大丈夫かな?

留年したらみんなに迷惑かけちゃうから気をつけなくちゃ

・・・あっ、そういえば洗濯と洗い物まだしてないや・・

やらなきゃ・・・（クラッ）
・・・駄目だ・・・起きあがれない
仕方ない後でやろう
・・・誰もいない・・・一人・・・か・・・
・・・寂しいな・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

昨日のお礼のつもりでお弁当作ってきたけど、和也食べてくれるかな？
・・・それにしても遅いわね

☆ＨＲ開始☆

あれ？まだ来てない？何かあってのかな？
・・・！まさか事故とか！？
（ガラッ）
あっ。来た・・・ってあれ？アキだけ？和也は？

明久「すいません。遅れました」

鉄人「遅いぞ、吉井兄弟！ん？弟はどうした？」

明久「風邪引いたみたいで、熱が３９．８度もあったので休ませました」

鉄人「そうか、とりあえずさっさと席に着け」

そっか・・・和也休みなんだ
せっかくお弁当作ったのになでも事故じゃなくて良か・・・
・・・ってちっとも良くない！
３９．８度!?ひどい熱じゃない!?

☆ＨＲ終了☆

美波「アキ！」

明久「和也なら大丈夫。おとなしく寝とくよう言ったから」

美波「そ、そう。良かった。・・・ってウチはまだ何も言ってないわよ!?」

明久「言わなくてもわかるよ。和也のことが心配で仕方ないって顔に書いてるもん」

・・・ウチってそんなにわかりやすいのかな?

瑞希「和也君は相変わらず病気にかかりやすいですね」

美波「え？そうなの？」

瑞希「はい、昔から風邪が流行ると必ず風邪引いてました」

明久「去年も１０日以上休んでるよ」

秀吉「それにしては同じ家に住んでる明久が休むところは見たことないのう」

雄二「んなもん決まってんだろ？バカは風邪を引かないってやつだ！」

明久「な、なんてこと言うのさ！？そんなの迷信だよ！」

美波「アキのバカはみんな知ってるんだからどうでもいいのよ！それより和也は大丈夫なの？３９．８度ってかなりの高熱だけど・・・」

明久「おとなしくしてれば大丈夫だと思うけど・・・和也の性格だと無理して家事とかやってそうだな。メール送っとこう」

美波「放課後お見舞いに行ってもいい？」

明＆瑞＆雄＆秀＆康、（ニヤニヤ）

美波「な、なにニヤけてんのよ！？友達が病気なんだから心配するのは当たり前でしょ！？」

雄二「まあそういうことにしとこうか」

秀吉「島田も難儀な性格じゃのう」

康太「・・・素直じゃない」

瑞希「美波ちゃん可愛いですぅ～」

明久「ありがとう。和也もきっと喜ぶよ」

いきなり行ったら驚くかな？

メールしとこう

『放課後お見舞い行くね』っとこれでよし

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

・・・もうお昼か・・・

そろそろ洗い物を・・・

（ｐｉｐｉｐｉ）

？メール？・・兄さんからだ。なになに・・・

吉井明久『家事は僕がやるからおとなしく寝てなさい』

・・・なんでわかったんだろ？
まあいいや、じゃあお言葉に甘えて・・・
（ｐｉｐｉｐｉ）
？またメール？美波さんからだ。なになに・・・
島田美波『放火をおみまいするね』
！！な、何です！？この恐ろしいメールは！？
『放火をおみまいする』って、また殺人予告ですか！？
弱ってる僕に止めを刺しにくる気ですか？
・・・僕、何か怒らせるようなことしたっけ？
と、とにかく早く謝罪しないと・・・って
和也「あ・・・あれ？」
クラクラする、目の前の景色が歪む
（バタン）
僕は意識を手放した
ＳＩＤＥ　ＯＵＴ
ＮＯ　ＳＩＤＥ
少女「・・・えっく・・・」

少女は数人の少年にいじめられていた

少年Ａ「毛虫投げつけた位で泣くなよ」

少年Ｂ「お前兄貴がいなきゃ何にもできないよな」

少年Ｃ「この泣き虫女」

和也「やめろ！」

少年Ａ「ゲッ、和也だ」

和也「羽月をいじめるな」

羽月「・・・ぐす、お兄ちゃん・・・」

少年Ｂ「や、やばいぞ。逃げろ」

少年Ｃ「あ、待ってよ」

和也「大丈夫か？羽月」

羽月「・・えっく・・うん。平気」

和也「いじめられたらすぐ僕に言うんだよ。羽月のことは何があっても僕が守るから」

羽月「うん！ありがとう、お兄ちゃん」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

美波「さて、アキ。行きましょう」

明久「うん。わかｔ・・・」

『２－Ｆの吉井明久君、至急職員室まで来てください』

呼び出し！？こんなときに・・・

明久「ちょっと行ってくるよ」

美波「待ってるから早くしなさいよ」

明久「・・・！遅くなるかもしれないから美波は先に行っててよ」

美波「しょうがないわね。じゃあ、みんなと先に・・・あれ？」

みんなどこに行ったのかしら？

明久「みんな都合が悪いみたいで帰ったよ」

な、なんて薄情な奴らなの！

明久「だからさ、美波『一人で』先に行っててよ」（ニヤリ）

！！！は、嵌められた！
男の子の家に二人きりなんて・・・
・・・こいつの笑顔がやけにムカツク

美波「ちょ、ちょっと待ってよ！そんなの・・」

明久「あれぇ～行かないの～？和也が一人苦しんでるのに？」（ニヤニヤ）

美波「い、行かないなんて言ってないじゃない！行くわよ！行くに決まってるでしょ！」

明久「じゃ、これ家の鍵。よろしくね」

・・・乗せられてしまった
仕方ない、早く行こう
ウチは和也の家へと急いだ

第二十二問　彼は意外と病弱！？後編（前書き）

なんか重い話になってしまいました
和也の過去が明らかに・・・

第二十二問　彼は意外と病弱！？後編

ＮＯ　ＳＩＤＥ

真っ白な空間

羽月「・・・どうして・・・」

妹が言う

羽月「どうして助けてくれなかったの？」

目の前の兄に対してつぶやく

羽月「何があっても守ってくれるって言ったのに・・・『助けて』って言ったのに・・・」

羽月は泣きながらつぶやく

羽月「ウソツキ」

羽月は和也に対して冷たく言い放った

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

美波「ここね」

・・・来ちゃった・・・
ホントにいいのかな?でも、帰るわけにはいかないし・・・
・・・よし!入ろう
（ガチャ）

美波「おじゃまします。和也?」

・・・返事がない。寝てるのかな?
にしてもこの家広いわね～
ここかな?（ガチャ）
・・・・（バタン）
なにかしら・・・今の汚い部屋は・・・
?よく見るとドアの前に何か書いてる

『ＡＫＩＨＩＳＡ』

なるほど・・・今のはアキの部屋ね
ってことはこっちかな？

『ＫＡＺＵＹＡ』

ここね・・
・・・なんかドキドキする
（ガチャ）

美波「か、和也。お見舞いに・・・」

・・・え？
ウチが目にしたのはベットから少し離れたところで倒れている和也
の姿だった

美波「ちょ、和也!?どうしたの!?しっかりして!」

和也「ハアッ、ハアッ」

!!ひどい熱!呼吸も荒いし・・
どうしよう・・・

和也「・・・月」

美波「え?」

和也「ごめん・・・もう・・・許して・・・」

許す?なにを?

美波「和也!しっかりして!和也!」

和也「う、ん・・・美波さん?」

美波「良かった。水持ってくるからちょっと待ってt・・」

そう言って立ち上がろうとしたら・・・

(ガシッ)

和也に手を掴まれた

美波「え?」

和也「行かないで・・・少しだけ・・・少しだけでいいから傍にいて」

美波「う、うん」

そんな泣きだしそうな顔されたら断れないじゃない

握られた手は小刻みに震えていた

☆数分後☆

美波「落ち着いた？」

和也「・・・うん。ごめんね」

美波「気にしないで」

こんなに弱ってる和也はじめて見た

美波「調子は・・・悪いみたいね・・・」

和也「うん。さっきも急にめまいがしてそのまま気絶しちゃった」

美波「ちょ、それ大丈夫なの！？」

和也「まだクラクラするけど、おとなしくしてれば大丈夫だよ」

美波「ならいいけど・・・凄くうなされてたわよ？ごめんとか許してとか言ってたけど・・・」

和也「・・・妹の夢を見てたんだ」

なんか和也・・・辛そう・・・

和也「僕の家族が十年前に死んだのは昨日話したよね？」

美波「う、うん」

和也「みんな・・・殺されたんだ」

美波「え！？」

和也「その日僕と妹は出かけてて、帰ってきたら刃物を持った３人の男と血まみれの両親がいた」

美波「・・・」

和也「二人ともすぐに捕まって僕の目の前で妹は・・・殺された・・・」

美波「そんな・・・ひどい」

和也「その後、僕もナイフで刺されたけど、急所から外れてたみたいで死ななかったんだ」

そう言って和也がシャツを捲ると、へそより少し上の辺りに大きな傷跡があった

和也「何もできなかった・・・何があっても守るって言ったのに・・

・守れなかった」

悔しそうに呟きながら涙を流す

和也「それからずっと夢に出てきて『どうして助けてくれなかったの？』『ウソツキ』って言うんだ！きっと僕のこと恨んでる！一人だけ生き延びた僕を憎んでるんだ」

美波「ちょ、和也！？落ち着いて」

和也「父さんも母さんも羽月も僕のこと恨んでる！僕もあの時一緒に死ねば良かったんだ」

！！（パシンッ）
平手の音が響いた

和也「え？」

美波「死ねば良かったですって？バカなこと言わないで！」

ウチは涙を流しながら叫んだ

美波「アンタが死んでたら、ウチはアンタに出会えない。日本に居場所なんてなかった！アンタが死んだらウチは悲しいし、アキや瑞

希、みんなだって悲しむのよ！そんなこともわからないの！？」

和也「・・・」

美波「・・・アンタだったらどうなのよ？」

和也「え？」

美波「アンタがアキの目の前で殺されてアキが生き延びたらアンタはアキを恨むの？」

和也「・・・」（フルフル）

美波「助かってくれてよかった、そう思うでしょ？」

和也「・・・」（コクン）

美波「家族ってそういうもんなのよ。だから・・・もう自分を責めないで」

和也「・・・うん。ごめんね、それと・・・ありがとう」

美波「どういたしまして」

和也「・・・で？いつまで隠れてんの？兄さん？」

美波「え？」

明久「・・・あはは、えっと・・・隠れるつもりはなかったんだけどね。なんか出て行きづらくなっちゃって・・・」

美波「あ、アンタ。い、いつからそこに?」

明久「和也が美波の手を掴んで震えてるあたりから」

美波「アンタの指を折るわ。小指から順に全部綺麗に」

和也「お、落ち着いて美波さん」

明久「そ、そういえばさ。和也あのこと話したんだね?」

和也「あのこと?」

明久「事件のこと。初めてだよね?人に話したの」

美波「え?でもアンタは知ってんじゃないの?」

明久「知ってるけど和也から聞いたわけじゃないし、それに後半の夢の話は初耳だよ?」

和也「そういえばそうだね。・・・もしかしたら・・・誰かに助けて欲しかったのかもしれない」

明久「そうなんだ。美波なら助けてくれると思ったの?」

和也「ん〜。よくわかんないや」

・・・ウチのこと信頼してくれてるのかな?

・・・なんか嬉しいな

明久「（よかったね、信頼されて）」

美波「（ウ、ウチは別に・・・）」

明久「（顔がニヤけてるｙ・・・あ、やめて。僕の関節はそっちに曲がらな・・・）」

美波「ウチ、そろそろ帰るね。お大事にね」

和也「あ、うん。わざわざありがとうね（兄さん何言ったんだろ？）」

美波「うん、じゃあまた学校でね」

明久「さてと、ご飯できたら持ってくるから横になってなよ」

和也「うん、ありがとう。兄さん」

（ガチャ、バタン）

明久「美波」

美波「なに？」

明久「和也のことよろしくね」

美波「な、何言って・・・」

そこまで言って気づいた
冗談じゃなく、真面目に言ってるんだってことに

明久「あいつはさ。辛くても苦しくてもきっと誰にも頼らずに抱え込むと思うんだ。だからそのときは和也を助けてあげて欲しいんだ」

美波「・・・わかった」

明久「ありがとう。じゃ、また明日ね」

美波「うん。お邪魔しました」

帰り道ずっと考えてた。
和也を助ける・・・ウチにできるかな？
でも・・・
できるだけ力になろう
だって・・・
和也はウチにとって大切な人なんだから

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

真っ白な空間

羽月「・・・どうして・・・」

黒い服を着た妹が言う

羽月「どうして助けてくれなかったの？」

僕に対してつぶやく
また・・・この夢か・・・

？「やめて！」

和也「え？」

振り返るとそこには白い服を着た羽月がいた

羽月（白）「もうお兄ちゃんをいじめないで！」

そう言うと黒い服の羽月は静かに消えていった

羽月「お兄ちゃん、ごめんね。いままで意地悪言って。私、全然恨

んでないよ。だってお兄ちゃんの事大好きだもん。だから・・・」

？「私たちの分も幸せになりなさい」

いつの間にか羽月の後ろには・・・

和也「父さん、母さん・・・」

父「お前だけでも生きていてくれてよかった」

母「あなたは私たちのことは気にしないで、自分の好きなように生きていいのよ」

羽月「お兄ちゃん。元気でね。私たちのこと忘れないでね」

和也「忘れないよ！絶対に忘れない！」

その直後目の前が光に包まれた

和也「・・・夢？」

明久「おはよう和也。具合は・・・また悪い夢？」

和也「ううん。今日は違った」

明久「でも・・・泣いてるよ？」

和也「・・・みんながさ、僕のこと恨んでないって、自分たちの分も幸せになれって・・・」

明久「・・・そっか。よかったね」

心配してくれる兄がいる。
親身になって僕を叱ってくれる友達がいる
父さん、母さん、羽月、僕は今・・・幸せだよ！

第二十二問　彼は意外と病弱！？後編（後書き）

ちょっとシリアスなシーンが多くなりましたね
次回は僕と暴徒とラブレターを予定しております

第二十三問　僕と暴徒とラブレター（前書き）

一日空いてしまいました
最近仕事が忙しいので
これからもちょくちょく間が開くかもしれません
ご了承ください

第二十三問　僕と暴徒とラブレター

下駄箱を開けると可愛らしい便箋が入っていた
彼はそれを手に取り確認する

『吉井明久さまへ』

裏を見てみると

『姫路瑞希』

そう書いてあった

ＳＩＤＥ　和也

和也「・・・」

僕は下駄箱を確認する

『吉井（和）』

和也「瑞希さん・・・ちゃんと確認して入れようよ・・・」

きっと間違えて入れたんだな・・・
でも、どうしよう。兄さん、僕の風邪がうつって今日休みなんだよな・・・
・・・瑞希さんに事情を説明して返そう

雄二「おう、和也じゃねーか。もう風邪は大丈夫なのか？」

和也「あ、雄二君おはよう。もう大丈夫だよ」

雄二「そうか（ん？手に持っているものは・・・）」

和也「どうしたの？早く教室に行こうよ」

雄二「（面白い暇つぶしゲット）」（ニヤリ）

？雄二君のあの顔は・・・また何か企んでるな

☆　Ｆクラス教室前☆

あっ、あれは美波さんだ
どうしよう・・・
僕はこの前のことを思い出した

『死ねば良かったですって？バカなこと言わないで！』

・・・美波さん泣いてたな
僕が泣かせたんだよな
・・・ちゃんと謝らなきゃ

和也「み、美波さん。おはよう」

美波「え？か、和也！もう大丈夫なの！？」

和也「うん、この前は変なこと言ってごめん」

美波「もういいわよ。頼りにしてもらって嬉しかったし・・・でも、もう二度と『死ねば良かった』なんて言わないで」

和也「うん。約束する」

雄二「（何かあったのか？）そういえば明久はどうした？」

和也「僕の風邪がうつって休みだよ」

雄二＆美波「「馬鹿でも風邪をひくんだな（のね）」」

和也「あはは、二人ともひどいなあ」

まぁ・・・否定はできないけど・・・

鉄人「おい、お前らさっさと教室に入れ。ん？吉井兄はどうした？」

和也「僕の風邪がうつって休みです」

鉄人「馬鹿でも風邪をひくんだな」

先生もひどいなあ

・・・あっ、瑞希さんに返しそびれたな・・・

まあ後でいいか

鉄人「近藤」

近藤「はい」

鉄人「斉藤」

斉藤「はい」

鉄人「坂本」

雄二「・・・和也がラブレターを貰ったようだ」

F「「「なんだと!!」」」

和也「ちょ、雄二君!これは違・・・」

F「なんてことだ!」

F「俺、密かに狙ってたのに・・・」

F「俺もだ」

F「和也ちゃんが誰かのものに・・・」

変態の集まりか!?ここは!
ってか、誰が和也ちゃんだ!!

雄二「落ち着け、お前たち」

叫びたい!お前が原因だと叫びたい!

雄二「嘆いて何もしなければ何も変わらないぞ。男だったら行動を起こせ」

・・・質問攻めは免れないだろうな・・・

鉄人「手塚」

手塚「どうする」

鉄人「藤堂」

藤堂「どうすればいい・・・」

西村先生・・・よくこの状況で点呼続けられますね・・・

鉄人「新田」

新田「送り主を聞き出すか・・・」

鉄人「根岸」

根岸「!!そうだ!ラブレターを奪い取ってこの事をなかったことにすればいいんだ」

F「「「それだ」」」

・・・予想の遥か上を行きやがった・・・

鉄人「よし、欠席は吉井兄だけだな。」

和也「この状況を放置ですか!?」

鉄人「・・・がんばれよ」

和也「止めてくださいよおおお!!!」

どうしよう!誰かに助けを・・・

美波「か～ず～や～？」

！美波さん？そうだ！美波さんならきっと助けて・・・

美波「ちょ～っと話を聞かせてもらえる？」（ゴゴゴゴゴ）

な、なんだ？すごい『気』だ！
推定戦闘力・・・１００万・・・２００万・・・
バカな！フ○ーザ以上だと！？

和也「え、えっとですね美波さん。これは僕じゃな・・・」

ダメだ！こんな人の多いところで事情を説明したら瑞希さんが傷つくことに・・・

F「「「さあ、和也ちゃん。ラブレターをこっちに・・・」」」

ぐっ！逃げるしかない！

美波「え？ちょ、和也！？」

僕は美波さんの手を引いて走り出す

☆　２－Ａ前☆

和也「ここまで来れば大丈夫かな」

美波「／／／」

和也「美波さん大丈・・・」

・・・落ち着いて考えたら美波さんを連れてくる必要はなかったんじゃ・・・
でも、美波さんには誤解されたくなかったし・・・
・・・って、あれ？なんでだろ？

美波「／／／・・・はっ！そ、そろそろ説明してもらうわよ！」

・・・美波さんは瑞希さんが兄さんのこと好きって知ってるんだったな・・・
だったらいいか・・・

和也「うん。これなんだけど・・・」

僕は手紙を渡す

（ゴゴゴゴゴゴゴ）

!?また戦闘力があがった!?

美波「・・・ミズキ、ウチヲウラギッタワネ?」

和也「み、美波さん!?落ち着いて!表を見て」

美波「表?・・・あれ?これって・・・」

和也「そ、兄さん宛。間違えて僕の下駄箱に入れたみたいで、兄さん今日休みだから後で瑞希さんに返すつもりだったんだ」

美波「そうだったんだ（よかった）」

和也「誤解が解けて良かったよ」

美波「でもどうするの?もう収拾つかないわよ」

和也「考えがある。でもそれには・・・」

!!この気配は!!

和也「・・・そこにいるね?康太君?」

美波「え？」

康太「・・・よくわかったな」

和也「まあね、でもちょうど良かった、協力してほしい」

康太「・・・断ったら？」

和也「僕の写真の撮影及び販売を禁止する」

康太「・・・協力しよう。何をすればいい？」

和也「えっとね・・・（ごにょごにょ）」

康太「・・・そんなもの何に使う？」

和也「ちょっと騒ぎの元凶へのＯ☆ＳＨＩ☆Ｏ☆ＫＩのためにね」

康太「・・・了解した」

和也「あ、それと。ＦＦＦ団のみんなが１０分後に屋上に来るように仕向けてほしい」

康太「・・・わかった」

美波「どうするつもりなの？」

和也「えっとね・・・（ごにょごにょ）」

美波「・・・アンタ、結構えげつないことするわね」

和也「人の気持ちを弄ぶような行為は許せないからね。じゃあ行こうか？」

美波「あ、うん」

☆屋上の扉の前☆

和也「じゃ、手筈通りにお願いね」

美波「わかったわ」

（ガチャ）

屋上の扉を開けると予想通り雄二君と瑞希さんが待ち構えていた

和也「やっぱり、ここにいたね・・・」

雄二「！わかってたのか？」

和也「まあね。逃げる人間の一番逃げやすいところといえば、人のいない所。屋上に行く可能性は極めて高い。雄二君ならそれにきっと気付く。そして瑞希さんは走り回る体力はないからそれについていく可能性が高いってわけさ」

雄二「・・・そこまでわかっててなんで来た？」

和也「さぁ？なんでだろうね～」

もちろん雄二君にＯ☆ＳＨＩ☆Ｏ☆ＫＩするためだよ

瑞希「あの、和也君。なんでこんなことを・・・」

和也「こんなこと？」

瑞希「ラブレターを貰ったことです！少しは美波ちゃんの気持ちも・・・」

美波「ウチがどうかした？」

雄二＆瑞希「「え？」」

二人とも驚いてるな～

そろそろネタバラシといきましょうか

和也「じゃあ、美波さん。これ、送り主に返しておいてね」

美波「ん、了解」

瑞希「え？あれ？あれって・・・」

瑞希さんは気付いたみたいですね

雄二「どういうことだ？」

和也「これはね、僕宛じゃないんだ。僕の下駄箱に間違えて入っていたから後で送り主に返そうと思ってたんだ」

雄二「そうだったのか」

和也「さて、騒ぎを起こした雄二君にはＯ☆ＳＨＩ☆Ｏ☆ＫＩが待ってますよ」

雄二「ぐっ、お手柔らかに頼む」

和也「ちなみに僕は手出ししないから」

雄二「は？それはどういう・・・」

Ｆ「「「「いたぞ！」」」」

ちょうどいいタイミングだね

和也「みんな聞いて！僕にラブレターを出したのは・・・」

さあ楽しいお仕置きタイムの始まりです

和也「雄二君だ！！」

F「「「殺せー！！」」」

雄二「くっ、そういうことか！だが、これしきのことで・・・」

和也「まだ終わりじゃないよ」

僕のターンはまだ終わらない
僕は左手に隠し持ってた携帯を取り出し画面を見せる

『通話中　霧島翔子』

雄二君の顔が一気に青ざめる

（ダダダダッ、ガチャ、バン）

翔子「・・・雄二、今の話ホント？」

は、速い！

雄二「ち、違う！デタラメだ！」

僕のターンはまだまだ終わらない
康太君に頼んだ『例の物』を・・・

和也「翔子さん、コレを見て」

翔子「！・・・雄二、浮気は許さない」

雄二「ぐぁあああ！俺の頭蓋がっ！！か、和也！テメエ何見せやがった！？」

和也「ん？これ♪」

そう言って見せた一枚の写真には屋上にいる雄二君と瑞希さんのツーショットだった
さらに僕はその写真をＦＦＦ団会長の須川君に渡す。すると・・・

Ｆ「「「坂本を殺せー！！」」」

翔子「・・・調教が必要」

雄二「くそっ、覚えてろよ！！」

雄二君は逃げた
翔子さんとＦＦＦ団のみんなはそれを追いかけていく

和也「ま、こんなもんかな」

瑞希「さ、さすがにやりすぎなんじゃ・・・」

和也「ん～でもさ、もしこの手紙をみんなに見られたら送り主の女の子は傷つくよ？そういう人を傷つける行為をする人は許せないんだ」

美波「なるほどね（言えない、ウチも奪い取ろうとしてたなんて言えない）」

瑞希「あ、あの～さっきのラブレターって・・・」

美波「あ、返すわね」

今屋上には僕達三人しかいないから問題ないだろう

瑞希「良かった、失くしたのかと思いました」

美波「え？瑞希が入れたんじゃないの？」

瑞希「はい、どこかに落としたみたいで、ずっと探してたんです」

和也「じゃあ、誰かが拾って親切のつもりで兄さんの下駄箱に入れようとして間違えて入れたのかな？」

瑞希「そうみたいですね」

和也「なんなら兄さんに渡しとこうか？」

瑞希「そ、それは。まだ、その、勇気が・・・／／／」

美波「無理みたいね」

和也「あはは。あっ、そろそろ教室に戻ろうか」

美波＆瑞希「「うん」」

瑞希（それにしても、一体誰が・・・）

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＮＯ　ＳＩＤＥ

☆その日の放課後☆

優子「～♪」

秀吉「姉上。随分機嫌が良いのう？」

優子「ちょっと良い事したから気分がいいのよ」

秀吉「良い事じゃと？」

優子「そ、恋する乙女の後押しをね（頑張ってね、姫路さん）」

意外な犯人がここにいた

オリキャラ紹介＆主人公設定（追加）

オリキャラ紹介

柊　羽月　享年５歳

和也の一つ年下の妹
和也の夢の中では『ウソツキ』など、和也を攻めるような言い方をしているが、それはあくまで和也の妄想であり、最後に和也を助けに来たことからわかるように、羽月は和也を攻めるつもりはまるでない

いつも和也にべったりで、『大きくなったらお兄ちゃんのお嫁さんになる』と言っていたほどのブラコンだった

柊　和義　享年２８歳
柊　皐月　享年２８歳

和也の両親
見た目は二人とも高校生にしか見えないため、和也の童顔は血筋ではないかと思われる
父親は政治家、母親は弁護士とかなり裕福な家庭だった
そのため強盗に狙われたと思われる

☆各キャラとの関係

島田　葉月

和也に出会った当初は和也のことを『ちっちゃくて可愛いお兄ちゃん』と呼んでいたが、和也にマジ泣きされたことと、美波が和也に好意を抱いていることに気付いた事により『お兄ちゃん』と呼んでいる
和也は名前が妹と同じ『ハヅキ』であることもあり妹のように可愛がっている
葉月も優しい和也のことを兄のように慕っているためとても仲がいいそのため二人が一緒にいると美波の機嫌が悪くなる（嫉妬する）

ＦＦＦ団

皆、和也のことを可愛い女の子として見ているので、異端審問会の対象外

オリ主設定（ネタバレ?編）

柊（吉井）　和也

得意教科は世界史と日本史で点数は教師と同等かそれ以上。
資料に書いてあることを丸暗記する為、覚える必要のないことまで覚えている
基本的には成績優秀なのだが、案外ドジでイージーミスが多い
計算が苦手で数学の点数は明久と大差ない

基本的に温厚なので怒ることはあまりないのだが、友達が傷つけられるとキレる

身体が意外にも病弱で病気への耐性はゼロ
風邪が流行ることがあると必ずかかる

Aクラス戦で工藤愛子との会話の中に水泳が苦手と言ったが、人前で水着姿になる（傷跡を見せる）ことを嫌い一切訓練しようとしなかったため、いまだ泳げない

また、過去のことから約束を破ることを恐れ、約束を破ると物事を悪く考えてしまう。所謂ネガティブである

オリキャラ紹介＆主人公設定（追加）（後書き）

この、オリキャラ紹介はいらないんじゃないか？と思う方もいると思います。
でもやります。
なぜなら、和也の両親の出番はもうないからです！
紹介くらいしてあげないと可愛そうですからね
あ、ちなみに『両親』がでないだけで『羽月』はでますよ
では、次回から本編に戻ります。二、三日中には書き上げる予定です

第二十四問　もうすぐ清涼祭（前書き）

二日間が開いてしまいました

第二十四問　もうすぐ清涼祭

ＳＩＤＥ　和也

兄さんの風邪も治り、僕らはいつも通り登校した
もうすぐ『清涼祭』があるということで他のクラスは準備に勤しんでいた
そして朝のＬＨＲで僕たちのクラスでも準備を・・・

須川「来い！明久！」

明久「勝負だ、須川君！」

須川「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

・・・しているのは４人だけだった（和也、美波、瑞希、秀吉）

和也「みんな元気だね～」

美波「感心してる場合じゃないでしょ！」

秀吉「それにしても、お主なら明久についてくと思っていたんじゃが・・・野球は苦手なのかの？」

和也「いや、好きだけど病み上がりだし。それになんか身体がだる

くてさ」

美波「ちょ、それ大丈夫なわけ！？」

和也「暴れたりしなければ平気だよ」

美波「ならいいけど・・・あまり無理しないでね」

和也「うん、心配してくれてありがとう」

美波「う、うん／／／」

秀吉&瑞希（（ここまであからさまなのに、なんで気付かないかな～？））

（ガラッ）

鉄人「ん？他の連中はどうした？」

和也「えっと・・・あっちです」

僕は窓の外を指差す

鉄人「全くあのバカどもが！ちょっと待ってろ」

☆数分後☆

雄二「さて、そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなきゃいけない時期が来たんだが・・・」

雄二君たちが戻ってきた
これで雄二君がうまくクラスのみんなをまとめて・・・

雄二「議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

・・・くれるつもりはなさそうだ
どうやら雄二君は全く興味がないらしい

雄二「で、実行委員だが・・・誰かやってくれる奴いないか?」

・・・なんか、みんなあんまりやりたくないみたいだな

和也「雄二君、誰もやりたくないんだったら僕がやろうか?」

雄二「そうか。じゃ、頼む。だが一人じゃ大変だろうからもう一人・・・」

美波「ウチがやる」

雄二「わかった、じゃ後は任せた」

美波さん、さっきまでめんどくさそうにしてたのに急にどうしたんだろ?
あ、さっき病み上がりで身体がだるいって言ったから気をつかってくれたのかな?
優しいなぁ

和也「じゃ、美波さんはみんなに意見を聞いてもらえる?板書は僕がやるから」

美波「了解。クラスの出し物でやりたいものがあったら手を挙げて」

さてさて、どんな意見が出るんでしょうね・・・

美波「はい、土屋」

康太「・・・写真館」

美波「・・・土屋の言う写真館ってかなり危険な予感がするんだけど」

和也「うん。僕もそう思う」

美波「でも一応意見だし、書いといて」

和也「了解」

写真館『フォトスタジオ』

美波「次、横溝」

横溝「メイド喫茶・・と言いたいけど流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

美波「ウェディング喫茶?ウェディングドレス着て接客するの?」

和也「確かに斬新だけど、ウチのクラスの女子って、美波さんと瑞希さんしかいないよ?」

明久「何言ってんのさ。和也と秀吉がいるじゃ・・・」

和也「ニイサン?」

明久「な、何でもありません!」

美波「じゃあ、ボツね。次、須川」

須川「俺は中華喫茶を提案する」

美波「中華喫茶?チャイナドレスでも着せようっていうの?」

和也「でもさっきも言ったけどウチのクラスには女子が・・・」

須川「いや、そうじゃない。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。イロモノ的な格好をして稼ごうってわけじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉が・・・」

須川君はどうしたんでしょう？
随分詳しいようですが・・・
中華料理好きなのかな？

美波「和也。須川の意見も書いてくれる？」

和也「は～い」

中華喫茶『好吃』

→ちなみに中国語でおいしいって意味ですよ

鉄人「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

美波「今のところ候補は二つです」

鉄人「・・・まともな意見は中華喫茶しかないように見えるが・・・」

・・・否定できない

鉄人「まったくお前たちは・・・。少しは真面目にやって稼ぎを出してクラスの設備を向上させようって気持ちはないのか？」

和也「え？そんなことしていいんですか？」

鉄人「ああ、学園長には許可をとってある」

ウチの学園長はひねくれ者だって聞いてたけど・・・やけにあっさり許可だしたなぁ

瑞希「みなさん、がんばりましょう！」

？瑞希さん、随分やる気だなぁ

和也「さて、どうしますか？・・・ってか写真館じゃあ利益は期待できないから中華喫茶しか選択肢がないんだけど・・・」

美波「じゃあ中華喫茶でいいんじゃない？反対の人いる？」

和也「・・・いないみたいだね。じゃあ中華喫茶に決定」

須川「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

康太「・・・（スクッ）」

和也「康太君、料理できるの？」

康太「・・・紳士の嗜み」

瑞希「じゃあ私も厨房に・・・」

和也＆美波「「ホールでお願いします」」

瑞希「・・・はい」

瑞希さんは残念そうだったが、一般客も来るのに硫酸入りの料理を出すわけにはいかないそれに女子二人にホールをやってもらった方がお客さんも多くなると思うし・・・

美波「ウチは厨房班にしようかな」

和也「え？」

美波「『え？』って何よ？ウチの料理は不味くて食べられないとでも言いたいわけ？」

和也「ち、ちがうよ！美波さんが料理ができることは知ってるけど、お客さんを呼ぶためには美波さんにホールをやってもらわないと・・・」

美波「？どうしてウチがホールやるとお客さんが来るわけ？」

和也「?可愛い女の子が接客する方が見栄えがいいからだけど?」

なんでそんな当たり前のこと聞くんだろ?

美波「か、か、可愛・・／／／」

?どうしたんだろ?
顔がトマトみたいに真っ赤だけど

秀吉「お主は天然じゃの・・・」

和也「?まあいいや。ってことで美波さんにはホールやって貰いたいんだけど・・・」

美波「・・・うん／／／」

明久「和也と秀吉もホール班でいいよね?」

和也&秀吉「「わかった（のじゃ）」」

こうして清涼祭の準備は着々と進んでいった

☆昼休み☆

明久「清涼祭の準備、何とかなりそうだね」

和也「そうだね。・・・ん？」

なんだろう？
掲示板の前に人が集まってる
どれどれ・・・

『試験召喚大会のお知らせ』

へ～そんなのあるんだ・・・
優勝賞品と準優勝賞品は如月ハイランドのプレオープンペアチケットと・・・
・・・！試召戦争で使える腕輪？
どんな能力かは書いてないけど・・・
これがあれば翔子さんや優子さんとの勝率上がるかな？

明久「どうしたの？ボーっとして・・・」

和也「僕、これに参加するよ！早速申し込んでくる！」

明久「え？ちょ、和也！？・・・行っちゃった・・・でも、これって・・・」

☆数分後、Fクラス教室☆

和也「・・・」

明久「あいかわらず、おっちょこちょいだなぁ」

美波「？どうしたの？」

和也「試験召喚大会に参加しようと思って職員室に行ってきたんだけど、ペアマッチってとこ見落としてて・・・」

！？殺気！？

美波「和也、試験召喚大会加するんだ。賞品目当て？」

和也「うん。これで・・・今度こそ・・・」

美波「今度こそってことは・・・前に誰かと！？誰！？」

和也「え？優子さんだけど・・・」

？なに言ってんだろ？僕が負けたとき美波さんもその場にいたのに・・

！？戦闘力が上がった！？

美波「・・・そういうのじゃないって言ったのに・・・」

和也「美波さん?どうし・・・」

美波「うわあああん」（ガラッ、タッタッタッ）

和也「え!?ちょ、美波さん!?・・・行っちゃった・・・どうしたんだろ?」

瑞希「和也君!酷いです!美波ちゃんという人がありながら・・・」

秀吉「和也、いつの間に姉上と・・・」

和也「?何言ってんの?みんなそのとき一緒にいたじゃん」

瑞希&明久&秀吉「「「?」」」

雄二「・・・!ああ。そういうことか」

瑞希「どういうことですか?」

雄二「和也の言ってる賞品ってのはチケットじゃなくて腕輪のことだ。で、今度こそってのは木下姉にリベンジするってことだろ?」

和也「?他に何があるの?」

なんだろう?みんなの視線が痛い

瑞希「・・・美波ちゃん、呼び戻してきます・・・」

☆放課後☆

和也「美波さん、さっきはどうしたの？」

美波「・・・お願い、もう忘れて／／／」

？まあいいや

瑞希「あ、あの！皆さんに頼みたいことがあるんです！」

明久「何？」

瑞希「このままじゃ私、転校させられちゃうんです」

美波「どういうこと？」

瑞希「その・・・今の環境が私にとって良くないってお父さんが・・・」

和也「なるほど、成績優秀なのに試験で体調不良ってだけでFクラスで、周りは低得点者ばっかり。おまけに設備はかび臭い教室にみかん箱。確かに父親としては心配だろうね」

瑞希「はい。でも、それよりもFクラスってだけでみんなをバカにしてきたんです！許せません！」

・・・あまり強く否定できないけどなぁ

瑞希「それで言い返したら、試験召喚大会で私以外の人が好成績を残したら考え直してくれるって・・・」

和也「そうなんだ。そういうことなら協力するよ。ね、兄さん」

明久「うん。もともと僕も雄二と出ることになってたし」

和也「え？そうなの？意外だなぁ、雄二君はこういうの出たがらないと思ってたんだけど・・・」

雄二「俺だってできれば出たくないさ。だが、チケットが翔子の手に渡ることだけは意地でも阻止しねぇと・・・」

さては、また余計な約束したんだな？

和也「でも、設備は売り上げで何とかなるとして。教室はどうするの？」

雄二「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

明久「僕らが学園長に言ったくらいで何とかしてくれるかな？」

雄二「ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

明久「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

雄二「そうだな。和也、お前も来るか？」

和也「僕はパートナー探さなきゃいけないからやめとく」

雄二「・・・その心配はないと思うが・・・まあいい。行ってくる」

？どういう意味だろ？

美波「か、和也」

和也「ん？どうしたの？」

美波「まだ、誰と大会に出るか決まってないのよね？ウ、ウチと出ない？」

和也「え？僕なんかでいいの？」

美波「和也こそウチでいいの？」

和也「うん。大歓迎だよ。よろしく」

美波「う、うん。よろしく／／／」

秀吉「そういえば、姉上も霧島と出場すると言っておったぞ」

和也「ホント？よ～し、今度こそ負けないぞ」

こうして清涼祭の準備は着々と進んでいった

第二十五問　清涼祭開幕

☆清涼祭初日☆

ＳＩＤＥ　和也

和也「やっぱり雄二君の統率力は凄いね」

美波「ホント、いつもはただのバカなのにね」

明久「このテーブルなんてパッと見は本物と区別がつかないよ」

瑞希「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なクロス持ってきて、手際よくテキパキと」

どこから持ってきたんだろ？
演劇部の備品かな？

秀吉「じゃが、クロスを捲るとこの通りじゃ」

そう言って秀吉君がクロスを捲るとそこには見慣れた汚いミカン箱が・・・

美波「これを見られたら評判ガタ落ちね」

和也「そうだね。食欲失せるよね」

明久「きっと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にしまっておいてもらえるさ」

瑞希「そうですね。わざわざクロスを剥がしてアピールするような人は来ませんよ、きっと」

ま、そうだね。たかが学園祭でそんな営業妨害するような人はいないでしょう

康太「・・・飲茶も完璧」

和也「康太君、厨房の方はどう？」

康太「・・・味見用」

これは胡麻団子とお茶だね

瑞希「わぁ・・・美味しそう・・・」

美波「これウチらが食べちゃっていいの？」

康太「・・・（コクリ）」

秀吉「では、遠慮なく頂こうかの」

そう言うと、美波さん、瑞希さん、秀吉君の三人が胡麻団子を食べた

瑞希「お、美味しいです！」

美波「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし」

秀吉「甘すぎないところも良いのう」

瑞希「お茶も美味しいです。幸せ・・・」

美波「本当ね～・・・」

みんな美味しそうに食べるなぁ

明久「それじゃ、僕も貰おうかな」

和也「あ、僕も」

（ヒョイッ）

そう言って僕と兄さんは胡麻団子を手に取り・・・

瑞希「あ、それは私が作ったんですよ」

（コトッ）

・・・お皿に戻した・・・

瑞希「な、なんで戻すんですか!?」

和也「だってこれ硫酸入ってるんでしょ?僕、死んじゃうよ」

瑞希「い、入れてません!今度は大丈夫です!」

和也「ホ、ホント?信じるよ!?瑞希さん」

瑞希「大丈夫です!信じてください!」

和也「じゃ、僕が先に逝くよ」

明久「ちょ、何か字がおかしくない!?」

（パクッ）

和也「モグモグ、表面はゴリゴリで中はネバネバで甘すぎず辛すぎる味わいが・・・んゴパっ」

（バタン）

美波「ちょ、和也!?しっかりして!瑞希!アンタ何入れたの!?」

瑞希「レ、レシピ通りに作りましたよ!それで隠し味にちょっと塩酸を・・・」

☆塩酸☆
化学式ＨＣｌ　正式名塩化水素酸
強い酸性の水溶液
人体に有毒。多量に吸入した場合、肺水腫などを引き起こし、死に至る。
・・・って、これやばいんじゃない?
ってか確か日本では毒物及び劇物取締法により劇物に指定されてるはずなんだけど・・・
どうやって手に入れたんだろ?

美波「だから化学薬品を使うのはやめなさい!和也、大丈夫?」

大丈夫・・・じゃないかも・・・
あぁ・・意識が遠のいていく・・・
・・・ん?あれは・・・

和也「・・大丈夫だよ」

美波「そう・・・良かっ・・・」

和也「あの川を渡ればいいんでしょ？川の向こうで父さんと母さんと羽月が呼んでる・・・」

美波「って良くない！だ、ダメよ！和也！その川は渡ったら戻って来れないわ！」

明久「ムッツリーニ！早く蘇生の準備を・・・」

和也「え？渡し賃？すいません今月は生活費が厳しくてお金が・・・ハッ！」

美波「和也！？気がついたのね。良かった」

瑞希「すいません。ちょっと失敗しちゃって・・・」

ちょっと！？劇物まで使っておいてちょっとの失敗ですって！？

和也「で？何故、塩酸を？」

瑞希「え、えっと・・・ちょっと塩味がほしくて・・・」

何故、胡麻団子に塩味が必要なんでしょう？

和也「・・・前回同様、身体が動かないんだけど・・・」

明久「・・・部屋の奥で横になってなよ。ムッツリーニ、そっち持って」

康太「・・・（コクリ）」

兄さんと康太君の手によって僕は部屋の奥へと運ばれた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

あれから数分後、和也が復活し、ウチらは瑞希が厨房に入るのを阻止しながらホールで働いていた

客入りは順調

・・・っと、そろそろ試験召喚大会の一回戦の時間だ

美波「和也、そろそろ時間よ」

和也「あ、うん。じゃあ雄二君。あとよろしく」

雄二「ああ、頑張れよ」

美波「坂本達はまだなの？」

雄二「ああ、俺たちは一回戦の一番最後の試合だ」

和也「そういえば、僕たちと雄二君たちはどこで当たるの？」

雄二「トーナメント表によると決勝まで当たらないな」

美波「そうなんだ。じゃあウチらで優勝、準優勝を飾りたいところね」

和也「そうだね。でも、決勝まで当たらないなんてラッキーだね」

雄二「（多分、あのババアの仕業だな）」

和也「？何か言った？」

雄二「いや、なんでもない。それより行かなくていいのか？」

和也「あ、うん。行ってきます」

会場へ向かうウチと和也
なんか緊張してきた

和也「頑張ろうね。美波さん」

美波「うん。足引っ張るかもしれないけどよろしくね」

和也「任せてよ。美波さんは僕が守るからね！」

美波「頼りにしてるわよ」

頼もしいなぁ／／／

でも、和也一人じゃ苦しいだろうから、ウチも頑張らなくっちゃ・・

・

・・・あっ！確か一回戦の科目って・・・

第二十五問　清涼祭開幕（後書き）

いよいよ次回から試験召喚大会が始まります

第二十六問　僕に出番を・・・

ＳＩＤＥ　和也

和也「・・・」（どよーん）

瑞希「か、和也君。元気出してください」

明久「美波。何があったの？もしかして負けたの？」

美波「ううん、一応勝ったんだけど・・・和也が開始直後に秒殺されちゃって・・・」

・・・面目ない

秀吉「和也が秒殺じゃと？ってことは科目は・・・」

美波「数学よ」

雄二「確かに数学は和也の苦手科目だが、秒殺されるほど低くはないだろ？」

美波「それが今回のテスト、和也は途中から解答欄ずれてたらしくて、相手は２５０点持ちの３年生で・・・」

明久「またドジしたんだ・・・それでよく勝てたね？」

美波「ウチは４００オーバーだったし、もう一人は５０点しかなかったから・・・」

（グサッ）

僕は２２点しかありませんでしたよ

雄二「随分と点数の低い雑魚だな」

（グサッ）

雑魚？雑魚って・・・

明久「４００オーバーの美波から見ればそんなの虫けら同然だね」

（グサッ）

・・・・・・

和也「うわあああん」

明久「ちょ、和也！？なんで泣くの！？」

美波「ちょっとアキ！アンタ何したの！？」

明久「ええ！？ぼ、僕なんにもしてないよ！」

秀吉「・・・お主ら、気付いておらんのか？」

雄二「はぁ・・。おい、島田。休憩入っていいから、そいつ連れてどっか行ってくれ」

美波「え？いいの？」

雄二「そんな状態で接客させれねーし、このネガティブ野郎を一人にすると自殺でもしそうだしな。そういうわけ楽しんで来い」

美波「う、うん。わかったわ。和也、行こ」

（ズルズル）

僕は美波さんに引きずられて教室を出た

和也「・・・はぁ」

美波「いつまでもくよくよしてないで元気出しなさい」

・・・確かに落ち込んでても仕方ないですね

和也「そうだね。次は頑張るよ！」

美波「そうそう。もう数学はないんだし、ここからは和也の力が必要なんだから。頼むわよ？」

和也「うん。さて、せっかくだしどっか行ってみようか？」

美波「う、うん（これってデート！？）／／／」

和也「どこに行こうか？」

？「あら、和也じゃない？」

和也「？あ、優子さん。こんにちは」

優子「こんにちは。二人とも休憩中？」

美波「ええ。優子も？」

優子「ええ、そうよ。ちなみにうちのクラスはメイド喫茶やってるから。よかったら来てね」

和也「あ、それでメイド服着てるんだね」

美波「でも意外ね。優子ってこういうの嫌がりそうだと思ってたけど・・・」

優子「まぁあんまり好きじゃないわね。私が着ても似合わないだろうし・・・」

和也「そう？よく似合ってるよ。優子さん美人だし」

美波「・・・」（ゴゴゴゴゴ）

優子「・・・とっても嬉しいんだけど、私に激しい殺気が襲い掛かってくるからヤメて」

和也「?うん」

どうしたんだろ?
それに美波さんは何で怒ってんだろ?

和也「あ、それより休憩中なら優子さんも一緒に回りませんか?」

美波「・・・」（ゴゴゴゴゴゴゴ）

優子「・・・遠慮するわ（相変わらず凄い鈍感）」

和也「そうですか。じゃ、僕たちはこれで。行こ、美波さん」

優子「ええ。じゃあね」

そう言って優子さんと別れた。
美波さんの機嫌が悪かったのはなんでだろう?

和也「ここ、何の店だろう?入ってみようか?」

美波「・・・好きにすれば」

やばい。凄く怒ってる
僕なにかしたっけ？

和也「じゃあ、とりあえず入・・・」

？「あ、かずちゃ～ん」

和也「・・・と思ったけどやっぱりやめよう。いやむしろ今すぐここから逃げよう」

（ガシッ）

玉野「逃がさないわよ！」

和也「は、放して！」

玉野「ふふ、大丈夫。優しく可愛がってア・ゲ・ル。さぁ、こっちへいらっしゃい」

？「そうはさせません！」

玉野「あ、あなたは清水さん！」

美春「吉井和也は『和美ちゃん』にして私とお姉さまの娘にするんです！あなたには渡しません！さっさと去りなさい！」

玉野「嫌よ！かずちゃんは私のものよ！誰にも渡さない！」

どっちも違います
ってかどっちも嫌です
それより今のうちに・・・

和也「（美波さん。今のうちに逃げよう）」

美波「・・・」

まだ怒ってる・・・
でも今はまず逃げなくちゃ（コソコソ）

美春「あ!?和美ちゃんがいません!」

玉野「かずちゃん!どこへ行ったの?」

ふぅ、ここまでくれば大丈夫かな?
それにしても・・・

美波「・・・」

和也「み、美波さん。どっか行きたいところとかある?」

美波「・・・別に」

どうしよう、怒ってる・・・
僕のこと、嫌いになっちゃったのかな?
・・・もう・・・友達でいてくれないのかな・・・?
・・・いやだ
そんなのいやだ

美波（ちょっと意地悪しすぎたかな?そろそろ・・・）

和也「・・・め・・・さい」

美波「え?」

和也「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

何故か涙が止まらなかった

美波「ちょ、落ち着いて!どうしたのよ!?」

和也「謝るから!何でもするから嫌わないで!友達やめないで!」

美波「落ち着きなさい。ウチがいつそんなこと・・・」

和也「・・・えっく・・・」

美波「ああもう!ちょっとこっちに来なさい!」

そう言って美波さんは僕の手を引いて屋上へと向かった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

さて、どうしたものかしらね
確かにウチも悪ふざけが過ぎたけど・・・
なにも泣くことないじゃない

和也「・・・」

美波「落ち着いたわね？で？なんで泣き出したの？」

和也「・・・美波さんが怒ってたから、美波さんに嫌われたんだと思って・・・」

・・・やりすぎたわね

和也「怖かった・・・美波さんに嫌われたらもう生きていけない」

美波「！！・・・／／／」

ウチに嫌われたら生きていけない・・・かなんか嬉しいな／／／

美波「・・・ウチの方こそごめん。和也が優子を褒めたり、誘ったりしてんの見て、嫉妬しちゃって・・・」

和也「じゃあこれからも友達でいてくれる？」

美波「もちろんよ」

できればそれ以上の関係に・・・／／／

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

美波「じゃ、そろそろ戻りましょ」

和也「うん。ほとんど周れなくてごめんね」

美波「気にしないの」

よかった。もう怒ってないみたいだ
それにしても・・・
なんで僕は美波さんに嫌われるのがあんなに怖かったんだろ？

和也「？なんか騒がしいね？」

美波「そうね・・・あれは優子？・・・じゃない弟の方ねテーブル持って何してんのかしら？」

雄二「失礼しました。テーブルの到着が遅れ、仮にこのようなものを使ってしまいましたが、ただいまテーブルが届きましたのでご安心ください」

美波「あれ？テーブル入れ替えるの？」

雄二「ああ、ちょっとクレームが入ったんでな。それよりお前らそろそろ二回戦の時間じゃないのか？」

和也「あ、ホントだ。じゃ、行ってくるね。あんまり手伝えなくてごめんね」

瑞希「頑張ってくださいね」

僕と美波さんは会場に向かった

和也「今度こそ・・・」

美波「次は数学じゃないんだし大丈夫でしょ。ウチは不安だけど・・・」

和也「じゃあ今度こそ僕が美波さんを守るよ」

美波「期待してるわ。次は英語Wね。自信は？」

和也「暗記系じゃないけど文系は得意だし・・・３００位はいってるはず・・・」

美波「ウチも１００以上はあるはずだけど・・・」

そんなことを言ってるうちに会場に着いた

観客「おっ、あいつ一回戦で２２点だった奴だぜ」

観客「うわっ、低っ！恥ずかしくないのかねぇ」

さっきの試合見てたのか・・・
情けないなぁ

美波「ちょっとあんたたち」

観客「？」

美波「ウチのパートナーをこれ以上バカにしたら許さないわよ！」

観客「・・・」

美波「和也、あんな奴らの言うことなんか気にしなくていいのよ。アンタの実力はこれから見せればいいんだから」

和也「うん。ありがとう」

先生「まだ相手チームが来てませんが時間ですので、召喚して待機してください」

和也&美波「「はい、試獣召喚！」」

２－Ｆ　吉井和也　３２４点
２－Ｆ　島田美波　１３１点

観客「なんだ、あの点数は！？」

観客「Ａクラス並だぞ！」

観客「あいつホントに２２点だったのか？」

美波「驚いてるわね」

和也「まぁ、さっき２２点だった奴が３００オーバーしてんだから無理ないよ」

美波「それにしても相手チーム遅いわね」

和也「大丈夫。誰が来たって僕が守って・・・」

先生「え～鈴木、吉田ペア棄権の為、勝者、吉井、島田ペア」

和也「・・・僕の出番が・・・」

美波「だ、大丈夫よ！次があるわ！」

先生「対戦相手があなた達だと聞いて顔を青くして棄権しますって言ってきたけどなにがあったの？」

何かしたっけ？

鈴木、吉田・・・

？どっかで聞いたような・・・

・・・あっ！！Bクラス戦で美波さんを傷つけた屑どもだ

・・・だったら僕らに顔を合わせたくないのもわかる

はぁ・・・仕方ないか・・・

美波「元気出して。三回戦は世界史よ」

和也「！！さ、戻ってみんなの手伝いをしようか」

美波（だんだん和也の扱い方がわかってきた気がする）

そうして僕たちは会場を後にした

第二十六問　僕に出番を・・・（後書き）

次回は原作通りあの子が登場します

第二十七問　メイド喫茶でバカ騒ぎ（前書き）

間が開いてしまいました・・・
どうもうまくまとまらない・・・

第二十七問　メイド喫茶でバカ騒ぎ

ＳＩＤＥ　和也

美波「早く教室に戻りましょ。」

和也「うん・・・？なんか騒がしいね」

美波「そうね。またクレームかしら」

？「チビッ子じゃなくて葉月ですっ」

ん？この声、この気配は・・・

葉月「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんです」

雄二「お兄ちゃん？名前はなんて言うんだ？」

葉月「あぅ・・・わからないです・・・」

雄二「？家族の兄じゃないのか？それなら何か特徴は？」

葉月「えっと・・・」

和也「あっ。やっぱり葉月ちゃんだ」

葉月「あっ。ちっちゃ・・・お兄ちゃん、こんにちはです」

和也「・・・葉月ちゃん、今、ちっちゃいって言おうとしなかった？」

葉月「い、言ってないです」

雄二「なんだ、和也のことだったのか」

葉月「あ、違うです。葉月が探してんのは、バカなお兄ちゃんです」

なんとも凄い特徴だ・・・

雄二「そうか・・・沢山いるんだが・・・」

雄二君酷いや・・・

否定はしないけど・・・

雄二「だが和也が知り合いってことは・・・明久！お前じゃないのか？」

葉月「あっ！バカなお兄ちゃんだっ！」

そう言うと葉月ちゃんは兄さんに抱きついた

和也「兄さん。葉月ちゃんと知り合いなの？」

明久「え、えっと・・・ああっ！あのときのぬいぐるみの子か！」

葉月「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

明久「そっか、久しぶりだね。元気だった？ってか、和也も知り合いなの？」

和也「うん。美波さんの妹さんだよ」

明久「え？そうだったんだ・・・そういえば似てるような・・・」

葉月「せっかく婚約者が遊びに来たっていうのに冷たいです！」

！！大変です！

兄さんがロリコンになりました

瑞希「あ、明久君！どういうことですか！？」

美波「ちょっとアキ！ウチの妹になにしたのよ！」

明久「な、なにもしてないよ！」

葉月「酷いです！ファーストキスまであげたのに・・・」

美波「よくもウチの可愛い妹を傷物に・・・」（ゴキゴキ）

明久「ギャー！ぼ、僕の関節はそっちには曲がらないって！和也、助けて！」

和也「兄さん。ちゃんと責任取らなきゃダメだよ」

葉月「お兄ちゃん、バカなお兄ちゃんの兄弟だったですか？」

和也「うん。そうだよ」

葉月「じゃあ、葉月のことは『お義姉ちゃん』って呼ぶです」

そっか・・・
兄さんと葉月ちゃんが結婚したらそうなるよな・・・
何か凄い違和感が・・・

瑞希「だ、ダメです！和也君に『お義姉ちゃん』って呼んでもらうのは私です！」

瑞希さん・・・それ凄い爆弾発言ですよ？
さすがの兄さんも気付いたんじゃ・・・

明久「瑞希ちゃん、弟が欲しいのかな？・・・美波様。そろそろ離していただけませんか？」（ギシギシ）

・・・僕の認識が甘かったようだ・・・
まさかこれでも気付かないとは・・・
さて、そろそろ兄さんを助けてあげようかな

和也「ところで随分お客さんが少ないみたいだけど・・・なにかあったの？」

葉月「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

和也「ん？どんな話？」

葉月「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って」

雄二「さっきの連中の妨害が続いてるんだろうな。探し出してシバき倒すか」

明久「まさか、そこまで暇じゃないでしょ」

雄二「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

葉月「お義兄ちゃん、バカなお兄ちゃん。葉月と一緒に遊びに行こっ」

今、字が違わなかった？

明久「ごめんね、葉月ちゃん。どうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

葉月「せっかく遊びに来たのに・・・」

和也「じゃ、葉月ちゃんも一緒に行けばいいよ。兄さんとお昼ご飯でも食べておいで」

美波「え?アンタは行かないの?」

秀吉「お主も行ってくるのじゃ。召喚大会もあるじゃろうし、早めに昼を済ませてくると良い」

和也「いいの?僕全然働いてないけど・・・」

秀吉「構わぬ。後できっちり働いてもらうのじゃ」

和也「うん。わかった。それで葉月ちゃん、さっきの話はどこで聞いたの?」

葉月「えっとね・・・短いスカートを穿いた綺麗なメイドさんが一杯いるお店・・」

明久「なんだって!?雄二、それはすぐに向かわないと!」

雄二「そうだな!我がクラスの成功のために、(低いアングルから)綿密に調査しないとな!」

和也「ちょ、兄さん!雄二君!・・・行っちゃった・・・」

凄いテンションですね

ってか、メイドさんってたしか・・・

瑞希「明久君、酷いです・・・」

葉月「バカなお兄ちゃん、最低です」

和也「まあまあ。それより僕たちも行こうよ」

美波「そうね。葉月、案内して」

葉月「はいです」

そう言って僕たちは二人の後を追った

☆???前☆

雄二「明久、ここはやめよう」

明久「ここまで来て何を言っているのさ！早く中に入るよ！」

雄二「頼む！ここだけは、Ａクラスだけは勘弁してくれ！」

僕たちは２－Ａのやってるメイド喫茶『ご主人様とお呼び！』に来ていた

・・・しかし凄いネーミングセンスですね

美波「そっか。ここって坂本の大好きな翔子のいるクラスだもんね」

瑞希「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

明久「これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから・・・」

康太「・・・！（パシャパシャパシャ）」

和也「・・・康太君？」

康太「人違い」

和也「僕が人の気配を見間違えると思う？何してんの？」

康太「・・・敵情視察」

和也「いやいや、どう見ても盗撮でしょ？」

明久「ムッツリーニ、ダメじゃないか。撮られてる女の子が可哀想だと・・・」

康太「・・・一枚百円」

明久「2ダース貰おう・・・可哀想だと思わないのかい？」

美波「アキ、普通に注文してるわよ」

和也「兄さん？この前も無駄遣いはダメだってイッタヨネ？」

明久「こ、これは違うんだ。それだけの価値のある買い物で・・・」

和也「康太君も、撮影するときは被写体に許可とらないとだめだよ」

康太「・・・ばれなければ問題ない」

和也「二人ともちょっとそこに正座しなさい！！全く、こういうことはしちゃいけないと何度も何度も・・・」

瑞希「ま、まあまあ。和也君落ち着いて」

葉月「お兄ちゃん、怖いです」

美波「ほら、葉月が怖がってるからやめて。それより中に入りましょ」

和也「・・・わかったよ」

明久＆康太（（助かった））

康太「・・・そろそろ当番だから戻る」

そう言って康太君は去っていった

美波「じゃ、入りましょ。お邪魔しまーす」

まず美波さんが入る

翔子「・・・おかえりなさいませ、お嬢様」

和也「じゃ、僕たちも入ろうか」

瑞希「はい、失礼します」

葉月「お姉さん、きれ～！」

続いて僕、兄さん、瑞希さん、葉月ちゃんが入る

翔子「・・・おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と、出迎えてくれた。
最後に雄二君が・・・

雄二「・・・チッ」

翔子「・・・おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

・・・言うと思いましたよ・・・

瑞希「霧島さん大胆です・・・」

美波「ウチも見習わないとね・・・」

葉月「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

和也「相変わらずですね、翔子さん。でも、今日は子供（葉月）がいるのでそういう発言は控えてくださいね」

翔子「・・・わかった」

それにしても美波さん、見習うって・・・
彼氏ができたのかな？
・・・なんでこんなに気になるんだろう？

雄二「ん？和也、翔子と仲良かったのか？」

美波「（ピクッ）」

和也「まぁ、それなりにね。一年のとき同じクラスで、毎日のように雄二君とのノロケ話を聞かされてたよ。・・・暗記できるくらい何度も・・・」

雄二「・・・なんていうか、その・・・すまん」

僕が遠い目をしてそう言うと、雄二君は申し訳なさそうな顔をした

そして、なぜか反応した美波さんの殺気が収まった

翔子「・・・ではメニューをどうぞ」

美波「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

瑞希「あ、私もそれがいいです」

葉月「葉月も」

女の子三人は仲良くシフォンケーキ

明久「僕は『水』で。付け合せに塩があると嬉しい」

和也「・・・兄さん？今月のお小遣いこの前渡したばっかりだよね？まさか、もう全部使ったとかイワナイヨネ？」

明久「え、えっと・・・今月は出費が多くて・・・」

和也「・・・はぁ。僕が払うから好きなもの頼みなよ」

明久「え？いいの？」

和也「うん。お説教は家に帰ってからするから」

葉月「お兄ちゃん、優しいです」

美波「相変わらずアキに甘いわね」

明久「じゃ、僕は『サンドイッチ』で」

和也「僕は『ホットケーキ』」

雄二「んじゃ、俺は・・・」

翔子「・・・ご注文繰り返します。『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『サンドイッチ』を一つ、『ホットケーキ』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいですか?」

雄二「全然よろしくねぇぞ!?」

翔子「・・・では食器をご用意致します」

女の子三人と僕の前にはフォークが、兄さんの前にはお手拭が、雄二君の前には実印と朱肉が用意された

雄二「しょ、翔子!コレ本当にうちの実印だぞ!どうやって手に入れたんだ!?」

翔子「・・・では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

和也「・・・大変だね。ところで葉月ちゃん、さっき言ってた場所ってここで良かった?」

葉月「うん。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話ししてたの！」

A「おかえりなさいませ、ご主人様」

？「おう、二人だ。中央付近の席は空いてるか？」

葉月「あ、あの人達だよ！」

葉月ちゃんが指差した先にはソフトモヒカンと丸坊主の二人組がいた

雄二「やっぱり常夏コンビか」

和也「常夏コンビ？」

瑞希「常村先輩と夏川先輩ですよ。二人合わせて常夏コンビです」

夏川「それにしてもここは綺麗でいいな」

常村「そうだな。さっきいった２－Ｆの中華喫茶は酷かったからな」

夏川「テーブルが腐った箱だったし、無視も湧いてたもんな」

あからさまな営業妨害ですね

それにしてもここも喫茶店なんだから『腐った』とか『虫が湧いてる』とか言ったらまずいんじゃ・・・

和也「どうするの?雄二君」

雄二「任せろ。おーい、翔子」

翔子「・・・なに?」

早っ!さっきまで気配はなかったはず・・・

雄二「あの連中を追い払うからメイド服を貸してくれ」

翔子「・・・わかった」

?メイド服なんて何に使うんでしょう?

翔子さんは着ているメイド服を脱ぎ始め・・・って!!

瑞希「き、霧島さん!こんなとこで脱ぎ始めちゃダメです!」

葉月「お姉さん、胸大きいです」

美波「和也は見ちゃダメ!!」

翔子「・・・雄二が欲しいって言ったから」

雄二「お、俺がいつお前の着ているメイド服が欲しいと言った!?

予備があれば貸してくれって意味だ!」

翔子「・・・今、持ってくる」

雄二君、首まで真っ赤ですね
それにしても美波さん、なぜ僕だけなのでしょうか？
全員見ちゃいけない気がするんですが・・・

翔子「・・・雄二、これ」

雄二「おう。すまないな」

翔子「・・・貸し一つ」

雄二「だ、そうだ。ショタ娘」

和也「（ブチッ）じゃあ翔子さんコレをどうぞ」

翔子「・・・！！ありがとう。和也は良い人」

和也「雄二君と幸せになってください」

雄二「ちょ、ちょっと待て！なに渡しやがった！？」

和也「箱根温泉旅行ペア宿泊券だけど？」

雄二「て、てめえ。なんて恐ろしいことを・・・」

美波「なんでそんなもん持ってんのよ？」

和也「こないだ商店街の福引で当たった」

明久「相変わらず変なところで強運だね。で?このメイド服どうするの?」

雄二「・・・着るんだ」

明久「だってさ、瑞希ちゃん」

瑞希「え?わ、私が着るんですか?」

雄二「バカを言うな。姫路が着ても攻撃なんてできないだろうが」

明久「それじゃ美波?でも、胸が・・・」

和也「兄さん?美波さんを傷つけるようなこと言ったらユルサナイヨ?」

明久「も、もちろん。そんなこと言うわけないじゃないか」

雄二「島田でもない。着るのは和也・・・」

和也「翔子さん、他にもこんなものが・・・」

雄二「・・・でもなくてお前だ。明久」

!!やっぱり雄二君は・・・

和也「気をつけて兄さん。雄二君は女装した兄さんを襲うつもりなんだ」

雄二「テメエ、なんて恐ろしいこと言いやがる！」

明久「ぼ、僕にはそっちの趣味はないよ！！」

雄二「俺にだってねえよ！」

翔子「・・・浮気は許さない」

雄二「ご、誤解だ！！ぐあああああ！俺の頭蓋がぁ！！」（ミシミシ）

・・・？この気配は・・・

優子「・・・」（キラキラ）

なぜ優子さんはこっちを見て目を輝かせているのでしょうか？

明久「結局僕が着るの？」

瑞希「大丈夫ですよ。明久君ならきっと可愛いと思います」

どうやら兄さんに逃げ道はないようだ・・・

☆数分後☆

メイド服を着て兄さんが戻ってきた

瑞希「良く似合ってますよ」

葉月「バカなお兄ちゃん可愛いです」

明久「うぅ、さっさと終わらせて着替えよう・・・」

そう言って兄さんは常夏コンビに近づいていった

明久「お客様」

夏川「なんだ？へぇ。こんなコもいたんだな」

常村「結構可愛いな」

明久「お客様を掃除しますがよろしいでしょうか？」

いやいや、よろしくないでしょ！

常夏コンビ「「は？」」

明久「くたばれぇ！」

夏川「ごばぁぁっ！」

・・・まさかバックドロップを使うとは・・・

容赦ないですね。下手すりゃ死にますよ？

夏川「き、キサマはＦクラスの吉井・・・まさか女装趣味が・・・」

・・・タフな人ですね・・・

無傷ですか？

明久「こ、この人、今私の胸を触りました！」

夏川「ちょっと待て！バックドロップする為に当ててきたのはそっちだし、だいたいお前は男・・・ぐぶぁっ！」

雄二「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

雄二君が坊主先輩を殴り飛ばした

無茶するなぁ

常村「何を見ていたんだ!?明らかに被害者はこっちだろ!」

ごもっともで

雄二「黙れ!たった今、こいつはこのウェイトレスの胸をもみしだいていただろうが!俺の目は節穴ではないぞ!」

いや、節穴だと思います

雄二「ウェイトレス。そっちの男は任せたぞ」

明久「え?あ、はい。わかりました」

兄さんは夏川先輩の頭にブラを・・・
・・・って、どっから出したんでしょうか?

常村「くっ!行くぞ夏川!」

夏川「こ、これ外れねぇじゃねえか!畜生!覚えてろ変態め」

今のあなたにだけは言われたくありません
常夏先輩は逃げるように走り去っていった。

雄二「逃がすか！追うぞアキちゃん！」

明久「了解！でもその呼び方は勘弁して！」

雄二君と兄さんは二人を追いかけて行ってしまった

ちなみに兄さんが頼んだサンドイッチはスタッフ（僕たち）が美味しくいただきました

第二十八問　僕に出番を・・・パート2（前書き）

今回から和也を原作に絡ませるつもりでしたが、
思いついたネタを先に書きます

第二十八問　僕に出番を・・・パート2

ＳＩＤＥ　和也

兄さん達が常夏先輩たちを追いかけていった後
僕は・・・Ａクラスでメイドをしていた

和也「お帰りなさいませ、ご主人様」

・・・なんで・・・こんなことに・・・

☆数分前☆

和也「お騒がせしてすいません」

翔子「・・・気にしなくていい。私たちもあの人たちには迷惑してた」

和也「でも、それも元々僕たちの責任で・・・」

愛子「んー・・・じゃあさ、和也君に身体で払って貰おうかな？」

美波「工藤さん？和也に何するつもりなのかしら？」（ゴゴゴゴ）

愛子「ち、違うよ！エッチな意味じゃなくて、少しの間ウチで働い

てもらうって意味で・・・」

まあそれくらいなら
・・・って!?

和也「ちょっと待って!厨房だよね?まさかメイドじゃないよね?」

愛子「・・・」（ガシッ）

和也「ちょ、放して!美波さん!瑞希さん!助けて!」

美波「・・・がんばってね、和也」

瑞希「きっと似合いますよ。和也君」

葉月「お兄ちゃん。頑張ってください」

僕に味方はいないのか!?
翔子さんは止めてくれないだろうし、利光くんは休憩中
他の人はノリノリだし・・・
このクラスに常識人はいないのか!?
あとは・・・
・・・!!あ、あれは!!

和也「ゆ、優子さん!優子さんは止めてくれるよね?」

良かった。常識人がまだいた・・・

優子「え、えーと・・・ごめん」

そ、そんな！優子さんまで！？

優子「和也。人は欲に勝てない生き物なのよ」（キラキラ）

和也「わけわかんないこと言ってないで助けてよー！！！」

こうして僕はメイドをやらされている

はぁ、こんな姿。Fクラスのみんなに見られたらなんて言われるか・・・

瑞希「和也君、よく似合ってますよ」

葉月「お兄ちゃん可愛いです」

美波「・・・負けた・・・」

似合ってるって言うな！可愛いって言うな！

そして美波さん。僕を見て落ち込むのはやめてください！

勝っても僕はちっとも嬉しくないから！！

瑞希「あ、そろそろ召喚大会の時間じゃないですか？」

美波「あ、本当だ。和也、そろそろ行くわよ」

和也「うん。着替えてくるね」

優子「別にそのままでもいいんじゃない？」

愛子「そうそう。可愛いんだし・・・」

・・・・・・

和也「・・・みんな僕のこと嫌いなんだ・・・僕を虐めて楽しんでるんだ・・・・・」

もうやだ・・・みんな敵だ・・・

優子「じょ、冗談に決まってるじゃない」

愛子「そ、そうだよ。本気で言うわけないじゃん」

美波「ほら、さっさと着替えてきなさい」

和也「・・・」（コクン）

そして僕は着替える為に更衣室へ向かった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

瑞希「和也君、可愛かったですね」

美波「そうね。アイツ本当に男なのかしら？」

和也といい、瑞希といい、木下といい・・・
なんでウチの回りには美人が多いのかしら？
・・・それにしても・・・

Ａ「やっぱり和也君可愛いよね～」

Ａ「ほんとうにね～」

Ａ「一家に一人は欲しいわよね～」

Aクラスの女子達がそんな話をしていた
・・・随分と人気ね・・・

優子「あの子達、みんな和也狙いよ」

美波「！！」

嘘！？あんなにいるの！？
軽く１０人はいるわよ！？

翔子「・・・和也は人気者」

優子「早くしないと、とられちゃうわよ？」

美波「うぅ・・・」

そ、そんなこと言われても・・・／／／

和也「美波さん、おまたせ・・・ってどうしたの？顔が赤いけど・・・」

美波「なななな、なんでもないわよ」

A「あの・・・和也君」

和也「？なに？」

A「私、この後休憩なんだけど・・・よかったら一緒に学園祭を・・・」

美波「！！か、和也！早く行くわよ！！」（ガシッ）

和也「え？ちょ、美波さん？引っ張らないで！」（ズルズル）

危なかったわ・・・

追いかけてこなければいいけど・・・

A「ちょっと！何抜け駆けしてんのよ！」

A「ずるいです！」

A「罰として一週間和也君との接触を禁止するわ」

A「そ、そんな・・・」

・・・大丈夫そうね・・・

ウチは和也を連れて（引きずって）召喚大会の会場へと向かった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

さてと、もうすぐ三回戦開始だ。
楽しみだな～

和也「頑張ろうね！美波さん」

美波「ええ（得意科目だからテンション高いわね）」

先生「吉井、島田ペアですね？」

和也＆美波「「はい」」

先生「三回戦なんですが・・・」

？どうしたんだろ？
・・・なんか嫌な予感がしますよ？

先生「相手チームが食中毒で棄権した為、不戦勝です」

・・・・・・・・・なんですって？

和也「・・・・・の・・・」

美波「和也？」

和也「僕の出番がぁぁぁ！！！！」

美波「ちょ、ちょっと！落ち着いて！勝てたんだからいいじゃない」

和也「でも、僕、ここまでなにもしてない」

美波「ほ、ほら。次は古典だからウチは戦力外だし、頼りにしてるわよ」

うぅ・・・納得いかないけど、ぼやいてても仕方ないか・・・

それにしても・・・

和也「ところで大丈夫なんですか。食中毒って・・・」

美波「まさか・・・」

僕はあるものを思い出した・・・

あのピンクの悪魔の殺人料理を・・・

美波さんの方を見るとどうやら同じことを考えているようだ

先生「その生徒が救急車に乗るときに何か言ってるのが聞こえたんですが、確か・・・胡麻団子がどうとか・・・」

和也＆美波「「急用を思い出したので失礼します」」（ダッ）

僕と美波さんは慌ててある場所へと向かった

☆中華喫茶『好吃』☆

瑞希「胡麻団子二皿と烏龍茶二杯、おまたせしました」

秀吉「ムッツリーニ、中華まん三つじゃ」

康太「・・・了解」

秀吉「ふぅ。む？外が騒がしいのう？」

瑞希「そうですね。どうしたんでしょうか？」

（ガラッ！）

和也＆美波「「瑞希、（さん）！厨房に入ったわね（入りましたね）！！」」

瑞希「え、えーと・・・ちょっとだけ」

秀吉＆康太「「いつの間に・・・」」

秀吉君と康太君は気付かなかったらしい

和也「さて、何を入れたのか教えてもらおうか？」

瑞希「か、和也君？目が怖いですよ？えーと・・・まず、水酸化ナｔ・・・」

和也「もういい、瑞希さん。ちょっとＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしようか？」

美波「和也。ウチも手伝うわ」

和也「わかった。秀吉君、康太君。瑞希さんをちょっと借りるよ。」

瑞希「き、木下君！土屋君！助けてください！」

秀吉「・・・すまぬ・・・」

康太「・・・許せ」

瑞希「そ、そんな・・・」（ズルズル）

その後、兄さんが止めに来るまでの間、隣の空き教室にてお説教が行われた

ちなみに厨房には『関係者以外と姫路瑞希立ち入り禁止』と書いた張り紙が設置された

第二十八問　僕に出番を・・・パート2（後書き）

和也のメイド姿&必殺料理人の再来を書いてみました
次回より和也を原作に絡ませて、何気にまだ出てない教頭が登場します

第二十九問　教頭登場（前書き）

最近うまく話がまとまらない
今回はちょっと短くなりましたが
とりあえず更新です

第二十九問　教頭登場

ＳＩＤＥ　和也

秀吉「さて、和也よ。済まぬがこっちの建て直しに協力してくれんか？」

和也「うん、わかった。でもお客さん全然いないね」

雄二「そうだな。一度失った客を取り戻す為にも、何かインパクトのあることをやる必要がありそうだな」

あの顔は何か企んでますね？

明久「雄二、何かアイデアはある？」

雄二「任せておけ。秀吉。頼んでおいたものは用意できたか？」

秀吉「うむ。演劇部の方から借りてきたのじゃ」

そう言って秀吉君が取り出したのはチャイナドレス・・・４着？

えっと・・・美波さんと瑞希さんと秀吉君と・・・

残り一着は誰が着るんだろ？

雄二「これを・・・明久が着る」

そ、それは、凄いインパクトだ！

美波「さ、坂本・・・アンタやっぱり・・・」

瑞希「明久君は渡しません！」

明久「僕にそんな趣味はないよ！」

和也「えーと・・・翔子さんの番号は・・・」

雄二「冗談だ！俺はホモじゃねえ！ってか、和也！翔子に電話しようとするのはやめろ！」

なんだ、冗談か
ってことはやっぱり女の子たちが・・・

雄二「これは秀吉と姫路と島田と和也に着てもらう」

和也&秀吉「「ちょっと待った（待つのじゃ）」」

雄二「なんだ？」

和也「なんで僕が着ることになってんの！？ってか何で持ってきた本人（秀吉君）が驚いてるの！？」

秀吉「ワシはてっきり、和也と明久が着るものじゃと・・・」

なにぃ!?こっちでも僕はカウントされてたのか!?

雄二「売り上げの為だ。我慢しろ」

和也「ただでさえさっきメイド服を・・・」

明久「?メイド服がどうしたの?」

和也「な、なんでもない!」

危ない危ない
あんな姿見られたら絶対笑われるよ

瑞希「私も流石に恥ずかし・・・」

雄二「ちなみにこれは明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな?」

明久「大好・・・愛してる」

兄さんはホントに嘘のつけない人ですね

瑞希「しょ、しょうがないですね。お店の為ですし」

そう言って瑞希さんは着替えに行った
わかりやすい人ですね～

美波「ウ、ウチは着ないわよ！瑞希や木下が着るならウチなんかが着ても見劣りするだろうし、きっと似合わないわよ」

和也「そう？美波さん綺麗だし、きっと似合うと思うけど・・・」

（ガラッ、タッタッタッ）

和也「でも嫌なら無理には・・・って、あれ？美波さんは？」

明久「美波ならチャイナドレスに着替えに行ったよ」

和也「？あんなに嫌がってたのに急にどうしたんだろ？」

秀吉「こやつは自覚はないのかの？」

雄二「俺が交渉するまでもなかったか」

秀吉「ふむ、ワシも着替えるとするかの」

和也「え？秀吉君も着るの？」

秀吉「仕方あるまい。女子にばかり働かせるわけにもいかんしのう」

・・・なんか断ってる僕が悪い気がしてきた

葉月「お兄ちゃん。葉月の分は？葉月も手伝う！」

和也「え？葉月ちゃんもやるの？でも・・・」

康太「・・・俺に任せておけ」

和也「康太君！？さっきまでいなかったよね！？」

康太「・・・俺の嗅覚を舐めるな」

僕に気取られずにこの距離まで近づくとは・・・

なかなかやりますね・・・

瑞希「着替えてきましたよ」

和也「おかえり。よく似合ってますよ」

明久「うん。凄く可愛い」

瑞希「か、可愛い・・・／／／」

瑞希さん嬉しそうですね
やっぱり好きな人に褒められると嬉しいんですね

美波「着替えたわよ」

あ、美波さんも戻ってきた

和也「おかえｒ・・」

振り向くとそこには、青いチャイナドレスを着た美波さんが立っていた
・・・・・可愛い／／／

和也「・・・」（じー）

美波「や、やっぱり似合わないわよね・・・」

雄二「安心しろ島田。こいつは見惚れてるだけだ」

和也「ゆ、雄二君！なんでわかったの！？」

雄二「・・・図星だったのか？」

美波「み、見惚れて・・・／／／」

和也「／／／」

葉月「お兄ちゃんとお姉ちゃん顔が真っ赤です」

秀吉「ほら、お主らも働くのじゃ」

いつの間にか秀吉君が着替えて戻ってきていた

瑞希「あ、はい」

美波「わかったわ」

和也「さてと。じゃ、僕も・・・」

（ガシッ）

明久「待って、和也も着替えるんだよ？」

和也「・・・どうしても着替えなきゃダメ？」

F「「「・・・」」」（じー）

なんかみんなから冷たい視線が・・・

美波「ちょっと！なにみんなして和也を虐めてんのよ！」

明久「べ、別に虐めてるわけじゃ・・・」

雄二「和也。女に守られてばかりでいいのか？男だったら男らしく覚悟を決めろ」

和也「・・・わかった。着るよ」

そこまで言われちゃあ仕方ない
僕はチャイナドレスを持って隣の空き教室に着替えに行った

☆数分後☆

和也「・・・僕もうお婿にいけない・・・」

雄二「なぁに、貰い手ならいるさ。な、島田？」（ニヤリ）

美波「な、なんでウチに聞くのよ！！」

明久「なんでだろうね～」（ニヤニヤ）

秀吉「それよりさっさと働いてほしいのじゃ」

瑞&美&和「「はーい」」」

落ち込んでても仕方ないし働こう

？「君、注文いいかな？」

和也「あ、はい、どうぞ」

あれ？この人確か教頭の竹原先生だ

竹原「本格ウーロン茶と胡麻団子を」

和也「はい、かしこまりました。後ほどお持ちしますので、少々お待ち下さい」

竹原「それと聞きたいことがあるんだが、いいかね？」

和也「はい、なんでしょうか？」

竹原「このクラスに吉井という生徒がいると聞いたんだが、どの子かな？」

和也「吉井は僕ですけど・・・」

竹原「？おかしいな。男の子だと聞いていたんだが？」

和也「・・・こんな格好してますが、僕は男です」

竹原「・・・そうかい」

須川「おーい。すまないが茶葉がなくなったから持ってきてくれないか？」

和也「あ、はーい。先生、ちょっと行ってきてもいいですか？」

竹原「構わんよ。特に用があったわけではないのでね」

和也「？そうだったんですか？では、失礼します」

何で僕のこと尋ねてきたんだろう？

まあいいや。急がなくちゃ

僕はストックの置いてある空き教室へと向かった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＮＯ　ＳＩＤＥ

竹原「アレが吉井『明久』か」

教頭はケータイを取り出し通話を始める

竹原『私だ。標的が空き教室に向かった。チャイナドレスを着た奴

だ。好きにして構わん。召喚大会に出られないようにしてくれればそれでいい』

それだけ告げると教頭はケータイをしまい・・・

竹原「ククッ、吉井君。君に恨みはないが・・・私のために少々痛い目を見てもらおうか」

下品な笑みを浮かべながら、そう呟いた

第三十問　ブラコンの怒り大爆発

ＳＩＤＥ　和也

和也「えーと・・・これくらいで足りるかな？」

？「おい」

和也「ん？」

振り向くとそこには不良っぽい三人組の男が立っていた

和也「すいませんがここは立ち入り禁止なので出て行ってもらえますか？」

男Ａ「そうはいかねぇ。俺たちは吉井明久に用があるんでな」

兄さんに？どうしたんだろ？

兄さんまた何かやらかしたのかな？

男Ｂ「お前に恨みはねぇけど、ちょっとおとなしくしててくれや！」

そう言うと男が殴りかかって・・・って！

えぇ!?僕!?
とりあえず僕は攻撃をかわし、距離をとった
よし、落ち着いて状況を把握しよう

※兄さんに用がある

※僕を兄さんと勘違いしてる

この二点から考えられることは、恐らくこの人たちは兄さんと面識はない
なぜなら僕と兄さんは兄弟とはいえ血が繋がってないから似てない。
だから見間違いはありえない

そして今、男が言った言葉
『お前に恨みはねぇけど、ちょっとおとなしくしててくれや!』
恨みはないのに攻撃する必要がある・・・
それはつまり誰かに依頼されたってとこかな?

そして多分その人も兄さんの顔を知らない
知ってたら写真を見せるなり、特徴を教えるなりするはずですからね

・・・どうでもいいけど、この人たち情報漏らしすぎじゃない?

さて、状況はわかったけどどうしよう
『気』でわかったけどこの人たちはあまり強くない
倒すのは簡単だけど、そうすると・・・

☆パターンA☆

三人を倒す
←
騒ぎになる
←
生徒の安全に問題
←
瑞希さんの転校

・・・これはダメだ
じゃあ・・・

☆パターンB☆

三人に人違いだと伝える
←
三人は兄さんを探しに行く
←
兄さんが見つかり、やられる
←
生徒の安全に問題
←
瑞希さんの転校

これもダメだ
あれ？・・・解決策がない？

男A「何ぶつぶつ言ってんだ！オラァ！」

和也「！！」（ガシッ、ブンッ）

男A「グアァ」

あっ、急に殴りかかってきたもんだから
つい投げ飛ばしちゃった
大丈夫かな？
・・・他の二人も警戒し始めましたね
さて、どうしたものか・・・

（ガラッ）

明久「和也。ムッツリーニが餡子も・・・」

雄二「ん？なんだこいつらは？」

兄さんと雄二君！？
なんて最悪なタイミングで・・・
とにかく逃がさなくちゃ！
こいつらの狙いは兄さんなんだ

和也「兄さん！雄二君！逃げて！」

男B「なに余所見してんだよ！オラァ」

和也「！」（ヒラリ）

男C「くたばれ！」

和也「クッ」（ヒラリ）

なんとか二人の攻撃をかわした・・・が

男A「よくもやりやがったな！死ねぇ！！」

最初に投げ飛ばした奴がナイフを持って襲い掛かってきた

マズイ！反応が遅れた！

（ズバッ）

和也「痛ッ！！」

かわしきれなかった

ナイフは僕の左腕をかすった

破れたチャイナドレスの袖口から血が滲む

雄二「和也！大丈夫か！？おい明久！とにかくこいつらを・・・」

明久「・・・くも」

雄二「明久？」

明久「よくも僕の大事な弟を傷つけたな！！全員ぶち殺してやる！！」

雄二「・・・やれやれ。このブラコンが・・・」

☆数分後☆

男A&B&C「「「お、覚えてろよ！」」」

明久「逃がすか！待ちやがれ！」

雄二「待て明久。和也を保健室に運ぶのが先だ」

和也「大丈夫だよ。これ位」

明久「何言ってんのさ！ちゃんと治療しないとダメだよ！」

雄二「ああ。それにお前、そんな格好じゃ客の前に出れないだろ？」

和也「え？」

僕は自分の格好を確認する
チャイナドレスの左袖（長袖）の部分が大きく破け、白い生地が血で赤く染まっていた
確かにこれじゃあ接客はできない

明久「さ、保健室に行くよ」

和也「うん。わかったよ。あ、でも・・・」

雄二「茶葉と餡子は俺が持って行っていくから安心しろ」

和也「うん。ごめんね」

雄二「気にすんなって」

僕は兄さんに連れられて保健室へ向かった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

葉月「お兄ちゃん遅いです」

秀吉「そうじゃの。餡子を取りに行った明久達も帰ってこんし・・・」

美波「なにかあったのかしら？」

変なことに巻き込まれてなければいいけど・・・

瑞希「和也君、人気あるし・・・ナンパされてたりして・・・」

美波「！！」（ガッシャン）

秀吉「島田、動揺しすぎじゃ。あやつの性格ならクラスを放って遊びに行ったりはせんじゃろう」

美波「そ、そうよね」

康太「・・・本人の同意が必要とは限らない」

秀吉「どうゆうことじゃ？」

康太「・・・たとえば誘拐とか」

美波「！！！」（ガラガラ、ガッシャーン）

瑞希「み、美波ちゃん。落ち着いてください。土屋君も変なこと言わないでください」

康太「・・・すまない」

き、きっと大丈夫よね
いくらなんでも学園内で誘拐なんて・・・
（ガラッ）

雄二「おーい。持ってきたぞ」

戻ってきた。良かった・・・
・・・って、あれ？

秀吉「む？雄二、明久と和也はどうしたのじゃ？」

雄二「ああ、実は和也が他校生に襲われて怪我を・・・」

美波「なぁんですってぇ！！！！」

雄二「お、落ち着け、島田」

美波「落ち着けるわけないでしょ！それで和也はどこ！？」

雄二「保健室で・・・」

（ガラッ、バタン、ダダダダダッ）

雄二「治療を・・・ってもういねぇし・・・」

葉月「お姉ちゃん、速いです・・・」

瑞希「愛の力ですね」（キラキラ）

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

明久「失礼しまーす・・・って、あれ？」

和也「誰もいないみたいだね」

明久「まあいいや。とりあえず止血を・・・」

（ドドドドドドドッ）

明久「ん？地響きが・・・地震？」

和也「いや、違うみたいだけど・・・」

何の音だろう？

だんだん近づいてくる・・・

・・・！！この気配は！！

（ガラッ）

美波「和也！」

やっぱり美波さんだ

和也「どうしたの？」

美波「『どうしたの？』じゃないわよ！怪我したってホント・・・」

そこまで言って美波さんは僕の左腕を見る

袖がボロボロで血だらけ

見た目はかなり酷い

（ゴゴゴゴゴゴゴゴ）

な、なんだ！この戦闘力は！？

西村先生（鉄人）を軽く上回っている！？

美波「誰にやられたの？」

和也「え、えっと。不良っぽい男の三人組」

うわー、凄い殺気・・・
こ、恐い・・・

美波「よくも・・・」

和也「み、美波さん?ちょっと落ち着い・・・」

美波「よくもウチの和也を傷つけたわね!アキ!そいつらはどこにいるの!?顔がわからなくなるまで殴るわよ!!」

『ウチの和也』って・・・
いつの間に僕は美波さんの所有物に!?
でも・・・それも悪くな・・・って!今、僕はなにを!?

明久「そ、それが逃げられちゃって」

美波「逃がしたですって!?」

和也「み、美波さん。兄さんは追いかけようとしたんだけど、僕が怪我してたから、僕を保健室に運ぶことを優先したんだ。兄さんは悪くないよ。油断して怪我した僕のせいだ」

美波「そ、そうなの?じゃあ仕方ないわね」

殺気が治まっていく
よかった。落ち着いたみたいだ
それにしても僕の為にあんなに怒ってくれるなんて・・・
やっぱり優しいなぁ・・・

明久「じゃ、美波。和也の手当てしてあげてよ。僕は和也の着替えとってくるからさ」

美波「わかったわ」

和也「ありがとう兄さん」

そう言うと兄さんは保健室から出て行った

美波「さ、傷口見せなさい」

和也「あ、うん」

美波「思ったより傷が浅いわね。ここをこうして・・・」（テキパキ）

テキパキと治療してくれた
随分馴れた手つきですね？

和也「手馴れてるね？」

美波「よく葉月の怪我の手当てしてたからね。はい、おしまい」

いいお姉さんですね
気がつくと僕の左手には綺麗に包帯が巻かれていた

和也「ありがとう。美波さん」

美波「どういたしまして。・・・あ、そろそろ四回戦だけど、どうする?傷が痛むなら棄権したほうが・・・」

凄く心配そうな目でこっちを見ている
本当に優しいなぁ

和也「平気だよ。心配しないで」

美波「ならいいけど・・・それにしてもアキの奴遅いわね」

和也「いや、もう着てるよ。兄さん。いつまで隠れてんの?」

美波「へ?」

そう言うと気まずそうな顔して兄さんが入ってきた

美波「あ、アンタいつからそこに!?」

和也「『手馴れてるね』の辺りからかな?」

明久「いや～いい雰囲気だからキスぐらいするかと思・・・痛たたっ!やめて!僕の関節を増やさないで!」

全く兄さんは・・・
美波さんを怒らせる天才ですね・・・
でも・・・二人の仲の良さそうな姿を見ると羨ましい気がするのはなぜだろう?

美波「っと、そろそろ時間ね。アキの処刑は後にして・・・和也、早く着替えて」

和也「うん」

僕は兄さんが持ってきた中華喫茶の制服（ウェイターｖａｒ）に着替えて会場へと向かった
ちなみに兄さんはふらふらしながら教室に戻っていった

和也「次の対戦相手は・・・!!」

そうですか・・・
『この人』も出てたんですね・・・

第三十問　ブラコンの怒り大爆発（後書き）

今回も和也の見せ場はなかったですね
さて、次回の対戦相手は誰なんでしょうか！？

第三十一問　好きな人の為なら頑張れる（前書き）

原作とちょっと変更点があります

☆原作☆

４回戦
←
準決勝
←
☆翌日
決勝戦

☆この小説☆

４回戦
←
５回戦
←
☆翌日
準決勝
←
決勝

第三十一問　好きな人の為なら頑張れる

ＳＩＤＥ　美波

美波「いよいよ5回戦ね。そういえばさっき対戦表見てたわよね？次の対戦相手は誰だった？」

和也「えっとね・・・」

愛子「やっほー、和也君、島田さん」

佐藤「こ、こんにちは。和也君」

この人たちはたしか・・・Ａクラスの工藤さんと佐藤さんだったかしら

和也「ふふ、愛子さん。ここで遭えて嬉しいよ。このときを待ってたよ」

愛子「ん？ボクに遭いたかった？なんか照れちゃうな♪／／／」

ま、まさか。和也の好きな人は工藤さん！？

和也「そう！ずっと待ちわびてたんだ！メイド服を無理矢理着せら

れた恨みを晴らすこの時を!!」

・・・じゃないみたいね・・・

愛子「・・・えっと・・・もしかしてまだ怒ってる?」

和也「いえいえ、全然怒ってませんよ」（ニコニコ）

・・・目が笑ってない
アレはかなり怒ってるわね・・・
それにしても・・・

美波「工藤さんも参加してたのね。賞品狙い?」

愛子「ボクのことは愛子でいいよ。ボクは賞品には興味ないよ。美穂がペアチケットで誘いたい人がいるって言うから付き合ってるだけ」

美波「へぇ。佐藤さん、好きな人いるんだ」

佐藤「わ、私は・・・その・・・／／／」（チラ）

美波「!!」

佐藤さんは顔を赤くしながら『ある人物』を見た・・・

・・・そう・・・ウチのパートナー。吉井和也を・・・・

美波「和也」（ゴゴゴゴゴゴ）

和也「は、はい」（なんだろう?この威圧感は・・・）

美波「ウチが佐藤さんを殺るから、和也は愛子をよろしくね」

和也「字おかしくない!?それにこの試合の科目は古典で・・・」

美波「よ・ろ・し・く・ね」

和也「・・・はい」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

・・・美波さん、何であんなに殺気立ってるんだろう?

確か、美波さんの古典の点数は一桁のはず・・・

佐藤さんは試召戦争のとき、物理を選択してたから多分理数系だけど・・・

いくらなんでも勝てないだろう・・・

・・・仕方ない、愛子さんを倒してからフォローに行こう

先生「試合開始です！」

和&美&愛&佐「「「「試獣召喚！」」」」

召喚大会5回戦　古典

２－Ｆ　吉井和也　４１２点
&
２－Ｆ　島田美波　６１点

ＶＳ

２－Ａ　工藤愛子　２９１点
&
２－Ａ　佐藤美穂　２４３点

・・・あれ？

愛子「うそ！？島田さんは古典は一桁のはずじゃ・・・」

美波「Ｆクラスだからって舐めないでほしいわね！ウチだって頑張れば苦手科目でもこれくらいは取れるのよ！」

・・・苦手科目が２２点ですいません

佐藤「そ、それでも点数は私の方が上です！行きます！」

美波さん・・・大丈夫かな

愛子「よそ見してていいのかな！」（ブン）

和也「！！」（ヒラリ）

あ、危なかった・・・
愛子さんの武器、斧だから一撃のダメージ大きいんだよね・・・
・・・ていうか黙って攻撃すれば当たってたのに・・・

さて、斧の攻撃パターンは大きく分けて二種類
なぎ払うか振り下ろすか・・・
だったら・・・

愛子「行くよ！和也君！」

そう言って愛子さんの召喚獣は正面から突っ込んできた
これは予想通りだ
愛子さんの性格上、正面から力押しでくると思いましたよ
僕はギリギリまで召喚獣を引きつけて・・・
・・・！振り下ろしだ！
左へかわして・・・斬りつける

愛子「くっ」

工藤愛子　２９１点↓１５４点

これで約半分か・・・上出来だ
あとは・・・

愛子「いっけぇ！！」

・・・！なぎ払い！これを待ってた！
さっきと同じくギリギリまで引きつけて・・・

愛子「これなら横にはかわせないよ！」

そうだね。でも・・・

和也「よける場所は横だけとは限らないよ！『瞬間移動』」

僕はそう呟いて上空へと移動する

愛子「え？あ！」

僕の召喚獣が上にいるのに気付いたみたいだけどもう遅い
愛子さんの召喚獣は攻撃を空振ってバランスを崩しているため避けられない

愛子「きゃあ」

吉井和也　４１２点→２６２点

工藤愛子　１５４点→０点

和也「僕の勝ちだね」

愛子「うぅ・・悔しいなぁ。でもまだこっちには美穂がいるもんね」

おっとそうだった
早くフォローに・・・・

先生「勝者、吉井、島田ペア！」

和也＆愛子「「・・・・はい？」」

僕は二人の召喚獣を見る

島田美波　２点

佐藤美穂　０点

えええええええええ！？

美波さんどうやって勝ったの！？

相手の点数４倍位あったはずなんだけど・・・

愛子「嘘！？美穂負けたの！？」

佐藤「怖かった・・・怖かったよう・・・」（ガクガクブルブル）

美波さん・・・・

一体どんな戦い方をしたんですか？

佐藤さんの怯えようが尋常じゃないんですが・・・

美波「ふう、すっきりした。さあ和也。早く教室に戻りましょ」（ニッコリ）

和也「・・・はい」

ストレスでも溜まってるんですかね？

僕でよければ相談に乗りますよ？

和也「それにしても美波さん。いつの間に古典の点数あんなに上げたの？」

美波「ずっとコツコツやってたんだけど・・・大会に出ることが決まってからは死ぬ気で勉強したのよ。あんまり点数が低いと恥ずかしいもん」

美波さん頑張ってたんだなぁ
・・・それに比べて僕は・・・

和也「・・・美波さんはこんなに頑張ってんのに、僕は・・・何もせずに、挙句の果てに数学は２２点・・・」

美波「和也？」

和也「僕は最低なんです。クズなんです。生ゴミなんです」

美波「落ち着きなさい。ウチはそんなこと全然思ってないし、ウチが頑張れるのは和也がいるからなんだから・・・それに・・・」

和也「？」

美波「ウチは和也がこのままじゃ終わらないって信じてる！カッコイイところ見せてくれるって期待してるんだから！」（ニコッ）

和也「！」／／／

美波さんは笑顔でそう言ってくれた

・・・可愛・・・

・・・・・あれ？僕、今なんて？

美波「？なに突っ立ってんのよ？早く行くわよ」

和也「あ、うん」

僕たちは教室へと戻っていった

☆２－Ｆ中華喫茶『好吃』☆

和也「だいぶ持ち直してきたね」

美波「そうね」

瑞希「あ、和也君、美波ちゃん、おかえりなさい。試合、どうでしたか？」

美波「もちろん勝ってきたわよ！」

和也「美波さん、凄いんだよ！苦手科目の古典なのに、Ａクラスの佐藤さん相手に勝ったんだ」

葉月「お姉ちゃん凄いです！」

瑞希「和也くん。それは愛の力ですよ。美波ちゃんってば『和也のパートナーになる以上もっと・・・』むぐむぐ・・・」

美波「キャー！み、瑞希！何言ってんのよ！」／／／

美波さんが顔を真っ赤にしながら、何かを言いかけた瑞希さんの口を押さえている
どうしたんだろう？

秀吉「三人とも、喋ってないで早く働いてほしいのじゃ」

和也＆美波＆瑞希「「はーい」」

こうして僕たちは5回戦開始までホールで接客を続けた

☆数分後☆

雄二「おっ、和也と島田はそろそろ5回戦じゃないのか？ここはもういいからさっさと行け」

和也「あ、ホントだ。じゃあそろそろ行こうか」

美波「ところで次の対戦相手は誰なの？」

雄二「どれどれ、えーと・・・！！」

む？雄二君の顔色が変わった

雄二「和也、島田。絶対勝てよ！絶対だぞ！」

和也＆美波「「う、うん」」

・・・なんとなく対戦相手が誰なのかわかっちゃったな

・・・たぶん・・・

優子「やっときたわね！和也！美波！」

翔子「・・・遅い」

・・・やっぱり・・・

和也「二人とも、遅れてごめんね」（ペコリ）

優子「（クッ、可愛い）ま、まあいいわ。早速始めま・・・」

翔子「・・・待って」

美波「？どうしたのよ？」

翔子「・・・三人にお願いがある」

優子「え？三人？わたしも？」

翔子「（コクリ）・・・和也、私と一騎打ちで勝負して」

和也「・・・は？」

翔子「・・・今度こそ負けない」

美波「？和也が負け越してるんじゃなかったの？」

優子「そうよ。和也が１勝、代表が６勝。でも・・・代表の６勝は全て数点差の僅差。対する和也の１勝は４００点以上差をつけての圧勝。これまでの総得点では和也の方が上なのよ。無得点扱いの振り分け試験を除けばね」

翔子「・・・お願い」

優子「私はいいわよ。もともと賞品には興味ないし・・・和也と美波は？」

和也「えっと・・・」

正直言うと翔子さんと一騎打ちをしたい

負けっぱなしですからね

でも、美波さんもいることだし、私怨で動くわけには・・・

美波「ウチもいいわよ」

和也「え!?いいの?」

美波「戦いたいって顔に書いてるわよ。それに・・・カッコイイところ、見せてくれるんでしょ?」（パチ）

和也「／／／」

美波さんはそう言って僕にウインクした

・・・可愛い

和也「・・・わかった。受けてたつよ!」

翔子「・・・ありがとう。それから、高橋先生」

高橋「何ですか?」

翔子「・・・対戦科目の変更は可能ですか?」

高橋「両チームの了承があれば可能です」

和也「・・・数学とか言わないよね?」

翔子「・・・違う。立会いが高橋先生だから『アレ』で勝負してほしい」

和也「？・・・！！わかった。『アレ』だね？」

『アレ』で翔子さんに絶対勝つ自信なんてない
でも・・・
瑞希さんの転校を阻止する為・・・
そして・・・
期待してくれてる美波さんの為にも・・・
勝ちたい！

高橋「科目は何にしますか？」

和也＆翔子「「総合科目でお願いします」」

こうして５回戦は始まった

第三十一問　好きな人の為なら頑張れる（後書き）

佐藤さん再び登場！
しかしまたしても可哀想なポジションになってしまいました
佐藤さんファンの皆様すいません

次回、ついに和也が活躍！

第三十二問　学年主席対元次席（前書き）

最近良い話が思いつかない・・・
とりあえず更新です

第三十二問　学年主席対元次席

ＳＩＤＥ　美波

高橋「試合開始」

和也＆翔子「「試獣召喚！」」

学年主席と元次席の戦いが始まった
ちなみにウチと優子は邪魔になるのでステージの外にいる
二人の召喚獣が現れた
点数は・・・

２－Ｆ　吉井和也　５０８９点
ＶＳ
２－Ａ　霧島翔子　５１０３点

翔子の方がちょっと高いけどほぼ互角ね
てかこの二人、点数高すぎない！？

美波「・・・ねえ優子。Ａクラスの人ってみんなあんなに点数高いの？」

優子「・・・いいえ。私は３５００位だし、次席の久保君だって４

０００前後よ。この二人が規格外なのよ」

やっぱり和也って凄いのね・・・

優子「全く・・・この二人を見てると自信なくすわね・・・私なんかがＡクラスにいてもいいのか？ってね」

優子はそんなことを言いながら溜息をつく

美波「・・・それを言ったらウチなんて優子の半分位しかないんだから・・・」

優子「あら？思ったよりあるのね。それだけあったらＤかＣくらいには行けたんじゃない？どうしてＦクラスに？」

美波「振り分け試験の日はウチの点数は１０００点どころか５００そこそこしかなかった。でも和也と同じクラスになって、試召戦争で和也に何度も助けられて、和也の足を引っ張りたくない、強くなりたいって思って必死に勉強してきたの」

優子「う、嘘でしょ！？こんな短期間にそんなに成績を上げたっていうの！？・・・なるほど、愛の力ってわけね」

美波「・・・」／／／

優子「（・・・この二人、やっぱりお似合いね）」

美波「？何か言った？」

優子「なんでもないわ。頑張ってね。応援してるわ」

美波「あ、ありがと」／／／

優子「あ、決着ついたみたいよ」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

点差はほぼ互角か・・・

さて、どうやって戦おうかな？

翔子さんは最初は無茶はせずに慎重に様子見から入るだろう・・・

多分、僕も同じ作戦でくると思ってるはず

なら・・・

和也「行きますよ！」

翔子「！！」

裏をかいて先手必勝！

僕は正面から突撃したのが予想外だったようで、翔子さんはかなり

驚いてた
最初の一撃は受け止められたものの、鍔迫り合いになったところに
即座に蹴りをいれ、体勢を崩したところに一撃を振り下ろした

２－Ｆ　吉井和也　５０８９点
ＶＳ
２－Ａ　霧島翔子　２４３５点

半分位減ったか・・・
なら・・・

和也「もう一丁！」

間髪いれずにもう一度突撃するが・・・

翔子「・・・甘い」

さすがに通用しなかった
僕の攻撃はかわされ、カウンターを受けてしまった
翔子さんが追撃しようとしてるのが見える
僕は振り下ろされる刀を受け止め、召喚獣を蹴り飛ばし、距離をとった

２－Ｆ　吉井和也　１９５４点
ＶＳ
２－Ａ　霧島翔子　１７３０点

結構ダメージ大きいなぁ
ちょっと無茶しすぎだったかな？
流石にもう通じないか・・・
だったら・・・

和也「まだまだ！」

もう一度正面から突撃する

翔子「・・・何回やっても同じ」

僕は振り上げた武器を・・・・
・・・振り下ろさなかった

翔子「・・・え？」

翔子さんの召喚獣は僕の攻撃を回避する為に左に飛んでいる
僕はそれに向かって武器を振り下ろす

翔子「・・・くっ！」

だが、翔子さんも甘くない
すぐに体勢を立て直し、僕の召喚獣に向かって刀を振りぬく
互いに防御を捨て、打ち合う形になった。
結果は・・・・

２－Ｆ　吉井和也　９５点
ＶＳ
２－Ａ　霧島翔子　０点

僕の勝ちだ

高橋「勝者、吉井和也！」

和也「やったっ！」

僕は両手を挙げて喜ぶ

美波＆優子＆観客達（（（か、可愛い！））））

なにか聞こえた気がするけど気にしない

翔子「・・・今回は私の負け。次は負けない」

和也「僕だって負けませんよ」

そんなことを言いながらお互い笑いあう

美波「和也！」（ギュ）

美波さんがこっちに走ってきて僕に抱きついて・・・

・・・って！！

美波「凄いよ和也！凄く格好よかったよ！」

かなり興奮してるようだ

和也「み、美波さん。その・・・流石に恥ずかしいからそろそろ離れてもらえる？」

美波「え？あ！」

美波さんも気付いたようだ

そう。今の状況は・・・
僕に抱きついてる美波さん
それをニコニコしながら眺めてる翔子さんと優子さん
そして周りには一般客を含む無数の観客
あ、恥ずかしくなったのか
美波さんの顔が少しずつ赤くなって・・・

美波「きゃあああああ」（ダッ）

顔を完熟トマトみたいに真っ赤にして、美波さんは走り去ってしまった

和也「じゃ、美波さんを追いかけないといけないので失礼します」

翔子「・・・わかった」

優子「明日の準決勝、頑張ってね。代表に勝っておいて、あっさり負けたりしたら、許さないわよ」

和也「は～い」

そう言って僕は会場を後にした
さて、美波さんはどこかな?

明久「和也」

和也「あ、兄さん、雄二君そっちはどうだった？」

雄二「ああ、なんとか勝った。それよりさっき島田が、顔を真っ赤にして蒸気機関車みたいに煙を出しながら凄いスピードで走っていったが・・・何かあったのか？」

和也「えっとね・・・」

☆事情説明中☆

雄二「なるほどな。ま、教室に戻っているだろ」

和也「そうだね・・・ん？」

あれは・・・康太君？
どうしたんだろ？

康太「・・・雄二」

雄二「どうした？何かあったのか？」

康太「・・・ウェイトレスが連れて行かれた」

明久「えぇ！？瑞希ちゃんたちが！？」

和也「一体誰が！？」

康太「・・・不良っぽい男の三人組だった」

雄二「それって和也を襲った奴らじゃないか！？」

明久「今度こそぶっ殺す！！」

康太「・・・行き先ならわかる。いざという時のために姫路に発信機を持たせておいた。盗聴もできる」

なんでそんなもの持ってるんですか！？
ってか、最後のは必要ないのでは？

和也「雄二君、早く助けに行こう」

雄二「ああ」

僕達はみんなが捕まっているカラオケボックスへと向かった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

・・・なんでこんなことに・・・
ウチらは今、不良っぽい男に捕まっている
教室に戻ったら葉月が人質に捕られててとなしくついて行くしかなかった・・・
逃げようにもみんな後ろで両手を縛られてて逃げられない

不良A「こいつら人質にして坂本と吉井ってやつを呼び出すのか？」

不良B「ああ、今度は間違えるなよ」

不良C「間違ったのは俺らじゃねえけどな」

不良A「で？こいつらはヤっちゃっていいの？じゃあ俺この巨乳ちゃんがいいなぁ」

瑞希「ひっ！さ、触らないでください！」

不良B「怯えちゃってかわいいねぇ」

不良C「じゃ、俺はこっちのペッタンコの姉ちゃんを・・・」

美波「気安く触るんじゃないわよ！」

不良B「お～怖っ！お前は俺らが怖くないわけ？」

美波「全然怖くないわよ！だって和也が助けに来てくれるもん」

和也はウチに言ってくれた

ウチが困ったときは助けてくれるって
だからちっとも怖くなんかない！

不良Ａ「和也？どっかで聞いたような・・・」

不良Ｃ「アイツじゃね？ほら、お前が吉井明久と間違えて斬りつけた奴」

美波「！」

・・・不良っぽい三人組・・・
そっか・・こいつらが和也を・・・

美波「・・・くも」

不良Ａ「あん？」

美波「よくも！」（ドゴッ）

不良Ａ「ぐあああああ」

ウチは和也を斬りつけた奴の股間を全力で蹴り上げた

美波「よくも和也を傷つけたわね！アンタ達、絶対に許さないんだから！」

不良Ｂ「てめえ！なにしやがる！」（バキッ）

美波「きゃあっ！」

不良の一人に殴り飛ばされ、激しい痛みとともにウチは意識を手放した

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

雄二「どうだ？ムッツリーニ？」

康太「・・・ダメだ。鍵がかけられてる。入れない」

雄二「ちっ、どうするかな」

僕達は今、美波さんたちが捕まってる部屋の近くにいる

だが、鍵がかけられてて中に入れない

そんなことを考えてると康太君に渡された受信機から声が聞こえた

不良Ａ『で？こいつらはヤっちゃっていいの？じゃあ俺この巨乳ちゃんがいいなぁ』

瑞希『ひっ！さ、触らないでください！』

不良Ｂ『怯えちゃってかわいいねぇ』

明久「あいつら！」

雄二「待て、明久。むやみに動けばかえって危険だ」

明久「くっ」

兄さん・・・気持ちはわかるよ・・・

不良Ｃ『じゃ、俺はこっちのペッタンコの姉ちゃんを・・・』

美波『気安く触るんじゃないわよ！』

不良Ｂ『お～怖っ！お前は俺らが怖くないわけ？』

美波『全然怖くないわよ！だって和也が助けに来てくれるもん』

和也「！！」

・・・もしかしてＢクラス戦の時に僕が言った言葉を信じて・・・

不良A『和也?どっかで聞いたような・・・』

不良C『アイツじゃね?お前が吉井明久と間違えて斬りつけた奴』

美波『・・・くも』

不良A『あん?』

美波『よくも!』(ドゴッ)

不良A『ぐあああああ』

美波『よくも和也を傷つけたわね!アンタ達、絶対に許さないんだから!』

・・・美波さん・・・僕のためにあんなに怒って・・・

和也「雄二君、僕、行ってくるよ」

雄二「し、しかしだな」

まだ止めようとする雄二君

でも、僕はそろそろ我慢の限界だ

雄二君の考えもわかるけど、こんな会話を聞いて黙ってるわけには・・・

不良B『てめえ！なにしやがる！』（バキッ）

美波『きゃあっ！』

・・・

第三十二問　学年主席対元次席（後書き）

戦闘がいまいちうまく描けませんでした
次回、ついに和也がマジギレします

第三十三問　普段大人しい人ほどキレると怖い（前書き）

なんか文脈がおかしい気がする・・・・
とりあえず更新です

第三十三問　普段大人しい人ほどキレると怖い

ＳＩＤＥ　雄二

さて、どうする？
俺の作戦ではムッツリーニを店員に変装させて潜入し、隙を見てみんなを助け出すつもりだったが・・・
鍵をかけられてはどうしようもない

不良Ｂ『てめえ！なにしやがる！』（バキッ）

美波『きゃあっ！』

！女を殴るとは・・・とんでもねえ下衆やろ・・・

（ベキッ）

？何の音だ？
ん？声が聞こえなくなったぞ？

（ガタガタ）

？明久とムッツリーニが何かを見て抱き合いながら震えてる
何見てんだ？
その視線の先には・・・

雄二「か、和也・・・？」

受信機を素手で握りつぶし、青筋立てて怒ってる和也がいた
和也は静かに立ち上がり、みんなが捕まってる部屋に・・・って！

雄二「おい、和也！ちょっと待・・・」

俺は慌てて止めに入ったが・・・

和也「どけ」

普段の和也からは考えられないような冷たい言葉
ダメだ・・逆らえない・・・
逆らえば殺される
直感的にそう思った俺はそれ以上何も言えずにドアを蹴り破って入っていく和也を見ていることしかできなかった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　瑞希

不良B「てめえ！なにしやがる！」（バキッ）

美波「きゃあっ！」

葉月「お姉ちゃん！」

瑞希「美波ちゃん！しっかりしてください！」

秀吉「お主ら、無抵抗の女子を殴るとは・・・男として恥ずかしいと思わぬのか！！」

美波ちゃんが三人組の一人に殴られてしまいました
頭を強く打ったみたいで気を失ってます

不良C「おい、こいつ、素っ裸にして和也君とやらの前に引きずり出してやろうぜ」

不良A「ギャハハ、そりゃいいや。どんな反応するか楽しみだな」

瑞希「や、やめてください！」

秀吉「お、お主ら！こんなことしてただで済むと思っておるのか！」

不良B「慌てなくてもこいつが終わったら次はお前らだ。じっくり可愛がってやるよ」

三人が下品な笑みを浮かべながら美波ちゃんの服に手をかけたその時

（ズガーン）

ドアが・・・飛びました・・・
『開いた』じゃありません・・・『飛んだ』です
そして入り口には・・・

瑞希「か、和也くん？」

青筋立てて三人を睨みつけてる和也君が立っていました

和也「・・・」（ドカッ、バキッ）

不良A＆C「「ぐあっ」」

和也君はものすごい速さで美波ちゃんの服を掴んでる男を殴り飛ばし、さらに近くにいた男の顔面に回し蹴りを決め、一瞬で二人を倒しました
そして残りの一人の方を睨みつけ・・・

不良B「ひっ、ま、待ってくれ！俺は・・・」

和也「！その声・・・ソウカ、オマエダナ？ミナミヲ、ナグッタノハ」

不良B「わ、悪かった！もう二度としな・・・（バキッ）グハッ」

和也「ユルサナイ、ヨクモヨクモヨクモヨクモオォォ！」（バキッバキッバキッバキッバキッ）

不良B「ぐふっ・・・やめ・・・・ゆるし・・・」

和也「ヨクモヨクモヨクモヨクモヨクモヨクモヨクモヨクモ」（バキッバキッバキッバキッバキッバキッバキッバキッバキッバキッ）

和也君は殴りすぎて手の皮が破け、拳から血が流れてますが、それでも殴るのをやめません

雄二「よせ！和也！」

明久「これ以上殴ったら死んじゃうよ！」

明久君と坂本君がどこからか飛び出してきて二人がかりで和也君を押さえ込みます

和也「ドケ！ジャマヲスルナ！コロス、コイツダケハユルサナイ。ゼッタイコロス」

雄二「お前の気持ちはわかる。だがこいつはババアのところに突き出して黒幕の正体を吐かせなければいけない。黒幕が捕まらない限りまた同じように島田やみんなが連れて行かれるかもしれないんだ。

そんなのは嫌だろ？」

和也「・・・」（コクリ）

雄二「だったら悔しいだろうが今回は我慢してくれ」

和也「・・・わかった」

落ち着いたみたいですね。よかった
相変わらず坂本君は交渉がうまいですね

雄二「じゃあお前はみんなを連れて学校に戻ってくれ。こっちは俺らでやっとくから」

和也「うん。さっきは酷いこと言ってごめんね」

雄二「気にすんなって」

そう言うと和也君は美波ちゃんに近づき、様子を見て・・・

和也「・・・よかった・・・気を失ってるだけだ・・・」

葉月「よかったです」

和也「葉月ちゃん、怖がらせてごめんね」

葉月「平気です。お姉ちゃんの為に怒ってくれて嬉しかったです」

和也「二人もごめんね」

秀吉「気にするでない」

瑞希「私も驚きましたけど平気です」

驚きすぎて恐怖心はどこかに消えていました

和也「じゃ、あとはよろしくね。兄さん、雄二君、康太君」

？土屋君？どこにいるんでしょう？

・・・！あ、あれ？縄が解けてる

後ろを向くとみんなの縄を解いてる土屋君がいました

秀吉「む？ムッツリーニ？いつの間に・・・」

その後、私たちは（美波ちゃんは和也君が背負って）学校へ戻りました

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

美波「う・・・んん・・・」

・・・ここ・・・どこ？
たしかあの不良に殴られて・・・

葉月「お姉ちゃん！」

瑞希「気がついたんですね。よかったです」

美波「葉月・・・瑞希・・・！！あいつらは！？」

瑞希「大丈夫です。和也君がやっつけてくれました」

美波「和也が？」

（ガラッ）

和也「失礼し・・・！美波さん！気がついたんだ！大丈夫？痛くない？」

入ってきた和也はウチを心配そうに見て・・・
・・・！

美波「和也！その手！」

和也「あ、こ、これは・・・その・・・」

美波「誰にやられたの！？あいつらね！？今度こそボコボコにしてやるわ！」

和也「あ、いや・・・これは自業自得で・・・」

葉月「お兄ちゃん、お姉ちゃんが倒れてるのを見て凄く怒って、悪いお兄ちゃんを手がボロボロになるまでずっと殴り続けてたです」

瑞希「あんなに怒った和也君ははじめて見ました」

美波「！ウチの為に怒ってくれたの？」

和也「・・・うん」

・・・嬉しいな／／／

美波「和也。ありがとう」（ニコッ）

和也「う、うん」／／／

美波「じゃ、治療するから手をだしなさい」

和也「いや、これ位平気で・・・」

美波「だ・し・な・さ・い」

和也「・・・はい」

全く・・・無茶して・・・
・・・でも・・・
約束通り助けに来てくれたんだ・・・

和也「美波さん、大丈夫だった?怖くなかった?」

美波「全然平気よ!だって和也が助けに来てくれるって信じてたもん」

和也「美波さん・・・」

瑞希「(私たち完全に忘れられてますよね?)」

葉月「(二人の空間です~)」

美波「・・・はい!終わったわよ」

和也「ありがとう」

(ｐｉｐｉｐｉ)

和也「?僕の携帯だね・・・兄さんからだ」

メールを確認する和也

和也「学園長と話をするらしいから僕も行ってくるね」

美波「あ、ウチも・・・」（フラフラ）

和也「あ、危ないよ。横になってたほうがいいよ」

まだ少しふらつく・・・

学園長の話は気になるけどこれ以上和也に心配かけたくないし・・・

美波「・・・わかった。休んでおくわ。後で話聞かせてね」

和也「うん。わかった」

そう言って和也は保健室から出て行った

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

教室に行くと、兄さんと雄二君が待っていた
学園長はまだ来てないみたいだ

和也「兄さん、雄二君」

雄二「お、来たな」

明久「美波の様子はどうだった？」

和也「さっき目を覚ましたよ。大丈夫みたい」

明久「そう、よかったね」

和也「うん。ところで雄二君。学園長がここへ来るの？」

雄二「ああ、俺が呼び出した」

明久「ダメだよ雄二。一応目上の人だし、用事があるなら出向かないと」

雄二「用事もクソも・・・この妨害の原因があのババァにあるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん」

明久「ババァに原因が・・・えええっ！？」

・・・なんだと？

明久「あ、あのババァ！僕らに何か隠してたのか！」

学園長「やれやれ、わざわざきてやっ・・・」

和也「貴様の仕業かぁぁぁぁ！！！！」

明久「だ、ダメだよ！和也！」

雄二「落ち着け！ババァは黒幕じゃない！」

和也「・・・・え？」

学園長「な、なにがあったのさね？」

☆事情説明中☆

学園長「そうかい、向こうはそこまで手段を選ばなかったか・・・すまなかったね」

そう言って学園長は頭を下げてきた

兄さんたちと事前に何かの取引をしてたみたいだけど一体何を・・・

学園長「おそらく一連の手引きは教頭の竹原によるものだよ。近隣の私立校に出入りしてたって話も聞くし、まず間違いないさね」

・・・・教頭・・・・・・そうか・・・全部アイツの仕業か・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・コロス

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　明久

学園長「そうかい、向こうはそこまで手段を選ばなかったか・・・
すまなかったね」

そう言って学園長は頭を下げてきた
年下の僕らにきちんと頭を下げれるなんて意外と責任感の強い人なのかもしれない

学園長「おそらく一連の手引きは教頭の竹原によるものだよ。近隣の私立校に出入りしてたって話も聞くし、まず間違いないさね」

黒幕は教頭先生だったのか・・・
・・・って！マズイ！
今、ここには和也がいるんだ！
和也の前で黒幕の正体を明かしたりしたら・・・・

雄二「ば、ババァ！今、その話はマズイ！」

雄二も同じことに気付いたらしい

明久「か、和也！落ち着い・・・」

振り向くとそこにはもう和也の姿はなかった・・・

雄二「くそっ！やばいぞ！あいつ絶対に教頭を殺す気だ！」

明久「は、早く止めに行かないと！」

雄二「ああ！ババァ！あいつに連絡しろ！キレた和也を止められるのはあいつしかいねぇ！」

学園長「わ、わかったさね」

雄二「頼む！明久！行くぞ！」

明久「うん！」

僕はケータイを持って教室を出た

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

もうすぐ教頭室に着く
階段を降りるとそこには・・・・

鉄人「話は学園長から聞いた。だが、俺は教師としてお前を行かせる訳にはいかん！」

西村先生が立っていた

和也「どけ」

鉄人「それはできん」

和也「そこをどけ！！邪魔をするなぁぁぁぁ！！！」

僕は叫びながら西村先生に立ち向かっていった

第三十三問　普段大人しい人ほどキレると怖い（後書き）

なんか中途半端になりました
次回、ショタ娘ＶＳ鉄人

第三十四問　ショタ娘ＶＳ鉄人（前書き）

なんかびみょー
とりあえず更新です

第三十四問　ショタ娘ＶＳ鉄人

ＳＩＤＥ　鉄人

清涼祭一日目が終了し、生徒が下校し始めたころ
俺は学園長の指示で暴走した吉井和也を止める為戦っていた

和也「・・・」（バシッ、バシッ、バシッ！）

鉄人「くっ！！」

つ、強い
去年、組み手をしたときとは比べ物にならん強さだ

生徒Ａ「な、なんだアイツ！？」

生徒Ｂ「鉄人相手に互角にやりあってるぞ！」

・・・互角・・・か・・・
・・・違うな・・・
情けない話だが、俺はこいつの攻撃を受け止めるので精一杯だ
反撃できない。する余裕がない
だが！

鉄人「お前を通すわけにはいかん！生徒が間違った道に行こうとしているなら、正しい道へと導く。それが俺の仕事だからな！」

俺は強引に反撃に移る
握り締めた拳を吉井弟に向かって全力で打ち込んだ・・・・が

和也「・・・」（ヒュ、ドスッ、ズガーン）

鉄人「グハ！」

俺の攻撃はかわされ、そのままカウンターで回し蹴りをくらってしまった

生徒Ａ「う、嘘だろ！？」

生徒Ｂ「あ、あいつ。鉄人に勝ったぞ！？」

まだ残っていた生徒がそんなことを言っているが
吉井弟はそいつらに見向きもせずに教頭室のほうへ行こうとする

鉄人「ま、待て！」

いかん！止めなければ！
俺が身体の痛みをこらえつつ吉井弟の方へ向かおうとしたその時

？「和也！」

一人の生徒の声が聞こえた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

和也「・・・」（ヒュ、ドスッ、ズガーン）

鉄人「グハ！」

僕は西村先生にカウンターを決めた

生徒Ａ「う、嘘だろ！？」

生徒Ｂ「あ、あいつ。鉄人に勝ったぞ！？」

誰かが周りで何か言ってるけど
そんなことはどうでもいい

もうすぐ教頭室だ
待ってろよ教頭
すぐに息の根を止めてやる！

鉄人「ま、待て！」

全力で蹴りこんだのにまだ意識があったか・・・
さすが西村先生
でも今は構ってる暇はない
西村先生を無視し、教頭室へ向かおうとしたその時

？「和也！」

誰かの声が聞こえる
・・・この声、この気配は・・・
振り向くとそこには・・・

和也「・・・美波さん」

チャイナドレスを着たポニーテールの少女
島田美波が立っていた

美波「アキから話は聞いたわ」

和也「・・・そう・・・」

美波「もうやめて！そんなことしたら和也は・・・」

和也「運が良くて退学。悪ければ刑務所だね」

美波「だったら・・」

和也「でも！・・・それでも美波さんやみんなを傷つけたアイツを僕は許せないんだ。・・・いままでありがとう。さようなら」

僕はそう言って再び教頭室のほうへ歩きだし・・・

美波「イヤ！」（ギュッ）

和也「え！？」

美波さんが僕にしがみついてきた

美波「イヤよ！そんなの絶対イヤ！和也がいなくなったらウチはどうしたらいいの！？」

和也「どうって・・・大丈夫。兄さんや瑞希さん、みんながいるんだかｒ・・・」

美波「和也がいなきゃダメなの！ウチは誰に何されたって和也が傍にいてくれれば平気！でも、和也がいなくなるなんてそんなの・・・それだけは絶対にイヤ！」

和也「美波さん・・・」

美波「・・・えっく・・・うわあああん」

そう言って美波さんは座り込んで泣き出してしまった

・・・僕は・・・なにをしてるんだ

教頭は確かに許せない

殴り殺したいくらい憎い

・・・でも・・・本当にそれでいいのか？

美波さんを・・・大切な人を泣かせてまでやることなのか？

和也「・・・わかったよ、美波さん。もうやめる」

美波「・・・ほんと？」

和也「うん。もうどこにも行かない。傍にいる。だからもう泣かないで」

美波「・・・えっく・・・うん」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＮＯ　ＳＩＤＥ

明久「もう大丈夫そうだね」

雄二「そうだな。おっ、外のベンチの方へ移動したぞ。どうする？」

明久「そっとしとこうよ」

雄二「そうだな。じゃ、俺らはババアのところに戻って話を聞くか」

明久「ん、了解」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

和也「・・・」

美波「・・・」

和也「さ、さてと」（スクッ）

美波「！」（ガシッ）

和也「・・・美波さん。もう暴れたりしないよ」

美波「・・・」（ギュ）

信頼ないなぁ
まぁ、自業自得だし、仕方ないか

和也「じゃあ美波さんも一緒に行こう」

美波「・・・どこに？」

和也「教室。学園長の話の途中だったからね」

美波「・・・わかった」

僕は美波さんと手を繋いで（掴まれて）教室へ戻った

☆２－Ｆ教室☆

明久「あ、やっと戻ってきた」

和也「あれ？学園長は？」

雄二「もう帰ったぞ。お前らには今から俺らが知ってる情報について全て話す」

☆事情説明中☆

和也「つまり兄さんと雄二君は賞品になってる欠陥のあった腕輪を回収する為に動いてて・・・」

美波「教頭先生はその不具合を公にして学園を潰そうとしているってこと？」

和也「・・・それってかなりやばくない？」

雄二「ああ、学園の存続が懸かってる話になる」

和也「腕輪が兄さんにしか使えないことはわかったけど、腕輪って優勝者と準優勝者の分で４つあるんだよね？」

雄二「ああ、それは大丈夫だ。欠陥があるのは『白金の腕輪』の同時召喚用だけだから俺らが決勝まで行ってババアが明久にそれを渡せばそれで済む」

なるほど、それでポスターに腕輪の詳細について何も書いてなかったんだね

美波「そっか。だから喫茶店の妨害とか、ウチらや和也が狙われたりしたのね」

雄二「そうだ。ま、和也は明久と間違えられたようだがな」

和也「でもどうするの？準決勝。勝てそうなの？」

雄二「相手は三年生らしいが・・・まあ何とかするさ。それよりお前らの方が問題だ」

美波「え？」

和也「どういうこと？」

雄二「お前らの次の対戦相手だが・・・」

明久「・・・常夏コンビ」

トーナメント表を見ながら兄さんがそう呟く

雄二「あいつらは教頭側の人間だ。もし決勝まできたらかなり厄介なことになる。例えば・・・白金の腕輪を奪い取って無理矢理暴走を起こすとかな」

和也「そっか・・・じゃあ僕たちが勝つしかないんだね」

雄二「最悪の場合、俺が警戒するが・・・教頭が余計なことを言う可能性もあるからな」

明久「ま、大丈夫でしょ」

雄二「そうだな」

和也「二人とも随分楽観的だね」

美波「そうよ！もし、ウチらが負けたら・・・」

そこまで言ったところで兄さんがトーナメント表を見せてくる・・・！！

和也＆美波「「なんとかなりそうだね（ね）」」

明久「そういうこと。じゃ、そろそろ帰ろうよ」

和也「あ、兄さんは先に帰ってて。僕はちょっと行くところが・・・」

美波「！！」（ガシッ）

和也「だから違うって。僕が行くのは西村先生のところで・・・」

雄二「鉄人？ああ、さっきの件か」

和也「うん。謝りに行かないと」

美波「ウチも行く」

和也「え？でも・・・」

美波「いいから！」（ズルズル）

和也「み、美波さん。わかったから、引っ張らないで」

☆職員室☆

今この場には僕と美波さん、西村先生と高橋先生がいる

和也「すいませんでした！」

高橋「全く・・・教師に暴力行為を行うなんて・・・」

鉄人「・・・」

高橋「あなたの処分については後ほど・・・」

美波「ま、待ってください！和也はウチのためにやってくれたんです！ですからお願いします！許してください！」

高橋「し、しかしですね」

美波さんが泣きながら謝り、高橋先生がうろたえている

和也「美波さん、ありがとう。でももういいよ。全部僕が悪いんだし、どんな処分でも・・・」

鉄人「高橋先生もお前らも何を言っとるんだ？」

和也＆美波＆高橋「「「え？」」」

鉄人「高橋先生、暴力行為なんてありませんよ。俺は吉井弟と組み手をしていただけですから」

高橋「・・・そうですか。わかりました。では二人とも、もう行っていいですよ」

和也「え?あの・・・」

鉄人「（吉井。もう泣かせるんじゃないぞ）」

西村先生は僕の耳元でそう囁いた

和也「は、はい！失礼します！」

僕は美波さんの手を引いて職員室を出た
そしてその後、僕は・・・

職員室から出る
←
すると美波さんを探してる葉月ちゃんと瑞希さんがいた
←
僕と泣いてる美波さんを目撃
←
Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩスタート

葉月＆瑞希「「全く・・・美波ちゃん（お姉ちゃん）を泣かせて・・・ガミガミクドクド」」

二人のお説教は二時間続きました

第三十四問　ショタ娘ＶＳ鉄人（後書き）

最後がうまくまとまらなかった

第三十五問　島田姉妹のお泊り（前書き）

間が空いてしまいました
どうも最近うまく話がまとまらない

第三十五問　島田姉妹のお泊り

ＳＩＤＥ　和也

帰り道、僕の隣には美波さんが、兄さんの両サイドには瑞希さんと葉月ちゃんが並んで歩いている
あんなことがあった後なので僕らが二人を送ることになった
ちなみに秀吉君は康太君が連れて帰った
雄二君は翔子さんに連れて行かれた

明久「ところで和也、その怪我じゃ料理できないよね？今日は僕が作ろうか？」

美波「！」（ピクッ）

兄さんが僕の怪我を気遣ってくれてる
まあ、利き腕は無事だし問題ないよね
でもなんで美波さんが反応するんだろう？

和也「大丈夫だと思・・・・」

美波「あ、あのさ。良かったらウチが作ってあげようか？」

和也「え？でも、わざわざ悪いよ」

美波「いいのよ。そもそもその怪我だってウチの為に負ったものなんだから。それともなに?ウチの手料理なんて不味くて食えないとでも言いたいの?」

和也「ち、違うよ。美波さんの料理はとっても美味しいよ」

美波「じゃ、決まりね。葉月、和也とアk・・・バカなお兄ちゃんと一緒にご飯食べるわよ」

葉月「本当ですか?わーいです」

明久「ちょっと待って美波!なんで僕の名前言いかけてわざわざ言い直したの!?」

葉月「綺麗なお姉ちゃんも一緒に食べるです」

葉月ちゃんが瑞希さんに声を掛ける・・・って
あ、こ、これはマズイ

瑞希さんも来る
←
美波さんを手伝おうとする
←
瑞希さんが料理に参加
←
食物兵器完成

どうしよう・・・
でも、瑞希さん一人除け者にするわけにもいかないし・・・

瑞希「残念ですけど私はこれから家族で外食に出かけることになってるんです」

明久「そうなんだ・・残念だね」

た、助かった

和也「じゃあ、買出しに行かなくちゃ。兄さんは瑞希さんを送ってあげてね」

明久「ん、了解」

和也「じゃ、行こうか。美波さん、葉月ちゃん」

葉月「葉月はバカなお兄ちゃんについていくです」

和也「ん?まぁ買出しについてきても退屈だろうし・・・いいかな兄さん?」

明久「・・・!うん。じゃあ、行こうか?瑞希ちゃん、葉月ちゃん」
（ニヤニヤ）

瑞希「はい」（ニヤニヤ）

？

なんでみんなニヤニヤしてんだろう？

葉月「お姉ちゃん、頑張ってです！」

美波「は、葉月！／／／」

？

買出しで何を頑張るんだろう？

そしてなんで美波さんは顔を真っ赤にしてるんだろう？

そんなことを考えている内に三人は去っていった

和也「じゃ、行こうか？スーパーでいいよね？」

美波「う、うん／／／」

僕達は二人でスーパーに向かった

和也「ところで何を作るの？」

美波「そうねえ・・・和也は何を食べたい？」

ん～なんでもいいんだけど・・・
作る人にとっては『なんでもいい』が一番困るんだよね
だったら・・・

和也「そうだなぁ。美波さんの一番得意な料理を食べてみたいな」

美波「そ、そう?じゃあ、ハンバーグね」

和也「!!」

ハンバーグ・・・
実は大好物なんだよね
楽しみだなぁ

美波「・・・和也、ひょっとしてハンバーグ好きなの?」

和也「!!なんでわかったの!?」

美波「いや、だって・・・目が輝いてたし・・・」

顔に出てましたか・・・
恥ずかしいなぁ
子供っぽいとか思われたかな?

美波「(そっか、ハンバーグが好きなんだ・・・覚えとこ)」

？

何ぶつぶつ言ってんだろう？

その後僕達はハンバーグとサラダ４人分の材料を買って帰宅した

和也「ただいま」

美波「お邪魔します」

明久＆葉月「おかえり」

美波「さて、さっそく作ろうかしら」

明久「僕も手伝うよ」

美波「そう？じゃ、サラダお願い」

明久「了解」

和也「じゃあ、僕も・・・」

美波＆明久「「怪我人はおとなしくしてなさい」」

和也「・・・はい」

むぅ・・・これ位平気なのに・・・

葉月「お兄ちゃん、宿題でわからないところがあるから教えてほしいです」

和也「ん？いいよ。どこ？」

美波「和也、大丈夫？」

和也「？なにが？」

美波「だって・・・葉月の宿題・・・算数よ？」

和也「失礼な！いくら数学が苦手でも小学生の問題位解けるよ！」

美波「冗談よ。じゃ、よろしくね」

そう言って美波さんと兄さんは台所へ向かった

こうしてみるとなんか仲の良い夫婦みたいですね・・・

・・・羨まし・・・

ん？いま僕は何を・・・

葉月「お兄ちゃん？」

っと、葉月ちゃんの勉強を見てあげなくちゃ・・

ついでに僕も勉強しよっと

☆数分後☆

和&明&美&葉「「「「いただきます」」」」

和也「！これ、凄く美味しいよ！」

明久「うん、美味しい」

美波「ありがと。ハンバーグはドイツにいた頃から作ってたから得意なのよ」

そういえばハンバーグの発祥の地はドイツでしたね

美波「ねえ和也。これ食べ終わったらちょっと勉強教えてほしいんだけど」

和也「ん？いいけどなんで・・・あ！もしかして明日の・・・」

美波「そ、ここまできたら勝ちたいじゃない。それにあの変態コンビには絶対負けられないしね」

和也「・・・常夏先輩との試合なんだけど、ちょっとやりたいことがあるんだ」

美波「へぇ、どんな？」

和也「えっとね、美波さん次第なんだけど・・・ごにょごにょ」

美波「・・・ぷっ、あはは、いいわね、それ。最高じゃない」

明久「なになに、どうするの？」

美波「内緒よ」

和也「明日をお楽しみに」

明久「気になるなぁ」

その後僕達は食事を終え、みんなで勉強をした

☆さらに数分後☆

美波「あ、もうこんな時間。そろそろ帰らなくちゃ」

和也「送っていくよ」

美波「ありがと、ほら葉月。帰るわよ」

葉月「はいです。バカなお兄ちゃん、バイバイです」

明久「うん、また明日ね」

☆帰り道☆

美波「明日は準決勝か・・・ちょっと緊張するわね」

和也「大丈夫。きっと勝てるよ。僕と美波さんのペアは最強だよ」

美波「そ、そうね／／／」

和也「それより今日はいろいろあって疲れてるでしょ?早く帰って休まなきゃね」

美波「それは和也も一緒でしょ?怪我してるんだから」

和也「そうだったね」

そんな話をしてるうちに美波さんの家に到着した

和也「さすがに帰り道は襲って来なかったね」

美波「ちょ、怖いこと言わないでよ」

和也「ごめんごめん」

美波「ま、まぁ家にお父さんとお母さんがいるわけだし・・・・」

（ガチャガチャ）

鍵がかかっているようだ

美波「あら？お父さんとお母さんまだ帰ってないのかしら？」

そう言いながら美波さんは鍵を開けて家の中に入った

・・・その時

（ｐｉｐｉ）

美波「？もしもし、お父さん？どうしたｎ・・・」

？

どうしたんだろ？

・・・！

美波さんの顔が青ざめていく

和也「ど、どうしたの！？美波さん？」

美波「・・・お父さんとお母さん、急に仕事が入って今日は帰って来れないって」

な、なんてタイミングの悪い・・・

葉月「お姉ちゃん・・・」

美波「だ、大丈夫よ、葉月。怖くなんか・・・」

（ガタン）
→台所でフライパンが倒れる音

美波「きゃあああ」
（ギュ）
→僕にしがみつく音

和也「ぎゃあああ」
（ミシミシミシ）
→僕のアバラ骨の悲鳴

全然大丈夫じゃないじゃん！
葉月ちゃんより怖がってるし・・・
さて、どうしよう

☆数分後☆

明久「・・・で、連れて帰ってきたと？」

和也「だ、だって置いて帰るわけにもいかないし・・・」

結局、連れて帰ってくるしかなかった
瑞希さんはまだ外食から帰ってなかったし
翔子さんの家は場所知らないし
優子さんは『なぜか』家に人をあげることを嫌がるし

和也「でも、同年代の男の子の家に泊まるなんて、親御さんは心配するんじゃ・・・」

美波「それは大丈夫よ、お父さんに事情を言ったら『和也君が傍に居るなら安心だ』って言ってたし」

和也「どういう意味だろう？」

美波「知らなかったの？和也はお父さんに気に入られているのよ？『今時珍しい好青年』だって」

明久「へぇ、よかったね。和也」

？

なにがよかったんだろ？
まぁ、嫌な気はしないけど

明久「じゃあ、姉さんの部屋を使ってもらって」

和也「わかった、美波さん、葉月ちゃん、こっちだよ」

美波「うん。ごめんね」

和也「気にしないで、困ったときはお互い様だよ」

明久「そうそう。あ、お風呂沸かしてあるから葉月ちゃんと入ってきなよ」

美波「わかｔ・・・」

葉月「バカなお兄ちゃん。一緒に入ろ！」

葉月ちゃんは大胆ですね

・・・あ、兄さんが暴走しかけてる

明久「喜ん・・・」

和也「女の子を家に連れ込んで一緒にお風呂、姉さんにバレたら・・・」

明久「・・ダメだよ葉月ちゃん」

葉月「残念です。じゃあお兄ちゃんと入るです」

和也「ダメだｙ・・・」

美波「そんなのダメよ！」

美波さん？急にどうしたんだろ？

兄さんのときは何も言わなかったのに・・・
まさか僕はロリコンだと思われてるのか?
・・・心外だ

葉月「じゃあお兄ちゃんとお姉ちゃんが一緒に入るです」

またこの子はそういうことを・・・
美波さん顔真っ赤にしてるし・・・
まさか僕はスケベだと思われてるのか?
・・・心外だ

和也「ダメだよ葉月ちゃん。年頃の女の子がそういうことを言っちゃあ」

葉月「でも、お父さんとお母さんはたまに一緒に入ってるよ?」

・・・仲のいい夫婦ですね

和也「・・・好きな人同士だったらいいんじゃない?」

明久「なんで疑問系!?」

葉月「だったら大丈夫です」

和也「?なにが大丈夫なの?」

葉月「だってお姉ちゃんはお兄ちゃんが・・・」

美波「きゃあああああ、葉月！なに言ってんのよ！！／／／」

？

どうしたんだろ？

美波「葉月、さっさとお風呂に入ってきなさい。お姉ちゃんも後で行くから」

葉月「はーいです」

そう言って葉月ちゃんは風呂場へ向かった

兄さんは入ったみたいだし・・・

二人が出たら僕も入ろう

和也「じゃ、お風呂が空くまで、僕は部屋で勉強してるから」

そう言って僕は部屋に向かった

和也「さて、明日の準備を・・・」

ん？
なんだか眠く・・・

☆数分後☆

和也「ＺＺｚｚｚｚ・・・・・ハッ！」

・・・どうやら眠ってたようだ
とりあえずお風呂に入ってこよう
もう出てるかな？

（フラフラ）

リビングを覗くと葉月ちゃんと兄さんが遊んでいた
もう出てるみたいだね
じゃ、僕も入ろう

（フラフラ）

この時、僕は寝ぼけて気付いていなかった
リビングにいるはずの人間が一人足りないことに・・・・

和也「ふぁ～」

眠い・・・疲れてるのかな？
・・・早く寝よう

（ガチャ）

美波「え？」

和也「え？」

僕が風呂場に入ると美波さんが・・・
手にブラを持ち、身に着けているのはパンツのみという状態で固まった
いつものポニーテールではなく髪を下ろし、淡い青の下着姿
そして・・・一糸纏わぬ胸元が・・・って！なにじっくり見てんだ僕は！
あ、やばい！美波さんの顔がだんだん赤くなって・・・・

美波「き、きゃあああああ」

和也「ご、ごめんなさい！！」

（バタン）

僕は慌ててドアを閉めた
・・・父さん、母さん、羽月・・・
僕は今日、そっちに逝くかもしれません

第三十五問　島田姉妹のお泊り（後書き）

今回はちょっとハプニングを入れてみました
こういうのはお決まりですからね

第三十六問　ＶＳ常夏コンビ（前書き）

今回はちょっと長くなりました

第三十六問　ＶＳ常夏コンビ

ＳＩＤＥ　和也

美波「・・・」

和也「すいませんでした！！」

僕は今、美波さんに土下座して謝っている
謝って済む問題じゃないことはわかってる
なんせ年頃の女の子を家に連れ込んで痴漢行為。
・・・最低ですね
もう確実に嫌われただろうな・・・
・・・もう死のう、死んで償うしか方法がない

和也「何でもします！紐無しバンジーでも、瑞希さんの料理を完食でも・・・」

美波「・・・両方死亡確定ね」

そのとおり
でもそれだけのことをしてしまったんだから仕方ない

美波「・・・一つ質問していい？」

和也「はい！なんなりと！」

美波「ドアを開けてウチがいるのに気付いてもすぐにドアを閉めなかったわよね？あれはどういうことかしら？正直に答えなさい」

和也「え、えっと・・・／／／」

美波「しょ・う・じ・き・に答えなさい」

和也「綺麗な身体だったので見惚れてました／／／」

って！僕のバカ！
とんでもないセクハラ発言だよ！

美波「え？そ、そうなんだ／／／」

美波さん、顔真っ赤にしてるし・・・
さて、そろそろ死刑執行の時間かな？

美波「こ、今回は特別に許してあげるわ／／／」

ほらね・・・って！あれ？

和也「え？いいの？」

美波「ワザとじゃないみたいだしね。そのかわり、一つお願いを聞いて貰うわよ」

和也「はい、なんなりとお申し付けください」

美波「召喚大会の賞品、何だったか覚えてる？」

和也「えっと、優勝者と準優勝者に腕輪と如月ハイランドのプレオープンペアチケットだっけ？」

美波「うん、そのペアチケットなんだけど・・・よ、よかったら・・・う、ウチと一緒に行ってくれない？／／／」

和也「え？僕と？美波さん、彼氏と行かなくていいの？」

※和也は美波には彼氏がいると思い込んでます（第二十七問参照）

美波「は？ウチに彼氏なんていないわよ？」

和也「え？そうなの？」

そっか・・・美波さん、彼氏いないんだ・・・

・・・よかった・・・

・・・？

あれ？何がよかったんだろう？

美波「そ、それでどうなのよ！／／／」

和也「もちろん、喜んでご一緒させていただきます」

美波「本当！？楽しみにしてるからね！」

これは許してくれたってことかな？
殺されても文句は言えないのに許してくれるなんて・・・
本当に優しい人だなぁ
・・・ん？

明久「（さりげなくデートの約束をするなんて、美波もやるなぁ）」

葉月「（お姉ちゃん頑張ったです）」

あの二人はあんなところでコソコソと何をしてるんだろう？
あれで隠れてるつもりなのかな？

美波「早く寝ましょ。明日は忙しくなるんだから」

和也「あ、うん。そうだね」

その後、僕は改めて風呂に入り就寝した

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

☆ＡＭ４：３０☆

美波「・・・」

・・・目が覚めてしまった
どうしようかな・・・
せっかくだし、朝ごはんでも作ろうかな・・・

（ガチャ、テクテクテク、ピタ）

☆和也の部屋の前☆

・・・ちょ、ちょっとだけ・・
べ、別に和也の寝顔を見たいわけじゃないんだから！
こ、これは・・・そう！和也がまた悪い夢を見てないか心配なだけなんだから

（ガチャ、コソコソ）

静かに部屋に入る
和也はベットの上で気持ち良さそうに眠っていた

和也「・・・すぅーすぅー」

な、なんなのかしら。この可愛い生き物は・・・
・・・カメラ持ってくれば良かった
しばらく眺めていると・・・

美波「・・・ふぁ・・・」

なんか・・・眠く・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

☆ＡＭ７：００☆

和也「・・・」

美波「・・・すぅーすぅー」

？？？
何これ？
どういう状況？
と、とりあえず状況の把握を・・・

目が覚める
←
気配を察知
←
そちらに目を向ける
←
美波さんが隣で寝てる

オッケー
さっぱりわからない
と、とにかく美波さんを起こさないように脱出を・・・

（モゾモゾ）

美波「・・・ん」（ぎゅ）

じょ、状況が悪化した！
美波さんは抱き枕にしがみつくように僕に・・・
・・・女の子っていい匂いがするなぁ

それに柔らかくって気持ち良・・・
・・・って！僕は変態か！
と、とにかく何とかしなきゃ・・・

（ゴソゴソ）

（ガチャ）

明久「和也、そろそろ起き・・・」

・・・状況を説明しよう
部屋のドアを開けてフリーズした兄さん
僕に抱きついてる美波さん
そして僕は美波さんを引き離そうとしてるわけだが・・・
傍から見たら寝ている美波さんを僕が襲ってる様にしか見えない

明久「し、失礼しました！」

（バタン）

和也「ご、誤解だよ！兄さん！兄さぁぁぁぁん！！」

美波「・・・う、ん・・」

はっ！美波さんが目を覚ました

この状況はマズイ

美波「・・・・」

和也「・・・・」

・・・死んだな

美波さんの顔がだんだん赤くなって・・・

美波「きゃあああああ」

（バチーン）

和也「グハッ！」

僕に平手打ちを決めて、美波さんは部屋を飛び出していった

・・・理不尽だ

その後、美波さんに誤解であることを説明し許してもらった

それにしても・・・

なんで美波さんは僕の部屋にいたんだろう？

そして朝食を食べて（結局明久が作った）学校へと向かった

☆２－Ｆ教室☆

和&明&美&葉「「「「おはよう（です）」」」」

雄二「お、来たな・・・って、なんで和也は怪我が増えてんだ？」

和也「・・・聞かないで」

落ち込む僕
顔をそむける美波さん
そして、必死に笑いを堪えてる兄さん
・・・なんかムカツク

和也「それはそうと雄二君。僕と美波さんは今から回復試験を受けてきたいんだけどいいかな」

雄二「ん？ああ、いいぞ。おまえらのシフトは大会が終わってからにするから、そのまま大会開始まで遊んで来い。島田、こいつが暴れないようにしっかり見張っとけよ」

和也「もう暴れたりしな・・・」

美波「わかったわ」

信頼ゼロだよ！
・・・まぁ、仕方ないか

僕達は回復試験へと向かった

☆補習室☆

和也「朝早くからすいません」

鉄人「かまわん。それに事情は学園長から聞いてるからな。情けない話だが俺には何もできん。頼んだぞ」

和也「はい、必ず勝ちます」

鉄人「で、科目はどうする？」

美波「ウチはこれ」

そう言って美波さんは『日本史』のテストをとった
そう、準決勝は日本史なのだ

鉄人「お前は別に受けなくてもいいんじゃないか？」

西村先生がそんなことを言う
それもそのはず、僕は日本史は得意科目で常に７００点以上
おまけに今回はとても調子が良くて過去最高点だ
だが・・・

和也「西村先生、僕が受けるのはこっちです」

そういって僕は別の科目のテストを手に取る

鉄人「？」

美波「どういうこと？」

二人とも不思議そうにこっちを見る

和也「決勝で必要なんだ。ここまできたら優勝したいからね」

美波「でも、決勝の科目は『それ』じゃないわよ」

和也「うん、でも、僕の予想通りならこれが必要になるんだ」

鉄人「・・・まあいい。始め！」

こうして回復試験を受け、二人で時間まで学園祭を回り、準決勝の時間になった

☆大会会場☆

司会「それでは、準決勝を始めます」

美波「緊張してきた」

和也「大丈夫。僕たちは最強だ。勝てる人なんていないよ」

美波「そ、そうね」

司会「それでは選手入場です」

和也「行こう」

美波「うん」

司会「二年Fクラス所属、吉井和也君と島田美波さんです！対するは三年Aクラス所属、夏川俊平君と常村勇作くんです！皆様拍手でお出迎えくださ い」

司会者がルールの説明を始めた
その間に僕はこの二人に聞きたいことがあった

和也「こんにちは常夏先輩」

常村「常村と夏川だ！一つにまとめるんじゃねえ！」

和也「あんたらの呼び方なんかこれで十分だ。それより質問だ」

美波「（・・・キレてるわね）」

和也「教頭に協力してる理由は何ですか？」

夏川「・・・そうかい、事情は理解してるってことか」

常村「大学の推薦状を書いてくれるんだ。今日もその大学の理事長を来賓席に呼んでくれてるしな」

なるほどね・・・大体予想通りだ
しかし大学の理事長を呼んでるとは・・・好都合だ

夏川「本当は小細工なんか要らなかったんだ。俺たちがFクラスに負けるわけがないからな！」

和也「御託はいい。さっさと始めるぞ」

美波「・・・和也・・・」

心配そうな目でこっちを見る美波さん

和也「（大丈夫、暴れたりしないよ。それより作戦通りによろしくね）」

美波「（うん）」

小声で僕は美波さんを安心させる
そして・・・

司会「それでは試合に入りましょう！始め！」

常村＆夏川「「試獣召喚！」」

日本史

３－Ａ　常村勇作　２０９点
＆
３－Ａ　夏川俊平　１９７点

夏川「どうした？俺たちの点数見て腰が引けたか？」

常村「無理もない、Ｆクラスじゃお目にかかれないような点数だからな」

・・・こいつらは・・・
これだけの点数を取れるのに自分たちが楽をする為だけにみんなを傷つけたのか？
・・・・許さない

和也「・・・・か」

夏川「なんだ？いい訳か？」

和也「その程度か？」

美波「ホント、思ってたよりたいしたことないじゃない」

常村「な、なんだと？」

和也＆美波「「試獣召喚！」」

日本史

２－Ｆ　吉井和也　９９６点

＆

２－Ｆ　島田美波　２１５点

常村＆夏川「「はぁ！？」」

和也「科目が日本史だったのが運の尽きだ！行くぞ！『瞬間移動』」

僕は腕輪の能力を使い点数が良いモヒカンの背後に移動。

（ザクッ）

そして頭を貫き倒し・・・

和也「美波さん、パス！」

丸坊主の召喚獣をサッカーボールの様に美波さんの方に蹴り飛ばす

美波「オーライ、オーライ」

（グサ）

美波さんのサーベルで坊主を串刺しにして試合終了

司会「え？あ、し、試合終了。吉井、島田ペアの勝利です」

試合時間はわずか１２秒
これが僕のやりたかったこと『これまでの誰よりも無様に倒す』だ

観客「なんかあの二人弱すぎない？」

観客「よくここまで勝てたよな？」

観客「Ａクラスって言ってもあの程度か」

玉野「カズちゃん最高！！」

周りから罵声が聞こえる。これも計算どおりだ
この二人が弱いわけではないが、最低クラスの二人に秒殺されれば雑魚にしか見えないだろう
・・・最後に何か変な声が聞こえた気がするが気のせいだろう

和也「さて、大学の理事長は呆れた顔して出て行きましたが・・・推薦の話がまだ残っていればいいですね」

夏川&常村「「！！」」

二人は慌てて来賓席のほうを見るが、もうそこには理事長の姿はなかった

夏川「くっ、てめぇ！」

（バキッ）

和也「痛っ！」

美波「和也！」

丸坊主が僕に殴りかかってきた
まさかこんなところで殴りかかってくると思わなかったのでまともに喰らってしまった
すると・・・

観客「なにあれ!?」

観客「負けた腹いせに下級生に暴力振るってるぞ!」

観客「最低ね!」

美春「よくも、美春の娘に手を出しましたね!この豚野郎!」

A「和也君を傷つけるものは・・・」

A「「「「即刻処刑!!」」」」

完全にこの二人は観客を敵に回しましたね

・・・なんか後半の方に変な声が聞こえた気がしますが・・・

鉄人「夏川!キサマ何をしとるか!恥を知れ!」

常村「くっ!!行くぞ夏川!!」

夏川「畜生!覚えてろよ!」

二人が逃げ去っていく

美波「和也、大丈夫?」

和也「大丈夫だよ。ありがとう」

鉄人「それにしてもお前なら避けれたんじゃないか？」

和也「・・・まさかこんな人目に付く場所で殴りかかってくるとは思わなかったものでして・・・」

鉄人「油断してたわけか・・・まぁ無理もない。・・・何度も言うようだが教頭の件はこっちに任せろ。くれぐれも暴れたりするんじゃないぞ？」

和也「わかってます。では失礼します」

そう言って会場を後にしようとしたその時

観客「おーい、決勝戦も頑張れよ！」

観客「応援してるからね！」

観客「あんな奴のこと気にしちゃダメよ！」

観客の人たちが声を掛けてくれた
なんか嬉しいですね
僕は観客に笑顔で手を振ってから教室に戻った

※後日、その写真はムッツリ商会にて販売され、売り上げに大きく

貢献した

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＮＯ　ＳＩＤＥ

夏川「はぁ、はぁ、クソッ！あの野郎！絶対許さねえ！」

常村「ま、学園長室に仕掛けた盗聴器の音声を放送すりゃ俺たちの勝ちだ」

夏川「ああ、アイツの悔しがる姿が目に・・・ん？」

常村「どうし・・・な、なんだあれは！？」

ＦＦＦ「いたぞ！あそこだ！」

ＦＦＦ「よくも我がクラスのアイドルを・・・」

美春「美春の娘を殴った豚野郎はどこですか！」

玉野「私のカズちゃんを傷つけた・・・許さない」

Ａ「和也君を傷つけるものは・・・」

Ａ「「「「デストローイ！！」」」」

常村&夏川「「う、うわあああああ」」

数分後、常夏コンビは『何者か』に襲われ、病院に運ばれた

第三十六問　ＶＳ常夏コンビ（後書き）

常夏コンビ秒殺！
次回は決勝戦
対戦相手は・・・秘密です

ヒント・・バカとゴリラ

第三十七問　絶壁＆ショタＶＳバカ＆ゴリラ（前書き）

いつの間にかお気に入り登録件数が１００件突破
このような駄文を読んでいただき
どうもありがとうございます

第三十七問　絶壁&ショタＶＳバカ&ゴリラ

ＳＩＤＥ　和也

美波「勝ててよかったわね」

和也「そうだね・・・あ、兄さん、雄二君」

明久「勝ったみたいだね。おめでとう」

雄二「お前・・・結構えげつない事やるな・・・」

そうかな？あいつらにはあれでもまだ足りないくらいだけど・・・

雄二「ま、これで問題はなくなったわけだ」

和也「ってことは雄二君たちも勝ったの？」

雄二「ああ、これで決勝は俺らとお前らの勝負ってわけだ」

和也「そっか、相手が誰であろうと僕達は負けないよ！」

雄二「ほう、たいした自信だな？なら一つ賭けでもしないか？」

美波「どんな？」

雄二「負けたチームはコスプレ撮影会」

康太「・・・撮影は任せろ」

秀吉「衣装は任せるのじゃ！」

美波「いいわよ。絶対負けないんだから！」

雄二「島田、負けたら和也のコスプレ写真が手に入るぞ」

美波「！」（ピクッ）

む、雄二君が早速仕掛けてきましたね？

和也「美波さん、負けた『チーム』ってことは美波さんも撮られる側だよ」

美波「絶対負けないんだから！」

雄二「ちっ！まぁいい。勝つのは俺らだ！」

自信満々ですね

やっぱりまだ何か秘策があるんですね？

・・・それにしても随分やる気満々ですね？

秀吉君と康太君までノリノリだし・・・

なにかあるんでしょうか？

雄二「（いざという時の為にこいつらの弱みを握っとくのも悪くない）」

明久「（和也のコスプレ写真は欲しい）」

秀吉「（衣装を着れば演劇部に興味を持つかもしれんしの）」

康太「（・・・和也と島田の写真ならかなり売れるし、明久と雄二の写真でも霧島と姫路が買いに来る。どっちに転んでも俺は儲かる）」

・・・何を考えてるのか知りませんが・・・
みんなしてニヤニヤして・・・不気味ですね

☆数時間後☆

司会「それではこれより、決勝戦を開始します」

和也「いよいよだね」

美波「そうね、絶対勝つわよ！」

和也「もちろん」

司会「それでは選手の入場です」

和也「行こう」

美波「うん！」

司会「二年Ｆクラス所属、吉井和也君と島田美波さんです！皆様拍手でお迎えください！」

観客「可愛いー！」

観客「こっち向いてー！」

観客「頑張ってねー！」

美春「お姉さま！頑張ってください！」

観客から応援の声が聞こえる
それにしても・・・

和也「美波さん、大人気だね」

美波「・・・そうね（美春の以外全部和也に言ってるんだと思うけど）」

司会「二人は五回戦では二年の学年主席を破り、更に準決勝ではクズ・・・失礼、三年Ａクラスの常夏くんをわずか１２秒で破っての決勝進出です。ちなみに準決勝の１２秒は不戦勝を除くと今大会最短でした。常夏君は非常に弱かったですね」

・・・この司会の三年生（秀吉君曰く演劇部の部長らしい）は常夏先輩に何か恨みでもあるんでしょうか？
呼び方も『常夏君』だし・・・

司会「続きまして、こちらも二年Ｆクラス、吉井明久君と坂本雄二君です」

観客「「「「ゴリラ！ゴリラ！ゴリラ！ゴリラ！」」」」

瑞希「明久君、頑張ってください！」

雄二「誰がゴリラだ！！！」

まさかゴリラコールが来るとは・・・
ノリのいい観客ですね
ってか今、瑞希さんの声が聞こえたような・・・

司会「えーこちらのゴリ・・・失礼、坂本雄二君はＦクラスの代表であり参謀。吉井明久君は先ほど紹介した吉井和也くんのお兄さんです。兄弟対決となりましたがどちらが勝つのか実に楽しみですね」

そういえば兄さんと対決なんていつ以来だろう？

司会「さて、Ｆクラス同士の対決となりましたが・・・何よりも驚

きなのは最下級であるFクラスが決勝戦に進んできたということです。これはFクラスへの認識を改める必要があるかもしれませんね」

嬉しいこと言ってくれますね
瑞希さんのお父さんが聞いていればいいのですが・・・

司会「それでは決勝戦開始です。科目は現代国・・・・」

なにかあったみたいですね？

司会「・・・申し訳ございません。決勝戦の科目は現代国語となっていましたが、どうやら立会人の先生が急用により来れなくなった為、科目を数学に変更とさせていただきます」

・・・雄二君の仕業ですね？
凄く悪い顔になってますよ？

美波「やってくれたわね」

雄二「なんのことかな？試獣召喚！」

明久「僕も知らないな。試獣召喚！」

☆数学☆

２－Ｆ　坂本雄二　２１５点
＆
２－Ｆ　吉井明久　１０６点

和也「なるほど、一回戦での僕の数学の点数は２２点、僕を倒した後に二対一で美波さんと戦うってわけだ」

雄二「その通りだ！くははははッ！これで勝ったも同然だな明久！」

明久「その通りだよ雄二！２２点しかない和也の召喚獣なんて秒殺さ！」

うわー、今のこの二人、どっからどう見ても悪人にしか見えないなぁ
二人ともう勝ったつもりでいるみたいだね？
確かに２２点じゃ勝ち目がないね
・・・・２２点ならね

和也「ほらね、美波さん。言った通りでしょ」

美波「ホントにね」

雄二＆明久「「？」」

和也＆美波「「予想通りだ（ね）」」

雄二「なんだと？」

和也＆美波「「試獣召喚！」」

２－Ｆ　吉井和也　１０２点
＆
２－Ｆ　島田美波　４２６点

雄二＆明久「「なにぃぃぃ！？」」

雄二「どういうことだ！？数学は２２点だったって・・・」

和也「僕たちが朝、来てすぐ、なにしたか憶えてる？」

雄二「・・・確か回復試・・・まさか！」

和也「そ、美波さんが日本史受けてる間に僕は数学受けたんだ」

明久「なんで！？準決勝は日本史、決勝は現代国語なんだから数学なんて受ける必要ないじゃないか！」

和也「雄二君が何か仕掛けてくることは最初からわかってた。だって・・・」

美＆明＆雄「「「？」」」

和也「雄二君が正々堂々戦うなんて、天と地がひっくり返ってもありえないよ！！」

雄二「やかましい！そこまで言うか！？」

明久＆美波「「なるほど」」

雄二「納得してんじゃねぇ！てめえ、どっちの味方だ！」

明久＆美波「「和也」」

雄二「パートナーに裏切られた！？」

和也「さて、そろそろ始めようか？」

明久「ど、どうするのさ！？雄二！」

雄二「・・・こうなったら真っ向勝負しかねぇ！」

明久「ようするに策がないってことだね？」

美波「おしゃべりは終わり？じゃあそろそろいくわよ！ゴリラ！」

雄二「誰がゴリ・・・おわっ！」

美波さんが雄二君の召喚獣に突っ込んで行った

ってことは・・・

和也「僕の相手は兄さんだね」（ガキン）

明久「和也と対決なんていつ以来かな?」（ガキンガキン）

和也「多分、小学校のときのリレーが最後かな?」（ガキンガキンガキン）

懐かしいなぁ

ちなみに効果音でわかるでしょうけど、話してる間も僕達は戦ってますよ

さて・・・

２－Ｆ　吉井和也　４５点

ＶＳ

２－Ｆ　吉井明久　６６点

やっぱり苦しいな・・・

ただでさえ操作能力じゃあ敵わないのに点数も負けてる・・・

一対一じゃ勝てないな・・・

でも・・・

今、僕は一人じゃない！

和也「行くよ！兄さん！」

明久「来い！和也！」

両者の召喚獣が激しくぶつかりあう

そして・・・決着が着いた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

雄二「・・・やるじゃねえか」

美波「・・・そっちこそ」

２－Ｆ　島田美波　２５６点

ＶＳ

２－Ｆ　坂本雄二　１１５点

それにしてもこいつなんでこんなに召喚獣の操作がうまいわけ！？

試召戦争ではほとんど召喚してないくせに！

でも・・・負けられない！

美波＆雄二「「コスプレなんか絶対嫌だ！」」

美波「なに言ってんのよ！アンタの言い出したんでしょうが！責任取っておとなしく負けなさい」（ガキン）

雄二「うるせえ！和也の点がこんなに高いとは思わなかったんだよ！そっちこそ和也のコスプレを見たかったら負けろ！」（ガキンガ

キン）

美波「そりゃ見たいけどウチまで着替えるのはイヤ」（ガキンガキンガキン）

そんなことしたら間違いなくアレ（美春）は襲ってくる
冗談じゃないわ！
ちなみに効果音でわかるでしょうけど・・・（以下略）

２－Ｆ　島田美波　１４２点
ＶＳ
２－Ｆ　坂本雄二　６５点

あと少し・・・
一撃で決める！

美波「行くわよ！ゴリラ！」

雄二「ゴリラって呼ぶんじゃねぇ！」

両者の召喚獣が激しくぶつかり合い
そして・・・
ゴリ・・・坂本雄二の召喚獣が消滅した

２－Ｆ　島田美波　７１点
ＶＳ
２－Ｆ　坂本雄二　０点

美波「やった！」

雄二「くっ！あとは頼んだぞ！明久！」

美波「あっ！そうだ！和也！」

ウチが和也のほうを見ると・・・

２－Ｆ　吉井和也　０点
ＶＳ
２－Ｆ　吉井明久　１５点

和也「ごめん、負けちゃった・・・」

和也は負けたか・・・
まぁ点差もあったし、しょうがないわね
それにしても・・・
しょんぼりしちゃって可愛いわね／／／

美波「大丈夫よ！あとは任せなさい！」

２－Ｆ　島田美波　７１点
ＶＳ
２－Ｆ　吉井明久　１５点

点差はある
でも、アキの操作技術なら普通に攻撃しても当たらない
どうする・・・

明久「いくよ！美波！」

美波「！」

アキの召喚獣の攻撃を何とかかわした
でもこのままじゃ・・・
！

そうだ！
ウチはバックステップで距離をとる

美波「！あっ！」

召喚獣は着地のときにバランスを崩し、倒れた

明久「チャンス！」

雄二「？・・・！よせ！明久！罠だ！」

かかった！
坂本は気付いたみたいだけどもう遅い！
ウチは握り締めた武器を・・・

明久「ぐあああああ！フィードバックであばらに痛みがあああぁぁぁぁ！」

アキの召喚獣に向かって思いっきり振りぬいた

２－Ｆ　島田美波　３０点
ＶＳ
２－Ｆ　吉井明久　０点

む、点数が減ってる
最後の攻撃がかすってたみたいね
あぶないあぶない

司会「吉井、島田ペアの勝利です」

美波「やったー！」

和也「凄いよ、美波さん」

美波「和也が点数を削ってくれたおかげよ。それに・・・」

和也「うん」

和也&美波「「僕達、（ウチら）は最強だ（よ）」」

（パーン）

そう言ってウチと和也はハイタッチを交わした

第三十七問　絶壁&ショタＶＳバカ&ゴリラ（後書き）

決勝戦終了
次回、コスプレ撮影会

第三十八問　腕輪ゲット、そしてコスプレ（前書き）

なんか文脈が変になった
とりあえず更新です

第三十八問　腕輪ゲット、そしてコスプレ

ＳＩＤＥ　和也

召喚大会が終わり表彰式が始まった

学園長「優勝おめでとう。くそじゃりども」

・・・この人は本当に教育者なんでしょうか？
学園長が僕たちに賞状を渡す瞬間耳元で・・・

学園長「（教頭の件だけど、西村先生の強制捜査で色々証拠が見つかった。清涼祭が終わったら懲戒処分にするからもう心配ないさね）」

西村先生、約束どおり動いてくれてたんですね
やっぱり生徒想いのいい先生ですね

学園長「じゃあ次に賞品の腕輪の説明だよ。準優勝者の『白金の腕輪』から・・・」

兄さんと雄二君に白い腕輪が手渡された

学園長「吉井兄の腕輪は『同時召喚』起動キーは『ダブル』、テストの点数を二分して二体の召喚獣を同時に呼び出すことができる。次に、坂本の『召喚フィールド生成』起動キーは『アウェイクン』、教師の代わりに立会人になって召喚フィールドを作り出すことができるが、科目の選択はできないさね」

なるほど・・・
うまく使えばかなり便利ですね

学園長「次に優勝者の『蒼海の腕輪』の説明をするよ」

そう言って僕と美波さんに青い腕輪を渡した

美波「！！」／／／

？

なんで美波さんは顔を赤くしてんだろう？
それにしても・・・
『デザインが全く同じ』だから見分けがつきにくいですね

学園長「まず、島田の『科目強制変更』起動キーは『チェンジ』、展開された召喚フィールドの科目を強制的に変更することができる

さね。例えば日本史のフィールド内で『数学にチェンジ』と言えば対戦科目が数学に変わる。ただし、使ったら次使うまでに１０分間空けなきゃ使えないから注意するんだよ」

まぁそんなにコロコロ変更できたら反則ですからね

学園長「最後に吉井弟の『点数吸収』起動キーはないよ。常時起動型さね。倒した敵の点数の十分の一を吸収することができる。たとえば２００点の召喚獣を倒せば２０点吸収するよ。ただし上限は１０００点、それ以上は増えないよ」

それは便利ですね
僕が貰っていいのかな?

和也「美波さん、こっちじゃなくてよかった?こっちの方が便利そうだけど・・・」

学園長「悪いけどもう使用者登録は済ませたし、名前も彫ってるから交換はできないよ」

・・・!
あ、ほんとだ
腕輪には『ｋ・ｙｏｓｈｉｉ』と彫られていた

学園長「じゃあさっそくデモンストレーションを行うよ。まず、坂本」

雄二「あいよ、『アウェイクン！』」

雄二君の声と共に召喚フィールドが広がった
どうやら科目は英語のようだ

学園長「さ、召喚しな」

和&美&明&雄「「「「試獣召喚！！」」」」

２－Ｆ　吉井和也　３２４点

２－Ｆ　島田美波　１３１点

２－Ｆ　吉井明久　５９点

おーホントに召喚できた・・・
・・・あれ？

雄二「？なんで俺の召喚獣は出ないんだ？」

学園長「ああ、言い忘れてたけど、その腕輪は召喚フィールド生成中は召喚できないよ」

なるほど、いい事ばかりじゃないってことですね

学園長「さて、島田、好きな科目に変更しておくれ」

美波「はい、数が・・・『世界史にチェンジ』！」

いま数学って言いかけてやめたよね？
僕の苦手科目だから気を使ってくれたのかな？

２－Ｆ　吉井和也　９２３点

２－Ｆ　島田美波　１１１点

２－Ｆ　吉井明久　１６６点

美波「アキに負けた・・・」

明久「へへ、日本史と世界史は和也に教わってるからね」

美波「・・・今度ウチにも教えて」

和也「僕でよければ喜んで」

学園長「次は吉井兄」

明久「了解！『ダブル』」

２－Ｆ　吉井明久Ａ　８３点

２－Ｆ　吉井明久Ｂ　８３点

よかった
どうやら成功みたいですね
兄さんの召喚獣が二体になった
じゃあ後は僕の・・・
あれ？

和也「あの、僕の腕輪はどうやってデモンストレーションするんですか？」

誰だって無抵抗で斬られたくないでしょうし・・・

学園長「兄貴を斬りな」

明久「ちょっと待てババア！９００点もある和也の召喚獣で斬られたらフィードバックで死んじゃうよ！」

確かに・・・
・・・ってかこの人は本当に教育者なのでしょうか？

学園長「冗談さね。相手は用意してあるよ。出てきな」

２－Ａ女子×３「「よろしくお願いします」」

学園長がそう言うとＡクラスの女子が三人出てきた

学園長「こんなことにわざわざ呼んですまないね」

２－Ａ女子×３「「いいんです。和也君の為ですから」」

学園長「・・・そうかい、じゃ、早速頼むよ」

２－Ａ女子×３「「はい！試獣召喚！！」」

２－Ｆ　吉井和也　９２３点
ＶＳ
２－Ａ　２２９点
２－Ａ　２０３点
２－Ａ　１８８点

学園長「さ、やりな」

和也「じゃ、失礼して・・・」（ザク、ザク、ザク）

２－Ｆ　吉井和也　９２３点→９８３点
ＶＳ
２－Ａ　０点
２－Ａ　０点
２－Ａ　０点

あ、ホントだ。点数が回復してる
どうやら小数点以下切捨てのようだ

学園長「これでデモンストレーションを終了するよ」

２－Ａ女子×３「「それじゃ、私たちはこれで・・・」」

おっと、デモンストレーションに付き合わせたんだしちゃんとお礼を言わなくちゃ・・・

和也「手伝ってくれてありがとう」（ニコ）

２－Ａ女子×３「「「う、うん／／／」」」

？

どうしたんだろう？
僕がお礼を言うと三人は顔を赤くして走り去ってしまった

学園長「あんたたちもご苦労だったね」

この腕輪は一騎打ちには向いてないから
優子さんへのリベンジには使えそうにないな・・・
でも・・・（チラ）

美波「（和也とお揃い♪）」

美波さんは満足してるみたいだし、良しとしよう

雄二「さて、教室に戻るぞ」

和也「そうだね。戻って撮影会だね」

雄二「くっ！忘れてなかったか」

☆演劇部部室☆

秀吉「準備オッケーじゃ」

康太「・・・こっちもいつでもいい」

瑞希「じゃあ、明久君。まずはコレです」

そう言って瑞希さんが取り出したのは・・・
・・・女子のスクール水着（名札付き）
うわー・・・兄さん泣きそうだし・・・
しかも今、『まず』って言いましたよね！？
瑞希さんノリノリですね

美波「じゃ、坂本はコレなんてどう？」

そう言って美波さんが取り出したのは・・・
・・・ゴリラの着ぐるみ
なんでそんなものがあるんだろう？

雄二「誰がゴリラだ！んなもん着るか！」

和也「じゃ、こっちの方がいい？」

そう言って僕が取り出したのは・・・
ミニスカセーラー服
あ、みんなが想像してしまったのか、吐きそうになってる
結局雄二君はゴリラの着ぐるみを選んだ

その後二人は色々な衣装に着替えた
雄二君は執事服、柔道着、羽織袴などなど

兄さんはチャイナドレス、セーラー服、チアガールなどなど
そんなことをしてると・・・

（ガラッ）

愛子「やっほー」

優子「ホントにやってるのね・・・」

和也「あれ？二人ともどうしたの？」

愛子「休憩だよ。中華喫茶の方に行ったら・・・」

優子「ここでコスプレ撮影会やってるって聞いたから見に来たのよ
（土屋君、この二人のペアの写真はあるかしら）」

康太「・・・そろそろ終わろうと思ってたところだ（もちろんある）
」

優子「そうなんだ（全種類貰うわ）」

康太「・・・ああ（まいど）」

和也「じゃあそろそろ・・・」

僕が外に出ようとすると・・・

優子「・・・」（ガチャ）

和也「？なんで鍵を閉めるの？それにその手に持った猫耳は何！？」

全員「「「「「「「「「・・・」」」」」」」」」（ジリジリ）

和也「み、みんななんでそんな『いい笑顔』でせまってくるの！？
ちょ！やめ！あああぁぁぁぁぁぁ」

※吉井和也、撮影会に参戦

和也「・・・僕もうお婿にいけない・・・」

全員「「「「「「「「「（可愛い）／／／」」」」」」」」」

瑞希「さてと、そろそろ教室に戻りましょう」

雄二「そうだな」

明久「じゃ、着替えを・・・」

美波「何言ってるの？その格好で接客するのよ」

明久「そ、そんな！」

雄二「キサマ正気か！？」

・・・やっぱり美波さん、昨日のこと（覗き）まだ怒ってるんだなぁ
だったら仕方ないな・・・
こうして僕達は教室に（強制的に）向かった

F「和也ちゃん、サイコー！！」

F「アキちゃん、結婚して！！」

客「可愛い」

客「はうぅ、お持ち帰りぃぃ」

・・・なぜかみんなに大人気
ってか最後のは某アニメの鉈女では？
ちなみに今の僕たちの格好は・・・

僕・・・ワンピースにランドセル
兄さん・・・ゴスロリ
雄二君・・・狼の着ぐるみ

雄二「ほら見ろ。収拾つかなくなったじゃねえか」

瑞希「ごめんなさい」

美波「やりすぎたわ」

秀吉「しかしどうするのじゃ？」

康太「・・・売り上げに支障が出る」

雄二「ちっ、しかたねぇ。木下姉、さっきの話受けると翔子に伝えておいてくれ」

優子「わかったわ」

雄二「みんな聞いてくれ！」

F「なんだ？」

F「アキちゃんとの愛の語らいを邪魔するなよ」

F「和也ちゃんをお持ち帰りしたい」

雄二「この後、打ち上げをAクラスと一緒にやることになった！ただし真面目に働かない奴は連れて行かないからな！Aクラスの女の子と仲良くしたいなら真面目に働け！」

雄二君がそう言うとみんな慌てて働き始めた

明久「ふぅ、助かったよ」

和也「ホント、危うくお持ち帰りされるところだったよ」

雄二「・・・冗談に聞こえねえな・・・とりあえず俺は外で客引きしてくる。お前らはホールだ、頼んだぞ」

明久＆和也「「了解」」

☆３０分後☆

客「お持ちかえりぃぃ！」

和也「誰か助けてぇ！！」

雄二「はぁ・・・またかよ・・・お客様、ウェイトレスをお持ち帰りされては困ります」

僕が働き始めてから３０分
その間、お持ち帰りされそうになった回数・・・５回

美波「和也、大丈夫？」

和也「もうやだ・・・怖い・・・お家帰りたい・・・」

雄二「和也、お前はもう着替えて来い。余計な仕事が増える」

明久「そうだね。今日のお客さんはロリコンが多いみたいだし、危ないよ」

む、兄さん？どうゆう意味です？

僕が幼女に見えるとでも言いたいんですか？
・・・はぁ・・・まぁいいや

和也「着替えてくる」

そう言い残し僕は教室を出た
そんなこんなで清涼祭は終了した

第三十八問　腕輪ゲット、そしてコスプレ（後書き）

次回で清涼祭編は終了です

第三十九問　打ち上げ（前書き）

今回は短いです
これにて清涼祭編は終了です

第三十九問　打ち上げ

ＳＩＤＥ　和也

明久「雄二、売り上げはどう？」

雄二「これだと机と椅子は苦しいな。畳と卓袱台がせいぜいだ」

やっぱり出だしの妨害が痛かったね

・・・っと、そういえば

和也「秀吉君、破った衣装弁償するから、後で金額教えて」

秀吉「それなら心配ないぞい。部長が『常夏、（クズ）コンビを無様に倒してくれたからいらない』って言っておったからのう」

・・・やっぱり部長さんは常夏先輩に何か恨みがあるみたいですね

和也「康太君も発信機壊してごめん。弁償するよ」

康太「・・・いらない。清涼祭のお前の写真のおかげで新品が買えるくらい儲けた」

僕の写真がそんなに売れる訳ないのに・・・
気を使ってくれてるんですね
いい人ですね

和也「そういえばみんなは？」

雄二「近くの公園で打ち上げの準備してる」

明久「じゃあ、僕たちも早く行こうよ」

秀吉「そうじゃな」

康太「・・・（コクッ）」

僕達は公園に向かった

☆公園☆

僕たちが公園に着くとAクラスとFクラスのみんなはお菓子とジュースで盛り上がっていた

雄二「お、やってるな」

美波「あ、遅かったわね。はい、どーぞ」

和也「ありがとう」

そう言って僕は美波さんからジュースを受け取り、一気に飲み干し・・・・

和也「！ゲホッゲホッ！！」

美波「大丈夫？」

これって・・・・
僕は近くに転がってる空き缶を見る
すると・・・

『大人のオレンジジュース』

誰だ！こんなの買ってきたのは！？

※お酒は二十歳になってから※

美波「あ、あのさ」

和也「ん？」

美波「まだ、あのときのお礼、きちんと言ってなかったよね」

和也「あのとき？」

美波「ほら、昨日変な連中に捕まってウチが殴られたとき、本気で怒ってくれたって」

ああ、あのことか・・・
別にお礼を言われるほどのことじゃ・・・

美波「凄く嬉しかった。助けてくれてありがとうね、和也」（ニコッ）

和也「う、うん／／／」

可愛いなぁ
それにしても美波さんは全然酔ってないみたいだなぁ
お酒強いのかな？

美波「と、いうわけでお礼するから服を脱ぎなさい」

前言撤回、完全に酔ってる

美波「さ、脱ぎ脱ぎしましょうね♪」

和也「ちょ、ダメだって！」

美波「なによ！ウチのお礼が受け取れないって言うの！？」

凄い悪酔いだ
誰かに助けを求めないと・・・
周りを見渡すと・・・

瑞希「服を脱いでください！」

明久「なにゆえッ！？」

翔子「・・・雄二、浮気は許さない」

雄二「誤解だ！ぐあぁぁぁぁ！」

ダメだ、二人とも自分のことでそれどころじゃないようだ
他には・・・

秀吉＆葉月「ＺＺＺｚｚｚ」

酔いつぶれて眠ってる秀吉君と葉月ちゃん

愛子「ムッツリーニ君♪えい！」（ピラッ）

康太「・・・・・！！」（ブシャァァ）

鼻血を出して倒れる康太君

優子「（無理矢理脱がされる美少年）」（キラキラ）

目を輝かせながらこっちを見ている優子さん

・・・って！

和也「優子さん！見てないで助けてよ！」

美波「なによ！やっぱりウチより他の女がいいのね！？」

和也「ち、違・・・み、美波さん・・・首が絞まって・・・」

そう言いながら美波さんは僕の首を絞め始めた

・・・あっ、身の危険を感じたのか、優子さんが逃げていく

美波「もういい！アンタが脱がないんだったら・・・」

そう言いながら美波さんは僕から手を離した

ふぅ、助か・・・

美波「ウチが脱ぐんだから！！」

・・・ってない！
むしろ状況が悪化した！？
・・・あ、昨日と同じ青い下着が・・・
・・・って！僕は変態か！

和也「ダメだって！美波さん！」

美波「だって！このままじゃ誰かにとられちゃうんだもん！」

とられる？
何を？

美波「和・・・は誰にも渡さな・・・ＺＺＺｚｚ」

和也「美波さん？」

寝ちゃったのか・・・
最後の方はよく聞こえなかったな
まあいいか

和也「！！」／／／

や、やばい
僕の視線の先には・・・
上着がはだけてブラが丸見え
スカートも脱ぎかけのためパンツが見える
これはやばい！
主に僕の理性が！

※和也もお酒を飲んでるので若干壊れ気味です※

どうしよう・・・
このまま放っておくわけにはいかないし
とりあえず脱ぎかけの服は着せておこう
そう思って僕が美波さんのスカートに手を掛けたそのとき・・

久保「みんな、遅くなってすまな・・・」

遅れてきた利光君は僕を見て固まった
今の状況を説明しよう

制服を脱ぎかけて眠っている美波さん
美波さんのスカートに手を掛けている僕

僕は服を着せているわけだが・・・

傍から見たら眠っている美波さんの服を脱がしているようにしか見えない

久保「・・・失礼しました」（ダッ）

和也「誤解だよ!!逃げないで!利光君!!」

☆翌日☆

和也「待ってよ利光君!あれは誤解なんだ!」（タッタッタッ）

久保「わかってるよ。誰にも言わないから安心してくれたまえ」（タッタッタッ）

和也「わかってない!とにかく止まって話を聞いてよ!!」（タッタッタッ）

利光君の誤解を解くのに丸二日かかった

☆おまけ☆

※ムッツリ商会の売り上げ表※

和也のチャイナドレス・・・６２枚
和也のメイド服・・・４３枚
和也のワンピース&ランドセル・・・７５枚
和也のその他・・・２２枚

木下秀吉・・・１１０枚
主な購入者、Ｆ○Ｆ団

姫路瑞希・・・８３枚
主な購入者、Ｙ井Ａ久

島田美波・・・５８枚
主な購入者、Ｓ水Ｍ春

吉井明久・・・３１枚
主な購入者、Ｈ路Ｍ希、Ｋ保Ｔ光

坂本雄二・・・１４枚
主な購入者、Ｋ島Ｓ子

明久&雄二・・・２枚
主な購入者、Ｋ下Ｙ子

和也&島田・・・７枚
主な購入者、Ｓ田Ｍ波

その他・・・６０枚

☆一番人気☆
準決勝での和也の笑顔で手を振る姿・・・５００枚

販売開始後３時間で売り切れ
希望者多数のため再販検討中

一枚百円×１０１７・・・１０１７００円の売り上げ

Ｔ屋Ｋ太「・・・まいどあり」

第三十九問　打ち上げ（後書き）

さて、あなたは主な購入者は誰かわかりましたか？
原作を知っていればわかるはず・・・
次回よりしばらく番外編に入ります
次回は『和也のアルバイト』です

第四十問　僕とバイトと兄の怒り（前書き）

なんかびみょー
とりあえず更新で・・・

第四十問　僕とバイトと兄の怒り

ＳＩＤＥ　和也

和也「どうしよう・・・」

今、僕の目の前にはカラオケボックスの壊したドアの請求書
その額、約１５万円
僕の所持金・・・１万３千円
・・・全然足りない
どうする？
兄さんに相談する？
ダメだ
兄さんがお金を持ってるとは思えない

じゃあ、義父さんや義母さん？
ダメだ
ただでさえいままで育ててもらった恩があるのに１５万も出してほしいなんて・・・
いくらなんでも図々しすぎる・・・

和也「バイトしよう。確かこのあたりに求人のチラシが・・・」

☆１６：００☆

和也「いらっしゃいませ、こちらは二点で１８００円になります。・・・２０００円からですね？お釣りが２００円になります。ありがとうございました」

僕は今、本屋さんでバイトしています
それにしてもこの店・・・随分マンガが多いですね？
キャラクターグッズも多いですし・・・

？「すいません、これお願いします」

和也「はい、いらっしゃ・・・って、優子さん？」

優子「ふぇ？か、和也！？なんでここに！？」

和也「アルバイトだよ。優子さんは買い物？」

優子「え、ええ、まあね」

和也「そういえば会計だったね、ゴメンゴメン」

（スッ）
→持ってきた籠に手を伸ばす音

（サッ）
→その籠を引っ込める音

和也「？どうしたの？」

優子「そ、そういえば、まだ買うものがあったんだったわ。また後で来るからバイト頑張ってね」

和也「うん。じゃあね」

そう言うと優子さんは慌てて店の奥の方に行ってしまった

どうしてあんなに慌ててるんだろう？

それに・・・

籠の中に大量に入ってた『やけに薄い本』はなんだったんだろう？

その後、優子さんが来ることはなかった

店長「吉井君、そろそろ上がっていいよ」

和也「あ、はい。お疲れ様でした」

さてと・・・

・・・次のバイトに行こう

☆２１：００☆

和也「いらっしゃいませ」

僕は今、コンビニでバイトをしています
え？高校生がこんな時間にバイトしていいのかって？
それは言わないお約束

？「あれ？和也君じゃん」

和也「？あ！愛子さん。部活帰り？」

愛子「うん。そっちはバイト？」

和也「うん、まぁね」

愛子「うんうん。わかるよ。男の子だもんね」

和也「？」

愛子「エロ本買いすぎてお金がなくなったんだね」

和也「ち、違うよ！」

愛子「あはは、冗談だよ。じゃ、コレとコレを・・・」

和也「はい、２６０円になります。・・・お釣りが２４０円ですね。
ありがとうございました」

愛子「うん、じゃあね。バイト頑張ってね。」

その後も何人か学園の生徒が買い物にきた

それにしても・・・
なんでみんな僕のこと知ってるんだろう?

店員「すいません、遅くなりました。あ、吉井君。遅れてごめんね。
もう上がっていいよ」

和也「はい、お疲れ様でした」

交代の人が遅刻した為ちょっと遅くなってしまった
さぁ、家に帰ろう

☆0:00☆

和也「ただいま」

どうやら兄さんは寝ているようだ

和也「・・・」

・・・台所が大変なことになってる
兄さんが食事を作るとこうなるんだよな・・・
・・・仕方ない
まずは洗い物を・・・(ジャブジャブ)

洗濯機も回して、朝のためにご飯も炊いておこう

☆３：００☆

お、終わった・・・
さあ、寝よう
ＺＺＺｚｚｚ

☆４：００☆

和也「ＺＺＺｚｚｚ」

ｐｉｐｉｐｉ

和也「！」（ムクッ）

・・・さて、新聞配達に行こう

☆６：３０☆

・・・疲れた

早く帰って準備しなくちゃ・・・

？「む、和也ではないか」

和也「？あ、秀吉君。何してるの？」

秀吉「ワシはランニングじゃ。お主は何をしておるのじゃ？」

和也「新聞配達の帰りだよ」

秀吉「？どうしたのじゃ？明久ならともかくお主が金がないとは・・・」

和也「まあいろいろあってね・・・」

秀吉「・・・言いたくないのであれば聞かぬが・・・無理はするでないぞ」

和也「うん。じゃ、また後で・・・」

☆数日後☆

・・・全然足りない・・・

もっとバイトを増やさなくちゃ・・・

☆更に数日後☆

和也「おはよう」（フラフラ）

美波「おはよ・・・って、なんか顔色悪いわよ?大丈夫?」

和也「大丈夫、なんともないよ」

美波「ならいいけど・・・」

・・・そうは言ったものの・・・
・・・身体が重い・・・
なんでだろう?

※働きすぎです※

まあ、一時間目は自習みたいだし、ちょっと横に・・・

鉄人「一時間目の自習だが、予定を変更してAクラスと合同で体育だ」

F「「「いやっほー」」」

さ、最悪だぁぁぁぁ

☆数分後☆

先生「今日は長距離走のタイムを計るぞ。先に女子。後から男子だ」

よりによってマラソン・・・
ツイてないなぁ
あ、女子が終わった・・・
美波さんがトップで、二位が愛子さん・・・
やっぱりこの二人は運動神経がいいですね
・・・ビリはやっぱり瑞希さんか

先生「次、男子始めるぞ」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

美波「ふぅ、疲れた」

愛子「美波、足速いね。僕も自信あったんだけどな」

美波「ウチ、運動神経はいいのよね」

愛子「むー、じゃあさ、もうひと勝負しない？男子は誰がトップか

予想するの」

美波「いいわよ。ウチは・・・やっぱり和也じゃない？」

愛子「じゃあ僕はムッツリーニ君かな？」

妥当なところね
この二人は学年どころか学校全体でもトップクラスだし・・・

翔子「・・・私は雄二」

美波＆愛子「「うわっ！！」」

びっくりした
いきなり背後に立たないでよ

優子「なに話してんの？」

愛子「男子は誰がトップになるかなって予想してんの」

優子「ふーん、ま、妥当に和也か土屋君じゃない？」

愛子「ま、そうだろうね。あ、始まった」

先頭に土屋、その後ろにアキ、坂本、

ちょっと離れて、須川、木下と続いて・・・あれ？

美&愛&優&翔「「「「？」」」」

美波「あれ？和也は？」

愛子「・・・！あ、いた。後ろから5番目。」

優子「調子悪いのかしら？授業で手を抜くタイプじゃないし・・・」

翔子「・・・顔色が悪い」

美波「そういえば朝もなんかフラフラしてたわね」

愛子「バイトで疲れてるのかな？」

美波「バイト？」

愛子「知らなかったの？和也君コンビニでバイトしてるんだよ」

優子「？コンビニ？本屋でしょ？」

翔子「・・・私はデパートで見かけた」

美波「？どういうこと？」

バイトを掛け持ちしてるってこと？

おかしいな

アキならともかく和也が金欠なんて・・・

（ドサッ）

美波「え？」

ウチが校庭に視線を戻すとそこには・・・
和也が倒れていた・・・

美波「か、和也！」

先生「吉井！大丈夫か！？」

和也「・・・」

先生「保健室に連れて行ってくる。霧島。すまないがここは任せていいか？」

翔子「・・・はい」

そう言って先生はストップウォッチを翔子に渡し、和也を背負って行った
大丈夫かなぁ・・・
心配だなぁ・・・

☆体育終了後☆

体育の授業終了後、ウチらはみんなで保健室に行ったけど
まだ和也は目を覚ましてなかった
仕方なく教室に帰る途中、ウチはとんでもないことを聞いた

雄二「しっかし、酒屋のバイトってのはそんなに忙しいのかねぇ」

・・・は？

秀吉「む？酒屋？新聞配達じゃろう？」

ちょっと？

康太「・・・？電気屋のはず」

・・・・・

瑞希「え？ファミレスのはずじゃ・・・」

明久「ちょっと待って。何の話？」

瑞希「知らなかったんですか？和也君最近バイトしてるんですよ？」

明久「・・・そういえば最近帰りが遅いことが・・・」

雄二「・・・同じ家に住んでんだから気付けよ・・・」

明久「うっ！で、でも何でバイトを？」

雄二「さあな」

康太「・・・聞いたけど教えてくれなかった」

秀吉「はぐらかされたのじゃ」

美波「・・・ねえ、その話、本当なのよね？」

瑞希「美波ちゃん、何か知ってるんですか？」

美波「えっと、翔子たちから聞いたんだけど・・・」

☆事情説明中☆

雄二「・・・今わかってるだけで七件か・・・」

秀吉「無茶しすぎなのじゃ」

康太「・・・早死にする」

瑞希「いったいどうしてこんな無茶を・・・」

美波「アキ！アンタまた和也の小遣い取ったんじゃないでしょうね！？」

明久「ち、違うよ」

雄二「落ち着け島田。仮にそうだとしても七件も掛け持ちする必要はないはずだ」

瑞希「そうですよね・・・」

雄二「考えてても仕方ねえ。和也の荷物を調べるぞ」

瑞希「いいんでしょうか？」

明久「・・・仕方ないよ。原因突き止めて和也を止めなくちゃ」

☆２－Ｆ教室☆

ウチラは手分けして和也の荷物を調べた

ちなみに今は自習中だ

康太「・・・！あった。これだ」

そう言って土屋が和也のかばんから取り出したのは一枚の紙切れだ

った

秀吉「？なんじゃそれは？」

康太「・・・和也が壊したカラオケボックスのドアの請求書。金額は１５万」

全員「「「「「！！」」」」」

そんな・・・
ウチらを助ける為に壊したドアの修理代を、たった一人で払おうとしてるっていうの！？

雄二「ん？ちょっと待て。手帳にバイトの予定が・・・って！なんじゃこりゃ！！」

明久「見せて！」

・・・！！
なによこれ！？
寝る時間すらほとんどないじゃない！
・・・ってか、この、バーテンダーとか雀荘のメンバーって高校生がやっていいものなのかしら？

☆昼休み☆

（ガラッ）

鉄人「おい、吉井弟が目を覚ましたぞ。行ってやれ」

ウチらはみんなで保健室に向かった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

☆保健室☆

（ガラッ）

美波「和也！」

和也「あ、美波さん、みんな・・・」

美波「よかった・・・心配したんだからね」

和也「うん。ごめん」

明久「和也」

和也「兄さん、心配掛けてごめ・・・」

（パシンッ）

兄さんの平手打ちの音が保健室に鳴り響いた

明久「バカ！どうしてこんな無茶するんだ！？なんで相談してくれないの！？家族だろ！兄弟だろ！そりゃ僕は頼りないかもしれないけど・・・だからってこんな無茶して死んじゃったらどうするんだ！！」

和也「・・・ごめんなさい。これ以上迷惑掛けたくなくって・・・」

明久「迷惑？僕がいつ迷惑なんて言った？そんなこと一度も思ったことないよ！」

和也「でも、赤の他人の僕を引き取ってくれて育ててくれて・・・」

明久「・・・それ以上言ったら本気で怒るよ」

和也「！」

明久「赤の他人なんかじゃない！お前は僕の弟だ！たとえ血が繋がってなくても、誰が何と言おうとお前は『吉井和也』。僕の大事な弟だ！！」

和也「・・・う、うわあああん。ごめんなさい・・・ごめんなさい」

僕は・・・涙が止まらなかった
・・・本当はわかってた・・・
兄さんに頼れば助けてくれるだろうし
甘えれば受け止めてくれるって
でも・・・育ててもらった恩とか、自分は血が繋がってないとかい
うことからなんとなく後ろめたい気持ちがあって頼れなかった
甘えられなかった

明久「もう無茶しない？」

和也「うん」

明久「困ったときはちゃんと相談するんだよ？」

和也「うん」

明久「よろしい。じゃ、教室に戻ろう」

和也「うん。・・・みんなも、心配掛けてごめんなさい」

秀吉「気にするでない」

瑞希「無理しちゃだめですよ」

康太「・・・（コクコク）」

美波「困ったときはウチらにも相談しなさいよ。友達なんだから」

和也「うん。わかった」

雄二「さて、教室に戻るぞ」

そう言って僕達は教室に戻った
僕はその日のうちに事情を説明しバイトを全て辞めた

ちなみにドアの修理代は雄二君の脅はｋ・・・説得により学園長が
払ってくれることになった
そのかわりプール掃除をしなければならなくなったけど・・・・

☆おまけ☆

雄二「ババア、入るぞ」

学園長「失礼なガキだね。何の用だい？」

雄二「これを払ってほしい」

学園長「？ドアの修理代？なんだいこれは？」

雄二「Ｆクラスの女子が誘拐されたときに和也が助ける為に蹴り壊
したものだ」

学園長「・・・ドアを蹴り壊すって一体どんな脚力をしてんだい？」

雄二「ま、鉄人に勝つぐらいだからな。それぐらいできても不思議じゃないさ」

学園長「で、なんでアタシがコレを払うんだい？」

雄二「もともとテメエの過失だろうが」

学園長「それで説得に来たわけかい。・・・ちなみに断ったら？」

雄二「腕輪の欠陥を全校生徒に言いふらす」

学園長「それは説得じゃなくて脅迫さね！」

雄二「んなことはどうでもいい。で？どうする？」

学園長「・・・まあいいさね。あんたらには迷惑掛けたしね。コレぐらい払おうじゃないか」

雄二「ありがとうございます。学園長」

学園長「急に敬語を使うんじゃないよ。気持ち悪い。そのかわりプールの掃除をやっておくれ。プール掃除で１５万。ついでに掃除が終わったら、ご褒美としてプールを自由に使っていいよ。悪い話じゃないだろう？」

雄二「・・・いいだろう。その条件を飲もう」

学園長「よろしい。用が済んだらとっとと失せな」

第四十問　僕とバイトと兄の怒り（後書き）

弟を心配し説教する明久と仲間のために動く雄二を描いてみました

第四十一問　僕とプールと水着の楽園　前編（前書き）

長くなりそうなので二つに分けることにします

第四十一問　僕とプールと水着の楽園　前編

ＳＩＤＥ　和也

金曜日の放課後、僕達は明日のプール掃除のことで話し合いをしていた

雄二「じゃあ明日の朝９時に学校に集合だ。いいな？」

和也「うん。ごめんね。僕のせいで・・・」

明久「いいからいいから」

康太「・・・気にするな」

秀吉「ワシも助けてもらった恩があるからのう」

みんな優しいなぁ

（ガラッ）

美波「あれ？あんたたち、まだいたの？」

瑞希「なにしてるんですか？」

和也「明日のプール掃除の話し合いだよ」

瑞希「?プール掃除ですか?」

美波「・・・アキ、アンタ今度は何やったの?」

明久「ちょっと待って!なんで僕のせいだと決め付けるの!?」

和也「違うんだ、美波さん。今回は僕のせいで・・・」

☆事情説明中☆

瑞希「じゃあドアの修理代は出してもらえたんですね。良かったです」

美波「で、代わりにプール掃除をするわけね。そういうことならウチも手伝うわ」

瑞希「あ、私も手伝います」

和也「え?でも悪いよ」

美波「いいのよ。それにそもそもドアを壊したのだってウチらを助ける為だったんだし・・・」

瑞希「助けてもらったお礼だと思ってください」

二人とも優しいなぁ
僕は友達に恵まれてるなぁ

雄二「あ、ちゃんと水着を持って来いよ」

美波「え？」

瑞希「み、水着ですか？」

和也「？別に水着じゃなくてもいいんじゃない？」

雄二「掃除中に服が濡れたら困るだろう？・・・一つ言っておくと、秀吉は持ってくるぞ。水着姿を和也と明久に見せるために、な」

？

雄二君は何を言ってるんだろう？

美波「ひ、卑怯よ木下！自分は自信があるからって！」

瑞希「そ、そうです！木下君はズルいです！」

秀吉「？？？お主らは何を言っておるのじゃ？」

秀吉君が困惑の表情を浮かべている
二人ともどうしたんだろう？

雄二「で、どうするんだ二人とも？」

美波「持って行くわ。その、イロイロと準備をして・・・」

瑞希「そ、そうですね。準備は大事ですよね」

準備？

なんの準備だろう？

和也「みんな水着なら僕も水着でやろうかな？」

美波＆康太（（やった！））

明久「じゃあ買いに行かなくちゃいけないね。和也は水着持ってないでしょ？」

和也「あ、そっか。じゃ、今から買いに行くから先に帰るね」

雄二「おう、またあした」

その後、僕はデパートに行き、ハーフパンツとパーカータイプの上着を購入し家に帰った

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

和也が先に帰った
さて、ウチも帰ろうかな？
そう思ったその時

明久「・・・ここまでは作戦通りだね」

雄二「・・・そうだな、あとは明日を待つばかりだ」

？

何を言ってるのかしら？
このバカとゴリラは・・・

雄二「おっと、そうだ。明日だが、掃除した後にプールを自由に使っていいそうだ。だから昼飯を持って来いよ」

秀吉「む、そうじゃったのか」

？

なんで最初に言わなかったのかしら？

瑞希「あ、じゃあ、私、皆さんの分のお弁当を・・・」

全員「「「「全力で遠慮します！！」」」」

瑞希「あぅ、酷いです・・・」

危なかった・・・

あんな食物兵器食べさせられたら命がいくつあっても足りないわ

美波「じゃ、ウチも帰るわね」

瑞希「あ、はい。また明日」

さて、どんな水着にしようかな・・・

・・・やっぱり和也も胸が大きい方が好きなのかな・・・

そんなことを考えてるうちにいつの間にか家に着いていた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

☆翌日☆

和也「みんな、おはよう」

秀吉「うむ、おはようじゃ」

僕と兄さんがプールサイドに行くとそこには雄二君と康太君と秀吉君と瑞希さん、それに翔子さん、優子さん、利光君が・・・って、あれ？

和也「なんでＡクラスのみんなが？」

久保「僕は昨日の帰りに明久君に会って話を聞いて手伝いに・・・」

優子「私は秀吉から話を聞いたの。まぁ、弟を助けてもらったお礼みたいなものよ」

和也「みんなありがとう」（ニコッ）

久保＆優子「「／／／」」

優子「（あ、相変わらず凄い破壊力だわ）」

久保「（か、可愛・・・ハッ！ダメだ！僕には明久君が・・・）」

康太「・・・」（パシャパシャパシャ）

和也「？そういえば翔子さんはどうして・・・いや、愚問だったね」

翔子「・・・私は雄二がいるならどこにでも行く」

・・・だと思った。
それにしてもみんな本当にいい人だなぁ
ホント、僕は友達に恵まれてるなぁ

優子「（美少年の水着姿・・・見逃すわけにはいかないわ）」

久保「（明久君と一緒にお掃除。・・・なんて幸せなんだ）」

？「お兄ちゃん、バカなお兄ちゃんおはようですっ！」

美波「和也、アキ。おはよう」

明久「あ、おはよう。葉月ちゃんも来たんだね？」

美波「家を出る時に見つかって、どうしてもついてくるって駄々こねてきかないもんだから・・・」

葉月「葉月もお掃除のお手伝いするです」

和也「葉月ちゃんも手伝ってくれるの？ありがとう」（ナデナデ）

葉月「えへへ」

・・・？

なんか視線を感じる

美波「・・・」（じー）

→　羨望の眼差し

？

なんで美波さんはこっちを見てるんだろう？

雄二「さて、さっさと始めるか。着替えたらここに集合だ」

☆数分後☆

男性陣は着替え終わってプールサイドに集合している

・・・それにしても

和也「なんで秀吉君は女性物の水着を着てるの？」

秀吉「・・・聞かないでほしいのじゃ」

※なぜなのか？それは原作３．５巻１９８ページ参照※

明久「女性陣は遅いね」

和也「仕方ないよ。女の子はイロイロと大変なんだよ。きっと」

雄二「お、誰か来たぞ」

ふむ、この気配は・・・
やっぱり葉月ちゃんだ
どうやら学校のスクール水着のようだ

明久「どどどどうしよう雄二!?あれってスクール水着だよね!?そんなものきた小学生と居て逮捕されないかな!?」

康太「・・・弁護士を呼んで欲しい（ボタボタ）」

和也「そんなに取り乱さなくても・・・」

葉月「お兄ちゃんたち、お待たせですっ」

？
水着の中に何か入れてるのかな?
胸にしては位置が明らかにおかしいし・・・

明久「懲役は2年程度で済みそうだね」

康太「・・・実刑はやむをえない（ボタボタ）」

・・・今のこの二人に冷静さを求めるのは無理な話か・・・

美波「こら葉月！お姉ちゃんのソレ、勝手に持って行ったらダメでしょ！？返しなさい！」

美波さんが現れた
何を慌ててるんだろう？

康太「・・・パッド」

明久「ほぇ？」

葉月「あぅ、ずれちゃいました」

葉月ちゃんが水着の中に手を入れてゴソゴソしてる
どうやら胸元にパッドを入れてたようだ
ん？美波さんが返しなさいって言ってたってことはこれは・・・

美波「うぅぅ・・・せっかく用意してきたのに・・・葉月のバカ・・・」

何かをぶつぶつと呟いてる美波さん
それにしても・・・・

美波さんの水着姿・・・可愛いなぁ

美波「な、何よ。やっぱりこの格好どこか変なの・・・？」

和也「え？あ、えっと・・・／／／」

どうしよう・・・
見惚れてましたなんて言えないよ・・・

雄二「なんだ和也？見惚れてたのか？よかったな島田。お前の水着姿を意識してるみたいだぞ」

美波「あ、そ、そうなの・・・？素直に言ってくれればいいのに・・・／／／」

なるほど
やっぱり素直に褒められた方が女の子は嬉しいんですね
でもなんか恥ずかしいなぁ・・・

和也「え、えっと・・・／／／」

明久「美波の胸、小さいね」

和也「ちょっと兄さん！何言ってんの！？こんなによく似合ってて綺麗なのに・・・って、あっ！」

美波「き、綺麗って／／／／」

しまった！つい本音が・・・
ど、どうしよう！？
美波さんの顔が真っ赤になってる・・・

和也「ち、違うんだよ美波さん！これは、その・・・つい本音が出ちゃっただけで・・・」

雄二「落ち着け和也。焦って墓穴掘ってるぞ」

しまったぁぁぁ！
僕としたことが・・・

和也「／／／」

美波「／／／」

葉月「お兄ちゃんとお姉ちゃん、お顔が真っ赤です」

和也「ちょ、は、葉月ちゃん！」

美波「あ、あのさ、和也・・・その・・・ウチの水着・・・似合ってる？」

和也「え?あ、うん。とっても／／／」

美波「で、でもウチ・・・胸、無いよ?男の人って胸が大きい人が好きなんじゃないの?」

和也「そうなのかな?僕はあんまり気にしないけど・・・」

美波「そ、そうなんだ・・・（だったらウチにもチャンスが・・・）」

男の人の好みを気にするってことは・・・
美波さんの好きな人はこの中にいるのかな?
・・・なんでこんなに気になるんだろう?

葉月「お姉ちゃん、これ、返すです」

そう言って葉月ちゃんが出したのはさっきのパッド

美波「もういいわ。葉月にあげる」

?

さっきまであんなに返しなさいって言ってたのに・・・
急にどうしたんだろう?

久保「みんな、掃除道具を取ってきたよ。早速始めようか」

利光君、さっきから姿が見えないと思ったら、掃除道具を取りに行ってたんですね

和也「あ、でもまだ瑞希さんたちが・・・」

瑞希「え?私がどうかしましたか?」

優子「あんたらがイチャついてる間にとっくに準備できてるわよ」

翔子「・・・準備万端」

い、いつの間に・・・
僕が気配で気付かないなんて・・・
どうやら相当動揺していたらしい

そんなこんなで僕達はプール掃除を始めた

第四十二問　僕とプールと水着の楽園　後編（前書き）

うまく話がまとまらず間があいてしまいました

優子と久保を出してはみたものの・・・

あんまり出番がないですね

うまくいかないものですね・・・

第四十二問　僕とプールと水着の楽園　後編

ＳＩＤＥ　和也

明久「終わったね」

和也「意外と早く終わったね」

まさかこの広いプールの掃除を昼前に終わらせれるとは・・・
・・・それにしても・・・

和也「雄二君、なんでプールに水入れてるの？」

雄二「あ？ああ、お前には言ってなかったが・・・実はこの後、プールを自由に使っていいことになってる」（ニヤリ）

明久「そういう訳だから思う存分泳げるよ」（ニヤリ）

・・・（ダッ）

※和也は逃げ出した※

雄二「おっと、逃げられないぜ」

明久「いい機会だから泳ぎの練習しようね？」

※しかし、周りを囲まれてしまった※

和也「ひ、酷いよ！兄さん、雄二君！僕を殺す気なの！？」

雄二「学校のプールで死ぬわけあるか！」

明久「まぁまぁ、二人とも落ち着いて。今ちょうどお昼だし・・・先にお弁当を食べようよ」

お弁当？

・・・！そうだ！

和也「そ、そういえば僕、お弁当持ってきてないから、ちょっとコンビニまで・・・」

雄二「行かなくていいようにちゃんと用意しておいたから安心しろ」

くっ！ダメか・・・

美波「ねえアキ、もしかして和也って・・・」

明久「うん・・・泳げないんだ。だから泳ぎの練習をさせようと思

って雄二に相談してたんだ」

瑞希「そうだったんですか」

秀吉「それにしても雄二よ。今回は随分優しいのう？」

雄二「苦手なことを克服する友人を応援するのは当然だろ」

・・・このセリフだけ聞くと友達想いの良い人に聞こえるけど・・・

和也「・・・本音は？」

雄二「召喚大会で負けてコスプレさせられた腹いせだ」

・・・やっぱり雄二君は悪意の塊だ

明久「和也だって泳げるようになりたいでしょ？」

和也「・・・別に泳げなくっても困らないもん」

明久「そんなこと言って・・・そんなんじゃ彼女ができても海に行ったりできないじゃないか」

和也「・・・だったら僕、一生彼女作らない」

美波「そ、そんなのダメよ！」

？

なんで美波さんが慌ててるんだろう？

美波「一生恋愛しないなんてそんなのダメ。泳ぎはウチが教えてあげるから一緒に頑張ろ」

真剣な目をした美波さんがそう言った

急にどうしたんだろ？

『一生恋愛しない』ってのが友達として放っとけないのかな？

・・・美波さんが教えてくれるのか・・・

・・・ちょっとだけ・・・頑張ってみようかな・・・

和也「・・・じゃあ、ちょっとだけ・・・」

美波「よろしい」

明久「二人とも、早くお弁当食べようよ」

兄さんたちのほうに目を向けるとみんながお弁当を広げて待っていた

どうやらみんなで広げて、少しずつ摘んで食べるようにしたらしい

和也「それにしても凄い量だね・・・」

翔子「・・・雄二に頼まれてたくさん作った」

優子「代表、もらっていい？」

翔子「・・・どうぞ。みんなもたくさんあるから食べて」

和也「じゃ、僕も貰うね」

（ヒョイ）

そう言って僕は一番手前の弁当箱からおかずを取り・・・

翔子「？・・・それは・・・」

（パクッ）

口に入れ・・・

翔子「・・・私の作ってきたものじゃない」

瑞希「あ、それは私が作ったものです」

（ブッ、ゲホッゲホッ）

吐き出した

美波「吐きなさい！今すぐ全部吐きなさい」（バシッバシッ）

美波さんが必死になって僕の背中を叩く

秀吉「大丈夫かの？」

和也「・・・なんとか」

めまいと吐き気と『背中に激しい痛み』があるけど大丈夫みたいだ

優子「姫路さんって料理苦手なの？それにしても騒ぎすぎじゃない？」

翔子「・・・大袈裟」

久保「いくらなんでも作ってきた人の前でそれは失礼だろう？」

雄二「じゃあ、久保、食ってみろよ」

なんて恐ろしいことを・・・

利光君はおかずを一つ手に取り口に入れ・・・

久保「ふむ、甘いような辛いような苦いようなしょっぱいような斬新な味わいが・・・ゴパァ」

（バタン、ガクガクガク）

食べたものを吐きだし、倒れ、小刻みに震えだした

優子「・・・前言を撤回するわ」

翔子「・・・ごめんなさい」

和也「・・・瑞希さん、今回は何を入れたの？」

瑞希「え、えっと・・・硝酸を少し・・・」

また、化学薬品を入れたんですか！？

あ、優子さんと翔子さんが青ざめてる

美波「み～ず～き～？」

和也「Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩが足りなかったのかな～？」

（ズルズル）

僕と美波さんは瑞希さんを裏に連れて行き、しっかりとお説教をした

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

瑞希「ごめんなさいごめんなさい」

久保「ま、まあ失敗は誰にでもあるさ。気にしないでくれたまえ」

お説教終了後
とりあえず瑞希には久保に謝るように指示した
・・・それにしても・・・

和也「・・・」（ブルブルブル）

プールサイドで和也が震えてる
・・・そんなに怯えなくても・・・
しかもまだ水に入ってないし・・・

雄二「おっと、手が滑った」

（ドンッ）
→和也を突き飛ばす音

和也「！！」

（バシャン）

→和也がプールに落ちる音

美波「ちょっと坂本！何するのよ！」

雄二「いつまでたっても入らねえから手助けしてやっただけだろ？入っちまえばじきに馴れるだろ」

美波「で、でも・・・」

翔子「・・・雄二」

雄二「ん？」

翔子「・・・和也、浮かんでこない」

和也「・・・ゴボゴボゴボ」

美波「か、和也！」

☆数分後☆

和也「・・・もうヤダ。お家に帰る」（ガタガタガタ）

美波「この、バカゴリラ！トラウマ増やしてどうするのよ！！」

雄二「・・・すまん。まさかここまでとは思わなかった」

仕方ない
とりあえず水に入れるところから・・・

美波「ほら和也。もうちょっと頑張ろ?ゆっくりでいいから」

和也「・・・（コクリ）」

和也は恐る恐る水に入・・・

美春「お姉さま!!どうしてプールに行くなら・・・あっ!」

（ドンッ）
→美春が和也にぶつかる音

和也「!!」

（バシャン）
→和也がプールに落ちる音

和也「・・・ゴボゴボゴボ」

美波「か、和也!」

☆数分後☆

和也「・・・」（ガタガタガタ）

美波「ミ～ハ～ル～。アンタ、邪魔しに来たのかしら？」

美春「ち、違います！ワザとじゃないんです！」

美波「とにかく、邪魔しないで大人しくしてなさい！さもないと・・・」

美春「さ、さもないと・・・？」

美波「ウチは明日からアンタのことを清水さんって呼ぶわ」

美春「うぅ、わかりました・・・（まぁお姉さまと我が娘の戯れる姿を眺めるのも悪くないですわ）」

さて、どうしよう

泳ぐ練習どころか、まだ水に入ってすらない・・・

美波「和也、もうちょっとだけ頑張ろうよ？」

和也「・・・（ブンブン）」

ダメだ

完全に怯えちゃってる

なんとかしなきゃ・・・

美波「和也、ウチの手を掴んでていいからちょっとだけ入ってみようよ」

和也「・・・離しちゃやだよ?」

美波「わかってる。絶対離さないから」

・・・・・・・・・（チャプ）

よし!第一関門突破!

美波「じゃ、少しずつでいいから泳いでみましょ。大丈夫。絶対に離さないから」

和也「・・・（コクン）」

そして、和也は少しずつ顔を水に近づけ・・・

愛子「かーずーやーく～ん♪」

（ギュ）

→工藤さんが和也に抱きつく音

和也「!!」

（ゴボゴボゴボ）
→和也が沈んでいく音

☆数分後☆

和也「・・・」（ガタガタガタ）

美波「さて、工藤さん。ナニカイイノコスコトハアルカシラ？」

愛子「や、やだな～こんなの軽いスキンシップで・・・」

美波「・・・（ギロッ）」

愛子「ひっ、ごめんなさい！」

はぁ、全く・・・
これじゃ全然練習できないじゃない・・・

美波「和也・・・」

和也「・・・（ブンブン）」

早い・・・
まだ何も言ってないのに・・・

美波「もうちょっと頑張ろうよ」

和也「・・・・」

美波「終わったらご飯作ってあげるから」

和也「・・・（ピクッ）」

あっ、反応した！もう一息・・・

美波「ハンバーグ作ってあげる」

和也「・・・もうちょっとだけやってみる」

よし、作戦成功

それにしても・・・

ウチの作ったハンバーグ、気に入ったのかな？

ちょっと嬉しいな／／／

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

ふぅ、疲れた

美波さんのおかげで少しだけ（５ｍ）泳げるようになった
・・・それにしても、美波さんはずっと僕の指導しているせいで全
然遊んでない
・・・なんか申し訳ないな・・・

和也「ごめんね。僕のせいでほとんど遊んでないでしょ？」

美波「そんなこと気にしなくていいわよ。友達なんだから」

和也「で、でも・・・」

美波「じゃあ、あとで勉強教えてよ。世界史と日本史」

和也「う、うん。そんなことでよかったら喜んで」

本当に優しい人だなぁ

秀吉「和也よ。ちょっとよいかの？」

和也「ん？どうしたの？」

明久「４人で水泳勝負することになったから判定して欲しいんだ」

美波「へぇーおもしろそうじゃない。ウチも参加していい？」

愛子「あっ、じゃあボクも！」

雄二「べつに構わんが・・・ビリの奴は今度、全員に昼飯奢りだぞ？」

美波「いいわよ。負けないから」

愛子「うわー、なんか悪いなぁ」

雄二「くっ！もう勝った気でいやがる！」

愛子「美波、マラソンの時のリベンジ、ここでさせてもらうよ！」

美波「望むところよ！」

翔子「・・・雄二がやるなら私もやる」

優子「せっかくだし私もやろうかな」

久保「皆と交流を深めるいい機会だ。僕も参加しよう」

瑞希「わ、私はやめておきます」

葉月「葉月は見てるです」

美春「美春はお姉さまを観ていますわ」

和也「僕も不参加で・・・」

まだ少ししか泳げないし・・・

ってか優子さんと利光君って泳ぎ得意なのかな？

優子「（秀吉には勝つ自信がある）」

久保「（勝っても負けても明久君と食事）」

☆数分後☆

みんながスタートラインについた

和也「位置について、ヨーイ、ドン！！」

（ザバァ）

いっせいに飛び込んだ

みんな速いなぁ

愛子さんと美波さんと康太君ががトップ争いしてる

その後ろに兄さんと雄二君、少し離れて優子さん

最後に秀吉君と翔子さんと利光君だ

・・・おっと戻ってきた

和也「一位愛子さん、二位康太君、三位兄さん、四位雄二君・・・ってあれ？」

？

あれ？

美波さんは？

美波「・・・ゴボゴボ」

（バシャバシャ）

え！？

もしかして溺れてる！？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

くっ！さすがね工藤さん！

土屋もなかなか速いわね

でも、ウチだって負けな・・・

（ピキッ）

え！？

う、嘘！？

あ、足が・・・

・・・ダメ・・・うまく力が入らない・・・

誰か・・・助けて・・・・和也・・・

？「美波さん！」

急に誰かに抱きかかえられた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

和也「美波さん！」

気がつけば僕はプールに飛び込んでいた
そして溺れてる美波さんに近づき・・・

和也「美波さん！大丈夫！？しっかりして！」

美波「ゲホッゲホッ・・・か、和也？」

和也「よかった。大丈夫？」

美波「う、うん。ウチは大丈夫だけど・・・」

？

どうしたんだろ？

美波「和也、泳げないんじゃなかった？」

和也「え？あっ！」

そう、夢中だったから気がつかなかったけど
確かに僕は泳いでた
といっても１０ｍ位だが・・・

和也「ホントだ・・・」

美波「気付いてなかったの？」

和也「う、うん。美波さんが溺れてるのが見えて、助けなきゃって思って、ただ夢中で・・・」

美波「そ、そうなんだ・・・／／／」

？

顔が赤いけど、どうしたんだろ？

和也「とにかくプールサイドに上がろう」

美波「うん」

僕は美波さんを背負ってプールサイドに上がった

美春「お姉様！大丈夫ですか？」

美波「ええ、和也のおかげでね」

愛子「ちょっと引き攣っただけみたいだね」

明久「和也、よく泳げたね？」

和也「無我夢中だったんだ」

雄二「なかなかやるじゃねえか」

葉月「お兄ちゃん凄いです」

秀吉「見直したぞい」

康太「・・・男らしい」

瑞希「愛の力です」（キラキラ）

こんなに褒められるとなんか照れくさいなぁ

美波「和也」

和也「ん？」

美波「ありがとね」（ニコッ）

和也「う、うん／／／」

美波さんは笑顔で僕にお礼を言った
その後、しばらく遊んで僕たちは解散した

ちなみに勝負はノーカウントになった
でも、美波さんがみんなに迷惑をかけたからと言って今度のお昼にみんなにお弁当を作ってくると言い出した
人数が多いので僕も半分作ることにした
・・・なんか死亡フラグ（食物兵器発動）のような気がする

☆おまけ☆

美波「ねぇ和也」

和也「ん？なに？」

美波さんは約束どおりご飯を作りにきてくれた

疲れただろうからいいって言ったんだけど
約束だからと言って聞かないので作ってもらった
ちなみに今は食事が終わって勉強（世界史）を教えているところだ

美波「来週の日曜日、覚えてる？」

和也「うん。如月ハイランドのプレオープンだったね」

美波「覚えててくれたんだ。楽しみにしてるからね」

笑顔でそう言う美波さん
相当楽しみなんだな
かなり大きい遊園地らしいし・・・
遊園地なんていつ以来だろう・・・
・・・ちょっと楽しみになってきたなぁ

第四十二問　僕とプールと水着の楽園　後編（後書き）

今日の成果

和也は５ｍ泳げるようになった（愛の力発動中は１０ｍ）

次回は如月ハイランド編をお送りします

第四十三問　僕と美波と如月ハイランド　前編（前書き）

話がまとまらない&仕事が忙しい&部屋が暑い
などの理由によりかなり間が開いてしまいました
申し訳ありません
とりあえず更新です

第四十三問　僕と美波と如月ハイランド　前編

ＳＩＤＥ　和也

今、僕たちは日曜日に如月ハイランドに行くので集合場所などを話し合って決めているところだ

明久「何話してんの？」

瑞希「美波ちゃん、随分楽しそうですね？」

和也「今度の日曜日に如月ハイランドに行くから集合場所なんかを話してるところだよ」

秀吉「如月ハイランド？ああ、召喚大会の優勝賞品のプレオープンチケットかの？」

和也「そ、美波さんに誘われて行くことになったんだ」

全員「「「「へぇー」」」」（ニヤニヤ）

？

なんでみんなニヤニヤしてんだろ？

美波「そ、そういえば、アキたちも貰ったのよね？誰と行くの？」

瑞希「！（ピクッ）」

明久「ん？ああ、あれなら・・・」

（ガラッ）

雄二「あ～き～ひ～さ～！今日という今日は貴様を殺す！」

明久「ちょ、ちょっと待ってよ！僕が何をしたっていうのさ！？」

雄二「とぼけんな！翔子にプレオープンチケットをあげたのは貴様だろ！？」

明久「ち、違うよ！僕はムッツリーニにあげたんだから！」

雄二「なに？そうなのか？」

康太「・・・ああ、いつも（ムッツリ商会で）世話になってる御礼だと言ってくれた」

雄二「おかしいな・・・じゃあ翔子はどこから・・・」

美波「で？土屋は誰と行くの？」

康太「・・・特にいないから秀吉にあげた」

和也「え？愛子さんは？」

康太「・・・そんな事実はない」（ブンブン）

美波「（他人のことだと鋭いわね）」

瑞希「木下君は誰と行くんですか？」

秀吉「ワシも一緒に行く相手なぞおらんから姉上にあげたのじゃ」

あ、なんとなくわかってきた

つまり

兄さん

←

康太君

←

秀吉君

←

優子さん

←

翔子さん

多分、こういうことだろうな

雄二「・・・翔子の奴一体どうやって・・・」

雄二君はまだ気付いてないみたいですね
相変わらず翔子さんが絡むと冷静な判断ができないんですね
・・・教えるとうるさそうだから黙っとこう

雄二「ん?まてよ・・・たしか和也たちも貰ったはずだよな?」

和也「うん。そうだけど・・・」

雄二「よし、和也。一緒に行こうぜ」

・・・・はい?
コレって僕を誘ったってことだよね?
やっぱり雄二君は・・・

和也「僕にソッチの趣味はないよ!」(ガタガタガタ)

美波「坂本!アンタやっぱり和也を狙ってたのね!?」

美波さんが僕と雄二君の間に割り込んで両手を広げて僕を守るような形になる

明久「このバカ雄二!人の弟に何するつもりだ!」

秀吉「ゆ、雄二・・・お主はやっぱり・・・」

康太「・・・変態」

優子「・・・（じー）」（キラキラ）

瑞希「もしもし翔子ちゃんですか！？坂本君が・・・」

みんなが雄二君を罵倒する

・・・ん？

今、Ｆクラスにいるはずない人がいたような・・・

※探してみよう（笑）※

雄二「そうゆう意味じゃねえよ！和也！小刻みに震えるのはやめろ！島田！『やっぱり』ってなんだ！そして姫路！翔子に電話するのはやめ・・・」

（バンッ）

翔子「・・・雄二。浮気は許さない」

雄二「ご、誤解だ！ぐぎゃあああああぁぁぁ！」

☆数分後☆

和也「つまり四人で一緒に行こうってこと？」

雄二「ああ、翔子も島田もいいだろ？」

翔子「・・・私は別にかまわない」

和也「あれ？僕、美波さんと行くって行ったっけ？」

雄二「違うのか？」

和也「いや、違わないけど・・・」

なんでわかったんだろう？

和也「僕はかまわないよ」

美波「ウチもいいわよ」

雄二「じゃ、決まりだな（よし！４人一緒なら翔子も暴走せずにおとなしくしてるだろう）」

☆日曜日☆

和也「おはよう」

美&翔&雄「「「おはよう」」」

僕が着いた頃にはもうみんな集まっていた
まだ集合時間３０分前なんだけどな・・・

雄二「さて、全員集まったことだし、行くか」

和也「そうだね」

☆如月ハイランド☆

スタッフ「いらっしゃいマセ！如月ハイランドへようこソ！」

到着すると入り口にスタッフが待機していた
日本人じゃないのかな？
出会った当初の美波さんみたいな喋りかたしてるけど・・・

スタッフ「本日はプレオープンなのデスがチケットはお持ちですカ？」

和也&翔子「「はい」」

スタッフ「！」

僕と翔子さんがチケットを渡すとスタッフの人は驚いた表情をみせたどうしたんだろう?

翔子「・・・そのチケット使えないの・・?」

スタッフ「イエイエそんなコトはないデスよ?ただ・・・」

和&美&翔&雄「「「「?」」」」

スタッフ「お客様がお持ちにならレたチケットはプレミアムチケットで、ウェディング体験ができるのですが・・・先着一組様となっておりまシテ・・・」

なるほど、二組同時に来たから困ってるんですね?

和也「じゃ、雄二君たちがやりなよ。翔子さんもやりたいみたいだし」

翔子「・・・(コクコク)」

雄二「お、お前らこそ興味あるんじゃないのか?ほ、ほら。島田もやりたいみたいだぞ?」

美波「べべ、別にウチは・・・///」

このままじゃ決まりそうにないですね

スタッフ「クジを用意しますので誰か引いてもらえマスか？」

雄二「よし、和也！いけ！」

和也「え？僕？」

雄二「ああ（過去に福引で温泉旅行を引き当てたほどの運の持ち主だしな）」

※第二十七問参照※

雄二「翔子。残り物には福があるということわざがあるぞ？」

翔子「・・・和也、引いて」

スタッフ「では、どうゾ」

筒の中に二本の棒が入ってる
僕はそのうちの一本を引き抜く・・・・

和也「・・・ハズレだね」

翔子「・・・やった」

美波「・・・（残念）」

雄二「ちくしょおおおぉぉ！！」

和也「まぁまぁ。翔子さんも喜んでるみたいだし・・・ね、美波さん？」

美波「え？あ、うん。そうね・・・」

？

なんか元気ないな？
ひょっとしてやりたかったのかな？
ウェディングドレスは女性の憧れって言うし・・・

和也「あの、ちょっとお願いしたいのですが・・・ゴニョゴニョ」

スタッフ「ふむふむ、ソレ位ならナントカなりマスよ？

和也「じゃ、お願いします」

スタッフ「わかりましタ。用意しておきマス」

美波さんがこれで満足してくれればいいけど・・・

スタッフ「ではマズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

？「お待たせしました。カメラです」

別のスタッフがカメラを・・・

・・・ん？この気配は・・・

雄二「ん？なんだか見覚えが・・・」

和也「兄さん何やってんだろ？バイトかな？」

雄二「やっぱり明久か！テメエ面白いことしてるじゃねえか」

明久？「人違いです！」

雄二「あッ！コラ！待ちやがれ！」

和也「まぁまぁ落ち着いて。ただの偶然かもしれないし・・・」

雄二「んなわけ・・・待てよ、明久だけとは限らないぞ・・・和也、他に誰がいる？」

和也「ん？ちょっと待ってね」

そう言って僕は目を閉じて集中し気配を探る

和也「康太君と瑞希さん・・・後は・・・ちょっと遠くに秀吉君か

な？」

雄二「・・・頼んどいてなんだが・・・お前、本当に人間か？」

和也「？」

雄二「まあいい。で？ムッツリーニと姫路はどこにいる？」

和也「瑞希さんは・・・あ、隠れちゃった。康太君はそこの左から二番目の着ぐるみだよ」

そう言って僕は何体か並んでる着ぐるみの中の一つを指差すると・・・

康太？「！！」（ダッ）

和也「逃げられたね」

雄二「逃がすか！あっ！姫路のスカートが捲れてるぞ！」

康太「！！」（ピクッ）

雄二「いまだ！」

翔子「・・・雄二は見ちゃダメ」（ガッ）

雄二「ぐぁあああッ！俺の頭蓋がぁぁ！」

雄二君の言葉に康太君は反応し振り返る
しかしそれと同時に翔子さんが雄二君にアイアンクローを決めて雄二くんは悲鳴を上げる
・・・それにしても・・・
なんで美波さんは僕の目を隠してるんだろう？

スタッフ「デハ写真を撮りマース。はい、チーズ」

え！？
このタイミングで！？

スタッフ「印刷シテきましタ。はい、どうゾ」

翔子「・・・ありがとう。雄二、私たちの思い出」

雄二「・・・なんだこの写真は！？」

和也＆美波「・・・」

・・・なにこれ！？
ハートの中にアイアンクローを決めてる男女が写っていてハートの周りには天使
さらに『私たち結婚します』と言う文字が大きく書かれていた
・・・撮るタイミング悪すぎです
康太君に撮ってもらったほうがよかったんじゃ・・・

？「ああっ！写真撮影してる！アタシらも撮ってもらおーよ」

？「オレたちの結婚の記念にか？おい係員、オレたちも写ってやんよ」

近くにいたバカップルがスタッフに話しかける

スタッフ「すいませーン、こちらは特別企画でスので・・・」

バカ男「ああ！？いいじゃねーか！オレたちはオキャクサマだぞゴルァ！」

バカ女「きゃーリューターかっこいー！」

随分マナーの悪い人たちですね？
常夏先輩より酷いんじゃ・・・

バカ男「だいたいよぉ、あんなダッセェジャリどもよりオレたちを写した方がココの評判的にも良くねぇ？」

バカ女「そうよ！あんなアタマの悪そうなオトコよりもリューターの方が百倍カッコいいんだから！」

・・・失礼ですが、どう見てもあなた方のほうが百倍カッコ悪いうえに百倍アタマが悪そうに見えます
あ！翔子さんがキレたかな？
戦闘態勢に入った

雄二「お、おい待て翔子！」

翔子「・・・あの二人、雄二のことを悪く言ったから」

雄二「その程度でイチイチ目くじら立てんなって」

ま、そうですね
あの手のバカは放っておくのが一番ですね

バカ男「それにしても最近のガキは発育が悪いんだなぁ」

バカが僕らを見てそう言う
僕のことかな？
・・・自覚はあるけど傷つくなぁ
ま、相手にしないで無視無視っと

バカ女「そうね！あんな胸のない女初めて見たわ」

バカ男「あんなペッタンコのどこがいいんだか」

・・・（ブチッ）

前言撤回
コイツらは確実に息の根を止める
フフフ、ココカライキテカエレルトオモウナヨ？

和也「雄二君、ちょっと待っててもらえるかな？」

雄二「お、おい和也！何を・・・」

和也「大丈夫。すぐ済むから」

僕はそう言って二人の元へ行き

和也「すいません。ちょっといいですか？」

バカ男「あ？なんだよ」

和也「僕の連れが原因で不愉快な思いをさせてしまったようですのでお詫びを何かご馳走したいと思いまして・・・」

バカ男「へぇ、お前は話がわかるじゃねえか」

バカ女「せっかくだし、奢ってもらおうよ」

バカ男「そうだな、よし、案内しろ」

和也「はい。じゃあ、こちらへ・・・」

☆トイレ裏☆

バカ男「あ？こんなとこでなに奢ってくれるんだ？」

・・・自分で連れて来ておいてなんですが・・・
気付きましょうよ！トイレ裏だよ！？なにかあるわけないじゃん！
こいつやっぱり雄二君より百倍・・・いや・・・千倍バカだ

バカ女「ちょっと！なんとか言いなさいよ！」

和也「心配しなくてもたっぷり奢ってあげますよ。僕の拳をな！」

（バキ！ボコボコボコ！ガスガス！ベキベキベキ！）

※残酷な描写の為お見せできません。音声でのみお楽しみください※

まぁ、こんなものかな？
それにしても・・・
この人、やたら怒鳴ってたわりに滅茶苦茶弱かったな・・・
ま、いいや。
僕は返り血をトイレで洗い流し、みんなのところへと戻った

第四十四問　僕と美波と如月ハイランド中編（前書き）

うまくまとまらないな・・・
とりあえず更新です

第四十四問　僕と美波と如月ハイランド中編

ＳＩＤＥ　美波

和也があの二人を連れて行って、なかなか帰ってこない

美波「・・・和也大丈夫かな？」

雄二「・・・ああ、心配だな」

翔子「・・・心配」

美＆雄＆翔「「「殺してなければいいけど・・・」」」

なんせ西村先生と互角に戦うほどの実力だし、本気になったら相手が死んじゃう
そしたら和也は殺人犯・・・
そんなの絶対ダメよ！

和也「おまたせ～」

美波「和也！大丈夫！？怪我はない！？」

・・・まぁ、ないだろうけど・・・

わかってても心配なものは心配なのよ！

和也「大丈夫。あんな雑魚にやられたりしないよ」

美波「無茶しないでね。ウチは悪口言われるより、和也が危険な目に遭うほうがよっぽど嫌なんだから」

和也「うん。心配かけてごめんね」

雄二「・・・こいつら、これでホントに付き合ってないのか？」

翔子「・・・信じられない」

美波「／／／と、ところでアイツラは？まさか殺したりしてないわよね！？」

和也「大丈夫。気絶するまで殴っただけだから」

雄二「それは大丈夫じゃねえだろ！？」

美波「ならいいわ」

雄二「いいのかよ！？」

翔子「・・・和也、グッジョブ」（グッ）

雄二「俺だけか！？俺だけがこの状況をおかしいと思っているのか！？」

和也「まぁまぁ、それより遊びに行こうよ。あのバカ共のせいで遅くなっちゃったし・・・」

美波「そうね。どこから廻る？」

？「そこのお兄さんたち！フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ？」

ウチらがどこから廻るか相談していると、キツネのフィーのキグルミを着た女の子が話しかけてきた

・・・それにしても・・・この声・・・どこかで・・・

ウチがそんなことを考えていると・・・

和也「あ、瑞希さん。バイト？」

和也は瑞希の変装を簡単に見抜いてしまった

フィー「ち、違います！私・・・じゃなくて、フィーは姫路なんて人じゃないよ？見ての通りキツネの女の子だよ♪」

和也「・・・僕は『姫路』なんて一言も言ってないよ？」

フィー「え？あっ！・・・」

・・・ドジだわ・・・

フィー「・・・フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ？」

全員「「「「誤魔化した!?」」」」

美波「（どうしようか？）」

和也「（まさか、まだ誤魔化すつもりとは・・・）」

雄二「（適当に付き合ってさっさと先に進もうぜ）」

翔子「（・・・わかった）」

雄二「じゃあフィーとやら、お前のオススメを教えてもらえるか？」

フィー「あ、うん。フィーのオススメはね、向こうに見えるお化け屋敷だよ」

和也＆美波「「!!」」

雄二「そうか、ありがとう」

フィー「いえいえ、楽しんできてね」

雄二「よし、お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

フィー「ままま待ってください!どうしてオススメ以外のところに行くんですか!?」

・・・どうしてって・・・
この子本気で言ってるのかしら

フィー「そ、そんなの困ります！お願いですからお化け屋敷に行ってください！」

雄二「断る」

・・・もう、何か仕掛けてるって言ってるようなものじゃない

？「そこまでだ！そこのブサイクな男！」

和也「あ、兄さんだ」

雄二「明久か！どうりで頭の悪そうな仕草をしてるわけだ！」

ノイン「失礼な！僕・・・じゃなくて、ノインのどこが頭が悪いって言うんだ！」

和也「・・・兄さん、頭が前後逆だよ」

フィー「あ、明久君！頭が逆です！ああ！小さい子が泣き出しちゃいましたよ！？」

ノイン「うわ、しまった！どうりで前が見えないと思ったよ！」

フィー「早く直さないと和也君たちにバレちゃいます！」

和也「・・・まだ誤魔化せると思ってるのかな？」

雄二「・・・みたいだな」

美波「どうする？」

雄二「そうだな・・・島田、ちょっと協力しろ・・・ゴニョゴニョ」

美波「ふんふん、了解。ｱk・・・ノインちゃん。ちょっといいかしら？」

ノイン「うん。なにかな？」

美波「さっき和也に向かってブサイクな男って言ったわよね？ウチの前で和也をバカにするなんていい度胸じゃない」（ゴゴゴゴ）

ノイン「ち、ちがうよ！僕が言ったのは雄二のことで・・・」

翔子「・・・雄二をバカにするのは許さない」（ゴゴゴゴ）

ノイン「ひっ！そ、それは・・・その・・・」

雄二「そういえば明久。さっきお前がナンパしてた女子大生はどうなった？」

フィー「！明久君！大事な作戦中に他の女の人と・・・」（ゴゴゴゴ）

ノイン「や、やめて！瑞希ちゃん！僕の関節はそっちには・・・ぎゃあああああ」

雄二「よし、邪魔者は排除したし、先に進もうか」

和也「・・・悪魔だ、悪魔がいる・・」

スタッフ「ハイ、すいませーン、お待たせしましタ」

あ、さっきの似非外国人だ

スタッフ「みなサンお化け屋敷に行って下サイ」

雄二「だからイヤだと・・・」

和也「絶対イヤです！！」（ガタガタガタ）

？

あ、そういえば和也こういうの苦手って言ってたな

※第十八問参照※

雄二「・・・気が変わった。お化け屋敷に行くぞ」（ニヤリ）

翔子「・・・雄二が行くなら私も行く」

美波「う、ウチラはやめとこうかな?ほ、ほら、和也も行きたくないみたいだし・・・」

和也「・・・」（コクコク）

ってか、ウチも怖いし・・・

雄二「（島田、お化け屋敷なら自然に和也に抱きつけるぞ）」

美波「和也、お化け屋敷に行くわよ」

はっ!しまった!口が勝手に・・・

和也「うぅ・・・わかったよ」

☆お化け屋敷☆

翔子「・・・雄二」

雄二「・・・なんだ」

翔子「・・・私、少し後悔してる」

雄二「・・・奇遇だな、俺もだ」

雄二&翔子「「コイツ（美波）を連れてきたことを」」

美波「・・・・」（ガタガタガタ）

ウチは入ってからずっと和也にしがみついてる
・・・だって怖いんだもん

雄二「それにしても、和也はあんまり怖がってないな」

和也「僕は『アレ』さえなければ平気だよ」

翔子「・・・アレ？」

和也「女の子の死体」

雄二「・・・随分ピンポイントだな？」

和也「トラウマってやつかな？小学生のときに入ったお化け屋敷で女の子の死体・・・もちろん偽物だよ？・・・それを見て・・・妹のこと思い出しちゃって・・・それで、狂ったように泣き出して・・・一日中吐き続けて・・・」

雄二「！！」

坂本が気まずそうな顔してる・・・
そういえばコイツは和也の過去を少し知ってるんだっけ・・・

翔子「・・・それって１０年前に亡くなったっていう・・・」

和也「あれ?なんで翔子さん知ってんの?この話を知ってんのは・・・」（チラッ）

雄二「お、俺じゃないぞ!」

美波「う、ウチも違うわよ!」

翔子「・・・瑞希に聞いた」

和也「瑞希さんに?」

翔子「・・・去年、優子が弟の事を『あんな出来損ないの弟なんて要らない』って言ったときに『自分の家族に対して要らないなんて言うな!』って和也がキレたことがあった。そのときに瑞希が和也の家族が亡くなってることを教えてくれた」

和也「そういえばそんなこともあったね・・・そっか・・・それで優子さん、すぐに謝りにきたんだ」

☆その様子を監視カメラで見ていた者たち☆

秀吉「そうじゃったか・・・そう言われてみれば去年から急に姉上

が優しくなったのじゃ」

明久「・・・秀吉、この話は・・・」

秀吉「わかっておる。誰にも言わぬから安心するのじゃ」

明久「ありがとう。そろそろ作戦開始だよ」

☆再びお化け屋敷へ☆

雄二「にしても、お化け屋敷にしてはなんの演出もないな？」

たしかに、廃病院を改造しただけあって雰囲気は出てるが、何の演出もない
そんなことを考えていると・・・

？「・・・じの方が・・・より・・・」

？「・・・ね、・・・に興味・・・」

翔子「・・・今の声・・・雄二？」

雄二「ん？そうなのか？」

美波「いいいい今、和也の声も聞こえた！」

和也「落ち着いて、大丈夫だよ」

雄二？『姫路の方が翔子よりも好みだな、胸も大きいし』

和也？『そうだね、僕も美波さんみたいなペッタンコには興味ないし・・・』

・・・・え？

翔子「・・・雄二、覚悟できてる？」

美波「・・・和也・・・アンタもウチのことそんな目で見てたの？」

和也「ちょ、ちょっと待ってよ！僕、そんなこと言ってないよ！」

和也だけはそんなこと言わないって信じてたのに・・・

（バンッ）

？

何の音？

雄二「翔子！何か出てきたぞ！」

坂本が指差した先には釘バットが2本・・・

翔子「・・・気が利いてる。はい、美波」

雄二「畜生!全く趣旨は違うが最強に恐ろしいお化け屋敷だ!」

そう言って翔子はウチに釘バットを1本渡して坂本を追ってどこかに走り去ってしまった

和也「ホントだよ!本当に僕はそんなこと言ってないよ!信じてよぅ・・・」

美波「・・・」

泣き出しそうな顔で和也は言う

・・・嘘をついてるようには見えないわね・・・

だんだん冷静になってきた・・・

落ち着いて考えれば今のはおかしい

あのバカップルが同じようなことを言ったときにあれだけ怒ってくれたのに自分もそんなこと言うだろうか?

☆別地点☆

?「全く、あのバカは・・」

？「あはは、さて、ムッツリーニ君よろしくね」

康太「・・・了解」

（カチッ）

☆再びお化け屋敷☆

（カチッ）

？

また放送？

秀吉『どうじゃ明久よ、ワシの声帯模写は』

明久『完璧だよ秀吉。これなら成功間違いなしだよ』

・・・そうか・・・こいつらの仕業か・・・

・・・ってことは和也は無実？

ど、どうしよう！

明久『！！ひ、秀吉！アナウンスの電源が入ってる！』

秀吉『な、なんじゃと!?ワシは確かに切ったはずじゃ・・・（カチッカチッ）き、切れぬ!壊れておるのじゃ』

和也「・・・美波さん」

美波「は、はい!」

激しい殺気
でもその矛先はウチじゃないみたいだ

和也「ちょっとコレ借りるね」

ウチが持ってた釘バットはいつの間にか和也の手に渡っていた

和也「ちょっとだけ待っててね」

そう言うと和也はどこかに歩き出した

秀吉『どどどどうするのじゃ!こんなの和也に聞かれたらワシらの命の灯火は・・・』

明久『と、とにかく逃げ・・・』

（バンッ）

明久『ひっ！か、和也！』

和也『ミナミサンヲ、バカニシタノハ、キサマラカ？』

秀吉『わ、ワシは明久に頼まれ・・・（ゴキッ）』

明久『ひ、秀吉！？お、落ち着いて和也！僕は二人の為を思って・・・（ゴキッ）』

和也『問答無用』

秀吉&明久『『ギャー』』

・・・ウチが手を下すまでもなさそうね
ってか殺してないわよね！？

和也「ただいま」

美波「・・・殺してないでしょうね？」

和也「大丈夫。ちゃんとみね打ちにしたから」

みね打ち！？釘バットで！？

そ、それより謝らなきゃ・・・

美波「和也！」

和也「ん？」

美波「疑ってごめん」

和也「気にしない気にしない。それより早く出ようよ」

美波「そうね」

ウチらはお化け屋敷を後にした

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＮＯ　ＳＩＤＥ

？「うまくいったわね」

？「でもよかったの優子？弟君がボコられてたけど・・・」

優子「いいのよ愛子。今回のことは秀吉が悪いんだもの」

愛子「ムッツリーニ君も協力してくれてありがとうね。約束通り、今度ボクの写真撮らせてあげるね」

康太「・・・ああ」

愛子「・・・ところでボクたち、なんでこんなに遠くにいるの？」

優子「仕方ないわよ。これ以上近づいたら和也に気付かれるんだもの」

愛子「・・・和也君ってホントに人間？」

優子「・・・さぁ？」

明久たちの知らないところで別働隊が動いていた

第四十四問　僕と美波と如月ハイランド中編（後書き）

原作とは違い、優子と愛子を出してみました
次回は和也と美波がコスプレ！？
お盆休み中には書き上げたいと思います
如月ハイランド編は次回で終了です

第四十五問　僕と美波と如月ハイランド　後編（前書き）

なんかびみょー

第四十五問　僕と美波と如月ハイランド　後編

ＳＩＤＥ　和也

美波「翔子達、どうする？」

気配を探ってみたけどどうやらかなり遠くにいるみたいで察知できない

和也「・・・見つからないなぁ・・・仕方ないからこっちはこっちで廻ろうよ。せっかく来たのに遊べないともったいないし・・・」

美波「そ、そうね。『二人』で楽しみましょ！／／／」

？

なんで強調するんだろ？

まぁいいや

和也「じゃあ、行こうか？」

美波「うん！」

☆数時間後☆

美波「次は・・・」

和也「み、美波さん。ちょっと休憩しよ?」

つ、疲れた・・・
絶叫系、（ジェットコースターなど）ばかりを乗っているので
僕のライフはもうゼロだ
まあ楽しかったからいいけど・・・

美波「そうね、ちょっと休憩・・・あっ・・・」

和也「?」

美波さんが売店の何かを見てる
・・・キツネのヌイグルミ?
欲しいのかな?
・・・色々お世話になってるし・・・プレゼントしようかな?

和也「欲しいの?買ってあげるよ」

美波「え?ちょ・・・」

和也「すいません。これください」

店員「はい、２４８００円です」

高っ！
でももう後には引けない

美波「い、いいわよ！安くないんだし・・・」

和也「大丈夫。バイトした時の分のお金がだいぶ残ってるから。これでお願いします」

店員「お返しが５２００円になります。ありがとうございました」

和也「はい、どうぞ」

美波「あ、ありがとう／／／命より大事にするね！」

・・・いや・・・命を大事にしてください
ヌイグルミは大きくて邪魔になるので入り口付近のコインロッカーに預けた
・・・そういえば、『アレ』の準備はまだかな？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

美波「～♪」

和也からプレゼント貰っちゃった
嬉しいな♪
今度お礼しなくちゃ
なにがいいかな？

和也「・・・さん？」

やっぱり料理？
でも、今までに何度かご馳走してるし・・・
じゃあ、なにか形の残るものを・・・
・・・ってこの子趣味が特にないんだった・・・

和也「美・・さん？」

こ、ここはやっぱり・・・う、ウチの身体で・・・／／／

和也「美波さん？」

美波「ふぁ！」

和也「どうしたの？さっきから何度も呼んでんのに全然反応がないし・・・」

美波「なななななんでもないわよ！／／／」

和也「？」

美波「そ、それよりなにか用があったんじゃないの？」

和也「あ、うん。次はアレに乗らない？」

そう言って和也が指差した先には・・・

美波「観覧車？」

和也「うん。あれって日本一大きいらしいよ。乗ってみようよ」

美波「ええ、いいわよ」

これってチャンス？チャンスよね？

よ、よし、ここで告白を・・・

☆数分後☆

和也「うわー、いい景色だね」

美波「ホント、綺麗ね」

・・・って！景色見てる場合か！？
ああ、もう半分過ぎちゃった
い、言わなくちゃ！

美波「あ、あのさ」

和也「ん？」

美波「え、えっと・・・和也・・・好き・・・・・・・・・・・・な人っている？」

ううう、ウチの根性なし・・・
で、でもこれで和也の好きな人を聞けるかも・・・

和也「？美波さんも兄さんも他のみんなも好きだけど？」

美波「あ、いや、そうじゃなくて・・・・その・・・恋愛対象として・・・よ」

この鈍感野郎が！

和也「んー・・・わかんないや。今までそういうの考えてなかったし・・・」

美波「へ？そうなの？でもなんで・・・」

和也「・・・家族が死んで僕一人生き残って・・・美波さんに怒られるまで、自分だけ生きてていいのか？自分だけ幸せになっていいのか？ってそんなことばかり考えてたから、恋愛とか考えてる余裕がなかったんだ」

美波「・・・」

和也「・・・僕は・・・幸せになっていいのかな？」

美波「そんなの・・・いいに決まってるじゃない！アンタは亡くなった家族の分まで幸せにならなきゃダメよ！」

和也「ありがとう・・・そうだね。一緒にいるだけで幸せな気持ちになれる、そんな人に出会えたらいいな」

美波「和也ならきっと出会えるわよ」

まだ・・・ひきずってたのね・・・

でもまあ、しょうがないか

家族の死なんてそう簡単に割り切れるものじゃないし・・・

・・・あ、もう下に着いちゃった

・・・結局、告白できなかったな・・・

まぁいっか。今はまだこのままで・・・

それにしても・・・

一緒にいるだけで幸せな気持ちになれる人・・・か

・・・ウチだったらいいな／／／

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

美波さんはなんで急にあんなこと聞いてきたんだろう？
もしかして異性の意見を参考にしたかったのかな？好きな人がいるみたいだし・・・
・・・亡くなった家族の分まで幸せに・・・か・・・
（夢の中の）父さんたちと同じこと言ってる
僕にもいつかできるかな・・・
傍にいるだけで幸せになれる、そんな人が・・・

スタッフ「吉井サーン」

あ、似非外国人だ
僕を呼びにきたってコトはアレの準備ができたのかな？
・・・ってか、僕、苗字教えたっけ？

スタッフ「準備が整いまシタヨ」

和也「あ、はい。ありがとうございます」

美波「？準備って？」

和也「それは着いてからのお楽しみ」

☆衣裳部屋☆

美波「ここは・・・」

和也「ウェディング体験できなかったからね。記念撮影だけでもできるように頼んだんだよ」

美波「ええ!?で、でも恥ずかしいし、それに・・・まだ心の準備が・・・」

和也「まぁ、僕が個人的に美波さんのウェディングドレス姿を見てみたいってのもあるん・・・」

美波「着替えてくるわ」

スタッフ「どうぞ、更衣室はコチラデース」

？

急にどうしたんだろう?
やっぱり着てみたかったのかな?

☆数分後☆

和也「・・・／／／」

美波「ど、どうかな？」

和也「凄く似合ってるよ／／／」

美波「ほ、ホント？」

着替えて出て来た美波さんはすごく綺麗だった
元々顔立ちはは可愛いし、背も高く足もほっそりしていてスタイル抜群
胸が小さいことを気にしてるみたいだけど、その不足部分を補ってあまりあるほどの魅力が・・・

美波「和也？」

和也「ふぁ！」

美波「どうしたの？・・・やっぱりどこか変？」

和也「そ、そんなことないよ！つい見惚れちゃって・・・」

ああ！つい本音が！

美波「み、見惚れ・・・／／／」

ヤバイ！
美波さんが顔を真っ赤にしてる
・・・・可愛い／／／／

スタッフ「あの・・・アナタは着替えナイデスか？」

和也「へ？僕？僕は別に・・・」

美波「すぐに着替えさせます！ほら、和也。せっかくなんだから着替えてきなさいよ」

和也「？うん、わかった」

スタッフ「デハ、アチラへどうゾ」

そう言ってスタッフが指差した先には・・・ウェディングドレスコーナー

和也「・・・冗談でも殴りますよ？」（ニコニコ）

美波「ちょ、ちょっと！和也は男の娘なんですよ！（タキシードじゃなきゃダメよ！）」

スタッフ「じょ、冗談デース。コチラへどうゾ」

そう言って今度はちゃんと男子更衣室に連れて行ってくれた
・・・それにしても・・・
いつもの美波さんだったら率先して女装させたがるのに今回は庇ってくれたなぁ
なんか字が違った気がするけど・・・

☆数分後☆

和也「おまたせ。どうかな？」

スタッフ「よくお似合いデスよ。七五三みたいで・・・ゴフッ」

最後まで言い切るまえに美波さんの右ストレートがスタッフの鳩尾を貫いた

美波「すごくよく似合ってるわよ（可愛い）／／／」

康太「・・・撮影する」

和也「あ、康太君」

美波「随分堂々と出てきたわね？」

康太「・・・変装しても和也にはすぐバレるからな。それより撮影」

和也「あ、うん」

康太君に言われて僕たちは二人並んで何枚か撮影してもらい・・・

康太「・・・次は腕を組んで欲しい」

和也「ええ!?それは・・・」

（ギュ）

→和也の腕に美波が抱きつく音

和也「み、美波さん?」

美波「ほ、ほら、早く撮りなさいよ／／／」

康太「・・・了解」（パシャパシャ）

そう言って康太君は再び何枚か撮り始めた

康太「・・・次はお姫様抱っこ」

和也「ええ!?それはさすがに恥ずかし・・・」

美波「ほ、ほら、和也、早く／／／」

・・・準備万端
あれ？
この状況がおかしいと思ってるの僕だけ？

和也「じゃあ、失礼して・・・」

美波「きゃ」

僕は勢いよく美波さんを抱きかかえた

美波「大丈夫？重くない？」

和也「平気だよ」

重いとでも言おうものなら僕の命の灯火は確実に消えることになるだろう

康太「・・・撮りおわった」

和也「じゃ、そろそろ着替えて・・・」

（ガシッ）

美波「和也？せっかくだし、違う衣装も着てみない？」（ニコニコ）

和也「?どういうこと?」

いい笑顔で美波さんが僕にそう言った
どういう意味だろう?

美波「さ、行きましょ」

和也「?・・・・・・!!!」

そう言って美波さんの視線の先には・・・ウェディングドレスコーナー

和也「い、いやだ!僕は男の子なんだよ!?」

美波「もちろんわかってるわ。男の娘よね?大丈夫、きっと似合うから」

和也「似合ってたまるかぁ!そ、それにお店の迷惑になっちゃうよ」

スタッフ「面白そうダカラ、オッケーデス」

この似非外国人が!余計なことを・・・
なんとかしなくちゃ・・・

和也「康太君、助けて！」

康太「・・・安心しろ。しっかりフィルムに収めてやる」

和也「この裏切り者ぉぉぉ！！！」

☆数分後☆

和也「・・・屈辱だ・・・」

美波「よく似合ってるわよ」

なんか複雑

・・・それにしても・・・

和也「なんで美波さんはタキシード着てるの？そして後ろの二人はそれで隠れているつもり？」

優子「・・・ほらね？あっさりバレたでしょ？」

愛子「・・・和也君って本当に人間？」

美波「・・・この二人に無理矢理着せられたのよ・・・」

優子さんと愛子さんも来てたんだなぁ

入り口では気配は感じなかったけどなぁ
射程範囲外だったのかな？

康太「・・・」（パシャパシャ）

和也「ちょ、康太君！なに撮ってんのさ！？」

康太「・・・売れる」

和也「売るな！！」

優子「まぁまぁ落ち着いて（いくら？）」

康太「・・・売り上げで今度何か奢ってやる（一枚百円）」

優子「よかったわね（いただくわ）」

康太「・・・とにかく撮影する（まいど）」

愛子「だってさ、二人とも並びなよ」

和也「うぅ・・」

☆数分後☆

和也「・・・僕もう絶対にお婿に行けない」

出来上がった写真を見ながら僕が呟く

優子「安心なさい、そのときはいい人紹介してあげるから」（チラッ）

愛子「そうそう、だから心配しなくても大丈夫」（チラッ）

美波「／／／」

？

なんで二人とも美波さんの方を見るんだろう？

和也「さて、そろそろ行こうか？みんなはどうする？」

康太「・・・俺はまだここでやることがある」

愛子「ボクも」

優子「アタシはこの二人と一緒にいるわ」

和也「そう？じゃ、またね」

そう言って僕たちは式場を後にした

美波「～♪」

美波さんごきげんだなぁ
やっぱりウェディングドレスは女の子の憧れなんですね？
・・・！！
あれ？

和也「あれって翔子さんじゃない？」

美波「え？あ、ホントだ。あれ？坂本は？」

翔子「・・・グスッ」

！？泣いてる？

和也「翔子さん！」

翔子「・・・和也、美波」

美波「どうしたのよこんなところで？ってか坂本は？」

翔子「・・・実は・・」

☆事情説明中☆

和也「つまりあのバカップルに雄二くんのお嫁さんになるって夢を笑われたってこと？」

翔子「・・・（コクン）」

クソッ！あの馬鹿ども！やっぱり息の根を止めておくべきだったか！もう生かしちゃおけねえ！

美波「和也」

和也「止めないで美波さん。あいつらは・・・」

美波「止める？何を言ってるのかしら？」

和也「え？」

美波「ウチを今すぐアイツラのところに案内しなさい！二度と人前に出れなくなるような顔にしてやるわ！」

美波さんもかなりお怒りのようだ

僕は目を閉じ集中し、あの馬鹿どもの気配を探る

・・・！？え！？この気配は・・・

・・・僕たちの出る幕はないようだ

和也「翔子さん、入り口に行きなよ。王子様が待ってるよ」

翔子「・・・雄二が？わかった」

そう言って翔子さんは入り口へと向かって行った

美波「どういうこと？」

和也「今、気配を探ったら雄二くんとあのバカップルが戦ってた。どうやら雄二君もお怒りのようだね」

美波「じゃ、ウチらの出番はないわね」

和也「そういうこと。じゃ、僕たちも帰ろっか？」

美波「うん」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

☆おまけ☆

康太「・・・」（パシャパシャ）

愛子「ムッツリーニ君、まだ撮るの？ボクのウェディングドレスなんか撮ってもつまらなくない？」

康太「・・・そんなことはない。よく似合ってる／／／」

愛子「ふぇ!?あ、ありがと／／／」

優子「（この二人もなかなかくっつかないわね）」

和也たちが去った後も撮影会は続けられていた

第四十五問　僕と美波と如月ハイランド　後編（後書き）

もう一話挟んだ後に強化合宿編に突入しようと思います

第四十六問　僕と空手と同性愛！？（前書き）

微妙な感じになりました

第四十六問　僕と空手と同性愛!?

ＳＩＤＥ　和也

（ガラッ）

秀吉「む?和也ではないか。おはようなのじゃ。」

瑞希「おはようございます。あれ?明久君は?」

和也「西村先生に捕まってるよ。観察処分者の仕事だって」

秀吉「大変じゃのう」

（ガラッ）

?「失礼する、吉井和也はいるか?」

和也「?あ、あなたは確か空手部主将の・・・」

大山「大山だ」

和也「どうしたんですか?空手部の勧誘ならお断りしたはずですが・・・」

大山「考え直してくれないか？」

和也「すいませんが、家事とか色々やることがありますので・・・」

何度も断ってるんだけどなぁ
この人ホントにしつこいなぁ
悪い人じゃないんだけど・・・

大山「なら次の試合だけでいい！お前の力を貸してくれ！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

昨日は色々あったなぁ
・・・思い出したら恥ずかしくなってきた／／／／
でも、和也との距離もグッと縮んだはず・・・
よーし、これからはもっと積極的に・・・
そんなことを考えながら教室のドアを開けると・・・

（ガラッ）

大山「頼む！俺にはお前が必要なんだ！」

・・・和也が２m近くある大男から告白されてた・・・って！
え、こ、告白！？しかも男から！？
で、でも和也は同性愛に興味なんてないはずなんだからきっと平気・
・・

和也「うーん・・・じゃあ一回だけですよ？」

・・・・・は？
いまなんて・・・？
確かに幸せにならなきゃダメって言ったけど・・・
何も男を選ぶことないじゃない！

大山「一回あれば充分だ。俺が（空手の）良さを教えてやる」

（同性愛の）良さですって！？
そんなもの教えさせてなるものですか！

美波「ちょ・・・」

大山「おっと、教室に戻らねば・・・じゃ、今週の日曜日だ。頼んだぞ」

和也「あ、はい」

ウチが止める間もなく男の人は出て行ってしまった

美波「か、和也！いいいいい今のは・・・」

和也「あ、美波さん。おはよう。また誘われちゃった。何度も断ってんだけどね」

美波「で、でも今、オッケー出してたわよね！？」

和也「うん。一回だけって約束でね」

美波「か、和也は・・・その・・・（あの人が）好きなの？」

和也「うん（空手が）好きだよ」

そ、そんな・・・ウチの恋が想いを告げる前に・・・
でも・・・ウチがモタモタしてたのが悪いんだし
和也が幸せならそれで・・・

（ガラッ）

雄二「おはよう。今、大山さんとすれ違ったが・・・和也も誘われたか？」

和也「うん、『も』ってことは雄二君も？」

雄二「ああ、『お前が俺には必要だ！』とか言われたよ」

・・・は？
ふ、二股！？
なによそれ！？最低じゃない！？

（ガラッ）

明久「おはよう。あれ？みんなどうしたの？」

雄二「ああ、和也が大山さんからまた誘われたそうだ」

明久「和也も？僕のところにも来たよ。『お前が俺には必要だ！』って」

さ、三股ですって！？
前言撤回よ！
あんなのに和也は渡せないわ！

雄二「明久も経験があるのか？」

明久「うん、和也と一緒にちょっとだけね。雄二は？」

雄二「俺は（喧嘩に）馴れてるだけだ」

・・・・ちょっと？
今なんて言った？
和也と一緒に？なによそれ！？
兄弟愛！？禁断の恋！？
ってか坂本の馴れてるってなによ！？

美波「ちょ、ちょっと和也！」

和也「？どうしたの？」

美波「か、和也は・・・その・・・経験あるの？」

和也「うん。小学生のときに・・・」

しょ、小学生の時！？
そ、そんなに早く！？

和也「兄さんと一緒に・・・」

アキと！？
禁断の恋？
・・・やっぱり和也が受けなのかしら？

和也「毎日道場に通って習ったんだ」

美波「もうウチには和也がわからない！」

（ダッ）

和也のことは理解してるつもりだったのに！
ウチはその場を走り去った

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

和也「美波さんどうしたんだろう？もうＨＲ始まるのに・・・」

秀吉「・・・お主らは・・・よくそんな曲芸のような会話ができるのう」

瑞希「あ、あはは・・・大丈夫です。美波ちゃんの誤解は後で解いておきますから」

誤解？
なんのことだろう？

☆昼休み☆

僕たちはこの前の約束どおりAクラスのみんなと僕と美波さんが作ったご飯を食べている

※第四十二問参照※

美波「・・・／／／」

和也「・・・美波さん、さっきの・・・」

美波「お願いだからもう忘れて／／／」

？

なんだったんだろう？

まぁいいや

優子「それにしてもあの人まだ諦めてなかったのね」

翔子「・・・しつこい」

秀吉「そんなになのかの？」

瑞希「一年のときはほぼ毎日来てましたよ」

明久「まぁ和也は強いからね」

雄二「清涼祭で鉄人を倒したってのも原因の一つだろうな」

※第三十四問参照※

和也「これで諦めてくれればいいけど・・・」

愛子「それで？和也君は試合に出るのかな？」

和也「うん。先鋒だって。ブランクがあるからちょっと不安だな」

雄二「ま、和也なら大丈夫だろ」

明久「そうだね。で？試合はいつ？」

和也「今週の日曜日だって」

康太「・・・撮影はまかせろ」

久保「君たち、雑談もいいけど早く食べないと昼休みが終わるよ？」

優子「そうね・・・これ和也の手作り？」

翔子「・・・おいしい」

愛子「美波のお弁当も美味しいよ」

美波さんは料理上手ですからね

・・・僕も貰おう

じゃあこのエビフライを・・・

（モグモグ）

うん、今までに食べたことのない不思議な味わいが・・・

（パタッ）

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

和也の手作りか・・・どれどれ・・・

・・・おいしい・・

さすがね、毎日家事をしてるだけのことはあるわ

ウチも頑張らなくちゃ

（パタッ）

？

・・・・！！！

美波「か、和也！？」

和也がエビフライを食べて倒れてた

ど、どうしよう！ウチのせい！？

なにか変なもの入れたかしら

・・・って、あれ？
ウチ、エビフライなんて作ったっけ？
ウチは和也の食べかけのエビフライを手に取り・・・

（クンクン）

！！！！

な、なにこれ！？
鼻にツンとくる、ものすごい異臭が・・・
周りを見渡すと・・・
みんなが慌てふためいている中・・・
目をそらしてるピンクのウサギの姿が・・・
なるほど・・・ハンニンハ、アイツカ？

美波「み・ず・き？ちょっといらっしゃい」

瑞希「み、美波ちゃん、おおお落ち着いてください。わ、わたしの腕はそっちには曲がりません・・・」

（ゴキッ）

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

☆そして日曜日☆

ＳＩＤＥ　和也

うぅ・・・
久しぶりだから緊張するなぁ・・・

美波「和也」

和也「？あ、みんな、どうしたの？」

明久「応援に来たよ」

雄二「ま、お前は勝つだろうけどな」

康太「・・・撮影は任せろ（和也の胴着姿・・・売れる）」

美波「（後で売って）」

康太「（・・・了解）」

秀吉「そろそろ試合が始まるようじゃからワシらは観客席に行くのじゃ」

瑞希「頑張ってくださいね」

和也「うん。がんばるよ」

みんなわざわざ応援に来てくれたんだ・・・
嬉しいな♪

よーし、頑張るぞ！！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

さて、もうすぐ試合開始ね
先鋒って言ってたから一番最初よね？
それにしても・・・
和也の胴着姿・・・可愛かったなぁ／／／

愛子「ところで空手の勝敗ってどうやって決まるの？」

翔子「・・・それはわからないけど、団体戦のルールは五人組で勝利数の多い方が勝ち、勝敗が決しても大将戦までやるってパンフレットに書いてる」

雄二「和也は勝つとして他の奴が問題だな」

優子「勝ち抜きだったら和也一人で五人抜きだったでしょうけどね」

確かに・・・
和也は鉄じ・・・ゲフンゲフン・・・西村先生を倒すほどの実力者
そんなことできる高校生はそうそういないでしょうね

秀吉「む?始まるようじゃぞ」

あ、ホントだ
和也が出てき・・・
・・・って!
ちょっと待った!!

美波「相手の方、和也の倍近くあるわよ!?いくらなんでも体格差がありすぎじゃない!?」

瑞希「和也君、大丈夫でしょうか?」

和也の相手は身長が２m以上は確実にある大男だった
どう見ても西村先生より大きい
いくら和也でもこれじゃあ・・・

明久「ま、和也なら大丈夫でしょ」

美波「何のんきなことを言ってんのよ!和也が怪我でもしたら・・・」

審判「始め!・・・・・ヤメ!勝者、文月学園吉井選手!」

明久「・・・怪我がなんだって?」

美波「・・・なんでもないわ」

雄二「秒殺かよ・・・」

翔子「・・・すごい」

秀吉「圧勝じゃのう」

愛子「・・・和也君ってホントに人間？」

優子「・・・さぁ？」

うぅ・・・

和也が勝つところ、見逃した・・・

（トントン）

美波「？」

康太「・・・（ビデオカメラで録画しておいた。１本５００円）」

美波「（買った）」

康太「・・・（まいど）」

いい買い物だったわ

秀吉「なんにせよ、これで先制じゃの」

明久「後は四人中二人勝てばいいんだよね？」

瑞希「あの大山さんって人、強そうですよね」

雄二「ま、これなら勝てるだろ」

この試合に勝てば二回戦でもう一度和也の戦う姿が見れる
今度こそ見逃さないんだから！

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

☆帰り道☆

美&明&雄&翔&瑞「「「「「・・・」」」」」

瑞希「・・・え、えっと・・・惜しかったですね？」

雄二「どこがだ！？和也以外全滅じゃねぇか！」

美波「そうよ！全く、せっかく和也が勝ったのに！」

翔子「・・・そういえばウチの空手部は毎年一回戦敗退」

僕と兄さん、美波さん、雄二君、翔子さん、瑞希さんはそんなことを喋りながら帰っている

※木下姉弟、愛子、康太は家の方向が違うのでいない※

結局試合は一勝四敗で僕たちの負け
まぁ、『気』で向こうの方が強いのがわかってたからこうなると思ってたけどね

和也「まぁまぁ、いいじゃない。僕も久々に空手やって楽しかったし・・・」

明久「・・・そのセリフ、大山さんに聞かれたら、また勧誘の嵐だよ」

和也「そ、そうだね。気をつけるよ」

雄二「おっと、俺たちはこっちだ。じゃーな」

翔子「・・・また明日」

※雄二、翔子と別れた※

明久「じゃ、僕は瑞希ちゃんを家まで送って来るから、和也は美波をよろしくね」

和也「あ、うん。了解」

瑞希「じゃ、美波ちゃん、頑張ってくださいね」

美波「／／／」

？

頑張る？何を？

そんなことを考えてるうちに兄さんと瑞希さんは去っていった

※明久、瑞希と別れた※

・・・さっきからなんかＲＰＧみたいなテロップが流れてる気がする

和也「じゃ、行こうか？」

美波「うん、それにしても和也、すごかったわね。秒殺じゃない」

和也「まぁ、相手が油断してくれたからね」

美波「和也、凄くかっこよかったよ／／／」

和也「あ、ありがと／／／」

なんか面と向かって褒められると照れくさいな

美波「ここまででいいわ」

和也「え？でも・・・」

美波「いいから。疲れてるでしょ？さっさと帰ってゆっくり休みなさい」

和也「うん、わかった。じゃあね、美波さん」

美波「また明日ね」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＮＯ　ＳＩＤＥ

？「・・・一体私はどこで間違えたのだ・・・」

商店街の中、５０代の男が呟く

和也「・・・じゃあね、美波さん」

美波「また明日ね」

？「！！あれは吉井和也。・・・そうだ・・・アイツだ・・・アイツのせいだ。アイツさえいなければ全てうまくいってたんだ」

仕事を失い、家族に捨てられた男が呟く

？「アイツは・・・アイツだけは絶対に許さん」

文月学園元教頭、竹原は静かにそう呟いた

第四十六問　僕と空手と同性愛！？（後書き）

作者「この話はぶっちゃけ教頭を再登場させる為だけに書きました」

雄二「ぶっちゃけやがった・・・」

作者「ちなみに教頭が動き出すのは、強化合宿の後になります」

明久「そんなにバラしちゃって大丈夫？」

作者「大丈夫、その頃には誰も覚えてないでしょうから」

雄二「おいおい・・・」

和也「次回から強化合宿編に突入します」

作者「ちなみに原作ブレイクを予定して・・・」

和＆明＆雄「「「これ以上ネタバレさせるんじゃねぇ！」」」

作者「それでは次回もよろしくお願いします」

第四十七問　強化合宿開始（前書き）

強化合宿編はだいぶ原作から離れると思います

第四十七問　強化合宿開始

ＳＩＤＥ　和也

和也「～♪」

秀吉「ごきげんじゃの？なにかあったのかの？」

和也「ん？明日からの強化合宿楽しみだな～と思って」

楽しみだなぁ
みんなで泊りがけなんていつ以来だろう？
・・・ん？
そういえば美波さんの姿が見えないな
どこに行ったんだろう？

雄二「ま、四泊五日なんて修学旅行みたいだからな。確かに楽しみだ。」

和也「（ピクッ）」

秀吉「ふむ、そうじゃの。修学旅行といえば、ワシは小学校、中学校とスキー旅行じゃったが、皆はどこじゃった？」

明久「え、えっと・・・」（チラッ）

瑞希「え、えーとですね・・・」（チラッ）

雄二「?なにオドオドしてんだ?まぁいいや。和也、どこだった?」

和也「・・・行ってない」

雄二「は?修学旅行が無い学校なんてあるのか?」

明久「えっとね・・・雄二、そうじゃなくて・・・」

瑞希「和也君は小学校も中学校も修学旅行当日に風邪で欠席だったので行ったことないんです」

和也「・・・グスン」

雄二&秀吉「「（（地雷踏んだ!））」」

和也「・・・みんなが旅行を楽しんでる中、僕は・・・えっく」

秀吉「わ、ワシらが悪かったから泣き止むのじゃ!」

雄二「頼むから泣き止んでくれ!こんなところ島田に見られたら・・・」

（ガラッ）

美波「・・・」

全員「「「「「・・・」」」」」

美波「・・・和也を泣かせたのは誰かしら」（ゴゴゴゴゴゴ）

明&康&瑞「「「雄二（坂本君）です！」」」

雄二「な、なんてこと言いやがる！・・・ハッ！ま、待ってくれ！ち、違うんだ島田！これには深い訳が・・・ぐぎゃあああああ！俺の腕がああああぁぁ！」

（ガラッ）

鉄人「ＨＲを始めるぞ！騒いでないで席に着け！」

雄二「た、助かった」

美波「坂本、後でぼっきりと話を聞かせてもらうわよ」

雄二「あ、ああ、わか・・・って、ちょっと待て！『ぼっきり』ってなんだ！？普通そこは『じっくり』とか『ゆっくり』だろ！？俺の腕を折る気満々じゃねぇか！」

鉄人「坂本、静かにしろ」

雄二「俺が悪いのか！？」

鉄人「さて、明日から始まる学力強化合宿だが、大体のことは今配ってるしおりに書いてあるので確認しておくように。それから集合

場所だが・・・」

おっと、泣いてる場合じゃない
ちゃんと聞いておかなくちゃ・・・
Aクラスは確かリムジンバスって言ってたな
となるとFクラスはどうやって・・・

鉄人「いいか、他のクラスと違って我々Fクラスは・・・現地集合だからな」

FFF「「案内すらないのかよっ!?」」

・・・予想の遥か上をいきましたね
でもまぁやっぱり楽しみだなぁ
・・・また風邪引かないように注意しなくちゃ

☆翌日☆

・・・よかった。風邪引かなくてホントによかった・・・
僕たちは今、目的地に向かう電車の中にいる

瑞希「あと二時間くらいはこのままですね」

二時間か・・・長いなぁ
退屈だな・・

和也「美波さんは何読んでるの？」

美波「ん、これ？心理テストの本。百円均一で売ってたから買ってみたんだけど意外と面白いの」

和也「へぇ～」

雄二「面白そうだな」

明久「美波、僕たちにその問題出してよ」

美波「うん。いいわよ」

丁度良い暇つぶしになりそうだ

美波「それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げてください。？緑　？オレンジ？青』」

明久「ん～僕は『緑→秀吉。オレンジ→美波。青→瑞希ちゃん』って感じかな」

雄二「俺は『緑→秀吉。オレンジ→姫路。青→翔子』だな」

美波「ふ～ん・・・和也は？」

和也「ん～そうだなぁ・・・」

美波「・・・（じー）」

？

なんでそんなに注目してるんだろう？

和也「僕は『緑→秀吉君。オレンジ→瑞希さん。青→美波さん』かなぁ」

美波「ふぇ！？／／／」

？

なんで赤くなるんだろう？

美波「ち、ちなみに・・深い理由はないんだけど・・なんでウチが青なの？」

和也「え、えっと・・・なんとなくかな？パッと思い浮かんだって感じで・・・」

美波「そ、そうなんだ・・・／／／」

・・・ごめん美波さん。僕、嘘ついた・・・でも、仕方ないんだ

だって・・・ウチに泊まった時に見た下着の色が青だったから連想したなんて言ったら間違いなく僕は八つ裂きにされてしまうだろうから・・・

明久「ところで今ので何がわかるの？」

美波「え？えっと・・・」

雄二「どれどれ？緑は『友達』、オレンジは『元気の源』、青は・・・」

美波「きゃあああ」

（ビリビリビリ！）

美波さんが突然、悲鳴をあげながら本を破った

和也「ど、どうしたの？」

明久「雄二、なんて書いて・・・」

雄二「忘れろ！今すぐに忘れろ！今、起こった出来事を全て忘れるんだ！／／／」

雄二君が顔を赤くして叫ぶ

何が書いてあったんだろう？

秀吉「・・・お主ら、次の色でイメージする『異性』を挙げてください。とあったのじゃが、緑でイメージするのは誰じゃ？」

和&明&雄「「「秀吉（君）」」」

秀吉「ワシは男じゃ！！」

おっと、そうだった

瑞希「あ、あの、美波ちゃん、『青で連想する異性』って・・・」

美波「あ、あのね・・・ゴニョゴニョ／／／」

瑞希「ふぇ！？／／／」

美波さんが何かを耳打ちすると瑞希さんの顔は真っ赤になった

ホント、何が書いてあったんだろう？

美波「き、気を取り直して、次いくわよ／／／」

ま、いっか

聞いても教えてくれそうにないし・・・

美波「『1から10の数字で今あなたが思い浮かべた数字を順番に2つ挙げてください』だって」

和也「ん～・・・8と10かなぁ」

雄二「5と6だな」

明久「1と4かな」

瑞希「3と9です」

秀吉「2と7じゃ」

・・・あれ？

和也「あれ？康太君は？」

康太「・・・ＺＺＺｚｚｚ」

秀吉「寝てるのじゃ」

明久「起こすのも可哀想だし、そっとしとこうよ」

和也「そうだね」

美波「じゃ、続けるわよ『最初に思い浮かべた数字はいつもまわり

に見せているあなたの顔を表します』だって。それぞれ・・・」

和也→可愛い

雄二→クールでシニカル

明久→ブラコン

秀吉→落ち着いた常識人

瑞希→温厚で慎重

雄二「ふむ、なるほどな」

秀吉「常識人とは嬉しいのじゃ」

瑞希「温厚で慎重ですか～」

和也「なんか大雑把だね」

明久「僕だけピンポイント過ぎない！？」

ってか、男が可愛いって言われても嬉しくないよ！

美波「それで『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だって。それぞれ・・・」

和也→怒ると怖い

雄二→公平で優しい

明久→呆れるほどのブラコン

秀吉→色香の強い人

瑞希→意志の強い人

雄二「秀吉は色っぽいのか」

秀吉「姫路は意思が強いそうじゃな」

瑞希「坂本君は優しいそうです」

明久「なんで僕だけさっきのがエスカレートしてんの!?」

和也「怒ると怖い・・・そうかなぁ?そんなことないと思うけど・・・」

美&明&秀&瑞&雄（（（（（（自覚なしか!?））））））

?

なんでみんな、驚いた顔してこっちを見るんだろ?

康太「・・・・（トントン）」

和也「あ、康太君おはよう」

秀吉「目が覚めたようじゃな」

康太「・・・空腹で起きた」

和也「え?あ、もうこんな時間・・・」

秀吉「確かに良い頃合じゃの。そろそろ昼にせんか?」

明久「そうだね。あまり遅くなると夕飯が入らないし」

瑞希「あ、お昼ですね。それなら・・・」

和也&美波「「瑞希、（さん）?」」

瑞希「だ、大丈夫です!作ったのはお母さんですから」

和也&美波「なら安心だ（ね）」

瑞希「うぅ、二人とも酷いです・・・」

僕たちはそんな会話を繰り広げながら目的地にたどり着いた

全員「「「「「・・・・」」」」」（唖然）

な、なにこれ!?
目的地にたどり着いた僕たちが見たものは大きな赤い城
そして、少し離れた先にある青い城だった

美波「なによこれ・・・」

秀吉「西洋の城のようじゃの・・・」

瑞希「大きいです・・・」

和也「と、とにかく他のクラスのみんなが待ってるみたいだから早く行こうよ」

明久「そうだね」

二つの城か・・・
男子と女子ってことかな?

鉄人「来たな、もうすぐ学園長の話が始まるぞ」

学園長「全員そろったようだね・・・さて、よく来たね。クソじゃりども」

・・・相変わらず教育者とは思えない発言だ

そんなことを考えてる間にも学園長はお決まりの長い話をしている

学園長「・・・とまぁ、堅苦しい話はこれくらいにして・・・あんたらからも見えるだろう?あの二つの城が・・・あれがこの強化合宿のメインイベント『試召大合戦』の会場さね」

試召大合戦?
あのババ・・・ゲフンゲフン・・学園長の思いつきかな?

学園長「まぁ簡単に言えば二年生全員を2チームに分けた試召戦争さね。チーム分けはこの前行った中間試験の結果で決めるよ」

二年生の数は３００人（一クラス５０人）
かなり大規模な戦いになりそうですね
ってか、中間テストの結果ってもう出てたんですね?

学園長「とりあえず、今回の試験の上位五名を発表するさね。一位と二位の人が各チームの代表だよ」

学園長がそう言うと、前の電光板に上位五名が映し出された

『五位、工藤愛子、４０１２点』

生徒「なにぃ！」

生徒「五位で４０００点オーバーだと！？」

美波「工藤さん頑張ってるわね」

和也「康太君に負けたくないから張り切ってるのかな？」

康太「・・・保険体育なら負けない」

『四位、木下優子、４１００点』

和也「優子さんも成績が上がってますね」

美波「清涼祭のときは３５００位って言ってたのに・・・」

秀吉「さすが姉上じゃ」

『三位、姫路瑞希、４４０７点』

明久「さすが瑞希ちゃん」

瑞希「えへへ、嬉しいです」

和也「ってことは二位が利光君で一位が翔子さんかな？」

美波「・・・違うと思うけど・・・」

和也「え？」

『二位、霧島翔子、５２６０点』

雄二「翔子が二位だと？ってことは・・・」

明久「やっぱり・・・」

和也「一位は利光君？」

美波「いやいや、違うでしょ。一位は・・・」

『一位、吉井和也、５９２６点』

全員「「「「和也だよ」」」」

和也「ええ！？」

秀吉「なぜそのような反応ができるのじゃ！？」

美波「そうよ、翔子が二位なら一位はアンタしかいないじゃない」

明久「ってことは和也がチームの代表だね」

和也「ええ!?ぼ、僕には無理だよ!雄二君、代わってよ!」

雄二「代われるわけないだろうが」

和也「で、でも、もし僕が負けたら・・・」

雄二「安心しろ、今回は代表を倒しても終わりじゃない」

明久「え?そうなの?」

雄二「ああ、最初の三日間は各チームで自習、回復試験の受講も自由だ。残り二日間で合戦、二日もあるのに、代表倒して終わりじゃあ時間が空く可能性があるだろ?だから、どっちかが全滅するまで続行。終わらなかった場合は生存者数で勝敗が決定する」

和也「・・・質問なんだけど、なんで雄二君はそんなに詳しいの?」

雄二「この前の代表同士の集まりで聞いてるからだ。各クラスの代表はみんな知ってるぞ。ま、チーム分けまでは知らなかったがな。そういうわけだから代表って言っても形だけだ、そう堅くなることは無い」

和也「うぅ・・・もし同じチームだったらフォローしてよ?」

雄二「わかってる」

明久「もちろんだよ」

秀吉「無論じゃ」

美波「任せなさい」

康太「・・・（グッ）」

瑞希「和也君が一位で、私が三位ですから、私たちは敵同士ですね」

瑞希さんが雄二君が持ってたパンフを見ながらそう呟く
ってかそんなの持ってるなら見せてくれればいいのに・・・

その後の発表で、美波さん、秀吉君、康太君が同じチーム
兄さん、雄二君、瑞希さんは相手チームとなった

※主要キャラのチーム分け※

赤チーム

Aクラス　霧島翔子（2位）
Fクラス　姫路瑞希（3位）
Aクラス　久保利光（6位）
Aクラス　佐藤美穂（7位）
Fクラス　坂本雄二
Fクラス　吉井明久
Dクラス　玉野美紀
Dクラス　清水美春
Eクラス　中林宏美

青チーム

Fクラス　吉井和也（1位）
Aクラス　木下優子（4位）
Aクラス　工藤愛子（5位）
Fクラス　島田美波
Fクラス　木下秀吉
Fクラス　土屋康太
Bクラス　根本恭二
Cクラス　小山友香
Dクラス　平賀源二

第四十七問　強化合宿開始（後書き）

次回よりほとんどオリジナルになります（若干原作も絡みます）

第四十八問　経費の無駄遣い！？（前書き）

ようやく書き終えました
オリジナル要素を入れると難しいですね
とりあえず更新です

第四十八問　経費の無駄遣い！？

ＳＩＤＥ　和也

チーム発表から一時間後
青い城の城内では同じチームのメンバー同士の挨拶が行われていた

優子「和也、美波、秀吉」

愛子「こっちこっち～」

和也「あ、優子さん、愛子さん」

美波「二人とも凄いじゃない。久保君に勝ったんでしょ？」

優子「たまたまよ」

愛子「よく言うよ。『和也には負けない』って死ぬ気で勉強してたくせに・・・」

優子「そ、そういう愛子だって『ムッツリーニ君に保健体育一位の座は譲らない』って張り切ってたくせに」

愛子「まあね。今回もボクがムッツリーニ君を倒すよ！」

和也「無理だよ」

美波「無理ね」

秀吉「無理じゃな」

愛子「ひ、酷いよ！みんなして！ボクじゃ役不足だって言うの！？」

和也「いや、そうじゃなくて、康太君は・・・」

康太「・・・遅くなった」

和也「同じチームだよ」

愛子「そ、そんな・・・」

膝をついてガッカリする愛子さん
そこまでがっかりしなくても・・・

優子「ま、たしかに残念ではあるわね。アタシも現国以外で和也を倒したかったし・・・」

和也「もう負けないよ！」

優子「ふふ、そんなセリフはアタシに勝ってから言いなさい！」

和也＆優子「「・・・」」（バチバチ）

美波「・・・二人の後ろで虎と龍が火花を散らしてる幻覚が見えるわ」

愛子「優子は負けず嫌いだからね～」

康太「・・・和也も」

秀吉「二人ともやめるのじゃ！今は同じチームなんじゃから争ってもしかたなかろう？」

優子「・・・確かにそうね」

和也「・・・ごめん」

秀吉「わかればいいのじゃ」

秀吉君がなんとかこの場を抑えてくれたさすがはこの学園の数少ない常識人・・・いっそチーム代表代わってくれないかなぁ

？「よっ、和也」

和也「？あ、平賀君」（キョロキョロ）

平賀「久しぶりだな・・・ってなにしてんだ？」

和也「べ、べつになんでもないよ」

平賀「・・・玉野も清水も赤チームだから安心しろ」

和也「よかった・・・ホントによかった・・・」

平賀「どんだけ苦手なんだよ・・・ま、いいや。よろしく頼むぜ。代表さん」

和也「あ、うん」

代表か・・・頑張らなくちゃ！

？「おう、和也」

？「久しぶりね、和也君」

和也「あ、根本君に小山さん」

あ、そういえば小山さんに試召戦争のときのこと謝ってないやちゃんと謝らなくちゃ・・・

和也「あ、あの、小山さん・・・」

小山「もういいわよ」

和也「先日の・・・って、え？」

小山「試召戦争のときのことでしょ？そもそも私がＢクラスに加担したのが原因なんだし、事情は木下姉妹から聞いたわ。アナタは最

後まで反対してくれてたんでしょ?だからもういいわよ」

和也「で、でも・・・」

小山「そのかわり、今回はしっかりチームを勝利に導いてもらうわよ。よろしくね。代表さん」

根本「だそうだ。頑張れよ、代表さん」

うぅ・・・みんなして代表代表って・・・

・・・なんだか緊張してきた・・・

SIDE　OUT

SIDE　美波

さっきからみんな和也に挨拶しに来ている

それにしても和也って友達多いわよね

・・・そのうちの何人がライバルなのか・・・気になるわね

和也「美波さ～ん」

優子「美波、コレを何とかして頂戴」

そんなことを考えていると、優子が和也の首根っこ掴んでこっちに

連れてきた

美波「どうしたの？」

優子「代表という肩書きのプレッシャーに押しつぶされそうなのよ」

和也「お願いだから代表、代わってよ！僕には無理だよ！」

優子「だからダメだって何度も言ってるでしょ？」

和也「で、でも・・・」

美波「和也なら大丈夫よ。それにウチもみんなもフォローするから一緒に頑張ろ？ね？」

和也「・・・うん」

優子「（ほらね？和也のことは美波に任せるのが一番でしょ？）」

秀吉「（ホントにのう）」

愛子「（コレ、本当に付き合ってないの？どうみても両想いじゃん）」

康太「（・・・互いに自分が好かれてるなんて夢にも思ってない。和也に至っては自分の気持ちにすら気付いてない）」

愛子「（そっか～。二人とも鈍いんだね）」

康太「（・・・同感）」

優子「（アンタたちもね）」

愛子＆康太「「？？？」」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　赤組

翔子「・・・雄二」

雄二「・・・なんだ？」

翔子「・・・私、このチームをまとめる自信ない」

雄二「・・・奇遇だな、俺もだ」

玉野「かずちゃ～ん！どこ～？」

美春「お姉さまー！どこですかー！？」

佐藤「・・・和也君・・・いない・・・」

中林「（久保君／／／）」

久保「（ああ、明久君がこんなに近くに／／／）」

雄二＆翔子「「勝てる気がしない」」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

高橋「みなさん、強化合宿の説明を行いますので少し静かにしてください」

いつの間にか現れた高橋先生の声が聞こえた
すると、みんな近くの椅子に座り、話を聞き始めた

高橋「では、説明を始めます。まず初日から三日目までは自習及び、回復試験となります。各自、苦手科目を得意な人に教わるなり、得意科目を伸ばすなり、自由に勉強してください」

なるほど、ってことは授業はしないのか
・・・美波さんに数学教わろうかな？

高橋「そして、四日目、五日目に試召大合戦を行います。目印としてわかりやすくする為に、青組は青のハチマキを頭に巻いてもらいます。基本的なルールは試召戦争と同じですが、今回は代表が倒されても続行、先に全滅させたチームが勝ちとなります」

この辺は雄二君に聞いた通りだね

高橋「ちなみに勝利チーム全員に図書券3千円分が進呈されます」

美波「あの学園長にしては随分太っ腹ね？」

優子「聞いた話によるとこの合戦を撮影して学園のホームページにＰＶとして載せるつもりらしいから真面目に参加させる為の餌みたいよ」

愛子「抜け目が無いね～」

和也「でも凄いね。各チーム１５０人だから全員に3千円分ってことは・・・６５万円だよ?そんな大金出せるなんて凄いよ」

優子「そうね。ちなみに和也。１５０×３千は４５万よ」

愛子「あはは、和也君ホントに数学苦手なんだね」

和也「・・・」（シュン）

美波「（可愛い／／／）この合宿で数学の勉強しましょうね」

和也「・・・うん」

高橋「では次に青組代表を紹介します。吉井和也君、立って挨拶を・・・」

A「キャー！」

A「和也く～ん！」

A「こっち向いて～！」

和也「？？？」（オロオロ）

美波「（和也がオロオロしてる・・・可愛い／／／）」

みんな急にどうしたんだろう？
もしかして盛り上げようとしてくれてるのかな？

高橋「静かに、では吉井君。挨拶を・・・」

和也「は、はい。あの・・・えっと・・・吉井和也です。青組勝利のために全力を尽くしますので一緒に頑張りましょう。よろしくお願いします」

F「任せとけ！」

F「和也ちゃんは俺らが守る！」

F「和也ちゃんの為なら俺は死ねる！」

高橋「はい静かに、では、城内の各施設や部屋割りの詳細はこちらのプリントに掲載していますので各自、目を通しておいてください」

どれどれ・・・司令室に会議室にコンピュータールーム、放送室に食堂に図書室に代表室・・・
す、すごいお金の掛けかただね・・・
随分無駄が多い気がするけど・・・

高橋「説明は以上です。では自習を開始してください」

そう言うと高橋先生は去っていった

和也「さてと・・・」

美波「？どこに行くの？」

和也「施設とか、建物の構造とかをきっちり確認しておこうかと思ってね。みんなも来る？」

美波「ええ」

結局、美波さん、秀吉君、康太君、愛子さん、優子さん、根本君、小山さん、平賀君と共に探索に向かった

和也「じゃ、行こうか。まずは・・・」

☆司令室☆

全員「「「「「・・・」」」」」

美波「す、すごいわね・・・」

根本「金、掛け過ぎだろ・・・」

確かに凄い・・・
まるで特撮でみるような通信機器がしっかりと備わっている

小山「このマイクで指示を出すのね」

和也「説明書によると、各チームに通信機が１０本渡されて、それにここから指示を出せるらしいよ」

平賀「こっちの画面は？」

和也「それは召喚獣の数がわかるレーダーだって」

優子「本格的ね・・・」

根本「軍隊と戦争でもする気かよ・・・」

和也「えっと次は・・・残りの施設は全部二階だね」

ちなみにここは一階です

☆会議室☆

全員「「「「「・・・」」」」」

愛子「・・・凄いね」

小山「どこの一流企業よ・・・」

和也「ただ話し合うだけの場所なんだから、こんなにお金をかけなくても・・・」

秀吉「ココは机と椅子が大量にあるだけじゃし、他に見るところはないのう。次に行くのじゃ」

☆コンピュータールーム☆

全員「「「「「・・・」」」」」

目の前にはパソコンが三十台くらい並んでる

康太「・・・全て最新型」

根本「あのババア、金遣い荒すぎだろ・・・」

確かに・・・
ちょっといじってみよう
・・・よくわからないな・・・
あんまりパソコンには詳しくないんだよね・・・

康太「・・・問題集や参考資料が大量に入ってる」

さすが康太君。パソコンの扱いに慣れてますね

和也「次、行こうか」

☆代表室☆

放送室、食堂、図書室は普通、（やや広い）だったので端折ります

平賀「代表室か・・・ここは和也だけが理解してればいいんじゃな

いか？

和也「まぁせっかく来たんだし入ってみようよ」

（ガチャ）

愛子「なんか校長室みたいだね」

美波「ここにもパソコンがあるわね」

和也「説明書によるとチームメンバーの成績を全員分見ることができるみたいだね」

優子「それは便利ね。ちょっと開いてみましょ」

和也「そうだね。康太君、お願い」

康太「・・・了解」

（カタカタ）

康太君がパソコンをいじると、画面が切り替わりメンバーの成績が表示された
どれどれ・・・

吉井和也

現代国語　４１２点
物理　３７６点
保健体育　３７０点
数学　７１点
世界史　９９６点
日本史　１００８点
・
・
・
総合得点　５９２６点

和也「随分細かく出るんだね」

和也以外「「「「ちょっと待て！！！」」」」

和也「？どうしたの？」

根本「なんだその化物みたいな点数は！？」

小山「１０００点越え・・・」

平賀「数学以外じゃ勝てる気がしないな・・・」

優子「・・・和也が仲間で本当によかったわ」

秀吉「さすがじゃな」

康太「・・・順位も出る」

和也「へぇ、僕らの順位は？」

青組順位

１位　吉井和也
２位　木下優子
３位　工藤愛子
・・・
１６位　根本恭二
・・・
２０位　島田美波
・・・
２９位　小山友香
・・・
３６位　平賀源二
・・・

小山&平賀「「・・・島田さんにも負けた・・・」」

優子「凄い成績の上がりようね・・・」

愛子「どれどれ・・・」

島田美波
数学　７３５点

優子「７００!?」

秀吉「いつの間にこんな成績になったのじゃ?」

美波「和也に日本語の読み書きを教わって、証明問題も解けるようになったのよ」

もともと美波さんは頭の回転は速いので日本語が読めるようになればかなり成績があがるんですよね

優子「それよりも秀吉の名前が見当たらないわね?」

秀吉「（ビクッ）」

愛子「そういえばムッツリーニ君も見当たらないね?どれどれ・・・」

（カチカチ）

土屋康太　１０６位（保健体育以外５０点以下）
木下秀吉　１４６位（下から５番目）

優子「ひ～で～よ～し？随分素敵な成績ねぇ？」

秀吉「（ガタガタガタ）」

和也「まぁまぁ、自習して成績をあげれば・・・」

（ｐ？）

須川亮　１４６位
木下秀吉　１４７位

平賀「ん？順位が変わったよ？」

和也「リアルタイムで更新されるみたい。須川君が回復試験を受けたみたいだね」

小山「無駄に手間がかかってるわね」

優子「秀吉?覚悟はできてるわね?」

秀吉「ま、待ってほしいのじゃ姉上。ワシの関節はそっちには曲がらな・・・・」

秀吉君の関節が外されていく
そろそろ助けなくちゃ

和也「ゆ、優子さん。そろそろやめてください。秀吉君が死んじゃいます」

優子「失礼、取り乱したわ」

和也「さて、後は・・・施設はこれで全部見て回ったみたいだね。」

三階は男子の、四階は女子の宿舎のようだ

和也「ホントは赤い城に繋がる道も把握しときたかったんだけど・・・もう暗いから明日にしようかな」

美波「それにそろそろ夕食の時間よ」

根本「じゃあ今日はこれで解散だな」

和也「うん、お疲れ様。明日もよろしくね」

こうして僕たちの強化合宿一日目は終了した

第四十八問　経費の無駄遣い！？（後書き）

次回は自習パートになります

第四十九問　天才教師現る！？（前書き）

なんか微妙
オリジナル入れるのは難しいですね

第四十九問　天才教師現る！？

ＳＩＤＥ　？？？

？「助けて！お兄ちゃん！」

和也「やめて！羽月を離して！」

妹を押さえつけてる男の人に向かって和也は叫ぶ
その側には血まみれで倒れてる両親の姿があった

男Ａ「運が悪かったな。顔を見られた以上生かしておくわけにはいかないんだよ」

そう言うと男の人は羽月の胸にナイフを振り下ろした

羽月「いやあぁぁーっ！！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

和也「!!!はぁ・・・はぁ・・」

・・・夢か・・・
久しぶりに見たな・・・この夢

秀吉「和也、大丈夫かの?」

康太「・・・顔色が悪い」

秀吉君と康太君がこっちを心配そうに見ている
ちなみに二人は同室です

和也「あ、ごめん。起こしちゃった?」

康太「・・・気にするな」

秀吉「それより随分うなされておったが大丈夫なのかの?」

和也「それは・・・」

(コンコン、ガチャ)

愛子「おっはよ~♪」

美波「和也、散歩がてら赤い城に繋がる道を見に行きましょ」

優子「?どうしたの?辛気臭い顔して」

秀吉「和也がうなされておったのでの」

美波「!!」

和也「・・・ちょっと、妹が死んだときの夢を見ちゃって・・・」

優子「妹さん?それって10年前に・・・」

和也「そう、死んだ・・・僕の目の前で・・・殺された」

秀&康&優&愛「「「「!!」」」」

和也「何もできなかったんだ・・・目の前で助けを求めてるのに・・・えっく・・・助けられなくて・・・うわあああん」

優子「ちょ、和也!?」

愛子「な、泣かないでよ!?」

秀吉「もうよい、もう言わんでよいから泣き止むのじゃ!」

康太「・・・(コクコク)」

美波「ほら、落ち着きなさい」(ナデナデ)

☆数分後☆

美波「落ち着いた？」

和也「・・・うん。ごめんねみんな」

秀吉「気にするでない」

愛子「そうそう、友達でしょ」

康太「・・・（コクコク）」

美波「さて、気分転換に散歩にでも行きましょ」

優子「ついでに下見でもしましょう」

☆会議室☆

※下見をした結果※

どうやら城内の出入り口は西口、北口、南口の三箇所
先生の話によると向こうの城もこっちと左右対称なだけで、構造は同じらしい
向こうの城へと続くルートは三本
仮にA、B、Cルートと呼ぶことにしよう
花壇が邪魔でAルートからB、Cルートに行くことはできないみたいだ
同じようにB、Cルートから他のルートには行けない

それぞれ向こうの城の東口、北口、南口に繋がっている

和也「と、まあこんな感じだね」

愛子「となると、ある程度戦力は城内に残さないといけないね」

秀吉「む？なぜじゃ？」

優子「たとえばＡルートが突破されて城内に誰も居なかったら向こうはＢ、Ｃルートを逆走してくるわ。そうなると挟み撃ちになるでしょ？」

美波「じゃあ、本隊を城内に残して三部隊で進軍ってこと？」

優子「まぁそれは開戦前の成績を見て考えましょ」

和也「そうだね。じゃあ自習を・・・」

平賀「和也」

和也「？あっ、平賀君、根本君、小山さん」

根本「今から自習するんだろ？俺たちも混ぜてくれないか？」

小山「和也君の日本史と世界史、土屋君と工藤さんの保健体育、島田さんの数学、木下さんの現代国語は学年で・・・いえ、学園でもトップクラスだから、ぜひ勉強を教えてもらいたいのよ」

和也「僕はかまわないよ。みんなは？」

美波「ウチもかまわないわ」

秀吉「ワシは教わる側じゃから皆の判断に従うぞい」

愛子「ボクは保険体育の実技・・・」

美波「クドウサン？」（ゴゴゴゴゴ）

愛子「・・・じゃなくて筆記を教えるね」

優子「人に教えれるほどじゃないけど、できるだけ協力するわ」

和也「じゃあ始めようか」

☆現代国語　教師　木下優子６５０点

優子「ここは・・・」

秀吉「ふむ、なるほどのう」

平賀「木下さん、ここは？」

優子「えっとここはね・・・」

☆数学　教師　島田美波７３５点

美波「ここはこの公式で・・・」

和也「ふむふむ・・・」

小山「ねえ島田さん、この問題はどうやって解くの？」

美波「えっとこれはこっちの公式を・・・」

☆保健体育　教師　工藤愛子７６１点

愛子「ふふ、ボクの勝ちだね」

康太「・・・負けた」（６９４点）

愛子「言ったでしょ？何回やってもボクが勝つって」

康太「・・・次は負けない」

愛子「望むところだよ！」

根本「・・・張り合ってないで勉強を教えてくれ」

☆世界史　教師　吉井和也９９６点

和也「この出来事はこっちと一緒に覚えた方が覚えやすく・・・」

全員「「「「「・・・」」」」」

和也「?どうしたの?もしかして分かりにくかった?」

愛子「・・・その逆だよ」

根本「お前の教え方、わかりやすいな」

小山「説明も丁寧だし」

秀吉「頭にすんなり入ってくるのじゃ」

康太「・・・（コクコク）」

美波「そういえばアキの成績をＢクラスレベルまで上げてたわね」

平賀「Ｆクラスの生徒の成績をこの短期間で!?」

優子「これなら・・・」

和也「?優子さん?どうしたの?」

優子「・・・なんでもないわ。そろそろお昼にしましょ」

？

なんだろう？何か嫌な予感がする・・・

☆昼食後☆

和也「無理無理無理！僕には無理だってば！」

美波「和也なら大丈夫よ！」

秀吉「そうじゃ、日本史は得意じゃろう？」

和也「そ、それは・・・だからって・・・大講堂でチームメンバー全員に講習なんて無理だよー！」

そう、今の状況は・・・

僕たちが居る場所は大講堂の入り口

中には青組全員が待機

正面には『世界一受けたい授業・和也ちゃん先生の日本史講座』と書かれた横断幕

愛子「でもいまさら中止にはできないし・・・」（チラッ）

優子「そうよねぇ～みんな楽しみにしてるのにがっかりするだろうなぁ～」（チラッ）

え?これ、僕が攻められる流れ!?

和也「・・・わかった、やるよ・・・」

うぅ・・・緊張するなぁ・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

なんとか和也の説得に成功した
そして講義を行う和也が中に入ろうとドアを開け・・・

（ガラッ）

「「「「キャー!!和也く～ん!!!」」」」

（パタン）

・・・閉めた

和也「・・・（フルフル）」（ジワッ）

涙目で小刻みに首を振る和也

・・・可愛いなぁ／／／

優子「全く・・・ちょっと待ってなさい」

そう言って優子は中に入って行った

そしてしばらくして出てきて・・・

優子「もう大丈夫よ。よろしくね」

和也「う、うん・・・」

（ガラッ）

今度は和也が入っても叫び声は聞こえなかった

美波「なんて言ったの？」

優子「次に騒いだらつまみ出すって言っただけよ」

なるほど、効果はバツグンのようだ・・・
おっと、和也の講義が始まる
ウチも席に着かなくちゃ

和也「え、えっと・・・吉井和也です。よろしくお願いします。では教科書の１５６ページを・・・」

こうして５０分×２回（間１０分休憩）の和也の講義により、青組メンバー全員の日本史の成績が元の成績より上がったらしく、たまたま様子を見に来ていた日本史の飯田先生が自信をなくしていた・・・

第四十九問　天才教師現る！？（後書き）

作者「以上、和也ちゃん先生でした。これで二日目終了ですね」

和也「和也ちゃんって言うな！」

美波「随分さくさくとすすめるわね？もう二日目終了？」

作者「ぶっちゃけ、さっさと戦争を書きたい」

和也「・・・そうですか・・・」

作者「次回もよろしくお願いします」

明久＆雄二＆翔子＆瑞希「「「「僕（俺）（私）たちの出番は！？」」」」

第五十問　ＡＡＡ団登場！（前書き）

ちょっと中途半端になりました

第五十問　ＡＡＡ団登場！

ＳＩＤＥ　和也

和也「ふぁ～・・・よく寝た」

秀吉＆康太「「和也」」

和也「あっ、二人ともおはよう」

秀吉＆康太「「・・・」」（じー）

和也「？どうしたの？」

康太「・・・大丈夫か？」

秀吉「今日はうなされなかったようじゃの？」

和也「ああ、うん。今日は大丈夫だよ」

心配してくれてたんだな・・・

二人とも優しいなぁ

（コンコン、ガチャ）

美＆愛＆優「「「おはよう」」」

和也「あ、おはよう」

美&愛&優「「「「・・・」」」」（じー）

和也「？」

秀吉「和也なら、今日はうなされてなかったのじゃ」

美&愛&優「「「よかった」」」

そっか・・・
みんな心配してくれてたんだ
なんか嬉しいな
そういえば厨房は自由に使っていいって書いてあったな
迷惑もかけてるし・・・お礼とお詫びに後でお菓子でも作って渡そう

秀吉「では食堂に行くとするかの？」

優子「そうね、あっ和也。後で代表室に入れてほしいんだけど・・・」

和也「？勝手に入っていいのに・・・」

優子「それが代表が一緒にいないと鍵が開かない仕組みになってるのよ」

和也「あ、そうなの？わかった、じゃあ食事のあとに行こうか？」

優子「ええ、よろしくね」

代表室ってことは・・・メンバーの成績が見たいのかな？
さすがＡクラスのまとめ役
総司令を任せようかな？

☆代表室☆

僕たちは食事を終えて代表室に来ていた
ちなみに食堂で合流した根本君たちも居る

和也「で？何を見たいの？」

優子「全員の日本史の成績よ。昨日の和也の授業の後、回復試験受けさせたでしょ？」

和也「一日勉強した程度じゃあまり変わらないでしょ」

愛子「それはどうかな？実際ボクも成績上がってたし・・・」

和也「たまたまだよ」

秀吉「ワシも初めて三桁を出したのじゃ」

美波「ってことは今まで二桁だったのね」

優子「秀吉?後でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩしましょうね」

平賀「ま、まぁまぁ木下さん落ち着いて」

根本「でも和也の言うこともっともだぜ?一日程度じゃそう変わらねえだろ?」

優子「まぁ見てみればわかるわ。土屋君、お願い」

康太「・・・了解」

康太君がパソコンを操作すると画面にメンバー全員の中間テスト時と今回の試験の成績が表示された

青組　日本史の平均点

中間テスト
１２２点
←
合宿二日目終了時
１７６点

小山「平均点５０点アップ!?」

美波「さすが和也ね♪」

優子「ま、そういうわけだから今日の講義もよろしくね」

・・・・・・は？

和也「ちょ、ちょっと優子さん！？僕そんな話聞いてないよ！？」

優子「そりゃあそうよ、言ってないもの。今日は世界史ね」

和也「そんな・・・」

全員「「「「「よろしくお願いします。先生」」」」」

逃げられそうにないな・・・

仕方ない、覚悟決めるか・・・

大講堂に行くと、もうみんな集まっており、正面には『第二回世界一受けたい授業・和也ちゃん先生の世界史講座』と書いた昨日見た横断幕をアレンジしたものが掲げてあった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

和也の講義（５０分×２＋回復試験）が終わった

和也の教え方はわかりやすいわね

美波「和也、お疲れ様。お昼ご飯を食べに行きましょ」

和也「あ、うん」

根本「お～い、和也に島田」

小山「ちょっといいかしら？」

美波「？根本君と小山さん？」

和也「どうしたの？」

根本「あ、いや・・・俺は用はないんだがこいつらが・・・」

鈴木＆吉田「「ひ、ひさしぶりだな」」

根本君の後ろから現れた二人組

・・・こいつらどっかで・・・

・・・！！

あ、Ｂクラス戦でウチを人質にした・・・

和也「・・・試獣召喚」

根本「待て！こいつらは味方だ！」

美波「お、落ち着きなさい！」

小山「・・・あなたたち一体何をしたの?和也君がここまで怒るなんてそうそうないわよ?」

鈴木「じ、実は試召戦争のときに島田を人質にとって・・・」

吉田「腕を掴んで捻りあげて泣かせちまって・・・」

小山「・・・女の子を泣かせるなんて最低ね。和也君、殺っちゃいなさい」

根本「友香!煽るな!こいつらはお前たちに謝りに来たんだよ!」

鈴木「あ、あのときはすまなかった!」

吉田「泣かせるほど力を入れたつもりはなかったんだが・・・ごめん!」

そう言って二人は謝ってくれた

・・・どうやらウチが泣いたのが力を入れすぎたせいだと勘違いしているようだ

ホントは和也に愛想尽かされるのが怖かったんだけど・・・

なんか言い出しにくいわね・・・

美波「もういいわ、気にしてないわよ」

根本「そうか。で、和也は?」

和也「美波さんが許すならこれ以上僕が言うことはないよ」

美波「そのかわり、明日はしっかり戦ってもらうわよ！」

鈴木＆吉田「「ああ、任せてくれ」」

そう言って二人と根本君たちは去っていった

それにしても・・・

和也、まだ怒ってたんだ・・・

ウ、ウチの為よね？

なんか嬉しいな／／／

美波「じゃあ行きましょ」

和也「うん・・・あ、ごめん。先に行ってて」

美波「え？あ、ちょっと・・・」

そう言うと和也はどこかに走り去ってしまった

どうしたんだろう？

☆数分後☆

和也「おまたせ」

美波「遅かったわね？」

秀吉「どこに行っておったのじゃ？」

和也「厨房。コレを作ってきた。色々と心配かけたお礼とお詫びだよ」

そう言って和也が差し出したのはクッキーだった

そっか・・・そういえば厨房は自由に使っていいんだっけ

だったらウチも何か作って和也に・・・

根本「お前、何でもできるんだな？」

小山「貰っていいの？」

和也「うん。どうぞ」

愛子「いただきま～す」

優子「おいしいわね」

美波「ホント？ウチも貰うわね」

お、美味しい・・・

・・・やめよう

何を作ってもコレに勝つ自信はないわ

根本「完璧超人かよ・・・」

小山「この子に弱点は無いのかしら・・・」

平賀「和也の弱点はあの二人ぐらいじゃないか?」

あの二人?
ああ、美春と玉野さんね

優子&小山&愛子「・・・」（じー）

和也「な、なに?」

三人ともなんで和也の方を?
ハッ!まさか和也に惚れたんじゃ・・・
どうしよう!?これ以上ライバルが増えたらウチは・・・

優子&小山&愛子「「「こんな娘が欲しいわ」」」

和也「僕は同い年だよ!?そして男だよ!?この際、弟とは言わないからせめて息子で!」

・・・とりあえず惚れたわけじゃなさそうね
そして三人の言い分もわかるわ

小山「はぁ・・・こんなにいい弟がいる明久君が羨ましいわ」

愛子「だよね～、成績優秀、運動神経バツグン・・・」

優子「素直で優しくて・・・」

和也「そ、そんなことは・・・／／／」

優子＆小山＆愛子「「「おまけに小さくて可愛い」」」

和也「小さいって言うな！！」

・・・気にしてたのね

優子「まぁ冗談はさておき・・・午後からの自習だけど、自由行動でいいかしら？和也も自分の勉強したいでしょ？」

和也「あ、うん。そうしてもらえると助かるよ」

自由行動か・・・

和也を誘おうかしら

和也「じゃあ僕は弱点の克服をするよ」

秀吉「お主の弱点というと数学かの？」

平賀「数学が苦手って言っても１００点前後は取れるんだろ？だったらそこまで気にすることじゃないんじゃないか？」

和也「ん～普通ならそうなんだけど・・・相手は雄二君だからね」

小山「？坂本君だと何かまずいことでもあるの？」

和也「雄二君の性格上必ず相手の弱点を突いてくる。これは間違いないよ！」

根本「なるほどな」

優子「確かに坂本君の軍師としての才能は厄介ね。わかったわ。美波、和也に数学教えてあげてね」

美波「ええ、わかったわ」

和也を誘う手間が省けたわ

和也「いいの？せっかく自由行動なのに・・・」

美波「いいのよ。ウチが和也と勉強したいだけなんだから／／／」

和也「そ、そう？／／／じゃ、お言葉に甘えさせてもらうね」

根本「（なぁ、あの二人・・・）」

小山「（両想いよね？）」

平賀「（アレは本当に付き合ってないのかい？）」

秀吉「（付き合ってないようじゃぞ）」

優子「（和也なんて自分の気持ちにすら気付いてないしね）」

愛子「（二人とも鈍いよね）」

康太「（・・・同感）」

根＆小＆平＆秀＆優「「「「「おまえらが言うな」」」」」

愛＆康「「？？」」

？

向こうは何をヒソヒソと話しているのかしら？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

美波「あ、和也。そこ間違ってるわよ。ここはね・・・」

和也「ふむふむ・・・」

僕たちは今数学の勉強をしている
みんなは邪魔しちゃ悪いと言って一度は出て行ったが、他の場所は
開いてなかったらしく戻ってきた

美波「ふぅ、ちょっと休憩しましょ」

和也「うん」

愛子「和也君、美波。面白いもの聞かせてあげようか？」

和也「？面白いもの？」

康太「・・・小型録音機」

愛子「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えば・・・」

根本？「『友香』『より』『姫路』『の』『方が』『タイプだ』『胸』『も』『大きいし』」

小山「恭二？これはどういうことかしら？」（ゴゴゴゴ）

根本「ち、違う！俺はこんなこと言ってない！」

愛子「ね？面白いでしょ」

秀吉「悪趣味じゃ・・・」

愛子「他にも・・・」

和也?「『愛子さん』『僕』『こんなに』『ドキドキ』『してるんだ』『やらない?』」

和也「ちょ!僕、こんなこと言ってないよ!?」

美波「和也・・・」

和也「ち、違うんだ美波さん!僕は『美波さんの』『胸』『が』『みたい』・・・って違う!!勝手に僕のセリフを変えないでよ!」

美波「え、えっと・・・か、和也が見たいなら・・・ごにょごにょ／／／」

?

最後の方はよく聞き取れなかったけどこのままじゃ僕は完全に変態だ!

和也「美波さん、よく聞いて。さっきのは誤解で・・・『本当は』『お尻』『が』『見たいんだ』・・・って違う!!僕じゃない!僕はそんなこと言ってない!お願い信じて、信じてよ・・・」

美波「わ、わかった!信じるから泣かないでよ!」

康太「・・・工藤愛子。おふざけが過ぎる」

愛子「あはは、ちょっとやりすぎちゃっ・・・ん?なんでみんなボ

クから距離をとるの？」

優子「愛子、あなたと過ごした日々は忘れないわ」

愛子「なんで別れの言葉！？」

優子「あなたはやりすぎたのよ」

愛子「何を・・・って！え！？なに！？この人たち！？」

『A』と書かれた覆面を着けた黒装束の集団が愛子さんを囲んだ

※イメージはＦＦＦ団のＡクラスバージョン

A「この者は何をしましたか？」

A「「「我らの愛しの和也ちゃんを泣かせました！」」」

A「判決は？」

A「「「死刑！」」」

愛子「ちょ、ちょっと待って！その石畳は何！？わ、悪かったって！謝るよ！もうしないから助けて！！」

・・・なんか可哀想になってきた・・・

和也「あ、あの、みなさん。僕は平気なのでもうやめてください」

A「「「「はい、和也ちゃんの仰せのままに」」」」

そう言って黒装束の集団は去っていった

・・・って、誰が和也ちゃんだ！

愛子「うぅ、ありがとう。それと、ごめんなさい」

和也「もういいよ。それより根本君の方を・・・」

平賀「ああ、それなら心配ないよ」

根本「俺が愛してるのは友香だけだ／／／」

小山「恭二・・・／／／」

平賀「ほらな？」

ああ、完全に二人の世界に入ってますね

恋愛か・・・

僕にもいつか恋人できるかなぁ？

・・・・・・・・あれ？

なんで・・・美波さんが思い浮かんだんだろう？

美波「さ、和也。続き始めるわよ」

和也「あ、うん」

その後、夕食の時間まで美波さんに数学を教わった

さて、部隊編成考えなくちゃ・・・

第五十問　ＡＡＡ団登場！（後書き）

この話では根本君と小山さんは別れていません
次回はもう少し早く更新できるように頑張ります

第五十一問　決戦前夜　部隊編成（前書き）

今回はいつもより短いです

第五十一問　決戦前夜　部隊編成

ＳＩＤＥ　和也

夕食終了後、僕は部隊編成を・・・・

※部隊編成※

和也隊
Ａ・・・１１人
Ｅ・・・９人
計２１人

木下姉弟隊
Ａ・・・６人
Ｅ・・・８人
計１６人

島田、工藤隊
Ａ・・・６人
Ｅ・・・８人

計１６人

根本Ｂクラス隊

計２５人

小山Ｃクラス隊
計２５人

平賀Ｄクラス隊
計２５人

須川ＦＦＦ団
計２１人

土屋遊撃部隊
計１人

常に二部隊以上城内に待機

優子「・・・と、まあこんなものかしらね」

・・・優子さんに決めてもらっていた
いや、僕がやらなきゃいけないのはわかってるんですけどね
どうもこういうのは苦手で・・・

和也「ごめんね優子さん。面倒なこと押し付けて・・・」

優子「いいわよ、アタシも和也に講義させたりしたし・・・それにAクラスで似たようなことやってるしね」

和也「ありがとう」

美波「ウチは工藤さんと同じ部隊ね」

愛子「うん。よろしくね♪」

秀吉「ワシは姉上の部隊じゃの」

優子「足引っ張るんじゃないわよ?」

和也「僕は一人か・・・知ってる人はいるかな?」

優子「一応、指示を出しやすいように、去年のクラスメイトを多めに入れたわ（まぁ、和也に逆らう人なんていないと思うけど・・・）」

和也「ありがとう、ところで僕の部隊にAクラスが多くない?」

優子「ああ、それは和也にも前線に出てもらうためよ」

美波「え?代表なのに前線に出すの?」

愛子「今回のルールでは代表は戦死しても続行だからかな?」

優子「ええ。代表自ら動くことによって士気を上げることができるし、相手への威嚇にもなる。メリットは充分あるわ」

秀吉「しかし、やられたら一気に士気が落ちるぞい」

優子「そうならないために戦力を多めに回してるのよ。和也はちょっと忙しくなるかもしれないけど・・・」

和也「僕なら大丈夫。明日は頑張ろうね」

優子「じゃ、今日はこれで解散ね。早く休んで明日に備えましょ」

和也「うん、そうだね。みんな、おやすみ」

全員「「「「「おやすみ」」」」」

こうして僕たちは解散し、みんな自分の部屋に戻って行った

SIDE　OUT

SIDE　美波

ミーティングが終わって解散後、ウチらは部屋に戻って就寝・・・

小山「恭二はね、学園では卑怯で通ってるけどホントは優しいのよ／／／」

愛子「へぇ～」

優子「意外ね」

・・・せずに好きな人の話で盛り上がっていた

小山「さて、次は工藤さんの番よ」

愛子「えぇ!?で、でもボク、好きな人なんて・・・」

美&優&小「「「土屋（君）でしょ」」」

愛子「なななななに言ってんのさ!ボ、ボクは別に康太君のことなんて・・・／／／」

優子「へぇ～『康太君』ねぇ～」（ニヤニヤ）

美波「確か工藤さんって『ムッツリーニ君』って呼んでなかったかしら?」（ニヤニヤ）

小山「いつの間にそんなに仲良くなったのかしらね～」（ニヤニヤ）

愛子「う、しまった・・・そ、それより美波、なんでボクのこと苗字で呼ぶの?名前で呼んでよ」

美波「いいの?じゃあ愛子って呼ばせてもらうわね」

小山「私も友香でいいわよ」

美波「わかったわ」

美&優&小「「「じゃあ続きを聞かせてもらおうかしら」」」

愛子「ちぇ、誤魔化せなかったか・・・わかったよ・・白状する。ボクは康太君が好きだよ／／／」

優子「あらあら」

小山「初々しいわね～私も恭二と付き合い始めた当初はこんな感じだったわ」

いつもからかう側の愛子がからかわれるなんて珍しい光景ね

愛子「くっ・・・つ、次は優子の番だよ！」

優子「ア、アタシ？ん～・・・今は好きな人はいないわね・・・」

小山「ほほう、『今は』ってことは昔はいたのね？」

優子「好きっていうより好みのタイプかな」

愛子「振られたの？」

優子「いいえ、告白したわけじゃない。ただ・・・この人には好きな人が居る。アタシの想いは伝わらないって気付いちゃったから・・・」

そう言った優子は寂しそうな顔をしていた
優子の好きだった人か・・・
誰なんだろう？

優子「さてと、次は美波の番ね」

美波「ウ、ウチ！？」

どうしよう・・・
でも、みんなの好きな人の話を聞いてるわけだしウチだけ話さないわけにはいかないわね

美波「う、ウチの好きな人は・・・」

愛&優&小「「「和也君でしょ？」」」

美波「な、なんで知ってるのよ！優子！喋ったわね！」

この面子の中でこのことを知ってるのは優子だけのはず・・・

愛子「いや・・・多分みんな知ってると思うよ」

小山「そうね、見ててわかりやすいし・・・」

優子「ってか気付いてないのって和也だけだと思うわよ」

なんですって!?
みんなにバレてるの!?
は、恥ずかしい／／／
・・・って、なんで和也は気付かないのよ!

愛子「それで?告白しないの?」

美波「う・・・い、いつか告白するわよ!」

優子「そんなこと言って・・・とられちゃうわよ?」

小山「そうね。Cクラスにも和也君狙いの子がいるし、Bクラスにもいるって恭二が言ってたわ」

さ、さすが和也ね・・・
でも・・・

美波「・・・それで和也が幸せなら・・・」

愛子「え?」

美波「ウチは和也が好き。だから和也には幸せになってもらいたい、和也が幸せなら付き合う人がウチじゃなくてもいいの」

そう、前は和也と恋人になりたいと思ってた
でも、和也の辛い過去を聞いて、和也には一番幸せになって欲しいと思った
だから和也が幸せを掴むことができるなら、そのとき隣に居る人はウチじゃなくてもいい

優子「美波・・・」

小山「一途ね～。ま、頑張ってね応援してるわよ」

愛&優&小（（（まぁどうせこの二人が付き合うことになるんだろうけど・・・））））

小山「さて、もう寝ましょ」

優子「そうね。三人共、明日は期待してるわよ」

愛子「任せといてよ♪」

美波「がんばるわ」

小山「任せなさい」

優子「じゃ、おやすみ」

こうしてウチらは眠りについた

SIDE　OUT

SIDE　赤組

雄二「やっと俺の出番が来たな！」

翔子「・・・雄二、誰に向かって喋ってるの？」

※読者にです。メタ発言、自重してください

雄二「気にするな。それよりミーティングを始めよう」

久保「で、どんな作戦で行くんだい？」

雄二「まず、多分向こうの総司令は木下姉だ。他にできそうな奴は居ないし、まず間違いないだろう」

瑞希「和也君は人に指示を出すタイプじゃないですからね」

明久「むしろ自分が動くタイプだよね」

雄二「そう、それだ。おそらく和也は頻繁に前線に出てくる」

明久「ええ！？和也は代表だよ！？」

雄二「今回のルールでは関係ないんだよ。代表が戦死しても続行なんだから。それにメリットはある。和也は人気者だからな。和也が

動けば周りの連中の士気は上がるし、それに和也は学年一位の実力、できるだけ戦いたくないから威嚇にもなる」

久保「ふむ、となると和也君のいるところを避けて戦うということかい？」

雄二「いや、逆だ」

明久「逆？」

雄二「一番最初に和也を倒す！」

赤組作戦参謀・坂本雄二は皆にそう告げた

第五十一問　決戦前夜　部隊編成（後書き）

次回より少し短くなるかもしれません

第五十二問　大試召合戦開始（前書き）

今回よりしばらく一話一話が短くなります
理由は、まだ結末を考えてないことと、できるだけ焦らしたいことによるものです

第五十二問　大試召合戦開始

ＳＩＤＥ　和也

合戦当日。今は朝食を終え、最後のミーティングを行っているところだ

根本「確保できた教師は、世界史、古典、英語、物理だな」

優子「・・・（おかしいわね。世界史は確保できないと思ってたんだけど・・・）」

和也「優子さん？どうかしたの？」

優子「なんでもないわ。じゃあ世界史で和也、英語は友香、物理で平賀君の部隊で進軍して。残りは待機」

愛子「いきなり和也君を出すの？」

優子「ええ、出し惜しみして、この後世界史や日本史で戦えるかわからないし・・・それに和也が前線に出るだけで味方の士気は上がるしね」

和也「？」

なんで僕が出るだけで士気があがるんだろう？

代表だからかな？

優子「じゃあ今言った三部隊は準備して、他の部隊も援護に出る可能性があるから気を抜かないで」

さて、僕も準備しなくちゃ・・・

美波「和也」

和也「なに？どうしたの？」

美波「気をつけてね」

和也「あ、うん。頑張るよ」

心配してくれてるんだな・・・
優しいなぁ・・・

（ヒュ～・・・ドーン！！！）

開戦の合図の花火が上がった
いよいよだな・・・

小山「じゃ、そろそろ行くわね」

平賀「和也、戦死するなよ」

そう言って小山さんはAルート（北口）、平賀君はCルート（南口）へと向かっていった
僕も行かなくちゃ・・・

和也「では、僕たちも出撃しますよ」

A&E「「「「「はい、和也ちゃんの仰せのままに」」」」」

誰が和也ちゃんだ！
・・・もういいや・・・さっさと行こう・・・
僕たちはBルート（中央）へと向かった

SIDE　OUT

SIDE　赤組

伝令「北からCクラス25名、南からDクラス25名、中央から吉井和也を含めたA、Eクラス、合わせて21名」

雄二「大体、予想通りだな」

瑞希「和也君を狙うんですよね？」

雄二「ああ、和也を倒せば向こうの士気は一気に低下するはずだ」

明久「って事は数学で狙うの？」

雄二「バカ久、頭を使え。和也がわざわざ苦手な数学のフィールドに来るわけ無いだろ」

久保「確かに・・・しかしそれならどうやって倒すんだい？」

雄二「まず科目だが、あえて世界史の田中教諭を向こうの引き入れやすい位置に誘導した。だから、まず間違いなく世界史で来るだろう」

明久「ちょっと待って！世界史で和也に勝てる人なんて・・・」（チラッ）

瑞希＆久保＆翔子「「「無理、（です）」」」

雄二「ああ、単体じゃあ無理だろう・・・単体ならな」

明久「？」

雄二「まぁ、見てりゃわかるさ。お二人さん、準備はいいか？」

？「カズちゃんに会えるならなんだってするよ！」

？「豚野郎の言うことを聞くのは癪ですが・・・愛娘に会う為に我慢しますわ！」

ＳＩＤＥ　美波

和也たちが出撃してから数分が経過した
和也大丈夫かなぁ・・・

優子「ごめんね、美波」

美波「へ？」

優子「和也と一緒にしてあげたかったんだけど、美波には数学で戦ってもらわないと困るから、万が一にもここで戦死させるわけにはいかないの・・・」

美波「べ、べつにいいわよ。死に別れるわけじゃあるまいし・・・」

部隊が違ったときからそれくらいは覚悟してたし・・・
ウチの数学の点数は７００以上、総司令の立場で考えれば当然数学で戦わせたいだろう
それに・・・
わがまま言って和也に嫌われたくないしね
ま、和也ならきっと無事に帰って・・・

（ｐ１）

秀吉「!?あ、姉上!」

優子「なによ、騒々し・・・何よコレ!?」

美波「うそ・・・」

レーダーには大量の赤い点が青い点を囲むように表示されていた
つまり赤組の生徒が青組の生徒を囲んでいるということ・・・
そしてその場所は・・・Bルート・・・和也が進軍したルートだった

（pipipi）

優子「!!紺野君ね?これはどういうことなの!?」

紺野君・・・たしか和也の部隊にいた人ね

紺野『そ、それが・・・姫路、坂本、明久を除くD，E、Fクラスの生徒が全員ココに居るんだ!』

優子「なんですって!?じゃあそこに72人も居るって言うの!?て、撤退よ!」

紺野『無理だ!一気に突撃されて周りを囲まれてる!背後にも居るんだ!逃げ道は無い』

そんな・・・このままじゃ和也が・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　優子

やられた
背後に回りこんでるのにこっちに向かってこないということは完全に和也を狙った作戦ね

根本「和也は１０００点位あるんだろ？なんとかならないか？」

優子「無理よ。いくらなんでも数が多すぎるし、和也の腕派の能力は瞬間移動、移動する場所が無いから使えないわ」

秀吉「じゃが、和也には『蒼海の腕輪』が・・・」

優子「１００点の敵を倒しても回復する点数はたった１０点。気休め程度にしかならないわ」

愛子「そんなのどうでもいいからこっち手伝ってよ！」

？

『手伝う』と言う単語に疑問を浮かべながら愛子の方に目を向けると・・・

美波「放して愛子！和也がピンチなのよ！」

愛子「落ち着いてよ美波！一人で行っても無駄死ににしかならないよ！」

・・・美波が暴走していた・・・

・・・ん？美波？

！！そうだ！コレなら・・・

優子「援護に向かうわよ！メンバーは・・・」

第五十二問　大試召合戦開始（後書き）

開始早々いきなり和也ちゃんのピンチ！！
援護は間に合うのか！？
和也ちゃんの運命は！？

作者「あ、ちなみに紺野くんはオリキャラじゃないですよ？原作二巻の１０１ページに名前だけ載ってます」

第五十三問　女性の身体的な短所を口にしてはいけません（前書き）

サブタイトルが長くなりました・・・

第五十三問　女性の身体的な短所を口にしてはいけません

ＳＩＤＥ　和也

困った・・・
今、僕の周りには無数の敵
だいぶ倒したが、まだ残り３０人以上いる
しかも僕の部隊はあと・・・２人・・・
僕と紺野君だけだ・・・

２－Ｆ　吉井和也　４２６点
＆
２－Ａ　紺野洋平　１１３点

僕も紺野君もかなり点数を削られてる
・・・正直、厳しいな・・・
対する向こうは・・・

玉野「カズちゃ～ん！会いたかったよぉぉぉ！」

美春「吉井和也！今日こそ美春とお姉さまの娘になっていただきますわ！」

中林「・・・私、要らないんじゃないかなぁ・・・」

２－Ｄ　玉野美紀　１１６点
＆
２－Ｄ　清水美春　１３１点
＆
２－Ｅ　中林宏美　９８点
＆
その他　３０人　平均９０点

美春「隙ありですわ！」

紺野「し、しまった！」

２－Ａ　紺野洋平　０点

紺野君もやられてしまった
ついに僕一人だ

Ｄ「くらえ！」

Ｅ「行け！」

和也「くっ！」

なんとかかわしてはいるものの防戦一方。反撃する隙が無い
このままじゃやられるのは時間の問題だ
・・・仕方ない、一か八か、上空に『瞬間移動』して、武器を思い
っきり振り下ろしてまとめて倒す！
そうすれば『蒼海の腕輪』の能力で点数を回復することができる
できるだけ敵を引き寄せて・・・今だ！

和也「『瞬間移動！』」

美春「吉井和也は上空ですわ！全員そこから離れなさい！」

なっ！読まれた！？着地地点には誰も居ない・・・
・・・しかも・・・

美春「今です！突撃ですわ！」

僕の着地と同時に突撃してきた
４００点を切ったからもう『瞬間移動』は使えない
僕は仕方なく攻撃を受け止める

２－Ｆ　吉井和也　３６６→１７点

なんとか生き残った・・・

でももうダメだ・・・・

？「試獣召喚！」

和也「え？」

不意に後ろから声が聞こえる
振り返るとそこには・・・

古典

２－Ａ　木下優子　４０６点

『５０m位』後ろで古典の先生を引き連れた優子さんが・・・・って！

和也「遠っ！！遠いよ！？そこからじゃ攻撃は届かないよ！」

優子「遠い？ふふ、射程範囲よ！『伸びろ！』」

優子さんがそう言うと召喚獣の腕輪が輝き、持っている槍が伸びた
そして・・・

D&E&F　8人　0点

優子さんの伸ばした槍に敵の召喚獣が串刺し、まるで焼き鳥の様になり、お茶の間の皆様にはとても見せられないようなグロテスクな姿に・・・

優子「和也、無事？」

向こうが戸惑ってる隙に優子さんは古典のフィールドを抜け、世界史のフィールドに入っていた

和也「ありがとう、助かったよ。」

美波「ウチらも居るわよ」

和也「美波さん！それにみんなも・・・」

振り向くとそこには美波さん、愛子さん、康太君、秀吉君がいたでももう僕は戦える点数じゃないし、たった5人で20人以上相手にするなんて・・・

優子「じゃ、美波。よろしくね」

美波「オッケー」

そう言って美波さんは右手を前に出し、腕輪を・・・
ああ、そういうことか！

美波「『保健体育にチェンジ』」

そう言うと、世界史のフィールドが保健体育に変わった
こうなったら・・・

２－Ｆ　吉井和也　３３１点
２－Ｆ　島田美波　１０３点
２－Ａ　木下優子　３２６点
２－Ｆ　木下秀吉　６３点
２－Ａ　工藤愛子　７７０点
２－Ｆ　土屋康太　７９４点

この二人に敵はいない

愛子「ま、負けた」

康太「・・・工藤愛子、お前はまだまだ甘い」

愛子「くっ、一回勝った位でいい気にならないでよね！」

康太「・・・もう負けない」

・・・この二人はこの状況でも相変わらずですね

D「お、おい、どうするんだ？」

E「俺たちじゃ勝ち目が無いぞ！」

F「心配無用！あんなぺったんこが何人来ようが我等ＦＦＦ団の敵ではない！」

あ・・・その発言はちょっと・・・

（（（プチン））））

ハッ！殺気！？

優子（薄）「秀吉」

愛子（激薄）「康太君」

美波（極薄）「和也」

和＆秀＆康「「「はい、なんでしょう？」」」

美&愛&優「「「あいつらはウチ（私）（ボク）達で殺るから下がってなさい」」」

和&秀&康「「「どうぞ、ご自由に！」」」

美&愛&優「「「「コロスコロスコロスコロココロ・・・・」」」」

怖っ！怖すぎるよ！
ち、近づけない・・・
・・・って、あれ？

２－Ｆ　島田美波だったもの　１０３点
＆
２－Ａ　木下優子だったもの　３２６点
＆
２－Ａ　工藤愛子だったもの　７７０点
＆
２－Ｄ　清水美春だったもの　１２６点

ＶＳ

２－Ｄ　玉野美紀　１２４点
＆
２－Ｅ　中林宏美　８９点
＆
その他　２２名　平均８５点

・・・なんで清水さんがこっち側にいるんだろう？

美春「オネエサマヲ、キヅツケルブタヤロウハ、ミハルガシマツシマス」

美&愛&優「「「コロコロコロコロコロ・・・・」」」

・・・これ、なんてホラー？

和也「秀吉君、優子さんを止めてよ。姉弟なんだから・・・」

秀吉「む、無理じゃ、姉弟だからこそ姉上の恐ろしさを知っておる。そういうお主こそ島田を止めるのじゃ」

和也「む、無理だって！それにしても愛子さんってこういうことでは怒りそうにないと思ってたんだけど・・・」

康太「・・・確かに・・・そういえばこの前、変なことを聞かれた」

和也「変なこと？」

康太「・・・『康太君は胸の大きい女の子の方が好きなの？』と・・・」

秀吉「それでなんと答えたのじゃ？」

康太「・・・『大きい方が良いに決まってる』」

和也＆秀吉「「それが原因でしょ（じゃろ）！！」」

康太「？？？」

康太君は鈍感だなぁ

・・・と、そんな会話をしているうちに

２－Ｆ　島田美波　３３点

＆

２－Ａ　木下優子　２６３点

＆

２－Ａ　工藤愛子　７００点

＆

２－Ｄ　清水美春　２６点

ＶＳ

２－Ｄ　玉野美紀　１４点

＆

２－Ｅ　中林宏美　９点

＆

その他　２２名　平均０点

あと二人・・・じゃなくて三人か

終わったな・・・・と、思ったその時

？「『起動！』」

和也「雄二君！」

声がする方には雄二君とCクラスの人たちがいた
雄二君が白金の腕輪を起動させ、『干渉』により召喚フィールドが消滅した

雄二「三人とも、もう充分だ、撤退だ」

雄二君は不気味な笑みを浮かべて・・・
ん？『もう充分』？
・・・！！
やられた！

和也「優子さん！僕たちも早く戻らなきゃ！」

雄二「ほう、和也は気付いたか・・・」

優子「どういうこと？」

和也「・・・ここにいるのは全員Cクラス以下、Bクラス以上は出てきてない。対するこっちは主戦力のほとんどがここに居る。つま

り・・・」

（ｐｉｐｉｐｉ）

根本『大変だ！Ａルートで霧島と姫路の部隊、Ｃルートで久保と佐藤の部隊が暴れてる』

優子「・・・そういうことね。撤退よ！できるだけ多くの人数を本隊に戻して！」

根本『わかった』

優子「やってくれるじゃない・・・」

雄二「褒め言葉として受け取っておこうか。じゃ、俺たちは逃げさせてもらうぜ」

和也「僕達も戻ろう！」

僕達が戻ると、そこには・・・
撤退してきた小山さんと平賀君の『二人』
そう、二人だけだ。
残りの皆は二人を逃がす為に相手に立ち向かい戦死してしまったらしい
そして・・・

（キーンコーンカーンコーン）

１２時になり、２時間の昼休みの時間になった
こうして午前の部は終了した

青組在存戦力
Ａ・・・１４人
Ｂ・・・２５人
Ｃ・・・１人（小山）
Ｄ・・・１人（平賀）
Ｅ・・・１６人
Ｆ・・・２５人

計・・・８２人

赤組在存戦力
Ａ・・・２０人
Ｂ・・・１９人
Ｃ・・・２５人
Ｄ・・・２人（美春、玉野）
Ｅ・・・１人（中林）
Ｆ・・・３人（雄二、明久、瑞希）

計・・・70人

第五十三問　女性の身体的な短所を口にしてはいけません（後書き）

優子「～♪」
和也「優子さんごきげんだね」
秀吉「総司令という立場上、出番が多いからのう」
美波「ウチの出番が少ないわよ！ウチはヒロインなのに・・・」
作者「ま、まぁ最終日には活躍してもらうから・・・」
美波「ならいいけど・・・」
和也（それって午後からも出番がないってことなんじゃ・・・）

第五十四問　僕たちは最後まで諦めない！！（前書き）

今回は短いです
そして戦闘シーンは無いです

第五十四問　僕たちは最後まで諦めない！！

ＳＩＤＥ　和也

僕たちは昼食を終え、作戦会議を行っているところだ
正直言って状況はかなり悪い
人数はこっちが勝っているものの、向こうは残りの大半はＣクラス以上だ
対するこっちはＣ、Ｄクラスは壊滅
Ａ、Ｅクラスも大半はやられてしまった
・・・僕のせいだ・・・
僕がピンチにならなければ、優子さんが本隊を離れることはなかったそれならＣ、Ｄクラスの被害はここまで酷くなかったはずだ
・・・全部・・・僕の・・・

（ポカッ）

和也「ふぇ？」

僕がそんなことを考えていると美波さんに頭を軽く叩かれた
やっぱり・・・怒ってるよね・・・

美波「和也、アンタ『全部僕のせいだ』とか『みんな怒ってるよね』とか考えてるでしょ？」

和也「・・・うん」

（ポカッ）

また叩かれた

美波「んなわけないでしょうが！誰も坂本の作戦に気付かなかったのにアンタ一人を攻めたりするわけ無いでしょ！」

和也「でも・・・」

美波「でもじゃない！！」

み、美波さんが怖い・・・

優子「それに今回の作戦を考えたのはアタシよ。責任はアタシにあるわ」

和也「それだって僕が総司令を押し付けたせいで・・・」

愛子「まぁまぁ、過ぎたことを言っても仕方ないって。それより次の作戦を考えようよ」

秀吉「そうじゃの。人数はこちらが多いんじゃし、籠城作戦はどう

じゃ？」

優子「無理よ、戦力差がありすぎるし入り口が三箇所ある以上、部隊を三分割しないといけない。ただでさえ少ない戦力を三分割したらもう勝ち目はないわ」

根本「打つ手無しか・・・」

全員「・・・」

ハッ！みんなが暗くなってしまった！
なんとかしなきゃ！

和也「そ、そういえば向こうの人たちは随分やる気満々だったよね？」

平賀「・・・言われてみれば・・・」

小山「戦死を全く恐れてなかったわ」

康太「・・・調べはついている。雄二は悪魔の手を使った」

秀吉「どういうことじゃ？」

康太「・・・『頑張った者には戦争終了後に姫路の手作りスイーツをプレゼント』」

和＆美＆優＆愛＆秀「「「「「なんて恐ろしいことを・・・」」」」」

」

鬼だ。鬼がいる・・・
確かにそれなら何も知らない男子は可愛い女子の手料理が食べられると思って張り切るだろう。
・・・中身が兵器だと知らずに・・・

康太（ちなみに女子は和也の写真で買収されたんだが、言わない方がいいだろうな）

根本「？なにが恐ろしいんだ？」

小山「もしかして・・・姫路さんって料理が下手なの？」

和也「あれは下手ってレベルじゃないよ」

康太「・・・（コクコク）」

秀吉「死人が出るレベルじゃ」

平賀「そ、それはいくらなんでも言いすぎじゃ・・・」

和也「ちなみに彼女は酸味が欲しくて硫酸、塩味が欲しくて塩酸を隠し味に入れるよ」

平賀「・・・前言を撤回しよう」

あっ、三人の顔が青ざめてる

根本「・・・理由はどうあれ、今、向こうの士気は最高潮ってわけか・・・」

全員「・・・」

ハッ！またみんなが暗くなってしまった！
ど、どうしよう（オロオロ）

美波「落ち着きなさい。まだ負けたわけじゃないわ」

愛子「そうそう、みんなで考えればなんかいい作戦思いつくよ」

優子「このまま負けっぱなしで済ませるなんてアタシのプライドが許さないわ！」

和也「そう・・・だよね。じゃあみんなで作戦を考えよう」

そうだ、まだ負けたわけじゃないんだ。
僕たちは最後まで諦めない！！

優子「ねえ、さっき思いついたんだけど、こんな作戦はどうかな？」

そして時は過ぎ、午後の部が開始した

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　赤組

雄二「じゃ、Ａルートに久保と清水、Ｂルートに姫路と明久、Ｃルートに佐藤と玉野の部隊でそれぞれ突入だ。一気にけりをつけるぞ！」

翔子「・・・そんなに勝ち急いで大丈夫？」

雄二「問題ない。向こうにはもうろくに戦力がいないはずだからな。勝ったも同然だ」

翔子「・・・優子を甘く見ないほうがいい」

雄二「ちっ、わーったよ」

伝令「た、大変だ！」

雄二「どうした？」

伝令「Ａ、Ｃルートから敵がこっちに向かってきてる！数は両方とも４０人位だ」

雄二「４０人だと！？向こうは８０人位しかいないはず・・・Ｂル

ートは？」

伝令「それが・・・誰も居ないんだ」

雄二「ちっ、三分割だと勝ち目がねえから、１コース捨てやがったか・・・明久と姫路を呼び戻せ！」

翔子「・・・雄二」

雄二「なんだ？」

翔子「・・・あの二人、通信機を持っていくの忘れてる・・・」

雄二「あのアホどもがぁぁ！！！！」

☆一方その頃☆

明久「ん？今、何か聞こえなかった？」

瑞希「気のせいじゃないですか？」

明久「そうかな？それにしても誰も出て来ないね」

瑞希「何かの罠かもしれませんね」

明久「じゃあ警戒しながらゆっくり進もうか」

瑞希「そうですね」

のんきな二人は無人の敵城を目指していた

第五十四問　僕たちは最後まで諦めない！！（後書き）

さてさて、どんな戦いになるのか・・・
次回もできるだけ早く書き上げたいと思います

第五十五問　策士、木下優子（前書き）

今回も戦闘シーンは無しです

第五十五問　策士、木下優子

ＮＯ　ＳＩＤＥ

☆午後の部開始３０分前☆

優子「さて、作戦はこれでいいわね」

根本「だが味方の士気は最悪だぞ」

優子「それも考えているわ。美波」

美波「なに？」

優子「和也を連れてどこかでのんびりしてて頂戴。和也は落ち込んでるから励ましてあげるのよ」

和也「優子さん。僕ならもう大丈夫で・・・」

美波「わかったわ。行きましょ、和也」（ズルズル）

優子「さてと、友香。準備は出来た？」

小山「ええ。みんな大講堂に集まってるわ」

平賀「どうして和也を離したんだい？」

優子「・・・今から和也には聞かせられないようなことを言うから

よ。幸い、生き残ってるのは女子が多いからね」

秀吉「・・・嫌な予感がするのじゃ・・・」

（ガラッ）

優子「さて、みんなに聞いて欲しいことがあるの。午前中のことだけど、和也が集中攻撃された・・・ここまではみんな知ってるわね。でも、敵の狙いはそれだけじゃないの」

愛子「（優子は何を言うつもりなのかな？）」

康太「（・・・多分、士気をあげるための作戦）」

優子「敵の目的は和也をお持ち帰りすることだったのよ！！」

「「「なんだと！！」」」

優子「しかも、嫌がる和也を押さえつけて無理矢理〇〇〇なことや××なこと、△△△なことをするつもりだったの。これを許していいのかしら？」

※→→→内容はご想像にお任せします※

「「「「許せるわけがない！！」」」」

優子「首謀者はFクラスの坂本君よ！！」

「「「「あのゴリラ！！」」」」

優子「アタシたちは午後から二手に別れ、敵城へと攻め込みます。協力してくれるかしら？」

「「「あたりまえだ！！」」」

「「「あの鬼畜ゴリラを始末してやるわ」」」

優子「開戦と同時に突撃します。各自準備しておいてください。以上、解散！」

（ガラッ）

優子「まあ、こんなもんかしら」

秀吉「鬼じゃ・・鬼がおる・・・」

平賀「あいかわらず和也は男女問わず凄い人気だね」

愛子「でも、最後のはいらなかったんじゃない？」

小山「あれは私のリクエストよ。あのゴリラには試召戦争の時にしてやられたし・・・」

根本「まだ、怒ってたのか・・・」

☆回想終了☆

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

午後の部が始まり僕たちは敵城へと攻め込んだ
作戦は１コース捨てた二点突破
僕は美波さん、愛子さん、康太君と一緒に部隊を率いてＡコースを進んでいる
・・・それにしても・・・

須川「和也ちゃんの進む道は我等ＦＦＦ団の手によって切り開くのだ！死を恐れるな！和也ちゃんの矛となり、盾となるのだ！」

Ｆ「会長！福村と近藤がやられましたが、代わりに横溝が疲弊したＡクラスの生徒を倒しました！」

須川「でかしたぞ！その調子だ！進め！坂本雄二を始末するのだ！」

・・・なんでこんなにやる気満々なんだろう？
それになんで雄二君を名指しなんだろう？

和也「どうしたんだろうね？みんな」

美波「ホント、どうしたのかしらね？」

愛子＆康太（（・・・言えない・・・））

まぁいいや

A「和也君、敵軍が城内に向かって撤退を始めました」

和也「まぁそうだろうね」

こっちは４１人、向こうは大体２０人位だ
いくら戦力差があっても数が違いすぎる
まともにぶつかれないなら引き返すしかない
でも、あんまりゆっくりもしてられない
Bルートを進んでる人達がAかCルートを逆走したら挟み撃ちになるからね
その前にできるだけ敵の数を減らさなくちゃ

和也「そのまま追撃、一対一で戦わないで。なるべく、多対一で戦うように」

「「「了解です。和也ちゃん」」」

・・・もう、ツッコミませんよ

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　雄二

雄二「くっ、翔子！北口を援護してくれ！」

翔子「・・・わかった」

「助けてくれ！」

「突破される！」

雄二「クソッ！翔子！南口に移動だ！」

翔子「・・・今行く」

マズイな
一体倒しては一体倒されている
こっちの方が人数が少ない分このままじゃ不利だ
しかも戦力の三分の一はＢルートに行ってて不在の上に通信機を忘れて連絡不可
本隊で高得点者は翔子と久保と佐藤だけ
絶体絶命だ
だがまだチャンスはある
Ｂルートに行った姫路と明久だ
あいつらがＡかＣルートを逆走して挟み撃ちにできれば・・・

瑞希「ただいま～」

明久「雄二、向こうの城には誰もいなかったよ」

※→Bルートから帰ってきた※

雄二「・・・この・・・大馬鹿野郎がぁぁぁ！！！！」

明久「え？な、なに！？」

雄二「なに普通に戻ってきてんだよ！ってか、通信機忘れてんじゃねえよ！」

瑞希「ご、ごめんなさい！」

雄二「ちっ、過ぎたことを言っても仕方ねえ。この状況をなんとかしねえと・・・」

『『『『坂本を殺せ！！！！』』』』

明久「雄二、なにしたのさ？」

瑞希「なんで坂本君を名指しなんでしょう？」

雄二「知るか！どうせなんか偽情報でも・・・」

『和也ちゃんに○○○や×××をしようとした鬼畜ゴリラを始末するのだ』

な、なんてこと言いやがる！？
木下姉の仕業か！？
・・・そういや向こうには小山もいたな
さては試召戦争の時のことまだ怒ってやがるな？

翔子「・・・雄二、今の話を詳しく聞かせてもらう」

明久「雄二！貴様、よくも僕の弟を！」

瑞希「坂本君には翔子ちゃんがいるのに酷いです！」

雄二「ま、待て！誤解だ！俺は何も・・・ぎゃあぁぁぁぁぁ！！！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

『和・・・んに・・〇や×・・・しよ・・した鬼畜ゴリ・・・・・のだ』

ん？
向こうで何か叫んでるみたいだけどよく聞こえないな
それにしてもいい感じだなぁ♪
敵軍はほとんど戦死したし

背後からの追撃もなさそうだし・・・
・・・いや、待てよ
相手はあの雄二君
もしかしたら何か仕掛けを・・・

「「「「ぎゃー！！！」」」」

和也「ど、どうしたの？」

！！
この気配は・・・

第五十五問　策士、木下優子（後書き）

雄二が可哀想なポジションに・・・

さて、最後に和也の前に現れた者の正体は・・・

第五十六問　彼が腕輪を使うとき・・・（前書き）

ちょっとぐだぐださせちゃったなぁ・・・
とりあえず更新です

第五十六問　彼が腕輪を使うとき・・・

ＳＩＤＥ　和也

僕達の部隊が一掃された
そこに立っていたのは・・・

和也「利光君・・・」

久保「悪いがこれ以上先には進ませないよ」

学年次席、久保利光君だった・・・
それにしてもあれだけいた敵を一掃するなんて凄いなぁ
っと、感心してる場合じゃない
僕も戦わなくちゃ

和也「みんな、行くよ！青組吉井和也が・・・」

美春「させませんわ！清水美春が吉井和也に古典で勝負を挑みます。
試獣召喚！」

？「試獣召喚！」

和也「くっ、仕方ない。試獣召喚！」

☆古典☆

青組　吉井和也　４２０点
ＶＳ
赤組　清水美春　１３５点
＆
赤組　玉野美紀　１４９点

二人がかりか・・・
点数はこっちが勝ってるけど侮ってはいけない
あの二人は同じクラスの仲間
気をつけないと息の合ったコンビネーションが・・・

美春「なんで玉野さんがいるんですの!?あなたは南口の担当でしょう!」

玉野「カズちゃんのいるところに私ありだよ!」

美春「こっちはいいから早く向こうに戻りなさい!」

玉野「ヤダ!カズちゃんの相手は私がするの!邪魔しないで!」

美春「なにを言ってるんですの!?娘の相手は私がしますわ!あなたこそ邪魔しないでください!」

・・・息の合ったコンビネーションが・・・

玉野「カズちゃんは私のものなの！」

美春「違います！！和美ちゃんはわたくしの娘ですわ！！」

どっちも違う！！

コンビネーションがどうとかいうレベルの問題じゃないな・・・

玉野「・・・あなたとは一度決着をつけなくてはならないようね」

美春「望むところですわ！！」

☆古典☆

赤組　清水美春　１３５点

ＶＳ

赤組　玉野美紀　１４９点

・・・この場合僕はどうしたらいいんだろう？

久保「・・・・」

和也「・・・苦労してるね？」

久保「・・・わかってくれるかい？」

☆古典☆

赤組　清水美春　０点
ＶＳ
赤組　玉野美紀　３点

美春「うぅ・・・悔しいですわ・・・」

玉野「勝ったわ！さあカズちゃん！私と・・・」

美波「試獣召喚！」

（サクッ）

青組　島田美波　８３点
ＶＳ
赤組　玉野美紀　０点

うわー・・・
美波さん、容赦ないね・・・

玉野「そ、そんな・・・」

鉄人「戦死者は補習!!」

玉野「カズちゃ～ん」（ズルズル）

美春「和美ちゃ～ん。お姉さま～」（ズルズル）

戦死した二人を西村先生が連れて行った
久しぶりの出番、お疲れ様です

愛子「他のメンバー倒してきたよ」

康太「・・・残るは久保のみ」

久保「くっ！」

明久「久保君、応援に来たよ」

雄二「ったく、酷い目にあったぜ」

中林「久保君、大丈夫？」

兄さんと雄二君、それに中林さんが援軍に来た・・・？
なんで雄二君の服はボロボロになってるんだろう？

明久「試獣召喚！」

☆古典☆

赤組　吉井明久　９点

「「「「「「・・・・・」」」」」」

明久「黙らないでよ！せめて笑って！」

雄二「だから勉強しろっつったんだ」

和也「兄さん・・・」

明久「やめて和也！そんな可哀想なものを見るような目で僕を見ないで！」

雄二「まあいい。お前の役目はもう終わった。久保、明久はお前の

ことを凄く心配してたぞ」

久保「それは本当かい！？」

明久「う、うん。本当だけど・・・」

中林「あ、あの、私も心配して・・・」

久保「明久君、君は僕が守るよ！下がっていてくれたまえ！」

明久「あ、うん、頑張ってね」

中林「うぅ・・・久保君・・・」

利光君のやる気が上がっちゃったなぁ・・・

・・・中林さん、ドンマイ

どれどれ、利光君の点数は・・・

赤組　久保利光　５５９点

・・・はい？

愛子「嘘！？中間テストのときより高いよ！？」

久保「僕だって今まで何もしなかったわけじゃない。特に木下さんや工藤さんに負けてからは必死に勉強してきたんだ」

愛子「くっ、ボ、ボクたちも行くよ！康太君！」

康太「・・・了解」

中林「久保君、私も手伝うよ！」

愛＆康＆中「「「試獣召喚！」」」

青組　工藤愛子　２６８点

青組　土屋康太　１０２点

赤組　中林宏美　１０５点

和也「康太君、点数上がったね？」

美波「土屋に負けた・・・」

愛子「ま、ボクが教えたからね、手取りアレ取り」

アレってなんだ！？

っと、僕も戦わなくちゃ・・・

青組　吉井和也　４２０点
＆
青組　島田美波　８３点
＆
青組　工藤愛子　２６８点
＆
青組　土屋康太　１０２点
ＶＳ
赤組　久保利光　５５９点
＆
赤組　吉井明久　９点
＆
赤組　中林宏美　１０５点

人数は同数
雄二君が召喚してないのは美波さんが腕輪を使ったら『干渉』するつもりだからだろう
ここは・・・

和也「瞬間移動！」

先に中林さんを倒しておこう
僕は中林さんの召喚獣の背後に回り

刀を振り下ろす

中林「え？きゃああ」

青組　吉井和也　４０１点
ＶＳ
赤組　中林宏美　０点

あ、ラッキー。もう一回使える♪
だったら・・・

和也「瞬間移動！」

狙うのは兄さん！
僕は兄さんの召喚獣の背後に回り、刀を振り下ろした
しかし・・・

久保「させない！『絶対防壁』」

（ガキン）

和也「え？」

攻撃が当たる瞬間、僕の攻撃は何かに弾かれた

明久「行け！」

和也「くっ！」

（ゴスッ）

逆に兄さんの攻撃を食らってしまった

青組　吉井和也　２８１点
ＶＳ
赤組　吉井明久　９点

僕は慌てて兄さんから距離を取る
さっきのは・・・

和也「今のは利光君の腕輪？」

久保「そう、僕の腕輪の能力は『絶対防壁』、使用した相手を１０分間守り続ける。ただし自分には使用できない」

なんてチート能力!?
さすが学年次席の腕輪・・・
ってか中林さんに使ってあげなよ・・・
ん?まてよ・・・
ってことは・・・

和也「兄さんは１０分間無敵って事!?」

明久「ふぇ?そうなの?」

しまったぁぁぁ!
言わなきゃ気付いて無かったよこの人!

雄二「行け、明久!今のお前は無敵だ!」

明久「ふふふふふ」

うわー
兄さんと雄二君が凄く悪い顔になってる・・・

和也「と、とにかくやるしかない！兄さんは１０分間倒せないから気をつけて！」

美＆愛＆康「「了解」」

青組　吉井和也　２８１点
＆
青組　島田美波　８３点
＆
青組　工藤愛子　２６８点
＆
青組　土屋康太　１０２点
ＶＳ
赤組　久保利光　４０９点
＆
赤組　吉井明久　９点（無敵中）

こうして戦闘が開始した
そういえば・・・
向こうは大丈夫かな？
こっちにいないメンバーといえば・・・

第五十六問　彼が腕輪を使うとき・・・（後書き）

ついに久保君のターン！
次回は南口側の様子を書く予定です

第五十七問　学年主席本領発揮

ＳＩＤＥ　優子

さて、どうしたものかしらね・・・
奇襲には成功したものの状況はあまりよくない
なぜなら・・・

☆英語Ｗ☆

赤組　霧島翔子　４４８点
＆
赤組　姫路瑞希　４１２点
＆
赤組　佐藤美穂　２０８点

この三人が立ちはだかっているからだ
対するこっちは・・・

青組　木下優子　３１６点
＆
青組　木下秀吉　７２点

&
青組　根本恭二　１９９点
&
青組　小山友香　１６５点
&
青組　平賀源二　１２３点

美穂は理数系だからなんとかなるし、姫路さんもちょっと苦しいけど、腕輪の能力さえ気をつければなんとかなる
問題は・・・代表
代表が腕輪を使っているところを見たこと無いからどんな能力か知らない
能力次第では一気にやられる可能性もある
慎重に行かなくちゃ・・・

優子「それにしても、こっち五人に対してたったの三人とは随分舐められたものね」

瑞希「本当は玉野さんがこっちの担当だったんですが・・・」

佐藤「『カズちゃんが私を呼んでる！』とか言ってどこかに行っちゃいました」

翔子「・・・和也は人気者」

よし！この調子で少しでも時間を稼ごう

秀吉「それにしてもお主らが明久や雄二と一緒におらんのは意外じゃのう」

翔子「・・・玉野が暴走したから私と瑞希がこっちに来るしかなかった」

瑞希「佐藤さんだけじゃ負担が大きすぎますからね」

なるほど。二人とも真面目だからね
さすがに私情を捨てて戦争を優先してるわね

翔子&瑞希「「そして活躍して雄二（明久君）に褒めてもらう（です）」」

前言撤回。
滅茶苦茶私情を挟んでる！

翔子「・・・時間稼ぎはもうおしまい？」

優子「っ！気付かれてたのね・・・」

佐藤「そういうことなら行きます！」

そう言って美穂が私に突っ込んできた
でも、点差があるし落ち着いて対処すれば・・・

瑞希「今です！『熱線！』」

優子「！！しまっ・・・」

平賀「危ない！」（ドンッ！）

平賀君がアタシの召喚獣を突き飛ばして助けてくれた
でも・・・

赤組　姫路瑞希　３６２点
　　ＶＳ
青組　平賀源二　０点

平賀君は熱線を直撃し、戦死してしまった

優子「平賀君、ごめんなさい。アタシのせいで・・・」

平賀「気にしないで、後は任せたよ」

佐藤「余所見してていいんですか！？」

美穂の召喚獣が再びこっちに向かってくる
でも・・・

優子「敵はアタシだけじゃないのよ」

小山「そういうこと」

佐藤「え？きゃあああ」

青組　小山友香　１６５点
ＶＳ
赤組　佐藤美穂　０点

背後に回りこんでた友香の攻撃によって美穂は戦死した
これであと二人
ただ・・・代表の動きが気になる
さっきから動かない
動く気が無いように見える
遠距離攻撃？
それとも和也みたいな移動系の能力？
双方、うかつに手を出せないまま
アタシ、秀吉、友香、姫路さん、代表の５人が睨みあい・・・
・・・って、あれ？根本君は？

根本「今だ！喰らえ！霧島！」

いつの間にか全員の死角に廻り込んでた根本君が代表に攻撃を仕掛ける

・・・？

おかしい

奇襲は成功してるはずなのに全然動揺してない・・・

まさか罠！？

翔子「・・・このときを待ってた。『・・・』」

代表が何かを呟くと、腕輪が輝いた

そして・・・

（ズバッ）

根本君の攻撃が当たった・・・はずだった

根本「な、なに！？うわあああ」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

あれから数分が経過し、僕たちは利光君が使った腕輪の能力、絶対防壁に圧倒されていた

青組　吉井和也　１１６点
＆
青組　島田美波　１３点
＆
青組　工藤愛子　７９点
＆
青組　土屋康太　２２点
ＶＳ
赤組　久保利光　２５９点（１０分経過後、もう一度使った）
＆
赤組　吉井明久Ａ　５点（無敵中）
＆
赤組　吉井明久Ｂ　４点（無敵中）

腕輪使用者の利光君を倒せば効果は消えるのではないかと思い、攻撃するものの・・・

和也「行け！」

明久「させない！」

愛子「えい！」

明久「よっと！」

こんな感じで兄さんが守り・・・

久保「今だ！」

和也「くっ！」

吉井和也　１１６点→８１点

隙を見て利光君が攻撃、この繰り返しだ

てか、『ダブル』使って両方無敵って反則じゃないかなぁ・・・

まぁ兄さん以外には使いこなせないだろうけど・・・

そういえば・・・

和也「兄さん、ノーダメージとはいえさっきからかなり攻撃喰らってるよね？フィードバックはないの？」

明久「そういえば痛くないや」

反則だぁ！！！

久保「そろそろ決めさせてもらうよ！まず一人！」

康太「！！」

利光君の召喚獣が康太君を狙う・・・が・・・

愛子「康太君！危ない！」

愛子さんが庇い、そして・・・

工藤愛子　７９点→０点

愛子さんが戦死してしまった

康太「・・・工藤、なんで・・・」

愛子「あはは、やられちゃった・・・ごめんね」

久保「ちょうど１０分経つころだ。明久君はさがっていてくれたまえ」

そう言って利光君が近づいてくる
どうする？
点差は約三倍
・・・ダメだ。打開策は無い

美波「和也！逃げなさい！ここはウチと土屋で抑えるから！」

康太「・・・和也、逃げろ」

和也「そ、そんな！二人を見捨てるなんてできないよ！」

久保「逃がすと思うかい？一番危険な人物を」

利光君は美波さんと康太君の召喚獣の間をすばやく通り抜け、そして・・・

久保「終わりだよ、和也君」

僕の召喚獣に向かって武器を振り下ろす
やられる！
そう思った次の瞬間

（フッ）

「「「「え？」」」」

全員の召喚獣が消えた
なんで？

『試召大合戦午後の部終了です。生徒のみなさんは速やかに城内に移動してください』

時間・・・切れ・・・？
時計を見るともう１７時だった
助かった・・・

久保「ここで決めたかったんだが・・・」

雄二「ちっ！命拾いしたな」

明久「雄二は何もしてないよね？」

雄二「うるさいぞバカ久。俺がいなかったら島田の科目チェンジでお前らは戦死してたんだぞ」

明久「うっ・・・さ、さて、城内に戻ろうか」

そう言って兄さんたちは城内へと戻っていった
・・・結果的には生き延びたけど完全に僕たちの負けだ

和也＆美波＆康太「「・・・」」

重い空気の中、僕たちは城内へと戻った

☆青の城の城内☆

僕たちが戻ると・・・

優子＆秀吉「「・・・」」

暗い空気を纏った優子さんと秀吉君がいた
他の人たちがいないって事は・・・

秀吉「おかえりなのじゃ」

優子「見ての通りアタシと秀吉以外は戦死したわ」

話によると平賀君は優子さんを庇い、根本君は奇襲に失敗、小山さんは二人を逃がす為に翔子さんと瑞希さんに一人で立ち向かったら

しい

秀吉「面目ないのじゃ」

優子「ごめんなさい」

和也「二人が悪いわけじゃないよ。それにまだ負けたわけじゃないんだし・・・」

美波「そうね。気持ちを切り替えて頑張りましょ」

こうして勝負は明日に持ち越しとなった

青組生存者

吉井和也
島田美波
木下優子
木下秀吉
土屋康太

計5名

赤組生存者

吉井明久
坂本雄二
姫路瑞希
霧島翔子
久保利光

計５名

第五十七問　学年主席本領発揮（後書き）

ぐだぐだになりました
どうしても五対五にしたかったもので・・・

次回、ついに・・・

第五十八問　彼が気持ちに気付く時（前書き）

今回は短いです
・・・ついに和也ちゃんが・・・

第五十八問　彼が気持ちに気付く時

ＳＩＤＥ　美波

補給試験と夕食を終え、部屋に戻るところなのだが・・・

根本「友香・・・／／／」

小山「恭二・・・／／／」

（イチャイチャ）

・・・ココもなの？

さっきからあちこちでカップルがいちゃついてるので邪魔しないように遠回りして、なかなか部屋に着けないでいた

☆数分後☆

美波「やっと着いた」

愛子「あっ、美波。おかえり～遅かったね」

美波「あっ、愛子。補習は？」

愛子「もう終わったよ。今回は特別ルールで、三時間補習したらあとは試合観戦だって」

美波「へぇ～そうなんだ」

愛子「ボクは今からお風呂に行くけど美波は？」

美波「ウチは後で行くわ」

愛子「そ、じゃ、またあとで」

愛子を送り出した後、ウチは帰る途中に見たカップルたちを思い出す

美波「いいなぁ・・・ウチもいつか和也と・・・」

・・・って、無理よね・・・

告白しないと・・・

でも、ウチにはそんな勇気は・・・

美波「・・・よし！」

ウチは鞄から携帯を取り出し・・・

美波『ウチのことどう思ってる？』

送信っと
告白じゃないけど、これならいくら鈍感な和也でもウチの気持ちに・
・・

（コンコン）

美波「？は～い」

（ガラッ）

和也「あ、美波さん、遊びに・・・」

（パタン）

和也「え？ちょ、なんで閉めるの！？」

な、なんてタイミング！？
ウ、ウチはまだ心の準備が・・・
・・・・あれ？

美波「・・・和也？メール見た？」

和也「メール？・・・何もきてないよ？」

？

送信できてなかったのかしら？

（ガラッ）

美波「とりあえず、上がって」

和也「うん。お邪魔します」

そしてウチは携帯をチェックし・・・

『送信完了→吉井明久』

美波「ウチのバカァ！！」

和也「ど、どうしたの？美波さん？」

間違えた！！

どどどどどうしよう

これじゃウチはアキに気があるみたいじゃない！？
ち、違うのよ！ウチは和也一筋で・・・

（ｐｉｐｉ）

美波「！！」

アキからの返信が・・・
・・・仕方ない、事情を説明して謝って・・・

明久『好きに決まってるじゃないか！雄二なんかよりもずっと！』

・・・・・・え？

美波「・・・どうしよう・・・」

和也「？どうしたの？」

美波「・・・アキに・・・告白されちゃった・・・」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

美波「・・・どうしよう・・・」

和也「?どうしたの?」

美波「・・・アキに・・・告白されちゃった・・・」

和也「・・・・・え?」

兄さんが?美波さんに?

あれ?兄さんは瑞希さんが好きなはずじゃ・・・

僕の勘違い?

そっか・・・兄さんは美波さんが好きだったんだ・・・

だったら二人の仲を応援してあげ・・・

いやだ・・・

応援して・・・

いやだ、応援したくない

?

なんで・・・?

二人はきっとお似合いだし
相手が兄さんなら僕も諦めがつくし・・・

・・・？
諦め？何の？

・・・・・・・そっか・・・そうだったんだ・・・
今、やっとわかった

なんでこんなに胸がもやもやするのか・・・
なんで応援したくないのか・・・

僕は・・・・・美波さんが・・・・好きなんだ

美波「和也？」

ぼ、僕は今までなんて恥ずかしいことを・・・
僕は今までのことを思い出していた

Bクラス戦でのお姫様抱っこ
二人きりでクレープ屋へのデート
ウチに泊まった時のハプニング
清涼祭打ち上げ時のハプニング
如月ハイランドへのデート

それから・・・

美波「和也？聞いてる？」

和也「は、はい！え、えっと・・・なんだっけ？」

美波「アキの告白、送信先間違えただけだってさ」

そ、そうなんだ
よかった・・・

美波「？さっきからなんか変よ？どうしたの？」

和也「なななななな何でもないよ」

ど、どうしよう・・・

恥ずかしくて美波さんの顔、まともに見れないよ・・・

美波「顔赤いわよ？熱でもあるんじゃないの？」

そう言って美波さんは僕のおでこに自分のおでこをくっつけて熱を測る

そして・・・

和也「☆○■▽♪×！！／／／」

（パタッ）

美波「ちょ！？和也！？しっかりして！和也！」

僕は意識を手放した・・・

第五十八問　彼が気持ちに気付く時（後書き）

ついに自分自身の恋心に気付いた和也
この後の展開は・・・

第五十九問　好きな人と話す時って緊張するよね（前書き）

和也ちゃんがネガティブモードに突入

第五十九問　好きな人と話す時って緊張するよね

ＳＩＤＥ　？？？

美波「話って何？」

和也「ぼ、僕は美波さんが好きです！付き合ってください！」

美波「・・・」

和也「あ、あの・・・」

美波「笑わせないでよ」

和也「え？」

美波「なんでウチがアンタみたいな泣き虫なチビと付き合わなきゃいけないのよ？はっきり言ってウチとアンタじゃ釣り合わないのよ。可哀想だから同情で友達やってあげてるってのに図に乗らないでよ」

和也「そ、そんな・・・」

美波「話は終わりよ。もう二度と話しかけないでね」

和也「ま、待って・・・」

美波「さようなら」

和也「う、うわあああぁぁぁぁぁぁ」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

和也「・・・・はぁ・・・・はぁ・・・・夢か・・・・・」

よりによってなんて夢を見るんだ・・・
あの優しい美波さんがあんなこと言うはずないのに・・・
僕は最低だな・・・

康太「・・・大丈夫か？」

秀吉「また例の夢かの？」

和也「あ、違うんだけど・・・ある意味もっと嫌な夢。ごめんね、起こしちゃって・・・」

秀吉「起こすも何も、もう朝じゃぞ？」

康太「・・・和也が寝坊してるだけ」

時計を見るともう七時半だった
とっくに起床時間を過ぎている

僕は完全に寝過ごして・・・
・・・あれ？
僕、昨日、いつ寝たっけ・・・？
ってか、部屋に戻ったっけ？
確か、美波さんの部屋に遊びに行って、僕が自分の気持ちに気付いて、動揺してる僕を心配した美波さんが僕のおでこに自分のおでこを・・・あっ！／／／

和也「／／／」

秀吉「ど、どうしたのじゃ！？顔がゆでだこのように真っ赤じゃぞ！？」

康太「・・・熱か？」

和也「なななななんでもないよ」

秀吉「ならよいのじゃが・・・」

康太「・・・無理はするな」

和也「う、うん。ありがとう」

☆会議室☆

美波「あ、和也、おはよう。もう大丈夫なの？」

和也「う、うん、大丈夫だよ／／／」

美波「ならいいけど・・・」

美波さんが心配そうな目で見てる
優しい人だなぁ

優子「さて、これが最後のミーティングになるわけだけど・・・」

ミーティングが始まった
戦死者は戦争に関することに参加できない決まりのためここにいるのは僕、優子さん、秀吉君、康太君、そして・・・美波さん
・・・やっぱり可愛いなぁ／／／
いままで何で気付かなかったんだろ?

優子「・・・ちょっと和也?聞いてるの?」

和也「ふぇ?あ、えっと・・・なんだっけ?」

優子「どうしたのよ?ぼーっとして・・・」

秀吉「さっきからずっとこんな感じなのじゃ」

康太「・・・具合が悪いのか?」

美波「やっぱりそうなの!?和也!医務室に行くわよ!」

和也「ち、違うよ。ちょっと考え事をしてて・・・」

優子「全く・・・しっかりしてよね」

和也「・・・ごめんなさい」

秀吉「まぁまぁ、それよりミーティングに戻るのじゃ」

優子「そうね。・・・って言ってもこっちも相手も五人しかもう作戦もなにもないけどね」

美波「どうするの？」

優子「五人でまとまって動くしかないわ。下手に分散して向こうが固まってたら勝ち目がないもの」

和也「なるほど、でも、雄二君もそれに気付いてるだろうから・・・」

優子「ええ、向こうも固まって動くでしょうね」

となると向こうの方が成績の良い人が多い分、こっちが不利か・・・

優子「これ以上話し合ってもどうしようもないし・・・試合開始まで自由行動ってことで」

自由行動か・・・
じゃ、僕は・・・

美波「和也」

和也「ふぇ?み、美波さん!?」

美波「?なんでそんなに驚くのよ?」

和也「べ、別に・・・」

美波「ま、いいわ。それより自由行動だし、暇ならウチと・・・」

和也「ご、ごめん!僕、行くところがあるから」(ダッ)

美波「え?あ、ちょっ・・・」

ダメだ・・・
恥ずかしくてまともに顔を見られないよ・・・
このままじゃダメだ・・・このままじゃ・・・

☆三階☆

和也「と、いうわけで相談に来ました」

根本「・・・俺が言うのもなんだが・・・相談する相手を間違って

ないか？」

和也「他に恋人がいる人を知らないもので・・・」

根本「まあいい、で？島田が好きなんだっけか？」

和也「・・・うん、目が合うだけで恥ずかしくてまともに顔を見れなくて困ってるんだ／／／」

根本「（ってことはこいつらやっぱり両想いじゃねえか）」

和也「？どうしたの？」

根本「いや・・・で、お前はどうしたいんだ？付き合いたいのか？」

和也「そ、そりゃあ・・・まあ・・・・／／／」

根本「だったら簡単じゃねえか」

？

なんだろう？

やっぱり告白しろってことかな？

根本「押し倒せ！！」

予想の遥か上を行った！？

（ゴンッ！）

小山「恭二！あんたねぇ・・・子供になんてこと教えてんのよ！！」

和也「僕は子供じゃないよ！！」

小山「と、まぁ冗談はさておき・・・」

和也「冗談だったの？かなり本気に聞こえたんだけど・・・ってか小山さん、いつからそこに？」

小山「『と、、いうわけで相談に来ました』のあたりからよ」

和也「・・・つまり最初からですね」

全然気付かなかった
相当、動揺してたんだな・・・

小山「まぁいいじゃない。で、美波が好きなのよね？」

和也「・・・うん／／／」

小山「（やっぱり両想いだったか）だったら告白するしかないわね」

和也「そ、そんなの無理だよ」

小山「あら、どうして？」

和也「・・・だって告白したら失敗して、ますます顔を合わせにくくなっちゃうよ」

根本「・・・なんで失敗することが前提になってるんだよ？」

和也「・・・だ、だって美波さんは可愛いし、優しいし、料理だって上手。それに比べて僕なんてチビだし、女顔だし、泣き虫だし、泳げないし・・・どう考えても釣り合わないよ」

根本「よくそんなに自分の短所ばっかり思いつくな・・・」

小山「あ、相変わらずのマイナス思考ね」

二人が顔を引き攣らせて苦笑いしてる

僕、何か変なこと言ったっけ？

根本「ま、無理に告白しろとは言わねえよ」

小山「そうね、少しずつ前に進めば良いんじゃないかしら？」

う～ん・・・

やっぱり少しずつ馴れるしかないな・・・

アナウンス『まもなく、合戦を再開いたします。生存者の方は所定

の位置に集合してください』

和也「あ、もう行かなきゃ。相談に乗ってくれてありがとね」

根本「大したアドバイスはしてないけどな」

小山「試合頑張りなさいよ」

和也「うん」

そう言って僕は一階へと向かう
話したら少し落ち着いたな
・・・やっぱり悩みを相談できる友達がいるっていいな

美波「あ、和也」

和也「み、美波さん」

落ち着け・・・落ち着くんだ吉井和也

和也「さっきは変な態度とってごめん。もう大丈夫だから」

美波「気にしてないわよ。でも、体調が悪いなら無理しちゃダメよ」

和也「うん。ありがとう」

よかった・・・普通に対応できた
この調子で・・・

美波「じゃ、早く行きましょ」

（ギュ）

そう言って美波さんは僕の手を掴んで・・・

和也「／／／」

美波「か、和也!?顔が赤いわよ?やっぱり医務室に・・・」

和也「だ、大丈夫!熱があるわけじゃないから・・・」

むぅ・・・不意打ちで来られるとまだ動揺しちゃうなぁ・・・
っと、このことを考えるのは後回し
今は合戦に集中しなくちゃ・・・
そして・・・

アナウンス『9時になりました。試召大合戦を再開します』

戦いが始まった

第五十九問　好きな人と話す時って緊張するよね（後書き）

誰と誰を戦わせるかは決まってるのに、そこまでもっていくのが難しい・・・

次回は早く更新できるように頑張ります

第六十問　人の話はちゃんと聞きましょう（前書き）

今回のメインは和也でも美波でもありません
愛の力で強くなるのはこの二人だけじゃない！？

第六十問　人の話はちゃんと聞きましょう

ＳＩＤＥ　和也

さぁ、合戦開始だ
頑張・・・あれ？

和也「なんでもうすでに召喚フィールドが張ってあるんだろう？」

「「「「・・・・」」」」

美波「・・・今日の合戦は戦場全体にランダムで召喚フィールドが張られるってミーティングで優子が言ったじゃない」

康太「・・・聞いてなかったのか？」

優子「か・ず・や？アタシの話はそんなに退屈かしら？」（ゴゴゴゴ）

和也「ご、ごめんなさい」

優子「・・・まあいいわ。さっさと召喚するわよ」

和也「？？？」

美波「今日は常に召喚獣を出したまま行動するのよ」

和也「なるほど」

優子「かぁ～ずぅ～やぁ～くぅ～ん？アタシの話は一切聞いてなかったのね～」（ゴゴゴゴゴゴ）

和也「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」（ガタガタ）

秀吉「ま、まぁまぁ姉上、落ち着くのじゃ」

美波「ほ、ほら、さっさと行きましょ」

優子「・・・仕方ないわね。次から気をつけなさいよ」

和也「・・・はい」

「「「「「試獣召喚！」」」」」

美波「じゃ、行きましょうか」

和也「うん」

☆数分後☆

明久「あ、来た来た」

雄二「遅かったな、待ってたぜ」

兄さんと雄二君が待ち構えていた

優子「たった二人で迎撃とは舐められたものね」

雄二「俺らの役目はここで足止めとお前らの点数を削ることだ。それにそう簡単にはやられねーぜ」

科目は日本史・・・
ああ、そういうことか・・・

赤組　吉井明久　４０６点
　　＆
赤組　坂本雄二　３２３点

優子「な、なによ、あの点数」

美波「ア、アキの点数がこんなに高いなんて・・・」

明久「日本史は和也に教わってるし、この合宿中も日本史と世界史しか勉強してないしね」

雄二「・・・明久に負けた・・・」

隣で雄二君がへこんでる
それにしても兄さんはすごいなぁ
この前まで２００も越えてなかったのに・・・

明久「さあ、始めようか」

どうしよう
この二人と戦っても勝てるだろうけど、その後の連戦は厳しい

康太「・・・先に行け」

和也「康太君!?いくらなんでも一人じゃ・・・」

秀吉「一人ではないぞい」

和也「秀吉君!?で、でも・・・」

康太「・・・問題ない」

秀吉「ワシらを信用するのじゃ」

優子「・・・わかったわ。和也、美波、行くわよ」

美波「ええ」

和也「気をつけてね」

僕たちは兄さんと雄二君の間を駆け抜ける

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　秀吉

雄二「あ、こら、待ちやがれ！」

秀吉「お主の相手はこっちじゃ！」

康太「・・・邪魔はさせない」

和也たちを先に進ませることに成功した
後はこやつらを倒すだけじゃ

雄二「ちっ・・・まあいい。どうせあいつらが負けるなんてありえねえんだからな」

明久「そうだね。二人を倒して追いかけよう」

雄二「ああ、挟み撃ちだ」

ワシ等は眼中に無いと言いたいようじゃな・・・
舐められたものじゃ

秀吉「そうはいかんのじゃ！」

康太「・・・舐めるな」

雄二「科目が保健体育なら勝ち目は無かったが、日本史なら俺らの・・・」

康太「・・・『加速』」

明久「うわっ！」

雄二「なっ！」

赤組　吉井明久
４０６点↓３４６点

雄二「な、なんで腕輪が使え・・・」

そこまで言って雄二が固まった
どうやらやっと気付いたようじゃな
ワシ等の点数に・・・

青組　木下秀吉　３８５点
＆
青組　土屋康太　４０１点

雄二「・・・明久はおろかこの演劇バカやムッツリにまで負けた・・・」

明久「・・・もしかして二人も和也に？」

秀吉「うむ、この三日間みっちりとしごかれたのじゃ」

康太「・・・おかげで日本史と世界史は一気に成績が上がった」

明久「そっか・・・さすが和也だね」

雄二「・・・俺も教わるかな・・・」

※後日、雄二が和也に勉強を教わりに行く姿が目撃された※

秀吉「では行くぞい」

そう言ってワシは明久に向かって行った

明久「うわっ！」

雄二「あ、明久！」

康太「・・・お前の相手は俺だ」

雄二の相手はムッツリーニ
普通は点数の低いワシが雄二と戦うべきなのじゃろうが
相手は学年一召喚獣の扱いがうまい明久
この程度の点数差では勝てないじゃろう
ならばワシらの取る作戦はただ一つ
雄二を倒して二対一じゃ
それまではワシが明久を抑えるのじゃ

秀吉「そういうわけじゃ。少しばかりワシに付き合ってもらうぞい」

明久「つ、付き合うだなんて・・・ぼ、僕には・・・その・・・他に好きな子が・・・／／／」

秀吉「そういう意味ではないのじゃ！」

こやつはどこまでバカなのじゃ・・・
じゃが好都合じゃ
この調子で時間稼ぎを・・・

康太「・・・待たせたな」

秀吉「む？雄二はどうしたのじゃ？」

康太「・・・もう倒した」

秀吉「なんと！」

明久「この雑魚がぁー！！！」

雄二「・・・すまん」

明久「え？あ、いや・・・僕もちょっと言い過ぎたかな～なんて・・・」

珍しく雄二がへこんでおるから、明久がうろたえておるのじゃ・・・
奇妙な光景じゃのう・・・
それにしても・・・

秀吉「随分気合が入っておるようじゃがなにかあったのかの？」

康太「・・・昨日、俺が弱いせいで愛子を戦死させてしまった。だから俺は強くなる。そして次こそは俺が愛子を守る！」

・・・こやつと工藤は違うクラスじゃから敵同士なんじゃが・・・
せっかくやる気になっておるようじゃし、黙っておくかの・・・
しかし・・・

秀吉「お主、この戦いの映像は城で皆が見ておるというのに随分大胆な発言じゃのう」

康太「！！！」

秀吉「・・・忘れておったのか」

☆一方その頃、青い城モニタールーム☆

愛子「／／／」

小山「あらあら、愛されてるわねえ～」（ニヤニヤ）

平賀「これが愛の力ってやつかな？」（ニヤニヤ）

愛子「茶化さないでよ！康太君だってきっとそういう意味で言ったんじゃないよ！／／／」

根本「（こいつらは揃いも揃ってなんで両想いに気付かないんだ？）」

☆再び戦場☆

秀吉「む、ムッツリーニよ。大丈夫かの？」

康太「・・・問題ない」

明久「じゃ、そろそろ行くよ！」

青組　木下秀吉　２６６点
＆
青組　土屋康太　２２１点
ＶＳ
赤組　吉井明久　２９８点

秀吉「行くぞい！」

そう言ってワシは明久に突撃するが・・・

明久「甘い！」

あっさりと受け止められてしまった
流石じゃな・・・
じゃが・・・計算どおりじゃ

秀吉「今じゃ！」

康太「・・・任せろ」

明久「え？うわあぁぁぁ」

ワシが突撃し、武器を押さえてる隙にムッツリーニが背後に回りこみ、一撃を決める

作戦通りじゃ

赤組　吉井明久
２９８点→１０３点

康太「・・・すまん。急所を狙ったが外された」

流石じゃ
ダメージを軽減したのじゃな

明久「くっ！せめて一人だけでも！」

明久はムッツリーニに向かって木刀をバットのように振る

康太「・・・甘い！」（タンッ）

ムッツリーニはジャンプで明久を飛び越え、背後に着地した

康太「・・・今だ！」

秀吉「了解じゃ！」

ワシは正面から明久の頭を、ムッツリーニは背後から心臓を突き刺した
そして・・・

赤組　吉井明久
１０３点→０点

ワシ等は明久を倒した

秀吉「やったのじゃ！」

康太「・・・（グッ）」

雄二「くそっ！まさかお前らがここまでやるとはな・・・完敗だ」

和也の授業がなければ勝てんかったじゃろうな
和也に感謝せねば・・・
・・・ん？
そういえば明久が随分おとなしいのう？

明久「・・・」（ビクンビクン）

秀吉「あ、明久よ！しっかりするのじゃ！」

康太「・・・これはヤバイかもしれない」

フィードバックのことをすっかり忘れておった
頭と心臓を貫かれたんじゃから相当痛いじゃろうな
その後、明久は医務室に運ばれた

勝者　青組　秀吉＆康太

第六十問　人の話はちゃんと聞きましょう（後書き）

バカ＆ゴリラコンビまさかの敗退

ムッツリーニがカッコイイ！？

最初に結ばれるのはこのカップルかも！？

第六十一問　彼は星になった！？（前書き）

ついに美波が腕輪を使います

第六十一問　彼は星になった！？

ＳＩＤＥ　和也

和也「秀吉君達、大丈夫かなぁ」

優子「大丈夫よ。二人ともだいぶ成績を上げてるし、それに・・・土屋君は何か思うところがあるみたいで気合充分だったしね」

美波「それよりウチらは自分の心配しなくちゃね」

あっ、そっか
兄さんと雄二くんはさっきいたから残りは・・・

瑞希「はぁ・・・はぁ・・・ここから先には・・・行かせません」

久保「ひ、姫路さん、大丈夫かい？」

僕たちの前に現れたのは、すでにかなり疲弊している瑞希さんとそれを心配する利光君
・・・この人、どんだけ体力ないんだろう？
さてと、科目は・・・

☆数学☆

・・・よりによって・・・

久保「ふふ、これで和也君はいないも同然」

瑞希「そうですね」

・・・酷いや二人とも・・・

さて、気を取り直して、二人の点数は・・・

赤組　姫路瑞希　５１６点

赤組　久保利光　４１０点

優子「嘘!?久保君は文型のはずじゃ・・・」

久保「今度こそ負けないよ!島田さん!」

瑞希「これなら美波ちゃんにも勝てます!」

そっか・・・

二人とも知らないんだな・・・

美波さんの点数を・・・

青組　島田美波　７８６点

青組　木下優子　４４４点

瑞希「う・・そ・・・」

久保「な、なんて点数だ」

優子「さすが美波ね。ところで和也は？」

和也「！！」（ビクッ）

青組　吉井和也　６８点

優子「か・ず・や？なんで合宿が始まる前より点数が落ちてるのかしら？」（ゴゴゴゴゴ）

和也「こ、今回の問題は難しくって・・・」

美波「・・・ウチの教え方、わかりにくかった？」

和也「そんなことない！美波さんに教わってなかったら３０点も取れない自信があるよ！」

優子「威張って言うな！」

美波「お、落ち着いて。ここはウチと優子の二人で頑張りましょ」

優子「・・・そうね。だったら和也。アンタは先に行きなさい」

和也「え?で、でも・・・」

優子「いいから。ここで三人で戦って勝っても向こうにはまだ代表がいる。アタシも美波も点数をかなり消費するだろうし、それにアンタ、数学で代表に勝てないでしょ?」

和也「うっ・・・わかった。先に行くよ」

瑞希「そ、それは困ります!私たちが点数を削って、翔子ちゃんが一掃する作戦なんですから!」

久保「ちょ、姫路さん!作戦をばらしちゃダメだ!!」

瑞希「あっ!」

なるほど、それで翔子さんが居なかったんだね
それにしても瑞希さん
相変わらず天然ですね

優子「そうと聞いては、ますます和也をここに居させるわけにはいかないわね」

瑞希「くっ、行かせません!『熱線』」

瑞希さんの『熱線』が僕に向かって放たれ・・・
や、やばい！
避けきれな・・・

美波「和也！危ない！『飛行』」

『熱線』が当たる直前に美波さんの召喚獣が僕の召喚獣を抱えて飛んだ

和也「コレって美波さんの腕輪の能力？」

美波「そっ、一秒につき一点消費で空を飛ぶことが出来るのよ」

瑞希「うぅ・・・空を飛ぶなんてズルイです。こうなったら『熱線』で・・・」

久保「待つんだ姫路さん！当たる確率は低いし、これ以上腕輪を使うとまともに戦えなくなる。向こうは飛んでるだけで点数を消費するんだし、ここは降りてくるのを待つんだ」

たしかに・・・
このままじゃ美波さんの点数が減っていくだけだ

美波「和也、先に行きなさい」

和也「う、うん。それはわかったけどどうやって・・・」

美波「こうやってよ」

そう言って美波さんの召喚獣は僕の召喚獣を片手で持ち、振りかぶって・・・

・・・って！まさか！！

美波「いっけー！！」

和也「ちょ、ちょっと待ってよ！７００点もある召喚獣が投げたりしたら・・・」

（ブンッ）

→僕の召喚獣が投げられる音

（キラーン）

→僕の召喚獣が星になる音

優子「・・・美波、やりすぎよ」

美波「ご、ごめん！」

瑞希「え、えっと・・・この場合どうなるんでしょう？」

和也「と、とにかく僕は召喚獣を追いかけるよ！二人とも、がんばってね」

美波「任せなさい！」

優子「代表の『腕輪』には気をつけなさいよ」

和也「例の不思議な能力だよね？」

根本君も何が起こったのかわからなかったって言ってたな
気をつけなくちゃ
こうして僕はその場を後にした

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

☆おまけ☆

翔子「・・・？」

（ヒュ～・・・ポテッ）

和也の召喚獣が空から降ってきた

しかし近くに和也の姿は無い

翔子「・・・これは・・・攻撃していいの？それともダメなの？」

赤組代表、霧島翔子は想定外の事態に戸惑っていた

第六十一問　彼は星になった！？（後書き）

和也の召喚獣が落ちた先は翔子（敵）の前！
次回、戦闘に入ります

第六十二問　ペッタンコンビの激闘（前書き）

美波＆優子「「誰がペッタンコンビよ！！」」

第六十二問　ペッタンコンビの激闘

ＳＩＤＥ　美波

和也は召喚獣を追って行ってしまった
・・・ホントは和也と一緒にいたかったけど・・・しょうがないわよね
ま、この二人を倒してから追いかければいいんだし、頑張らなくちゃ！

久保「行くよ。姫路さん『絶対防壁』」

瑞希「ありがとうございます。行きます！」

優子「アタシが抑えてる隙に早く久保君を！」

美波「わかったわ！」

瑞希「させません！『熱線』」

美波「わっ・・・」

危なかった・・・
ちょっとかすっちゃったけど大丈夫かしら？

青組　島田美波
７５０点↓５９１点

・・・かすっただけでダメージが１５０点・・・
でたらめな威力ね・・・
でも、これじゃ久保君に近づけない
それに・・・

（ガキン、ガキンガキン）

優子「くっ」

このままじゃ優子が戦死しちゃう
どうしよう・・・
ウチの腕輪の能力は空を飛ぶだけだし、まだ空中での操作に慣れてないから熱線を撃たれたら避ける自信なんてない
・・・！！
そうだ！

美波「優子！一旦召喚獣をこっちに」

優子「？わ、わかったわ」

そう言うと優子は瑞希の攻撃をふりきってこっちに来る

そしてウチは優子の召喚獣を抱えて・・・

美波「行くわよ『飛行』」

瑞希「あっ、飛ぶなんてずるいです！」

優子「久保君の腕輪の効果がなくなるまで飛ぶつもり？でもそんなことしたら美波の点数は・・・」

美波「違うわ。えっとね、ゴニョゴニョ」

優子「！そういうことね。わかったわ」

美波「それじゃ、行くわよ！」

そしてウチは瑞希の召喚獣の頭上を超え・・・

美波「今よ！」

優子「『伸びろ』」

優子に腕輪を使わせる

狙いはもちろん・・・久保君！

久保「え？うわあああ」

赤組　久保利光
２６０点→０点

美波「やった！後は下に降りて瑞希を・・・」

瑞希「『熱線』」

美波「しまっ・・・」

ヤバイ！
当たったら二人とも死ぬ
と、とりあえず・・・

（ポイッ）

ウチは優子の召喚獣を熱線の軌道の外に投げる
あとはウチが避けるだけ
なんとか直撃だけは避けなきゃ・・・

（キュボ）

・・・直撃・・・は、しなかったが、左腕を焼き千切られてしまった
点数は・・・

青組　島田美波
５１１点→１１点

・・・なんとか生き延びたか・・・

瑞希「美波ちゃん！これで終わりです！」

優子「アタシを無視とはいい度胸ね！『伸びろ』」

瑞希「え？きゃあぁ」

優子が瑞希の召喚獣を貫いた
よし！これで勝・・・

赤組　姫路瑞希
３６６点→６６点

・・・ってない！？
なら・・・

美波「いっけー！」

ウチは瑞希に向かって武器を投げる
そして・・・

赤組　姫路瑞希
６６点→０点

瑞希の召喚獣に突き刺さり決着がついた

優子「やったわね」

美波「ええ」

優子「さて、どっちのフォローに行こうかしらね？」

美波「和也の方か、木下と土屋の方かってことね？」

秀吉「姉上～」

優子「秀吉？土屋君も・・・あんた達勝ったの？」

康太「・・・（グッ）」

秀吉「うむ！ワシとてやるときはやるのじゃ！」

優子「凄いじゃない。お姉ちゃん嬉しいわよ」（ナデナデ）

秀吉「や、やめるのじゃ姉上。恥ずかしいのじゃ／／／」

優子が木下を褒めるなんて珍しい光景ね
っと、そうなると残るは・・・

秀吉「む？そういえば和也はどうしたのじゃ？」

優子「科目が数学だから先に行かせたわ」

美波「いま、翔子と戦っているはずよ。急ぎましょ」

優子「そうね、代表相手じゃ確実に和也が勝つって保証もないし、
それに・・・あの不思議な腕輪のこともあるしね」

うち等は和也の元へと急いだ

勝者青組　木下、島田ペア

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

☆おまけ☆

翔子「・・・」（じー）

和也の召喚獣「・・・」（オロオロ）

和也の召喚獣を眺める翔子
主が居ないことでどうしていいかわからずオロオロしてる和也の召喚獣

翔子「・・・とりあえず、捕らえておく」

翔子はとりあえず捕まえておくことにした

第六十二問　ペッタンコンビの激闘（後書き）

和也ちゃんのピンチ！
このまま戦わずして負けてしまうのか！？
次回に続く

第六十三問　最強の敵、登場（前書き）

ついに和也ちゃんの戦闘シーン

・・・しかし・・・

第六十三問　最強の敵、登場

ＳＩＤＥ　和也

ん～見つからないなぁ
どこまで飛んでいったんだろう？

翔子「・・・和也」

和也「あ、翔子さん」

翔子さんが現れた
困ったなぁ、召喚獣がないと戦えな・・・って！

和也「・・・翔子さん、それって・・・」

翔子「・・・和也の召喚獣。空から降ってきた」

よ、よりによってなんてところに・・・
ど、どうしよう・・・

翔子「・・・倒していい？」

和也「ま、待って！」

こ、こんな間抜けな戦死なんてイヤだ！
何とかしなくちゃ・・・

和也「か、返してくれたら雄二くんが浮気をした時、真っ先に報告しますよ～なんて・・・」

ダメだよね～
そんな要求通らないよね・・・

翔子「・・・主人の元にお帰り」

あっさり通った！？
僕の召喚獣は手元に戻ってきた
雄二君、ゴメン
今度何か奢るからね
さて、気を取り直して科目は・・・

☆世界史☆

青組　吉井和也　９９８点
ＶＳ

赤組　霧島翔子　５５６点

・・・僕の得意科目、世界史だった

和也「あ、あの・・・僕が言うのもなんだけど、やっぱり止めを刺したほうが良かったんじゃ・・・」

翔子「・・・問題ない。私が勝つから」

む、凄い自信ですね？
例の腕輪の能力が関係してるんでしょうか？

和也「じゃあ、行きますよ」

翔子「・・・うん」

・・・相当自信があるんですね？
武器を構えもしないなんて・・・
だったら・・・

和也「瞬間移動」

腕輪を使われる前に倒す！

僕は背後に回りこみ、召喚獣を真っ二つにした・・・はずだった

翔子「・・・『吸収』」

翔子さんが呟いた瞬間、腕輪が輝き
僕の攻撃は翔子さんの召喚獣をすり抜け大きく空振った

和也「え？」

青組　吉井和也
９９８点↓４９９点

和也「な、なんで僕の点数が減って・・・」

そこまで言って僕はあることに気付いた

赤組　霧島翔子
５５６点↓１０５５点

そう、翔子さんの点数が増えてることに・・・

翔子「・・・これでおしまい」

翔子さんは空振ってバランスを崩している僕の召喚獣に一撃を決め、
そして・・・

青組　吉井和也
４９９点→０点

僕は・・・あっさり戦死してしまった

和也「そ、そんな・・・」

翔子「・・・これが私の腕輪の能力。『吸収』。触れた相手（攻撃も含む）の点数を半分吸収することが出来る」

和也「・・・わざわざ説明ありがとう」

翔子「・・・説明しないと読者の皆さんにはわかりづらいから・・・」

メタ発言自重してください
それにしてもなんというチート能力！

和也「それ反則じゃない！？」

翔子「・・・もちろん弱点もある。同じ人からは一度しか吸収できない、同じ科目でも一度しか吸収できない、一日三度しか使えない、自分の召喚獣が止まってないと使えない」

なるほど・・・
結構、使用条件が厳しいんですね

和也「それ、僕にばらしちゃっていいの？」

翔子「・・・かまわない。どうせ和也はそのうち気付くだろうし、これだけ点数があれば優子たちとも互角に戦える」

和也「！」

そうだ、僕の点数を吸収したせいで、翔子さんの点数は１０００オーバー
頭の中が真っ白になった
唯一つわかっているのは・・・僕が・・・戦況を悪化させてしまったということだった

美波「和也！」

和也「み、美波さん・・・」

そこには青組の四人が出揃っていた
そっか・・・みんな勝ったんだ・・・
僕だけ・・・負けたんだ
しかもただ負けただけじゃなく、敵の点数を増やして迷惑をかけて・・・
・・・みんな、怒ってるよね？僕のせいだよね？

和也「みんな・・・ごめん・・・ごめんよ・・・」

優子「ちょ、なに泣いてんのよ！」

和也「だって・・・僕のせいで・・・僕の点数が吸収されたせいで・・・翔子さんの点数が・・・」

美波「アンタのせいじゃない！翔子の点数が増えたのは結果論よ！アンタはアンタなりに勝とうと思って頑張ったんでしょ！それを攻めるような奴が居るならウチの前に連れてきなさい！ボコボコにしてやるわ！」

優子「美波、落ち着いて。和也も気にしないで後はアタシたちに任せなさい」

和也「・・・うん」

優子「さて、どうする？」

美波「どうするって？」

優子「こっちは四人、向こうは一人だから、一人が囮になって残り

三人が時間内逃げ続ければこっちの勝ちだけど・・・」

美波「却下よ！ウチは和也の仇を討つのよ！」

優子「・・・そう言うと思ったわ。二人もそれでいいわね？」

秀吉「うむ！ワシらがここまで来れたのは和也のおかげじゃ。和也の仇をとるために戦死するなら悔いはないのじゃ！」

康太「・・・（コクコク）」

みんな・・・優しいなぁ・・・

こうして四対一の戦いが始まった

第六十三問　最強の敵、登場（後書き）

まさかの和也ちゃん秒殺！！
次回、美波は敵討ちに成功するのか！？

第六十四問　最終決戦（前書き）

意外な結末！？

第六十四問　最終決戦

ＳＩＤＥ　美波

さて、そうは言ったものの・・・

☆世界史☆

青組　島田美波　３５０点
＆
青組　木下優子　３８６点
＆
青組　木下秀吉　２９９点
＆
青組　土屋康太　３０２点
ＶＳ
赤組　霧島翔子　１０５５点

点差が大きすぎるわね
おまけにこっちは誰も腕輪を使えない
どうしよう・・・
蒼海の腕輪の能力を使って科目を変える？
でも、ウチの数学はもう点数残ってないし、日本史も土屋と木下は消費してる
じゃあ優子の現代国語？
でももしそれも吸収されたらウチら三人の点数は１００点前後、も

っと厳しくなるわね
・・・厳しいけど世界史のまま戦うしかないわね

優子「四人同時に行くわよ」

美波「了解」

優子の指示通り四人で同時に攻撃する
これならいくら点数が高くても勝てる！
そう思ってた・・・が

（カキンカキンカキン）

翔子は刀と鞘を巧みに使い、まるでアクション映画の戦闘シーンのように華麗に攻撃をあしらう
・・・しかも・・・

（カキンカキンズバッカキンカキンサクッ）

青組　島田美波
３５０点→２４６点
＆
青組　木下優子
３８６点→２９０点

&

青組　木下秀吉

２９９点→１６５点

&

青組　土屋康太

３０２点→１８０点

・・・きっちりと反撃を決めながら・・・

美波「な、なんでそんなに召喚獣の扱いが上手いのよ!?」

秀吉「まるで明久のようじゃ！」

優子「・・・代表は和也に負けた日から毎日Ａクラスの生徒と模擬試召戦争をしてるのよ。それも一対一、多対一、奇襲など、あらゆる状況に備えて・・・」

なるほど・・・それであんなに扱いが上手いのね・・・

しかも・・・

赤組　霧島翔子　１０５５点

・・・全くダメージを喰らってない・・・

これはマジでヤバイかもね・・・

秀吉「姉上、島田、攻撃するチャンスはワシらが作る。じゃから後は頼むのじゃ！」

そう言うと木下の召喚獣が真正面から突っ込んでいった

翔子「・・・甘い」

（ズバッ）

青組　木下秀吉
１６５点→０点

秀吉「今じゃ！ムッツリーニ！」

康太「・・・（コク）」

木下の召喚獣を踏み台にし、土屋の召喚獣が上空に飛び上がり武器のクナイを投げつける

翔子「！！」

（キンッサクッ）

赤組　霧島翔子
１０５５点↓９４９点

翔子は一本は防いだものの、もう一本はかわしきれず当たってしまう

優子「まだまだ！」

土屋の攻撃でひるんだ隙に優子が畳み掛ける

翔子「・・・クッ！」

赤組　霧島翔子
９４９点↓６３０点

優子の攻撃は直撃した・・・が・・・

翔子「・・・二人とも、これでおしまい」

（ズバッズバッ）

青組　木下優子
２９０点→０点

青組　土屋康太
１８０点→０点

翔子が優子を切り、背後に着地した土屋を攻撃
その瞬間、正面に居たウチが視界から外れる
今だ！そう思いウチは翔子に攻撃を仕掛ける

翔子「・・・甘い」

優子「甘いのはあなたよ代表！」

（カキーン）

翔子「！！」

優子の召喚獣が消える寸前に翔子の刀を弾き飛ばした

優子「今よ！美波！」

秀吉「行くのじゃ！」

康太「・・・（グッ）」

和也「美波さん！」

美波「これで、終わりよ！！」

ウチは翔子の召喚獣の心臓目掛けてサーベルを突きつけた
いくら点差があっても、頭や心臓のように急所に当てればダメージは大きい
これでウチらの勝ちだ！

（ザクッ）

ウチの攻撃は当たった・・・が・・・

赤組　霧島翔子
６３０点→１９９点

美波「う・・・そ・・・なんで・・・」

翔子「・・・危なかった。『コレ』がなかったら負けていた」

そう言って翔子が持っていたのは日本刀を納めていた鞘
そう、鞘を使って攻撃の軌道をずらし、直撃を避けたのだ

翔子「・・・美波も、コレで終わり」

（バキッ）

翔子は持ってた鞘でウチを殴り飛ばし、そして・・・

青組　島田美波
２４６点→０点

ウチは・・・戦死した

アナウンス『試合終了！勝者、赤組！』

第六十四問　最終決戦（後書き）

美波「ちょっと！ウチの活躍は！？」

いや・・・ホントは最後の方で勝たせるつもりだったんですが・・・
途中で思いついたあるイベントの伏線として負けていただきました

美波「あるイベントってなによ？くだらないことだったら承知しないわよ」

えっとですね・・・ごにょごにょ・・・

美波「！！そ、そういうことならしょうがないわね」

和也「・・・なんだろう・・・凄く嫌な予感がするよ・・・」

第六十五問　強化合宿終了（前書き）

今回で強化合宿編は終了します

第六十五問　強化合宿終了

ＳＩＤＥ　和也

戦争が終了し、僕たちは城に戻っていた
大講堂の中には青組メンバーが待っている
そして僕は青組代表として最後の挨拶をしなければならない
でも・・・

和也「・・・怖い・・・怖いよ・・・」（ガタガタガタ）

戦争で負けたのは僕のせいだ
きっとみんな怒ってる
怒られる責められる嫌われる
・・・怖い

美波「和也、顔色悪いわよ？大丈夫？」

美波さんが隣で心配そうに僕を見ている

和也「・・・大丈夫」

これ以上美波さんを心配させたくない
僕はゆっくりと壇上に上がった
そして・・・

和也「み、みなさん。お疲れ様でした。我々青組は負けてしまいました。全て僕の責任です！ごめんなさい！」

僕はそう言い頭を下げる

（ドドドドド、スパーン）
→美波さんが走りこんできてハリセンで頭を殴る音

美波「アンタのせいじゃないって言ってるでしょうが！！」

和也「み、美波さん痛い・・・ってかそのハリセンどこから・・・」

美波「んなことはどうでもいいのよ！」

和也「でも、僕が点数を吸収されなければ・・・」

美波「それ以前にアンタが居なかったらそこまで行けてないわよ！」

和也「そ、そんなことは・・・」

優子「じゃあ証拠を見せてあげるわ。土屋君、お願い」

康太「・・・了解」

優子さんがそう言うと正面の大型ディスプレイにあるものが表示された
それは・・・

青組　日本史の平均点

中間テスト
１２２点
←
和也の授業終了時
１７６点

青組　世界史の平均点

中間テスト
１１９点
←
和也の授業終了時
１６５点

優子「どう?和也はチームにこれだけ貢献してるわ。コレを見て負けたのは和也のせいだって思う人は手を挙げなさい」

・・・手を挙げる者は一人も居なかった

「和也ちゃんのせいじゃありません！」

「俺たちの力不足だ」

「和也ちゃん、かあいいよぉ～お持ち帰りぃ～」

・・・最後のは関係ない・・・

美波「ね、誰もアンタのせいだなんて思ってないでしょ？」

和也「・・・うん」

美波「アンタは一人で何でも背負いすぎなのよ。アンタの周りには友達がたくさんいるんだから一人で抱え込まずに頼りなさい」

和也「うん。みんな！ありがとう！！」

（パチパチパチパチ）

☆閉会式☆

学園長「・・・というわけで強化合宿を終了するよ」

学園長の話が終わり、閉会式が終了・・・かと思われたその時

学園長「最後に、ある生徒から一言あるみたいだよ」

そう言って現れたのはゴリ・・・ゲフンゲフン、雄二君

雄二「さて、お楽しみの時間だ!敗者チーム代表の罰ゲーム、コスプレ撮影会、始めるぞ!!」

「「「「イエーイ」」」」

・・・・は?

敗者チーム代表↓僕

和也「ちょ、ちょっと待ってよ!僕、そんな話聞いてないよ!?」

雄二「当然だ。言ってないからな」

言えよ!!

だが、甘いよ雄二君!

強化合宿とはいえ今は授業中、そんな許可が下りるわけが・・・

学園長「ふむ、面白そうだね、許可するよ」

ババアァァァ！！！
くっ、どうする！？
ここは誰かに助けを・・・

康太「・・・撮影は任せろ」

秀吉「衣装はコレを使うとよいのじゃ」

味方が裏切った！？
ってか、秀吉君、その衣装どこから出した！？
なんとかして逃げねば・・・

優子&愛子「「和也、（君）」」

和也「優子さん、愛子さん、助けて！」

（ガシッガシッ）
→二人が腕を掴む音

和也「え？ちょ、裏切り者ぉぉぉ！！」

くっ、僕に味方はいないのか！？

美波「和也」

和也「み、美波さん！助け・・・」

そこまで言って気付いた・・・
美波さんの手にメイド服が握られていることに・・・

和也「え、えっと・・・冗談だよね？な、なんでそんな『いい笑顔』で近づいて・・・ちょ、やめ・・・あああああぁぁぁぁぁ！！」

その後、二時間に及ぶ撮影の後、強化合宿は幕を閉じた

☆おまけ☆

ムッツリ商会からのお知らせ

合宿中に撮影した和也ちゃんの写真によりついに写真集が完成！

吉井和也個人写真集『生まれ変わった僕を見て』

一部１０００円にて絶賛発売ちゅ・・・

訂正、現在在庫切れ

再販検討中

吉井和也のコメント

・・・僕もうお婿にいけない

第六十五問　強化合宿終了（後書き）

大人気、和也ちゃんのコスプレを導入しました
次回より新章に突入！！
自分の気持ちに気付いた和也ちゃんはどうなるのか！？

第六十六問　僕と失恋と勘違い（前書き）

新章突入！
オリジナルストーリーなので内容が微妙かも・・・

第六十六問　僕と失恋と勘違い

ＳＩＤＥ　和也

強化合宿から数日が経過し、僕は美波さんのことばかり考えていた

美波「あ、和也！おはよう」

和也「お、おはよう／／／」

あぁ・・・今日も可愛いなぁ・・・

美波「？顔、赤いわよ？熱でもあるんじゃ・・・」

そう言って美波さんは僕に手を近づけて・・・

和也「だ、大丈夫！！ぼ、僕、ちょっと用があるから先に行くね！！」

美波「え？あ、ちょ・・・」

うぅ・・・ダメだ・・・

最近、ずっと頭の中がもやもやして・・・
・・・やっぱり告白するしかないのかな？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

和也ったらどうしたのかしら？
もしかして無理矢理コスプレさせたことをまだ怒ってるのかしら？

康太「・・・」（トントン）

美波「？土屋？どうしたの？」

康太「・・・相談がある」

土屋がウチに相談？
うーん・・・今それどころじゃ・・・

康太「・・・これを」（スッ）

そう言って土屋が差し出したのは一枚の写真
そこに写っていたのは・・・
気持ち良さそうに眠っている和也の寝顔だった

康太「・・・非売品」

美波「！！いいわよ！何でも聞いてちょうだい！」

土屋ったらこんな名作を持っていたなんて・・・
コレはなんとしても手に入れなくては・・・
ウチは『天使の寝顔』（命名、土屋康太）を手に取り土屋の相談に乗ることにした

美波「で？相談って何？」

康太「・・・ここではちょっと・・・人通りの少ないところがいい」

美波「・・・エッチなことしたら爪を３０枚剥ぐわよ？」

康太「・・・違うから安心しろ。ってか俺の爪はそんなに無い」

美波「右手で６セットよ」

康太「・・・鬼」

☆体育館裏☆

人のいない体育館裏に移動

屋上にはアキ達がいたのでちょっと遠いがココまで来た

美波「で?相談って何よ?」

康太「・・・俺は・・・愛子に告白しようと思っている」

へぇ～結構男らしいところあるじゃない

美波「で?ウチにどうしろと?まさか代わりに想いを伝えて来いなんて言わないでしょうね?」

康太「・・・違う。俺は告白なんてしたことない。だから告白の仕方を教えて欲しい」

美波「・・・ウチだって告白なんてしたことないんだけど・・・」

康太「・・・自分だったらどんな告白をされたら嬉しいかを教えてくれればいい」

なるほど、女性の意見を聞きたいというわけね

美波「ん～・・・とりあえずアンタが言おうとしてる言葉を言ってみなさいよ。練習あるのみよ」

康太「・・・わかった」

さて、なんて言うのかしら？
ちょっと楽しみね

康太「・・・好きだ」

美波「・・・って、短っ！！ダメよ！それじゃ何が好きなのかもそれでどうしたいのかも言ってないじゃない！」

まさかたった三文字しか言わないとは・・・

康太「・・・俺、土屋康太は工藤愛子に好意を抱いており、できれば交際を・・・」

美波「まわりくどい！！しかもなによ、その機械が喋るような言い方は！もっとストレートに自分の想いをズバッと言うのよ！」

はぁ・・・これ、うまくいくのかしら？

康太「・・・俺はお前が好きだ！付き合ってくれ！」

美波「！！」

ちょっとドキッとしちゃった
ウチも・・・和也にこんな風に言われたいな・・・

康太「・・・どうだ?」

美波「いいと思うわ。やればできるじゃない。それにしてもなんで急に告白を?」

康太「・・・言いたい事はわかる。俺と愛子じゃ釣り合わないだろう」

美波「あ、いや・・・そうじゃなくて・・・」

康太「・・・でも、俺は後悔したくない!」

美波「!!」

康太「・・・想いの全てをぶつけてそれで振られるなら悔いは無い」

美波「そう・・・じゃあ頑張りなさいよ!」

康太「・・・ああ」

そう言って土屋は去っていった
・・・そういえばさっき物音がしたような・・・

(キョロキョロ)

気のせいかな？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

うぅ・・・全然授業が頭に入らない・・・
ちょっと散歩してこよう・・・
この辺なら人も少ないし少し落ち着ける

和也「ん？あれは・・・」

体育館の裏、人気の無いところに美波さんと康太君がいた
珍しい組み合わせだなぁ
こんなところで何を・・・

康太「・・・俺はお前が好きだ！付き合ってくれ！」

・・・・・・え？

僕は静かにその場を離れた

和也「そっか・・・そうだったんだ・・・」

僕はフラフラしながら状況を把握しようとしていた
康太君が愛子さんのことを好きって言うのは僕の勘違いで康太君は
美波さんが好きで美波さんも康太君が好きで二人は付き合ってて新
婚さんで・・・

※→和也ちゃん混乱中※

愛子「和也君?」

和也「あ、あれ?愛子さん?なんでここに?」

愛子「?なんでってここAクラスの前だし・・・和也君こそ何でこ
こに?」

周りを見ると確かにココは2－Aの教室の前
どうやらフラフラしているうちにココにたどり着いたらしい

愛子「大丈夫？顔色悪いけど・・・どうしたの？」

和也「ん、ちょっと・・・失恋しちゃって・・・」

愛子「失恋？そりゃあ大変・・・って、はい？」

そういえば愛子さんは康太君が好きなんだよな・・・

和也「じゃあ僕はもう行くね。愛子さんも頑張ってね」

愛子「え？あ、ちょ・・・」

愛子さんもいずれ失恋する
そんなこと言えるわけが無い
僕は逃げるようにその場を立ち去った

☆おまけ☆

ＳＩＤＥ　愛子

さっきのなんだったんだろ？
失恋って・・・
和也君の好きな人って美波だよね？
じゃあ美波が和也君を振ったってこと？
・・・いや、それはないな
美波も和也君のことが好きなはずだし・・・
じゃあなんで・・・
それに最後の『頑張ってね』ってどういう意味だろう？

康太「・・・愛子」

愛子「あ、康太君」

康太「・・・今度の日曜空いてるか？」

愛子「え？う、うん。予定は無いけど・・・」

康太「・・・出かけないか？」

愛子「ふぇ？・・・う、うん。いいよ／／／」

こ、これってデートのお誘い？／／／

ボクは和也君のことをすっかり忘れて舞い上がっていた

第六十六問　僕と失恋と勘違い（後書き）

今回もムッツリーニがカッコイイ！？

次かその次ぐらいから話が重くなります

第六十七問　後悔、嫉妬、決意、そして・・・（前書き）

サブタイトルがいまいちパッとしない・・・

第六十七問　後悔、嫉妬、決意、そして・・・

ＳＩＤＥ　和也

和也「はぁ・・・」

明久「どうしたの？さっきから溜息ばっかりついてるけど・・・」

和也「ああ、大したことじゃないよ。気にしないで」

明久「ならいいけど・・・早くご飯食べないと冷めちゃうよ？」

和也「あ、うん」

そう言って僕は兄さんが作った朝ご飯に手をつける
目玉焼きに味噌汁か・・・

明久「はい、お醤油」

和也「あっ、ありがと」

・・・落ち着いて考えたら僕は告白もしてないんだし、落ち込む資格も権利も無いんだよな・・・

（ドボドボドボドボ）
※→目玉焼きに醤油をかける音※

やっぱり想いを伝えておけばよかったなぁ・・・はぁ・・・・

（ドボドボドボドボ）

和也「はぁ・・・いただきまーす」

明久「召し上がれ・・・って！ちょ、和也！」

和也「？なに？（パクッ）ブッ！ゲホッゲホッ！」

明久「いくらなんでも醤油かけすぎだよ。はいお水」

和也「ありがと（ゴクゴク）」

明久「・・・ねえ和也。悩みがあるなら相談に乗るから話してよ」

兄さんが心配そうな目でこっちを見る
優しいなぁ・・・
でも・・・

和也「・・・ありがとう。でも、これは僕が自分で解決しなきゃいけない問題だから・・・」

明久「そう・・・わかった。でも、悩みすぎちゃダメだよ」

和也「うん。ありがと、兄さん」

☆Fクラス教室☆

美波「あ、和也、アキ、おはよう」

明久「おはよう美波」

和也「・・・おはよう」

美波「？和也、元気ないわよ？どうかしたの？」

和也「・・・なんでもないよ」

美波「ならいいけど・・・」

康太「・・・おはよう」

美波「あ、土屋（愛子に告白したの？）」

康太「（・・・まだ。日曜日にデートに誘った。そこで告白する）」

美波「（そっ、まぁ頑張りなさいよ）」

二人とも仲良さそうだな・・・
やっぱり・・・付き合ってんだな・・・
・・・・・・・・いいなぁ、羨ましいな・・・

☆放課後☆

和也「はぁ・・・」

僕は公園のベンチで溜息をついていた

葉月「あっ、小さいお兄ちゃん、こんにちはですっ！（あっ、小さいって言っちゃったです）」

和也「あ、葉月ちゃんこんにちは」

葉月「え?あ、こんにちはです（あれ?怒られなかったです）」

和也「今、学校帰り?」

葉月「はいですっ！・・・お兄ちゃん元気ないです。どうしたですか?」

和也「ん～・・・まぁ色々あってね」

・・・さすがに『君のお姉ちゃんに恋して失恋した』とは言えないな

葉月「元気出すです！」（ナデナデ）

そう言って葉月ちゃんは僕の頭を撫でてきた
優しい子だなぁ・・・
・・・僕はダメだなぁ
こんな小さい子に心配かけたりして・・・

和也「ありがとう葉月ちゃん。ちょっと元気出たよ」

葉月「本当ですか？よかったです！あっ、葉月はもうお家に帰るです。バイバイです！」

和也「うん。バイバイ」

そう言って葉月ちゃんは走り去っていった
・・・そうだよな・・・
ジメジメしてても仕方ないし・・・
もしかしたら、まだ付き合ってないかもしれないし・・・
ここは思い切って告白しよう！
玉砕するだろうけど１％でも可能性があるならそれに賭けてみよう
さて、そろそろ帰ろうかな？
帰ってご飯の支度を・・・

？「あの～すいません」

和也「？あ、はい」

気がつくと目の前には男の人が立っていた
ちょっとチンピラっぽい人だ

男「ちょっと道を聞きたいんですけど、いいですか？」

和也「あ、はい。どこですか？」

男「えっと、ここなんですけど・・・」

そう言って男は地図を僕に見せてきた
えっと、どれどれ・・・

（バチッ）

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

☆翌日☆

ＳＩＤＥ　明久

明久「ふぁ～・・・朝か・・」

目の前のテレビには電源が入っており、画面には『ＧＡＭＥ　ＯＶＥＲ』の文字
今日は土曜日で学校が休みだから徹夜でゲームをするつもりだったんだが途中で眠ってしまったらしい

明久「・・・お腹・・・空いたなぁ」

とりあえず台所へ向かうと・・・

明久「しまった・・・片付けるの忘れてた・・・」

そこには脱ぎ捨てた制服や食べ散らかしたお菓子などがあちこちに転がっていた
・・・和也が片付けてないって事は・・・

明久「・・・怒ってるよね・・・」

と、とりあえず謝ろう

（コンコン）

明久「え、えっと・・・和也・・・さん?その・・・コレには深い訳がありまして・・・」

・・・?

返事が無い?

と、いうよりも何かがおかしい

部屋の中からまるで人の気配を感じない

明久「・・・和也?入るよ?」

そう言って僕がドアを開けると・・・

（ガラッ）

明久「かず・・・や?」

・・・そこに和也の姿はなかった

第六十七問　後悔、嫉妬、決意、そして・・・（後書き）

和也ちゃんは何処へ！？
ぼちぼち話が重くなって行きます

第六十八問　美波の決意、そして事件発覚（前書き）

オリストーリーだからなんか微妙・・・

第六十八問　美波の決意、そして事件発覚

美波「和也？どこに行くの？」

和也「・・・美波さん、今までありがとう」

美波「え？『今まで』って・・・」

和也「お別れだよ」

美波「な、何を言って・・・」

和也「さよなら」

美波「ま、待ってよ！何でもするから！和也の望むことなら何だってする！だから・・・だからお願い！行かないで！和也ぁぁぁぁ！！」

ＳＩＤＥ　美波

美波「！！・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ゆ・・・め・・・？

美波「よかった・・・」

全く、なんて嫌な夢
でも・・・
いずれ本当になるのよね・・・
和也に彼女ができたらウチに構ってられないものね・・・
・・・ヤダな・・・
和也が幸せならそれでいいって思ってたはずなのに・・・
・・・やっぱり・・・ウチは和也が好き
誰にも渡したくない
和也の・・・傍に居たい

『俺は後悔したくない！』

先日のクラスメイトの言葉が脳裏に浮かんだ
後悔したくない・・・か・・・

美波「・・・やっぱり・・・想いを伝えよう」

ウチだって後悔したくないわ！
和也に・・・告白する！！

☆数分後☆

美波「あなたが好きです！ウチと付き合ってください！」

和也の写真（先日手に入れた天使の寝顔）に向かって告白の練習中
うーん・・・
なんかありきたりのセリフね・・・
もっとインパクトのあるセリフがいいな・・・
本でも参考にしてみよう

☆更に数分後☆

美波「あたしね、カズ君のこと、だーい好き♪」

・・・バカか！？
ていうか口に出して言ってるウチもバカか！！
こ、こんなの言ったらドン引きされる光景しか思い浮かばないわ
ちょっと参考にした本が幼稚すぎたわね
もっと大人の読む本を・・・

☆更に数分後☆

美波「和也！アンタの秘密は握ってるわ！ばらされたくなければウチと付き合いなさい！」

って、違う！！

脅してどうする！！
・・・やっぱりシンプルに言った方がよさそうね・・・

葉月「・・・お姉ちゃんなにしてるですか？」

美波「ふぇ？」

振り向くとそこには若干引いてる葉月が立っていた
し、しまった！
葉月が居るの忘れてた！（両親は仕事）

葉月「お兄ちゃんに告白するですか？略奪愛で修羅場ですか？」

・・・この子はどこでそんな言葉覚えてくるのかしら？

葉月「あっ、そういえば昨日、お兄ちゃんの様子がおかしかったです」

美波「？おかしい？どんな風に？」

葉月「えっとね、公園で寂しそうに座ってたです」

寂しそうに・・・ね
そう言われてみれば学校でもなんか様子が変だったわね？

さてはまた何か悩みを一人で抱え込んでるわね？
全く、世話が焼けるわね・・・

美波「葉月、ウチは和也の家に行ってくるけど葉月も来る？」

葉月「葉月はお友達と約束があるから行かないです」

美波「そう、遅くならないうちに帰ってくるのよ」

葉月「はいです。行ってきますです」

そう言って葉月を送り出し、ウチは外出の準備をした

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　雄二

翔子「・・・雄二、おはよう」

雄二「・・・お前はなぜ俺の部屋にいる？」

翔子「・・・今日はいい天気。デートに行こう」

・・・またそれか・・・
どうせ断っても強制連行されるんだろうな・・・はぁ・・・

（ｐｉｐｉ）

ん？着信？

翔子「・・・吉井から」

雄二「さも当然のごとく俺の携帯を奪うな・・・もしもし、明久か？なにか用・・・」

明久『雄二！どうしよう！？和也が！和也が！』

雄二「おい、落ち着け。和也がどうした？」

・・・待てよ・・・コレは使える！

雄二「よし、今からそっちに行くから待ってろ」

そう言って俺は電話を切った

そう、これで翔子から逃げる理由が出来た

雄二「翔子、そういう訳だ。何かトラブルがあったらしいから俺はそっちに・・・」

翔子「・・・そう・・・だったら私も行く」

・・・どうあっても逃がさないつもりか・・・
はぁ・・・仕方ねえか・・・
それにしても・・・
明久の慌てっぷりは尋常じゃなかったな
・・・念のため『コレ』を持っとくかな

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　明久

雄二「で？和也がどうしたって？」

電話して数分後、雄二と翔子さんが駆けつけてくれた

明久「・・・雄二・・・和也が・・・家出しちゃった・・・」

雄二「はぁ？あの和也がか？」

明久「朝起きたら居なかったんだ・・・きっと僕がちゃんと片づけをしないから怒って出て行っちゃったんだ・・・」

雄二「その程度で和也が怒るとは思えんがな」

翔子「・・・出かけてるだけかも」

明久「朝六時にはもう居なかったんだよ?そんな朝早くに出かける用なんてないはずだよ」

やっぱり僕に愛想を尽かせて・・・

（ピンポーン）

チャイムが鳴った?
こんな朝早くに?

明久「!!もしかして和也!?」

僕は玄関へと急いだ

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

・・・和也が心配でつい来ちゃったけど、時間はまだ朝七時半ちょっと早すぎたかな?

ま、いっか
アキならともかく和也なら起きてるだろうし

（ピンポーン）

チャイムを鳴らして出てくるのを待つ
もしかしたら和也のパジャマ姿を見ることができるかも／／／

（ドドドドド、バンッ！）

明久「和也！今までどこに・・・って、なんだ美波か・・・」

美波「なんだとはなによ。ウチが来ちゃ悪い？」

明久「あ、いや、そういうわけじゃ・・・」

雄二「落ち着けバカ久、和也が自分の家に戻ってくるのにインターホン鳴らすわけねえだろ？」

ん？
和也が・・・『戻ってくる』？
それにさっきのアキの慌て様・・・
なんか・・・嫌な予感が・・・

美波「ねえ・・・和也に何があったの？」

明久「あ、え、えっと・・・」

美波「正直に答えなさい！関節外すわよ！」

明久「・・・じ、実は・・・和也が・・・家出しちゃったんだ・・・」

美波「・・・はぁ？」

あの和也が？アキを置いて？無いでしょ

雄二「まだそうと決まったわけじゃねえ。とりあえず和也の部屋を調べるぞ。アイツが家出するなら置手紙の一つぐらい用意してるはずだ」

明久「あ、うん・・・」

こうしてウチらは和也の部屋を調べることになった

☆和也の部屋☆

調べた結果、置手紙の類のものなかった

美波「じゃあ和也は家出したわけじゃないってことね」

明久「よかった・・・」

雄二「いや・・・むしろ最悪だ」

？

どういうことかしら？

翔子「・・・これ」

そう言って翔子が指差したのは和也の財布と携帯

翔子「・・・普通、出かけるなら財布は持っていく」

雄二「そうだ、そしてココにあるはずのものが無い」

明久&美波「「？？」」

雄二「制服と学生鞄だ。今日は学校は休みだ。制服を着る理由も鞄を持っていく理由もないはずだ。明久、昨日、和也が帰ってきたのを見たか？」

明久「・・・ううん、気付いたら寝てて・・・まさか！？」

雄二「やっとわかったか?そう、和也は昨日から家に帰ってないってことだ。おまけに財布と携帯があるってことは無一文の上に誰にも連絡が取れないってことだ。なのに何故帰って来ない?」

美波「誰かの家に泊まったってことは?」

雄二「ないな。それならアイツの性格上、何とかして明久に連絡するはずだ」

それって・・・

翔子「・・・連絡できず、帰って来れない状況」

雄二「そういうことだ」

・・・連絡できず、帰って来れない状況
いくらなんでも迷子の可能性は無いだろう
となると・・・

美波「・・・まさか・・・誘拐」

雄二「いや、拉致された可能性は高いが、誘拐なら何かしらの要求があるはずだ。・・・最悪・・・殺されてる可能性もある」

!!

そ、そんな・・・
ふと、今朝の夢が脳裏に浮かぶ
ま、まさか・・・あれは正夢？
彼女ができたからお別れじゃなくて
この世とのお別れってこと？
そんなのイヤよ！

雄二「まだそうと決まったわけじゃねえ。とにかく探しに行くぞ。まずは目撃者を探すんだ」

目撃者・・・そういえば・・・

美波「そ、そういえば、葉月が学校帰りに公園で和也を見たって・・・」

雄二「よし、まずは公園に行くぞ」

こうしてウチらは和也を探しに出かけた

第六十八問　美波の決意、そして事件発覚（後書き）

だんだん話が重くなってきました
次回も頑張ります

第六十九問　聞き込み調査開始！

ＳＩＤＥ　美波

ウチらは葉月が言ってた公園に到着したが、ここで問題が発生

翔子「・・・人、いない」

雄二「だな、こりゃここで目撃者を探すのは無理かもな」

そう、ここは大通りから離れたところにあり
交通量も人通りもほとんどない
・・・拉致するには絶好のポイント・・・

瑞希「あれ？みなさんこんなところでどうしたんですか？」

背後から声が聞こえる

明久「あっ、瑞希ちゃん。瑞希ちゃんこそ何を・・・」

振り向くとそこには何故かジャージ姿の瑞希が鞄を持って立っていた
・・・ん？あの鞄って・・・

どうやらアキも同じことに気付いたらしい

美波「み、瑞希・・・その鞄・・・」

瑞希「あっ、これですか？和也君の鞄です。そこのベンチの下に置いてたんですけど、和也君が見当たらないので置き忘れたのかと思って今から家に届けに行くところだったんです」

！！

和也はいないのに和也の鞄だけがある？
それってやっぱり・・・

瑞希「み、美波ちゃん？どうしたんですか？顔色が悪いですよ？」

美波「うそよ・・・そんな・・・和也が・・・・」（ガタガタ）

明久「諦めちゃダメだよ！瑞希ちゃん、実は・・・」

※事情説明中※

瑞希「ええ！？和也君が行方不明！？」

明久「・・・うん。だから今、目撃者を探してるんだ」

瑞希「だったら私も手伝います！」

明久「・・・いいの？」

瑞希「もちろんです！和也君は私の大事な義弟・・・ゲフンゲフン、友達ですから！」

明久「ありがとう！」

雄二「次は学校に行くぞ」

明久「え？なんで？」

雄二「ここじゃ、目撃者は見つかりそうに無いからな。学校なら部活動をしてる生徒がいるだろ？そいつらは下校時間も遅いし、何か目撃してるかもしれない」

美波「そういえば木下は演劇部よね」

翔子「・・・愛子は水泳部」

瑞希「じゃあ着替えたら学校に行きますね」

明久「そういえばなんでジャージなの？」

瑞希「え、えっと・・・健康のためにジョギングです。（太ったからダイエットしてたなんて言えません）」

明久「そうなんだ。じゃ、また後でね」

美波「それじゃ、早く行きましょ」

☆学校☆

雄二「よし、翔子は工藤、明久は秀吉に聞いてみてくれ。俺は教師陣に聞いてくる。で、島田は・・・」

美波「ウチもアテがあるから聞いてくるわ」

雄二「そうか、じゃ、また後でな」

さてと、あの人はたしか・・・

☆バレー部☆

小山「和也君?見てないけど」

美波「そう・・・ありがと」

☆テニス部☆

中林「見てないわ」

美波「わかった、練習の邪魔してごめんね」

うーん・・・ダメか・・・
もう知り合いはいないし、ウチも先生たちに聞いて・・・

（ピンポンパンポーン）

雄二『吉井明久、霧島翔子、島田美波は至急学園長室に集まってくれ』

今のアナウンスは・・・坂本？
何か情報を手に入れたのかしら？
ウチは急いで学園長室に向かった

☆学園長室☆

学園長室に入ると三人とも、もう来ていた

美波「どう？何かわかった？」

明久「こっちはダメだったよ」

翔子「・・・こっちも目撃者はいなかった」

雄二「こっちもだ。だが和也の居場所がわかるかもしれんぞ」

美波「ホント!?でも、どうやって・・・」

学園長「とりあえず吉井弟の鞄を見せな」

明久「あ、はい」

アキが学園長に鞄を渡す
すると学園長は鞄の中を調べ始めた
一体何を・・・

学園長「ふむ、あの子に渡した蒼海の腕輪が無いね」

・・・（プチッ）

美波「このクソババア!!和也が危険な目に遭ってるかも知れないっていうのに自分の作品の心配!?どういう神経してんのよ!!」

雄二「お、落ち着け、島田。そういう意味じゃない」

美波「へ？」

学園長「あ、ああ。あの腕輪は特殊な電波が発生してててね。ある程度の場所なら特定できるようになってんのさ。だからあの子が腕輪を持ってるなら大体の場所がわかるって訳さ」

美波「そ、そうだったんですか・・・ごめんなさい」

明久「それなら和也はいつも使わないときは制服のポケットに入れてますよ」

学園長「なら調べてやるからちょっと待ってな・・・」

そう言って学園長はパソコンを開き調べ始めた

（コンコン）

学園長「？開いてるよ」

瑞希「失礼します」

明久「あっ、瑞希ちゃん」

瑞希「遅くなってごめんなさい。何かわかりましたか？」

雄二「目撃者はいなかったが、和也の持ってる腕輪のおかげで場所がわかりそうだ」

学園長「場所がわかったよ。ちょっと遠いから車で連れて行ってやるよ」

雄二「ほぉ、ババアにしちゃ、珍しく優しいじゃねえか」

学園長「やかましいガキだね。車を持ってくるから玄関で待ってな」

そう言われた後、ウチらは学園長室から追い出された

そういえば・・・

なんで学園長は休みの日に学校にいるんだろう？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　学園長

ガキどもから話を聞いてアタシは一つの可能性を拭い去れずにいた

吉井和也に恨みを持つ者

人を拉致監禁することが出来るほどの力、もしくはそれを手に入れるだけの財力を持つ者

その条件に当てはまるのは・・・

学園長「・・・もし『アイツ』が犯人だとしたら・・・アタシにも責任があるからね・・・」

誰もいない学園長室で静かに呟いた

第六十九問　聞き込み調査開始！（後書き）

勘の鋭い人なら犯人の正体がわかったかな？
出来れば内緒の方向でｗｗ

次回は、時を遡り、和也ＳＩＤＥ！
犯人の正体、目的が明らかに・・・

第七十問　黒幕登場（前書き）

かなり残酷な描写が入ります

第七十問　黒幕登場

ＳＩＤＥ　和也

和也「・・・ん・・・ここは・・・」

周りを見渡すと木造の部屋の中に僕はいた
・・・！！
う、動けない！？
僕は両手を縛られ、天井から吊るされていた
おまけによく見ると僕は動物園の動物が入ってるような頑丈そうな檻の中に閉じ込められている
どうやって部屋の中にこんな大きな檻を入れたんだろう？
・・・って、そんなことはどうでもいい！
な、なんでこんなことに！？
えっと・・・たしか・・・
公園で落ち込んでて、葉月ちゃんに慰められて、それから・・・
！！そうだ、男の人に道を聞かれた辺りから気が遠くなって・・・
・・・あれ？もしかして僕、拉致された？

？「やぁ、お目覚めかい、吉井和也君」

和也「お、お前は・・・竹原教頭！」

竹原「『元』教頭だよ。お前のせいで追い出された・・・な」

和也「お前が悪いんだろ！自業自得だ！」

竹原「黙れ！」

（ゴスッ）

和也「ぐっ・・・」

竹原「お前のせいだ！お前さえいなければ全てうまくいったんだ！」

竹原は持っていた金属バットで僕を殴りつけた

竹原「くくっ、楽には死なせないぞ。じわじわとなぶり殺してやる」

く、狂ってる・・・
そういえば僕を拉致した男はどこだ？
辺りを見渡しても姿は見えない

竹原「？ああ、君を拉致した男ならそこら辺のチンピラを金で雇っただけだ。もういないよ」

僕の考えてることがわかったかのように答えてきた

竹原「さてと・・・」

竹原が取り出したのはカセットコンロとフライパン
・・・？
何に使うんだ？

竹原「ああ、コレはあとのお楽しみだよ。それじゃ、まずは千本ノックといこうか」

そう言いながら竹原は金属バットを持って僕に近づいてきた

竹原「９９８・・・９９９・・・・１０００」

和也「ぐ、ゲホッゲホッ・・・」

・・・金属バットで『直接』千回殴られた・・・
これのどこが『ノック』だ!?
体中が痛い・・・
多分、アバラも何本か折れただろう・・・

竹原「ふぅ、思ったより疲れたな、私ももう年かな・・・次はもっと楽なのにしよう」

（ビリビリ）

竹原は僕の上着とシャツを破り始めた
何をするつもりなんだろう？
すると、さっきから加熱していたフライパンを手に取り、下品な笑みを浮かべながら僕に近づいて・・・まさか！？

和也「や、やだ・・・やめ・・・」

（ジュ）

和也「ぎゃあああああ」

加熱されたフライパンは僕のお腹に押し付けられた
そして、熱さと痛みで僕の意識は遠のいていった・・・

竹原「まだまだ、気を失ってる暇はないぞ」

（バシャ）

和也「！！ゲホッゲホッ」

水をぶっ掛けられ、僕は意識を取り戻す
いつの間にか僕はさっきまでとは違う体勢になっていた
椅子に座らされ、身体を背もたれに、両手を手すりに固定されていた
手首と親指をぐるぐる巻きにされてるので指1本動かせない

竹原「さて、一本ずつ始めようか」

相変わらず下品な笑みを浮かべている竹原
一体何を・・・
そんなことを考えていると竹原は僕の左手の小指を掴み・・・

（ボキッ）

・・・へし折った

和也「ぎゃあああああ」

竹原「さあ、次は薬指だ」

（ボキッ）

和也「ぐあああああああ」

竹原「次は中指」

和也「や、やめ・・・」

（ボキッ）

和也「ぐっ・・・・・もう・・・・許し・・・・」

竹原「許せだと?許すものか!」

（ボキッ）

和也「うぐっ・・・」

竹原「チッ、反応が薄いな・・・感覚が鈍ってきたか・・・まあい

い。次は右手だ」

（バキッ）

和也「いぎゃあああああ」

（バキッ）

和也「い、痛い！痛いよぉ・・・」

（ボキッ）

和也「やめて！もうやめて！もう許して！」

（ボキッ）

竹原「ククククッ、おっと、もうこんな時間か・・・もっと楽しみたいんだが時間が無いんでね・・・そろそろフィナーレといこうか」

そう言って竹原は部屋から出て行った

・・・殺される・・・このままじゃ殺される・・・

和也「怖い・・・怖いよ・・・助けて・・・お兄ちゃん・・・」

僕は誰もいない部屋の中でそう呟いた

第七十問　黒幕登場（後書き）

和也ちゃんが殺されそうになってます！
明久（お兄ちゃん）と美波（恋人？）は間に合うのでしょうか？
次回も頑張ります

第七十一問　最期のとき！？（前書き）

和也ちゃんの運命は！？

第七十一問　最期のとき！？

ＳＩＤＥ　和也

竹原「ほら、さっさと起きろ！」

（ゴスッ）

和也「う・・・」

僕は殴られて意識を取り戻す
どうやらあのまま気を失っていたらしい
・・・！！
また体勢が変わってる
今度は両手を広げた状態で壁に磔にされている
胸と腰と足も固定されている為、一切身動きが取れない

竹原「さて、最後のゲームを始めようか」

そう言うと竹原は檻の外に出て鍵を掛けた

竹原「吉井君、君は縁日に言ったことはあるかい？」

？

急になにを・・・

竹原「そこには射的ってゲームがあってね・・・」

そう言って取り出されたのは・・・ボウガンだった
射的・・・ボウガン・・・壁に張り付けられた僕・・・
今から何をされるのか、説明を受けるまでも無く、僕は理解した

竹原「ここに矢が五本ある。私がコレを撃って、君が死ななければ
君の勝ちだ。これ以上危害を加えないことを約束しようじゃないか。
さて、まずは1本」

（ダンッ）

壁に矢が突き刺さる

（ダンッ）

二本目、今度はさっきより近く、顔のすぐ真横に刺さった
本気だ・・・本気で僕を殺す気だ・・・

僕は・・・ここで死ぬ・・・？
・・・やだ・・・
死んだらもう・・・兄さんにも美波さんにも他のみんなにも会えなくなる・・・
そんなの・・・いやだ・・・

和也「いやだ！死にたくない！死にたくないよ！誰か！誰か助けて！」

竹原「くくく、無駄だ。ココは人が滅多に来ない山の奥。しかも道から外れた山小屋の中だ。いくら叫んでも誰も来たりはしないよ」

（ブシュ）

和也「うぎゃあああ！！」

僕の左足の太ももに矢が刺さる

竹原「やっと当たったか。では、四本目」

（グサッ）

和也「ぐ・・・ぁ・・・」

僕の脇腹に突き刺さった

竹原「さて、ラスト1本、これで死ななければ君の勝ちだ」

そして竹原は狙いを定め・・・五本目を放った

（ザクッ）

和也「う・・・ぐっ・・・」

矢は僕の右胸のやや下に刺さった

竹原「・・・死ななかったか・・・おめでとう。君の勝ちだ。だから・・・・・・・・・ここでそのまま死ね」

・・・え?

竹原「なんだその顔は?私は危害を加えないと言ったんだ。開放するなんて一言も言ってないよ。大体、君には顔を見られたんだ。生かして帰すわけないだろう?」

最初から僕を無事に帰すつもりなんてなかったんだ・・・
ただ僕の苦しむ姿、絶望する顔を見たかっただけなんだ・・・

竹原「さて、さっきも言ったようにここに来るやつなんてそうそういない。この山小屋の存在は地元の人でもほとんど知られてない位だ。万が一、人が来たとしても・・・」

竹原は何かの機械を使い、鍵穴に細工を施した

竹原「こうやって鍵穴を溶接で塞いでおけば、発見されても誰も君を助ける事は出来ない。さて、失血死するのが先か、餓死するのが先か・・・どちらにしろ君が助かる術は無い。本当なら君の最後を見届けたいところなんだが・・・私も忙しくてね。残念だがこれで失礼するよ」

そう言いながら竹原は小屋から出て・・・

竹原「さよなら吉井君。せいぜい命尽きるまで苦しむがいい」

ドアを閉め鍵を掛けた
・・・足音が遠ざかっていく・・・
どうやら本当に行ってしまったらしい

ど、どうしよう・・・
このままじゃ・・・
・・・・・不思議だな・・・
あまり痛みを感じない・・・
それだけじゃない・・・
痛覚だけじゃない、なんか全ての感覚が鈍っていくような感じだ・・・
本能的にわかる・・・
僕は・・・もうすぐ死ぬんだ・・・

和也「・・・お兄ちゃん・・・グス・・・美波さん・・・」

・・・みんな・・・さよなら・・・
兄さん・・・血の繋がってない僕を今まで可愛がってくれてありがとう
美波さん・・・大好きだったよ・・・
こんなことになるんなら・・・
ちゃんと美波さんに想いを伝えておけばよかった・・・

？「和也？そこにいるの？」

え・・・？この声・・・

和也「美・・・波・・・さん？」

おもわず僕はそう呟いた
・・・そんな訳ない・・・
こんな所に美波さんがいるわけない
でも・・・幻聴でも何でもいい
『最後』に美波さんの声を聞けてよかっ・・・・・・・・・・

第七十一問　最期のとき！？（後書き）

和也ちゃんが・・・

次回は美波ＳＩＤＥ！

第七十二問　ショタ娘捜索、発見、そして・・・

ＳＩＤＥ　美波

学園長「着いたよ」

明久「ここに和也が・・・」

学園長に連れてこられた場所は至って普通の山
登山するほど高いわけでもなく、登っても景色がいいわけでもない
だからあまり人は寄り付かないらしい

学園長「残念だが、この辺りにいるって事ぐらいしかわからないよ」

雄二「ま、普通に考えりゃ山の中だろうな」

瑞希「そうですね。拉致したんなら人目につかないほうがいいですもんね」

明久「でもこんな所に連れてきて一体何を・・・」

確かに・・・こんな何も無いところで・・・
・・・ハッ！ま、まさか・・・

美波「こ、殺されて・・・バラバラで・・・生き埋めで・・・」（

ガタガタ）

明久「そ、そんな・・・」（ガタガタ）

瑞希「お、落ち着いてください！き、きっと大丈夫ですから！」

雄二「ちょっと落ち着け。ってか、殺されてバラバラだったら『生き埋め』じゃねえ」

美波「んなことはどうでもいいのよ！さっさと探しに行くわよ！」

雄二「わかってる。ふむ、かなり道が悪いみたいだな。ババアと女性陣はここで待ってろ。捜索は俺と明久が・・・」

美波「何言ってんのよ！ウチも行くわよ！和也が危険な目に遭ってるかもしれないのにこんなところでじっとしてられないわ！」

翔子「・・・雄二が行くなら私も行く」

瑞希「わ、私も・・・」

学園長「アンタはダメさね。お世辞にも運動神経がいいとは言えないだろ？」

雄二「そうだな。姫路は待ってろ。ババアと周辺の聞き込みを頼む」

瑞希「・・・わかりました」

美波「それじゃ、早く行きましょ」

☆山の中☆

雄二「ちっ、大して高くねえとはいえ流石に広いな・・・」

美波「手分けして探しましょ」

雄二「お、おい！和也を拉致した奴が居るかもしれないんだぞ！」

明久「・・・いないかもしれないよ。それに時間がかかり過ぎると手遅れになるかもしれない」

雄二「確かに・・・仕方ねえ、何かあったら大声を上げろ。見つけたらすぐに誰かを呼べ。一人で対処しようとするな」

翔子「・・・うん」

美波「わかったわ」

明久「じゃあ急ごう」

☆数分後☆

見つからないなぁ・・・

・・・やっぱり・・・もう・・・

？「和也～どこじゃ～」

あれ？この声って・・・

秀吉「む、島田。そっちはどうじゃ」

美波「木下？なんでここに・・・」

秀吉「事情を聞いて部活を早退したのじゃ。それで学園にいた高橋先生に連れてきてもらったのじゃ。ちなみに工藤と姉上、ムッツリーニも来ておる」

美波「みんな・・・来てくれたんだ」

秀吉「当然じゃ。仲間のピンチかもしれぬのじゃからな。では、ワシはこっちを探すのじゃ」

そう言って木下は奥へと去っていった

・・・そうよ・・・諦めてる暇なんて無いわ！

絶対に諦めるもんですか！

美波「ん？」

少女「・・・」（じー）

女の子？
山道の途中、白い服を着た女の子が立っていた
なんでこんな所に・・・？
地元の子かな？
・・・・あれ？
この子・・・どっかで見たことがあるような・・・
っと、そんなことより・・・

美波「ねえ、この辺で男の子見なかった？背はコレくらいで、ちょっと女の子みたいな顔した子なんだけど・・・」

少女「・・・」（スッ）

ウチが質問すると少女は無言でウチの左後ろの辺りを指差した
・・・？何も無・・・ん？あれって・・・

美波「小屋？」

大量に生えている木に隠れて見えにくいがよく見ると木造の小屋のようなものが見えた

美波「ねえ、ホントにあそこに・・・あれ？」

ウチが少女の方を向くと、そこにはもう・・・少女の姿はなかった

ま、まさか・・・お化け・・・
・・・・・って！気絶してる場合じゃない！
そんなことより今は和也よ！
そしてウチは小屋に近づき・・・

美波「和也？そこにいるの？」

恐る恐る声を掛けてみる
まさかこんなとこにいるわけ・・・

？「美・・・波・・・さん？」

！！
今・・・確かに聞こえた！
擦れて今にも消えてしまいそうな声だったけど今のは確かに和也の
声だった

美波「和也！そこにいるのね！返事をして！和也！」

（ドンドン！）

ウチは小屋のドアを叩きながら叫ぶ
ドアには鍵がかかっていて開かない

このままじゃ・・・

雄二「おい！どうした島田！」

明久「和也が見つかったの！？」

どうしようかとウチが困っていると皆が駆けつけてくれた

美波「この中から確かに声が聞こえたの！」

秀吉「こんなものがあったとは・・・」

雄二「鍵がかかってるな・・・」

優子「じゃあ鍵を探さないと・・・」

康太「・・・！！」

愛子「どうしたの？康太君」

康太「・・・中から血の匂いがする」

「「「「！！」」」」

雄二「くっ、鍵を探してる暇はねえ！明久！手伝え！ぶち破るぞ！」

明久「う、うん。了解」

（ドンッ、ドンッ、バンッ）

アキと坂本が体当たりでドアをぶち破る
そして小屋の中にいたのは・・・

美波「か・・・ずや・・・」

大きな檻の中で壁に張り付けられてる、血まみれの和也だった・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　明久

美波「か、和也！しっかりして！和也！」

美波が檻の外から叫ぶが反応がない
まさか・・・死・・・

美波「いやよ・・・せっかく見つけたのに・・・こんなの・・・」

明久「ムッツリーニ！この檻の鍵、ピッキングで開けられないの！

？」

康太「・・・無理だ。鍵穴が溶接されて塞がれている」

明久「そんな・・・」

美波「いやあぁぁぁ！和也ぁぁぁぁ！！」

美波が泣きながら檻の隙間から手を伸ばすがその手は和也に届かない
どうしよう・・・このままじゃ・・・

雄二「翔子、電波の届くところまで降りて救急車を呼んでくれ。秀吉と木下姉はババアと高橋女史に事情の説明を、ムッツリーニと工藤は和也の応急処置を頼む。」

雄二がみんなに指示を出す
一体何を・・・

雄二「『コレ』を持ってきてよかったぜ。明久、覚悟はいいな？」

明久「え？それってどういう・・・あっ！」

僕は雄二が手に持っているあるものを見てその言葉の意味を瞬時に理解した

明久「雄二、頼む」

雄二「了解！行くぞ！・・・『起動』」

雄二が言葉を放った瞬間、周囲に召喚フィールドが広がった

第七十二問　ショタ娘捜索、発見、そして・・・（後書き）

『こんなところで召喚フィールドを張れるのか？』ってツッコミは無しの方向でお願いしますｗｗ

次回も頑張ります

第七十三問　救出そして絶望（前書き）

ちょっと文脈がおかしい？

第七十三問　救出そして絶望

ＳＩＤＥ　美波

明久「試獣召喚！」

声と同時にアキの召喚獣が現れる
そうか、アキの召喚獣は物理干渉能力を持っている
これで檻を壊せば・・・

明久「うおおおおおりゃあああああ！！」

アキは檻に向かって木刀を振り下ろし・・・

（バキッ）

・・・木刀が折れた・・・

古典　吉井明久　２点

雄二「この大バカ久！何だそのふざけた点数は！？昔の島田より低

いじゃねえか！！」

明久「このバカ雄二！なんでよりによって古典なんだよ！他ならろうじて二桁はあるのに！」

・・・このバカども・・・
でもどうしよう・・・
こんなことになるならウチも腕輪を持ってきておけば・・・
・・・ん？
ふとポケットの中に違和感を感じる

美波「え？」

うそ・・・なんで・・・腕輪が入ってるの？
家に置いてきたはずなのに・・・
前出かけたときに入れっぱなし？
いやいや、制服ならともかく私服に入れてるわけがない
じゃあなんで・・・

美波「まさか・・・あの子が・・・？」

なぜか先ほど会ったお化けの少女の顔が脳裏によぎった
・・・・・ハッ！
考えてる場合じゃない！
早く和也を助けなきゃ！

美波「アキ、一番点数が高い科目は何？」

明久「へ？・・・多分日本史かな？でも何・・・」

ウチは腕輪をつけながらアキに聞いた

そして・・・

美波「日本史にチェンジ！」

吉井明久

古典→日本史

２点→２９９点

美波「頼むわよ！」

雄二「明久！檻を横に広げろ！人が入れる位広がればそれで充分だ」

明久「了解！うおおおお！！」

（ぎ・・ぎ・・・ぎ・・メキッ）

雄二「よし、もういいぞ」

美波「和也！」

ウチは一目散に和也の元に走る

美波「今、降ろしてあげるからね。坂本、和也を支えてて」

雄二「おう。よっと、ムッツリーニ、工藤、手当てを頼む」

愛子「う、うん」

康太「・・・（コク）」

そして和也の縛ってる縄を解き、土屋と愛子が手当てを始める
それにしても・・・

美波「・・・酷い」

体中にアザ、お腹には火傷のような痕、両手の指は折られてる
それに、和也の体と壁に刺さってる矢、和也の目は赤く、涙の流れた跡があった
それだけで泣き叫ぶ和也とそれに向かって矢を放つ犯人の姿が想像できる
・・・許せない・・・怒りで気が狂いそうだ・・・
隣には拳を握り締めてるアキ

どうやらウチと同じ事を考えているようだ

康太「・・・出血が酷すぎる。このままじゃマズイ」

明久「そんな・・・」

美波「土屋！ウチの血を使って！全部使っていいから和也を助けて！」

明久「僕のも使って！」

康太「・・・落ち着け、そんな設備はココに無い」

雄二「どっちにしろ救急車はここまで来れねえんだ。止血は終わったな？早く下に降りるぞ」

そう言って坂本は和也を担ぎ、外に向かって歩き始めた
ウチらもそれについていくように下山した
山を降りるとそこには救急車とパトカーが着ており和也と付き添いでアキが救急車に乗って病院に、坂本と翔子と高橋先生が警察との事情聴取のため現場に、残りのメンバーは学園長の車で病院へ行くことになった

☆病院☆

美波「アキ！和也は！？」

明久「みんな・・・」

ウチらが病院に着くとアキが病室の前で泣いてた
ま、まさか・・・
ウチらは恐る恐る病室の中に入る。すると・・・

和也「・・・すぅーすぅー」

・・・和也は眠っていた

優子「紛らわしいことしてんじゃないわよ！」

康太「・・・人騒がせな」

全く・・・でもよか・・・・
・・・？
和也が助かったって言うのにアキの表情は暗いままだ

明久「違うんだ・・・確かに一命は取り留めたけど・・・怪我が酷くて・・・いつ目を覚ますかわからないって・・・もう目を覚まさない可能性もあるって・・・」

瑞希「そ、そんな・・・」

目の前が真っ暗になる
和也が・・・もう目を覚まさない？
もう声を聞けない・・・もう笑いかけてくれない・・・
そんな・・・・

秀吉「し、島田よ。気を確かに持つのじゃ」

愛子「そ、そうだよ。まだ目を覚まさないって決まったわけじゃないんだから」

周りで誰かが騒いでいるがそんなのどうでもいい
ウチは静かに和也に近づいた
ベットの上で眠る和也の姿はあちこちに包帯が巻かれている、とても痛々しい姿だった

美波「なんで・・・」

瑞希「え？」

美波「なんで和也ばっかりこんな酷い目に遭わなきゃいけないの？和也が何したって言うの？家族が死んだり親族に引き取ってもらえなくて一人ぼっちだったり、今まで散々苦しんできたのよ？アキの家に引き取られて今から幸せになれるはずじゃないの？・・・神様は・・・不公平よ・・・」

ウチは和也の傍で泣くことしか出来なかった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　愛子

病院からの帰り道、ボクは康太君に送ってもらっていた

康太「・・・愛子、明日のことだが・・・」

康太君が申し訳なさそうな顔で言い出した

愛子「うん・・・遊びに行ける気分じゃないね」

友達があんなことになった直後に遊びに行って楽しめるとは思えない

少し残念だけど仕方ないよね

康太「・・・ああ、また今度だな」

愛子「うん。あっ、ここでいいよ。バイバイ康太君」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　康太

愛子を送った後の帰り道、俺は公園で考え事をしていた
デートが中止になったのは残念だが、こんな状況で愛子が楽しめるとは思えないから仕方ないだろう
それよりも・・・

康太「・・・お前は後悔してないのか？」

好きな人に想いを告げられなかった
きっと辛いはずだ。後悔してるはずだ

康太「・・・このままでいいのか？違うだろ？だから戻って来い・・・和也」

誰もいない公園で一人そう呟いた

第七十三問　救出そして絶望（後書き）

ムッツリーニがなんかカッコイイ
次回も頑張ります

第七十四問　絶望の淵（前書き）

今回は短いです
そして美波しか出てきません

第七十四問　絶望の淵

ＳＩＤＥ　美波

和也が病院に運ばれてから一週間以上が経過した
未だに和也は目を覚まさない

美波「・・・朝か・・・」

学校に行かなくちゃ・・・

☆学校☆

ＨＲが始まる。出席者４９名欠席１名
授業が始まる。内容なんか全く頭に入らない

・・・つまらない・・・何もかもつまらない
和也がいない・・・ただそれだけで何をしてもちっとも楽しくない

そして学校が終わり家に帰る
毎日がその繰り返し
機械の様にその動作を繰り返すだけ・・・
そして・・・

☆病院☆

美波「和也・・・」

家に鞄を置くと和也の病室へ直行
そして毎日面会時間終了までここにいる
来たらどうなるってわけじゃない
ただ・・・少しでも和也の傍に居たいだけ・・・

美波「・・・辛い・・・苦しいよ・・和也・・・」

困ったときはいつも助けてくれた
辛いときはいつだって傍にいて微笑んでいてくれた
でも・・・今はいない・・・

美波「イヤだ・・・寂しいよ・・・」

後悔ばかりが頭を過ぎる

なんで和也の様子がおかしかったのに気付いてあげられなかったんだろう?
なんで和也が拉致されたとき傍にいてあげられなかったんだろう?
なんで・・・和也に好きって伝えられなかったんだろう・・・

美波「・・・もうこんなの・・・耐えられないよ・・・」

・・・もう・・・いいや・・・
和也の居ない世界なんて・・・いらない
ウチは静かに病室を出た

☆翌日☆

今日は学校は休み
でも・・・もうそんなことどうでもいい
昨日のうちに書いた手紙を持ってウチは家を出た

☆病院☆

和也の病室に入る
よかった・・・今日はまだアキは来てないみたいだ
いたら・・・きっと邪魔されるだろうから・・・
そんなことを考えながらウチは和也の傍に座る
鞄の中には・・・昨日書いた遺書と大量の睡眠薬
睡眠薬を大量に摂取すれば死ぬって何かの本に書いてた気がする
・・・勘違いしないで欲しい
和也を殺すつもりなんて無い
ただ・・・死ぬなら和也の傍で死にたい・・・ただそれだけ・・・

美波「バイバイ、和也」

そう言ってウチは睡眠薬を手に取・・・

美波「え?」

いつの間にか和也の手がウチの服の袖を掴んでいた
親指しか動かない弱々しい手で・・・
それは和也が『止めろ』と言ってるような気がした

美波「ウチは・・・なにしてんだろ?」

こんなことして和也は喜ぶの?
ううん、きっと喜ばない
むしろ怒るに決まってる
こんなの・・・辛いことから逃げてるだけじゃない・・・
そんなの・・・ダメ・・・

美波「ねえ・・・ウチは・・・ずっと待ってるんだよ?伝えたい事だってあるんだよ?だから・・・だからお願い・・・起きて・・・目を開けてよ・・・和也・・・」

ウチは泣きながら和也に語りかける
しかし、返事は返って来な・・・・
？「美波・・・さん？」

第七十四問　絶望の淵（後書き）

次回は和也サイドでお送りします

第七十五問　愛の軌跡（前書き）

ついに和也ちゃんが・・・！！

第七十五問　愛の軌跡

ＳＩＤＥ　和也

和也「ここは・・・？」

真っ白な空間
周りには何も無い

？「お兄ちゃん・・・」

僕は声のするほうへ振り向く
するとそこには白い服を着た女の子が立っていた
そして・・・僕はこの子の事を知っている

和也「羽月・・・」

そう・・・妹の羽月だ
そして僕はこの瞬間全てを理解した
羽月は・・・１０年前に死んだはず・・・なのにここにいるってことは・・・

和也「そっか・・・僕・・・死んだんだ・・・」

やっぱり・・・助からなかったんだ・・・仕方ないか・・・
兄さん、美波さん、みんな・・・さようなら・・・お元気で・・・

和也「迎えに来てくれたんだね。ありがとう。じゃ、行こうか」

僕は羽月にそう言うと羽月の横を通り抜ける
そして羽月は僕について・・・来ない・・・？

和也「？どうしたの？」

羽月「・・・お兄ちゃんは・・・本当にそれでいいの？本当に後悔しない？遣り残した事は無いの？」

羽月は悲しいような苦しいような顔で僕に問いかける

和也「そ、それは・・・」

遣り残したこと？後悔？
・・・・やっぱり・・・・・

和也「美波さんに・・・ちゃんと想いを伝えたかったな・・・」

告白したところできっと振られるだろうけど・・・それでも・・・
自分の想いを伝えたかった・・・

羽月「・・・たら・・・」

和也「？羽月？」

羽月「だったら！」

（ドンッ）

和也「え？」

僕は羽月に突き飛ばされた
すると羽月がだんだん遠ざかっていく
・・・いや、違う・・・僕が落ちて行っているんだ

羽月「だったらお兄ちゃんはまだこっちに来ちゃダメだよ！私は・・
・お兄ちゃんと一緒にいたいけど・・・でも、お兄ちゃんが幸せに
ならなきゃ意味無いんだから！」

羽月の姿が小さくなっていく・・・

羽月「・・・お兄ちゃん・・・大好きだよ・・・美波お姉ちゃんと
幸せになってね」

羽月の声が遠ざかっていく・・・
姿はもう見えなくなってしまった
僕は・・・どこに行ってるんだろう・・・

？「・・・和也」

？

向こうの方で声が聞こえる
僕はこの声を知っている
・・・僕の大好きなあの人の声だ
僕はその声のする方へ手を伸ばす
すると目の前に光が広がった

☆？？？☆

ここは・・・どこだろう？
見知らぬ天井・・・薬品のような匂い・・・
病院？

？「・・・・・起きて・・・目を開けてよ・・・和也・・・」

僕は声のする方を見ると、そこには僕の腕を抱きしめ涙を流している一人の女の子
顔は見えない・・・でも、僕にはその人が誰なのかすぐにわかった
この人は・・・

和也「美波・・・さん？」

そう・・・島田美波さん・・・僕の・・・大好きな人
僕がそう呟くと美波さんはビクッと震え・・・

美波「かず・・・や・・・？」

こっちを見て驚いたように目を見開く

和也「うん。おはよう、美波さん」

美波「・・・う・・・うわあああああああああああああああああああ
あん」

美波さんは僕に抱きついて大声で泣き出してしまった

美波「凄く・・・凄く心配したんだから・・・」

和也「心配かけてゴメンね」

美波「いいの・・・和也が無事ならそれでいいの」

そう言って美波さんは僕にしがみついて離れようとしない
温かい・・・僕は・・・生きてるんだ・・・
・・・もう・・・後悔したくない・・・伝えるんだ・・・僕の気持ちを・・・

和也「美波さん、落ち着いて。少しだけ、ほんの少しだけでいいから僕の話聞いてくれる？」

美波「・・・うん」

そう言って美波さんは僕から離れた

和也「僕は・・・怖かった。拉致されて殺されそうになって・・・」

美波「和也・・・もう大丈夫よ」

そう言って美波さんは僕の震える手を握る

和也「でもね・・・死ぬことよりも・・・美波さんや兄さん、他の皆に会えなくなる事、そしてなにより・・・自分の想いを伝えられずに死んでいくのが一番怖かった」

美波「自分の想い？」

和也「うん、だから・・・もう後悔したくないから・・・伝えたいんだ」

僕は一呼吸置いて・・・

和也「島田美波さん。僕は・・・あなたが好きです」

第七十五問　愛の軌跡（後書き）

ついに自分の想いを告げた和也
美波の答えは！？
次回も頑張ります

第七十六問　恋愛成就（前書き）

なんかおまけが長くなっちまった・・・

ついに皆様お待ちかね！和也と美波の・・・

第七十六問　恋愛成就

ＳＩＤＥ　美波

和也が目を覚ましてウチの名前を呼んでくれた
ただそれだけ、たったそれだけのことが凄く嬉しかった
そして気がつくとウチは和也に抱きついて泣いていた
多分・・・今までの人生の中で一番大きな声で泣いた
和也が目を覚ましてくれたことが嬉しくて涙が止まらなかった

和也「美波さん、落ち着いて。少しだけ、ほんの少しだけでいいから僕の話を聞いてくれる？」

美波「・・・うん」

そう言ってウチは和也から離れる
真面目な顔してどうしたんだろう？

和也「僕は・・・怖かった。拉致されて殺されそうになって・・・」

和也の手は震えていた
そりゃそうだ。身体の自由を奪われた状態であんなにボコボコにされて・・・
どこのどいつか知らないけど和也をこんな目に遭わせた奴は絶対許

さないわ！

美波「和也・・・もう大丈夫よ」

そう言って和也の震える手を握る

和也「でもね・・・死ぬことよりも・・・美波さんや兄さん、他の皆に会えなくなる事、そしてなにより・・・自分の想いを伝えられずに死んでいくのが一番怖かった」

美波「自分の想い？」

和也「うん、だから・・・もう後悔したくないから・・・伝えたいんだ」

？？？

一体何を・・・

和也「島田美波さん。僕は・・・あなたが好きです」

・・・ふぇ？

え？え？今・・・なんて・・・？

ウ、ウチのこと好きって言った？

これは夢？夢じゃないわよね？

・・・ハッ！返事しなくちゃ
答え？そんなの決まって・・・

和也「・・・そうだよね」

美波「へ？」

和也「康太君と付き合ってるのに、こんなこと言われても困るよね？迷惑だよね？」

・・・ちょっと待て
なんでウチが土屋と付き合ってることになってるのよ！
一体どんな、かんちが・・い・・を・・・？
ふとウチの脳裏に思い浮かんだのは土屋の告白の練習に付き合ってたときの光景
ま、まさか・・・アレを見てたんじゃ・・・

和也「ごめんね。困らせるつもりはなかったんだ・・・ホントにごめん」

和也は泣き出しそうな顔でウチに謝る
ま、待って！違う！誤解よ！
そう言おうとしたが、声に出すより先に身体が動いていた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

僕が告白すると美波さんは固まってしまった
きっと困ってるんだ

和也「・・・そうだよね」

美波「へ？」

和也「康太君と付き合ってるのに、こんなこと言われても困るよね？迷惑だよね？」

そうだ・・・美波さんは康太君と付き合ってるんだった
だったら僕がいくら想いを告げたって困らせるだけじゃないか

和也「ごめんね。困らせるつもりはなかったんだ・・・ホントにごめん」

もう・・・おしまいだ・・・
きっともう気まずくて、いままで通りの関係じゃいられない
いやだ・・・でももう手遅れだ・・・
僕は泣き出しそうになるのを必死に堪え、美波さんに謝り続ける

和也「ごめん・・・ごめ・・・むぐっ」

すると突然、僕の口が塞がれた・・・
美波さんの口で・・・つまり・・・キス・・・された

美波「・・・和也、これがウチの答えよ。土屋と付き合ってるっていうのは勘違い。・・・ウチが好きなのは世界でただ一人。吉井和也だけよ」

・・・え?

和也「・・・ホント?ホントに僕なんかでいいの?」

美波「もちろんよ。和也こそウチでいいの?ウチは乱暴だし、胸だって無いし・・・」

和也「そんなの関係ないよ。僕は美波さんの全てが好きなんだから」

美波「そ、そうなんだ／／／ウ、ウチも和也の全てが好き!大好き!」

和也「じゃ、じゃあ、僕と付き合ってくれる?」

美波「うん!喜んで!」

そう言って僕たちは再び唇を重ねた
こうして僕は美波さんと付き合うことになった

☆一方その頃、病室の外では☆

（（（（（（入りにくい））））））

お見舞いに来ていたいつものメンバーが二人の世界に入って行けず、
立ち往生していた

優子「やっとくっついたわね」

秀吉「めでたいのじゃ」

瑞希「よかったですね。美波ちゃん」

明久「和也・・・幸せになってね」

翔子「・・・羨ましい。雄二、私たちもそろそろ結ばれるべき」

雄二「ま、待て！なんでそうなる！？」

愛子「コータクン？ミナミトツキアッテルッテドウイウコトカナ？」

康太「・・・そ、そんな事実は無い（ブンブン）」

その後、病室の前でこれだけ騒いでいた為、当然のごとく二人に覗いていたことがバレ、全員説教される羽目になる

☆おまけ☆

ＳＩＤＥ　愛子

お見舞いを終えて帰り道、ボクは康太君に家まで送ってもらっていた

康太「・・・愛子、ちょっと寄り道していいか？」

愛子「？うん、いいけど・・・」

そう言って康太君は歩き出し、ボクはそれについていった

そういえば今、康太君と二人っきりなんだよね・・・

こういうの久しぶりだなぁ・・・

こないだはデートは中止になっちゃったし・・・

はぁ・・・うまくいかないなぁ・・・

美波はいいなぁ・・・和也君に告白されて・・・

ボクも一度でいいから康太君に告白されてみたいよ・・・

康太「・・・俺はお前が好きだ！」

そうそう、こんな感じで・・・・って、え？

愛子「え？い、今、なんて・・・？」

気がつくとボクたちは近くの公園に来ていた

康太「・・・だ、だから、俺はお前が好きだ。付き合って欲しい／／／」

え・・・ええ！？

ってことは、ボク達両想いだったの！？

・・・夢じゃないよね・・・

康太「・・・答えを聞かせて欲しい」

答え・・・そんなの決まってる

愛子「ボ、ボクも康太君が好きです。よろしくお願いします／／／」

康太「・・・よろしく／／／」

いつもと変わらない反応に聞こえるけど、康太君の顔は真っ赤だった
・・・ちょっと可愛いかも・・・

愛子「なんで急に告白する気になったの？」

康太「・・・ホントはこないだの日曜日に告白するつもりだった。
でも、タイミングを逃して言い辛くなって・・・でも、和也の告白
を見て決心がついた。俺も後悔したくないから・・・」

そっか・・・和也君たちのおかげだね
今度、お見舞いにシュークリーム持っていってあげよっと
さて、恋人同士なんだし、キスしてもいいかな？／／／
でも、康太君はきっと鼻血出しちゃうだろうな・・・
残念だけど、ここは我慢だね

愛子「さ、遅くなっちゃう前に早く帰ろう」

（ギュ）

そう言ってボクは康太君の腕に抱きついた
腕を組む位なら大丈夫・・・

康太「☆○△□♪×※（ブシャァァァ）」

・・・じゃないみたいだね・・・

まさか腕を組むだけで鼻血を出すとは・・・

はぁ・・・こりゃキスは当分おあずけかな・・・

その後、康太君を介抱して家に帰ったが、結局帰りが遅くなったため両親に説教されてしまった

第七十六問　恋愛成就（後書き）

作者「以上、和也と美波のキスシーンでした」

和也「そして二人は幸せに暮らしました。めでたしめでたし」

作者「こら、勝手に終わらせるな！まだまだ続きますよ」

第七十七問　事件の真相発覚（前書き）

和也から事件の真相を聞きます

第七十七問　事件の真相発覚

ＳＩＤＥ　和也

美波さんと結ばれた翌日、今日も美波さんはお見舞いに来てくれた

美波「はい和也。あーん」

和也「ちょ!?美波さん!?恥ずかしいよ／／／」

美波「仕方ないでしょ、指が折れてんだから。ほら」

和也「う・・・あーん」（もぐもぐ）

そう、指が折れてるためご飯を食べさせてもらってる
恥ずかしいなぁ・・・／／／
だって・・・

瑞希「美波ちゃん、幸せそうです。（羨ましいです）」

明久「うーん・・・僕らは場違いな気がするよ」

雄二「・・・だな、完全に二人の世界、桃色の空間が広がってやがる」

明久「雄二は霧島さんに頼んでいちゃつけばいいじゃないか。僕なんてそんな相手もいないんだよ」

優子「・・・明久君、本気で言ってんの？」

雄二「・・・おそらく本気だろうな・・・この鈍感野郎」

・・・みんながこっちを見てるからだ
ちなみに秀吉君は部活
康太君と愛子さんは二人でお出かけらしい、デートかな？
・・・いいなぁ、僕も美波さんとデートに行きたいなぁ・・・
で、翔子さんは後から誰かを連れて来るって言ってたけど・・・

（コンコン）

和也「はい、どうぞ」

学園長「失礼するよ」

翔子「・・・和也、具合はどう？」

高橋「災難でしたね」

病室に入ってきたのは優子さんと翔子さん、学園長と高橋先生と西村先生だった

和也「どうしたんですか?みんな揃って・・・」

翔子「・・・和也に聞きたいことがあるって」

鉄人「ああ、お前を襲った犯人が知りたくてな」

和也「・・・おそらく皆さんの想像通りです」

学園長「そうかい・・・やっぱり・・・竹原なんだね?」

僕は静かに頷いた

美波「なんですって!!アノクソヤロウ、ヨクモカズヤヲ・・・」

和也「み、美波さん!?落ち着いて!」

鉄人「すまん。俺が無理矢理追い出したばっかりにこんなことに・・・」

高橋「いえ、私があの男の企みに気付いていれば・・・不審な動きがあることには気付いていたというのに・・・」

学園長「アンタ達が気にすることはないさ。アタシが欠陥のある腕輪なんか作らなけりゃよかったのさ。全部アタシの責任だよ」

和也「あ、あの・・・気にしないでください。僕は大丈夫ですから」

学園長「そう言ってもらえると助かるよ。もうすぐ警察の事情聴取

の時間だね。竹原にされたこと、辛いだろうけど話してくれないかい？」

数分後に警察の人が来て、僕はあそこで行われた拷問のことをみんなに話した

瑞希「・・・酷いです・・・」

優子「・・・逆恨みもいいとこね・・・」

翔子「・・・最低」

雄二「人間のやる事とは思えねえな・・・」

明久「ユルサナイ、コロシテヤルコロシテヤルコロコロコロ・・・」

美波「アキ、ウチモツレテイキナサイ。ジゴクノソコニオクッテヤルワ」

和也「ふ、二人とも落ち着いて！」

警察「では、我々は捜査に戻ります。何かお気づきの点がありましたらご連絡ください。それでは我々は失礼します。お大事に」

そう言って警察の人は去っていった

これで竹原はすぐに捕まるだろう

もう・・・大丈夫・・・だよね？
でも、もし捕まらなかったら・・・また僕は酷い目に遭うのかな？
そしたら今度こそ殺され・・・

（ギュ）

美波「和也！大丈夫、もう大丈夫よ」

和也「美波さん・・・」

美波さんは僕の考えてることがわかったようで、優しく抱きしめてくれた
温かいなぁ・・・

翌日のニュースで、竹原は学生拉致暴行事件の容疑者として捜査が開始された
しかし、交通検問を張るなどしたが、未だ発見には至ってないらしい

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＮＯ　ＳＩＤＥ

学園の近くの商店街にて・・・

F「竹原ぁ！どこだ！出て来い！！！」

F「よくも我がクラスのアイドルを・・・」

A「和也君を傷つける者は・・・」

A「「「サーチ&デス」」」

玉野「ヨクモワタシノカズチャンヲ・・・」

美春「ワガムスメヲキズツケタブタヤロウ・・・ユルシマセンワ」

F&A&玉野&美春「「「「コロコロコロコロ・・・」」」」

謎の覆面集団とどす黒いオーラを出した人外が目撃された

☆おまけ☆

ＳＩＤＥ　教頭

ニュースを見た私は驚きを隠しきれなかった

吉井和也が助かった？

バカな！？ライオンでも閉じ込めることが出来るほどの頑丈な檻だぞ！？

一体どうやって・・・
いや、それよりも・・・

竹原「私が・・・指名手配・・・？」

恐らく吉井和也の証言だろう
誰にも見られないよう、細心の注意を払ったからな・・・
また・・・またしても・・・あいつのせいで私の計画が・・・

竹原「おのれ・・・このままでは済まさん。許さんぞ・・・吉井和也・・・どんな手を使ってでもお前を殺してやる！」

誰も居ない部屋の中で私は静かに呟いた

☆おまけ2☆

ＳＩＤＥ　？？？

？「ふぅ、やっと、一段落着きましたね」

ようやく抱えてる仕事が終わった
さて、食事にしましょう
そう想い、私はテレビの電源を入れる

ニュースキャスター（以下ＮＣ）「次のニュースです。日本にて注目されている試験高、文月学園の生徒が拉致され、暴行を加えられるという事件が発生しました」

あら？確か、アキ君とカズ君が通ってる学校ですね。物騒ですね・・・二人とも無事だといいのですが・・・

ＮＣ「被害にあった生徒は吉井和也君、高校二年生」

（ガッシャーン）

・・・なんですって？
カズ君が！？無事なんでしょうか？

ＮＣ「病院に運ばれ、一週間ほど意識不明でしたが、先日、意識を取り戻しました」

・・・よかった・・・
一命を取り留めたと聞き、私はホッと胸を撫で下ろす

ＮＣ「犯人は文月学園元教頭、竹原容疑者。竹原は近辺にいた男性に金とスタンガンを渡し拉致してくるよう指示、そして人通りの少ない山小屋にて吉井君を監禁。その後金属バットで複数回殴りつけ、加熱したフライパンを押し付け、腹部、胸部、太ももの三箇所ををクロスボウにて撃つなど、極めて残虐な行為が行われたそうです。調べによると、竹原容疑者は吉井君に、教頭時代に企んでいた悪事の邪魔をされ、それが退職の理由となっていることから、逆恨みによる犯行と見られています」

・・・なんて酷いことを・・・

・・・ハッ！こうしちゃいられません！

？「もしもし、母さんですか？すぐに私を日本に帰れるように手配してください！」

待っていてくださいね、カズ君！

すぐにそっちに行きますからね！

第七十七問　事件の真相発覚（後書き）

ＦＦＦ団＋αの暴走
竹原の逆恨みはまだまだ続く
さて、最後に出てきた人は誰なんでしょうね？
わかる人にはわかるはず・・・

第七十八問　初恋の終わり（前書き）

遅くなってしまいました
ついにあの人が帰国します

第七十八問　初恋の終わり

ＳＩＤＥ　和也

医者「・・・患者にこんなことを言うのはあれだが・・・君は本当に人間かい？」

和也「あ、あはは・・・」

僕は今、診察を受け、その結果を見た医者にそう言われた
どうやら僕の指はまだ完治はしてないものの、だいぶ直りかけているようだ・・・
・・・三週間で（意識不明の時期も含む）

医者「普通はこの倍以上は時間がかかるんだけどね・・・刺された傷口は完全に塞がってるし・・・僕も長いこと医者をやってるが、こんなに回復の早い人を見たのは初めてだよ」

・・・褒められてるのかな？

医者「この調子なら来週か再来週位には退院できると思うよ」

☆病室☆

和也「・・・ってことで、もうすぐ退院できるってさ」

美波「よかった」

僕は医者に言われたことを美波さんに報告する
ちなみに美波さんは毎日病院に来てくれている
無理しなくていいよって言ったら
『ウチが和也に会いたいからいいの／／／』って言ってくれた
あぁ・・・可愛いなぁ／／／
こんな可愛い人が彼女なんて夢みたいだなぁ・・・

和也「そういえば兄さん大丈夫かなぁ」

美波「アキ？そうね・・・『お金が無い』とか言ってるかもね」

和也「あはは。食事が塩と水になってたりとか」

美波「それはないでしょ」

和也「だよね。いくらなんでもたった三週間で金欠って事はないよね」

美波&和也「「あはははは」」

・・・・不安だ・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　明久

明久「お金がない・・・」

ここ数日、塩と水しか食べてない
目の前には僕の財布（６円）と和也の預金通帳（６万円）
『お金が足りなくなったら使っていいからね』
和也はそう言ってた
でもこのお金は和也がお小遣いをコツコツ貯めたものと、死ぬ気でバイトして稼いだお金
それを僕が使うのは・・・・
・・・バイトしよう。確かこの辺りに求人のチラシが・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

☆一週間後☆

和也「ありがとうございました」

医者「まさか一ヶ月で退院するとは・・・お大事にね」

今日は退院の日。指とアバラは完治してはいないが、他の傷は完全に治ってるようだ

医者曰く『驚異的な回復力』らしい

美波「和也」

和也「あ、美波さん。来てくれたんだ」

美波「当然でしょ、か、彼女なんだから／／／」

和也「あ、うん／／／」

・・・なんか照れくさいな・・・

美波「それにしてもアキの奴・・・迎えにも来ないなんて何考えてんのかしら？」

和也「仕方ないよ。兄さんにだって都合があるだろうし・・・」

美波「そりゃそうだけどさ・・・」

和也「まぁまぁ」

美波「あ、ちょうどお昼時だし、ここ、寄ってかない？」

そう言って美波さんが指差したのはいつか二人で来た『ラ・ペディス』だった

和也「そうだね・・・って、あ・・・僕の財布、家に置いたままだ・・・」

美波「いいわよ。退院祝いってことでウチが奢るわ」

和也「え？でも・・・」

美波「いいから！ほら、行きましょ」

そう言って僕を引きずって歩き出す美波さん
彼女に奢らせるってなんか情けないなぁ・・・

？「カズ君！」

和也「へ？」

声がする方を振り向くと・・・

？「無事だったんですね？ニュースを見てびっくりしました。心配したんですよ？」

美波「か・ず・や？その綺麗な女性は誰かしら？」（ゴゴゴゴゴゴ）

和也「お、落ち着いてよ！？この人は・・・」

？「吉井和也の妻です」

美波「・・・」（ブチッ）

（メキメキメキ）

和也「ぐぎゃあああ！ちょっと姉さん！変なこと言わないでよ！」

美波「へ？姉さん？」

？「ふふ、軽い冗談ですよ。改めて、初めまして、カズ君とアキ君の姉の吉井玲です」

美波「え？あ、えっと・・・島田美波です」

和也「ところで、なんで姉さんがここに？たしかアメリカに行ってたはずじゃ・・・」

玲「もちろんカズ君が心配だからですよ。弟を心配しない姉がどこにいます？・・・ところで・・・」（じー）

美波「な、なんでしょうか？」

玲「・・・失礼ですが・・・カズ君のお友達ですか?」

美波「え、えっと／／／」

和也「その・・・恋人・・・です／／／」

玲「!!恋人・・・ですか・・・?」

和也「うん・・・三週間くらい前に付き合い始めたばかりだけど・・・」

僕がそう言うと姉さんは黙り込んでしまった

玲「・・・一つだけ質問です。カズ君は今・・・幸せですか?」

姉さんからの突然の質問、『今、幸せですか?』だって?
そんなの・・・決まってる!

和也「はい!とっても幸せです!」

玲「・・・そうですか・・・カズ君が幸せならそれでいいんです。
さて、もうすぐお昼ですし、姉さんがお昼を奢ってあげます。もちろん島田さんの分もね」

美波「え?いいんですか?」

玲「もちろんです。カズ君の恋人でしたら私の義妹ですから」

美波「／／／」

玲「あ、カズ君。先にお店に入っていてもらえますか？少し島田さんと女の子同士でお話したいので・・・」

和也「あ、うん。わかった」

そう言って僕は店に入った

それにしても・・・僕が幸せだって言ったときの姉さんの顔、ちょっと寂しそうだったような・・・

？「いらっしゃ・・・あれ？和也！？」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美波

ウチに話ってなんだろう？

『カズ君は渡しません！』とか言われたらどうしよう・・・

玲「島田美波さんでしたね？」

美波「は、はい」

玲「あ、そんなに固くならないで下さい。・・・私は嬉しいんですよ」

？嬉しい？

玲「カズ君のあんなに幸せそうな顔は初めて見ました。きっとあなたのおかげですね。ありがとうございます」

美波「い、いえ・・・ウチはただ・・・和也の過去のことを聞いて、和也には幸せになって欲しい。いつでも笑っていて欲しいって思って行動しているだけです。和也の笑顔が・・・大好きだから」

ウチは想いの全てを打ち明ける
これは嘘偽りの無い、ウチの本心だ

玲「そうですか・・・カズ君を・・・弟のことを・・・よろしくお願いします。幸せにしてあげてください」

そう言って深々と頭を下げる玲さん

美波「も、もちろんです！だから頭を上げてください！」

玲「・・・はい・・・先に店に入っててもらえますか？すぐに行き

ますので・・・」

美波「あ、はい」

嬉しいと言っていながらも、そう言う玲さんはなんだか辛そうに見えた

・・・もしかして玲さん・・・和也のこと・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　玲

カズ君に恋人が出来たって聞いてショックだった

認めたくなかった・・・

でも・・・

玲「・・・あんな幸せそうな二人の仲を・・・引き裂けるわけ無いじゃないですか・・・」

悲しい過去によって苦しみ続けてきたカズ君

その全てを受け止め、支え、心の傷を癒そうとする島田さん

誰がどう見てもお似合いの二人だった

それに・・・カズ君のあの幸せそうな表情

私が何年かけても救えなかったカズ君の心を彼女はたったの１、２年で・・・

・・・私の入る余地はなさそうですね・・・

玲「・・・失恋・・・しちゃいましたね・・・」

そして私の初恋は静かに終わりを告げた

第七十八問　初恋の終わり（後書き）

玲の失恋でした・・・
次回、もう一人失恋します・・・

ヒント・・・『ラ・ペディス』は誰の家？

第七十九問　恋の終わり、そして新たな恋！？（前書き）

ある人物にフラグが・・・

第七十九問　恋の終わり、そして新たな恋!?

ＳＩＤＥ　和也

？「いらっしゃ・・・あれ?和也!?」

和也「あれ?兄さん?それにみんなも・・・」

僕が店内に入ると兄さん、雄二君、康太君、秀吉君の四人がウェイターの格好で働いていた

秀吉「なんで和也がココにいるのじゃ?」

明久「そ、そうだよ!ちゃんと病院で安静にしてなきゃダメじゃないか!」

和也「え?今日退院だって言ったじゃん」

雄二「・・・おい明久。お前、和也の退院は『来週』の土曜日だって言ったよな?」

明久（・・・間違えた!）

秀吉「・・・間違えたんじゃな?」

明久「・・・うん。ごめん和也。迎えに行かなくて」

和也「平気だよ。美波さんが来てくれたから」

（ガチャ）

美波「あっ、アキ！アンタ、和也の迎えにも行かないでなにやってんのよ！」

そこに美波さんが登場
ご立腹のようだ

和也「まぁまぁ、落ち着いて。それよりも兄さん、姉さんが帰ってきてるなら教えてくれればよかったのに・・・」

明久「・・・ゑ？」

え？なにその反応？もしかして兄さんも知らないの？

（ガチャ）

玲「おまたせしまし・・・アキ君？こんな所で何をしてるんです？」

明久「ね、姉さん！？なんで日本に！？」

玲「カズ君が心配だからに決まっているでしょう?大体、カズ君が怪我をしたならなんで姉さんに報告しないんです?」

明久「ご、ごめん。ちょっとバタついてて・・・(そんなことしたら姉さんがこっちに来るからだなんて言えない)」

玲「・・・まあいいでしょう。で?アキ君はアルバイトですか?まさか、カズ君がいないからって生活費を使い込んでお金が無いなんて言わないでしょうね?」

明久「そ、そんなわけないじゃないか!これは・・・その・・・社会勉強の一環で・・・」

・・・使い込んだんですね?また見え透いた嘘をついて・・・

玲「・・・まぁそれに関しては家に帰ってからボッキリと聞かせてもらうことにしましょう。それより食事にしましょう」

秀吉「では、こちらへどうぞなのじゃ」

そう言って秀吉君に連れられて僕たちは席へと移動した

和也「そういえばなんでみんなバイトしてんの?」

秀吉「雄二は部屋に頑丈な鍵をつけたいそうじゃ。ムッツリーニは

カメラ購入資金の足しにすると言っておった。ワシは特に必要無いのじゃが、仲間はずれは寂しいのじゃ」

なるほど。みんなそれぞれの事情があるんですね

秀吉「ご注文が決まりましたらお呼びください」

そう言って秀吉君は去っていった

玲「あの子もカズ君の学友ですか？」

和也「うん。木下秀吉君。クラスメートで演劇部のホープなんだよ。で、あっちの小柄な子が土屋康太君、趣味はカメラ。あっちの赤い髪の大きなゴリ・・・人が坂本雄二君、ウチのクラス代表だよ」

とりあえず僕は大雑把にみんなの紹介をする

玲「そうですか。また今度改めて挨拶しなくちゃいけませんね。それはそうと注文は決まりましたか？」

和也「えーと・・・」

？「お姉さま！」

美波「み、美春!?」

美春「そこの豚野郎から聞きましたわ!和美ちゃんとお付き合いなさってるというのは本当ですの!?」

和也「誰が『和美ちゃん』だ!」

美波「本当よ」

美春「そ、そんな・・・美春を捨てるのですか!?あの夜の約束は嘘だったのですか!?」

美波「そんな事実はないでしょうが!・・・って、ああ、和也!誤解よ!だからそんな泣き出しそうな顔しないで!」

美春「・・・お姉さま・・・お姉さまは・・・吉井和也が好きなんですね・・・?」

美波「・・・ええ、この世の誰よりも愛してるわ。そして、和也もウチを愛してくれてる。ウチは今とっても幸せよ」

和也「／／／」

美春「・・・そうですか・・・吉井和也!」

和也「は、はい」

美春「・・・お姉さまを泣かせたら承知しませんからね!」

そう言って清水さんは涙を流しながら店の奥に走り去ってしまった

和也「なんか・・・申し訳ないな・・・」

美波「・・・しょうがないわよ。ウチは和也が好きなんだから・・・」

和也「う、うん／／／」

美波「みんなも、騒がせてごめんね」

明久「う、うん。それはいいけど・・・どうしようか？」

玲「そっとしておいた方がいいでしょう」

雄二「だな・・・ん？秀吉はどこに行った？」

康太「・・・お手洗い」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　秀吉

☆『ラ・ペディス』裏口☆

美春「・・えっく・・・お姉さま・・・・」

秀吉「清水・・・」

美春「あ、あなたは木下秀吉」

秀吉「コレでも飲んで落ち着くのじゃ」

ワシは店内から持ってきたドリンクを清水に渡し、清水はそれを無言で受け取る

美春「・・・ホントは・・・とっくにわかっていたんですわ・・・お姉さまの視線の先にはいつも吉井和也がいることも、あの二人が両想いだということも・・・そして・・・私では吉井和也に絶対に勝てないことも・・・」

ワシは清水の言葉を黙って聴き続ける

美春「・・・みんなでプールで遊んだあの日、お姉さまが溺れてる姿を見て私は驚くことしか出来なかった。でも、吉井和也は迷わず飛び込んだ・・・自分が泳げないにも関わらず・・・」

そうじゃな・・・あのときの和也はかっこよかったのじゃ

美春「その時、私はこの人には敵わないと気付いてしまいました・・・でも、諦められなかった！・・・お姉さまが・・・大好きだったから・・・」

そう言って清水は再び泣き出した

美春「・・・やっぱり・・・私はおかしいのでしょうか？同性を愛するのは変なのでしょうか・・・」

秀吉「・・・そうじゃの・・・一般的ではないかもしれん。じゃが、ワシはおかしいとは思わぬぞ」

美春「え？」

秀吉「異性でも同姓でも、一人の人をそれだけ愛せるのは素晴らしいことじゃ、胸を張って良い、ワシはそう思うのじゃ」

ワシは自分の考えを清水に言う
これは慰めではない、ワシの本心じゃ

美春「そう・・・ですか・・・話したら少し気が楽になりましたわ。ありがとうですわ（ニコ）」

秀吉「う、うむ／／／わ、ワシは仕事に戻るのじゃ」

目の前で微笑む清水に目を奪われる
ワシは赤くなった顔を隠しながら店内へと戻った

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　美春

美春「・・・木下秀吉・・・」

私は持ってきてくれた飲み物を見つめながら静かに呟く
他の男とは違う。私の愛を笑わなかった。おかしくないと言ってくれた
私の愛を・・・胸を晴れる素晴らしいものだといってくれた・・・

美春「・・・木下秀吉・・・・・・秀様／／／」

私は誰にも聞こえないような声で静かに呟いた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＮＯ　ＳＩＤＥ

後日、文月新聞にて『和也ちゃん、熱愛発覚』の記事が出回った

それを見た多くのものは・・・

A「そ、そんな・・・」

F「我がクラスのアイドルが・・・」

など、嘆きの声をあげたが、最後には・・・

A&F「「「「和也ちゃん、お幸せに」」」」

と、全員が祝福した

玉野「カズちゃんはワタサナイ・・・」

・・・約一名を除いて

第七十九問　恋の終わり、そして新たな恋！？（後書き）

なんかちょっと微妙だったかな？
次回も頑張ります

第八十問　和也ちゃんの過去編スタート（前書き）

過去編への突入の伏線です
かなり短いです

第八十問　和也ちゃんの過去編スタート

ＳＩＤＥ　和也

今日は月曜日、僕は退院して現在自宅療養中
・・・と、言うのは建前で、実際は僕の制服は（元教頭に）破かれて、新しいのを学園長が用意してくれることになっていたんだが、兄さんが僕の退院日を勘違いして報告していた為、まだ出来ていないとのこと

和也「退屈だなぁ・・・」

みんなは当然学校、姉さんは仕事。
外に出かけるのは一応自宅療養中ということになっているのであまりよろしくない
ってことで家にいるしかないわけだが・・・

和也「・・・部屋の掃除でもしようかな」

ま、兄さんの部屋ほど散らかってないけど・・・ん？

和也「あっ、これは・・・」

僕が見つけたのは、一枚の家族写真
写っているのは、十年前の僕と・・・死んだ両親、そして羽月

和也「・・・もう十年も経つんだな・・・いろいろあったなぁ・・・」

そう言いながら僕はあの頃のことを思い出す

第八十問　和也ちゃんの過去編スタート（後書き）

次回から和也の過去編が始まります

第八十一問　新たな家族と醜い感情（前書き）

和也の過去編
吉井家に引き取られてすぐの和也ちゃんのお話です

第八十一問　新たな家族と醜い感情

ＳＩＤＥ　和也

気がつくと僕は知らない部屋で眠っていた
僕が目を覚ますとお医者さんが来て・・・お父さんとお母さんと羽月が死んじゃったことを伝えられた
僕はその言葉の意味をすぐに理解できなかった・・・理解したくなかった・・・
でも・・・少しずつ思い出していく・・・
もはや人の形をしてなかった両親・・・
そして・・・泣き叫ぶ妹の羽月が目の前で真っ赤に染まっていくあの光景を・・・

どうしてみんな死んじゃったの？
どうして僕だけ生きてるの？
・・・どうして・・・僕も一緒に・・・死なせてくれなかったの？
そして僕は・・・狂ったように病室で泣き出した

☆両親と羽月の葬式の日☆

親族Ａ「あの子、どうするのよ？」
親族Ｂ「知らねーよ、あいつらの子なんか」

親族C「ウチだってお断りよ」

親族の人たちが口論している
僕の両親は親戚の反対を押し切って駆け落ちのような感じで結婚したから親族に嫌われており、誰も僕を引き取ろうとしない
僕は・・・どうなっちゃうんだろう？

和也「ぐすっ・・・お父さん・・・お母さん・・・」

？「どうしたの？」

和也「え？」

？「なんで泣いてるの？」

和也「・・・みんな・・・死んじゃったんだ・・・だから僕、一人ぼっちになっちゃったんだ・・・寂しい・・・寂しいよ・・・」

？「・・・一人じゃないよ」

和也「？」

？「僕と友達になろう。これで一人じゃないよ。僕は吉井明久。君は？」

和也「・・・柊和也」

明久「和也だね？よろしくね」

そう言って目の前の男の子は僕に笑いかけた

？「明久、うろちょろしてないで、おとなしくしてなさい」

明久「あ、お母さんが呼んでるからまた後でね」

明久が母親の方に走っていく
変わった子、でも・・・とっても優しい子だな・・・
気がつくと僕は泣き止んでいた

☆数日後☆

どういう経緯でこうなったのかはわからないけど、僕は明久さんの家に引き取られることになった

明久「ほら和也、着いたよ」

和也「あ、はい。えっと・・・お邪魔します」

明久「違う違う。『ただいま』だよ！」

玲「そうですよ。今日からカズ君もウチの家族なんですから」

この人は吉井玲さん。明久さんのお姉さんで現在中学生

母親「まぁ、色々あったし、すぐに馴染むのは難しいかもしれないけど・・・アンタは今、アタシの息子でウチの家族なんだ。何も遠慮することなんてないよ」

明久さんのお母さんはそう言ってくれた
吉井家のみんなは僕にとっても優しくしてくれる。みんなとってもいい人だ
・・・でも・・・
時々寂しくなる・・・兄弟だ、家族だといっても、やっぱり僕はよそ者。
・・・明久さんが羨ましい・・・優しい両親が・・・家族がいる明久さんが・・・
そんな嫉妬のような醜い感情が僕の中に芽生えていた・・・

☆学校☆

僕は明久さんと同じ小学校に転入した
ちなみに明久さんとは別のクラスだ

先生「次、吉井。今回も百点だ。よく頑張ったな」

テストの答案が返ってきた
僕は・・・とにかく必死だった。
いい子じゃなきゃいけない
悪い子になったら捨てられるかもしれない
そしたらまた一人ぼっちだ
イヤだ・・・もう一人はイヤだ・・・

？「和也君、また百点ですか？凄いです！」

この人は同じクラスの姫路瑞希さん
やたらと僕に話しかけてくるけど、話題はほとんど明久さんのこと
そう、この子は明久さんのことが好きみたいだ
そのことに気付いてから僕の醜い感情は更に酷くなっていく・・・
家族だけじゃなく、たくさんの友達に囲まれて幸せな明久さんが羨ましい・・・

明久「あっ、和也」

そんなことを考えていると明久さんがこっちに向かってきた
タイミングが悪い・・・

明久「また百点だったんだ。凄いね」

和也「あ、うん・・・」

明久「そうそう、今日、僕の誕生日だから母さんがケーキ買ってきてくれるって」

・・・神様は・・・不公平だ・・・
・・・明久さんは僕が失ったものを全部持ってる・・・
両親・・・幸せな家庭・・・たくさんの友達・・・
明久さんはまだ何か喋ってたけど、僕はもう聞いていなかった・・・

明久「和也?どうしたの?」

和也「・・・さい」

明久「え?」

和也「うるさい!!」

瑞希「か、和也君!?」

僕はもう・・・嫉妬を抑えられなかった・・・

和也「なんなんだよ!自分は幸せだって自慢したいの!?もう・・・もう放っといてよ!!」

僕は明久さんを突き飛ばして、その場を走り去った

☆公園☆

和也「・・・はぁ・・・」

やってしまった・・・
もう・・・あの家には帰れない・・・
僕は・・・何やってんだろう・・・

？「おい、吉井」

声のするほうを見ると、男の子が十数人立っていた
確かウチの学校の悪ガキどもだ

ガキ大将「ちょっと勉強が出来るからっていい気になるなよな」

コイツはやたらと僕に絡んでくる
その理由はわかってる
コイツは・・・姫路さんが好きなんだ
だから姫路さんが僕に話しかけてくるのが気に喰わないんだろう

ガキ大将「姫路と仲がいいからって調子に乗るなよ」

・・・やっぱりね・・・

和也「そんなの知らないよ。あっちが勝手に話しかけてくるんだ」

ガキ大将「うるせえ！」

（バキッ）

いきなり僕は殴り飛ばされた

ガキ大将「おい、お前ら！やっちまえ！」

その言葉と同時に周りにいた連中が僕に殴りかかってきた
なんで・・・僕ばっかりこんな目に遭わなきゃいけないの？
僕がなにか悪いことした？
酷いよ・・・神様・・・

ガキ大将「よし、これでトドメだ」

ガキ大将はどこかから金属の棒を持ってきた
あんなので殴られたら死んじゃうかもしれないな・・・
でも・・・もういいや・・・
どうせ生きてたっていいことなんて何も無いんだ・・・
それに・・・死んだらみんなに会えるかもしれないし・・・

そんなことを考えてるうちにガキ大将は棒を振り上げ、僕は目を閉じる
そして振り下ろされ激しい痛みが・・・
・・・来ない？
おそるおそる目を開けると・・・

和也「明久・・・さん？」

明久さんが僕とガキ大将の間に立ち、棒を受け止めていた

明久「よくも・・・よくも僕の弟をいじめたな！？許さないぞ！」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　？？？

？「なんか面白いことねえかな・・・ん？」

公園の前を通ったとき一人の男の子を数十人で殴っている姿が見えたいじめか？

？「ったく、たった一人相手によってたかってみっともねえな」

そんなことを考えていたその時
集団のリーダー格の男が金属製の棒を持ってそれを振り上げ・・・
って!?
おいおいちょっと待てよ!
それはマジで洒落になんねえぞ!?
俺がいる位置からアイツラがいるところまで１０m以上ある
間に合わねえ・・・そう思ったその時・・・
一人の男の子が虐められてる子を庇うようにして金属の棒を受け止めていた

「よくも・・・よくも僕の弟をいじめたな!?許さないぞ!」

あいつ・・・あの子の兄貴なのか・・・
いや・・・それより・・・
あの人数相手にたった一人で立ち向かうつもりか?

?「弟のために身体を張るか・・・おもしれぇ」

第八十一問　新たな家族と醜い感情（後書き）

六歳の小学生にしては難しい言葉を使うとかそういうツッコミは無しの方向でお願いします

さて、最後に出てきた男の子は誰なんでしょうね？

次回も頑張ります

第八十二問　僕も強くなれるかな・・・（前書き）

むぅ・・・最近、忙しいから更新が遅れる・・・

第八十二問　僕も強くなれるかな・・・

ＳＩＤＥ　和也

明久「死にくされやぁぁぁっ！」

（ドゴッ）

ガキ大将「ぐあああああ」

明久さんがガキ大将の股間を全力で蹴り上げる

・・・アレは痛い・・・

ガキ大将「くっ・・・二人まとめてぶち殺してやる・・・やっちまえ！！」

そう言うと周りの連中は明久さんに殴りかかっていった

明久「『ぶち殺してやる』はこっちのセリフだ！お前ら、絶対に許さないぞ！！」

そして、明久さんはそいつらに立ち向かっていく

・・・無茶だ・・・

いくらなんでも相手が多すぎる

明久「ぐっ・・・負けるもんか！」

・・・なんで・・・？
なんでそんなに必死なの？
僕なんか放っとけばいいのに・・・
僕は・・・あんなに酷いことをしたのに・・・
なのに・・・なんで僕を助けようとするの・・・？

ガキ大将「くたばれぇぇぇ！！」

和也「！危ない！！」

いつの間にかガキ大将はさっきの棒を拾い、明久さんの背後で振り上げていた
ダメだ・・・当たる・・・そう思ったその時・・・

？「おりゃ！」

ガキ大将「ぐはっ！」

横から赤い髪の男の子が飛び蹴りを決め、ガキ大将は吹っ飛んだ

明久「君は・・・？」

赤髪の少年「こいつらぶちのめすんだろ？手ぇ貸してやるよ！」

明久「あ、ありがとう」

そして数分後

「「「「くそ・・・覚えてろよ！」」」」

たった二人で全員ぶちのめしてしまった

明久「はぁ・・・はぁ・・・」

和也「明久さん・・・」

明久「あっ！和也、大丈夫？」

和也「・・・んで・・・」

明久「え？」

和也「なんで・・・助けてくれたの？僕はあんなに酷いことをしたのに・・・」

明久「それはね・・・僕が和也のお兄ちゃんだからだよ。弟が虐められてたら助けるのは当然だよ。・・・何があっても和也は僕が守るからね」

和也「！」

そのセリフは・・・いつか僕が羽月に言ったセリフだった・・・
そっか・・・明久さんも僕と同じなんだ・・・
ただ・・・自分の家族を守りたいだけなんだ・・・
僕は・・・何をしていたんだろう・・・
自分は不幸？一人ぼっち？
僕の幸せは・・・こんなに近くにあった・・・
『一人ぼっちじゃない』って言って救いの手を差し伸べてくれた人は・・・こんなに近くにいたのに・・・
それなのに・・・僕は・・・

和也「う・・うわあああん」

明久「ちょ、ど、どうしたのさ！？」

和也「ごめんなさい・・・えっく・・・ごめんなさい・・・」

明久「いいんだよ・・・ほら、泣き止んで」

そう言って明久さんは僕を優しく抱きしめてくれた
温かさを感じながら僕の意識は遠のいていった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　明久

明久「？和也？」

和也「・・・すぅー・・・すぅー」

明久「・・・寝ちゃったか」

瑞希「明久くーん」

明久「あっ、瑞希ちゃん」

瑞希ちゃんがこっちに走ってくる

あの後、二人で手分けして和也を探していたんだ

瑞希「和也君は見つかり・・・ど、どうしたんですか！？二人とも！？酷い怪我です！」

僕と和也の怪我を見て瑞希ちゃんは慌てふためく

明久「へーきへーき。・・・っと、君も手伝ってくれてありが・・・あれ？」

僕は赤い髪の男の子のことを思い出し、お礼を言おうとしたが、もうそこに・・・彼の姿はなかった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　？？？

赤髪の少年「いたたた・・・無茶しすぎたかな？」

？「・・・雄二」

雄二「ん？翔子か？」

翔子「・・・その怪我は？」

雄二「ああ、ちょっとそこで喧嘩の加勢をな」

翔子「・・・雄二らしくない。いつもなら『くだらねえ』とか言って相手にしないのに・・・」

雄二「そうだな・・・一言で言ったら気に入ったからだな。大切な人を守る為に勝ち目の無い相手に立ち向かったアイツが・・・」

翔子「・・・雄二」

雄二「あ？」

翔子「・・・私がピンチのときは助けてくれる？」

雄二「・・・さぁな」

翔子「・・・雄二は酷い」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

和也「・・・ん・・・」

玲「あっ、起きましたね」

玲さんがこっちに気付いて声を掛けてくる

玲「全然目を覚まさないから心配しましたよ」

和也「・・・ごめんなさい」

玲「いいえ、アキ君から事情は聞きました。カズ君は悪くありません」

和也「！そうだ！明久さんは！？」

玲「大丈夫。まだ眠ってますよ。カズ君ほど怪我は酷くなかったですからね」

そっか・・・よかっ・・・
・・・ん?『まだ』?
窓の方を見ると光が差し込んでいた
どうやら僕は朝まで眠っていたらしい

玲「アキ君が傷だらけのカズ君を背負って帰ってきたときはびっくりしましたよ」

そっか・・・あの後、僕を背負って帰ってくれたんだ・・・

和也「明久さんは・・・どうしてこんなに優しくしてくれるんでしょうか・・・?」

玲「アキ君はバカですけど人のために行動できる優しい子ですから。それに・・・カズ君を引き取るきっかけになったのもアキ君なんですよ」

和也「え?」

玲「カズ君がこのままだと一人ぼっちになるって聞いて『そんなの可哀想だよ!お願い!あの子を助けてあげて!』ってお母さんに泣きついてきたんですよ」

和也「そうだったんだ・・・ここに居れるのは明久さんのおかげだったんですね。それなのに僕は・・・」

玲「勘違いしないでくださいね」

和也「え?」

玲「アキ君は別に恩を売りたいわけじゃないと思うんです。アキ君はいつもみんなに笑っていて欲しいって思っているだけなんですよ」

和也「・・・本当に・・・優しい人なんですね・・・」

玲「ええ、私の自慢の弟です」

凄いなぁ・・・他人のためにここまでできるなんて・・・

和也「僕も・・・なれるかな・・・?明久さんみたいな強くて優しい人に・・・」

玲「ええ、きっとなれますよ」

明久「ふぁ・・・おはよ・・・あ、和也、もう大丈夫なの?」

僕たちが話していると明久さんが起きてきた

和也「うん。もう大丈夫だよ」

明久「よかった。あ、お腹すいたでしょ？ケーキがあるんだよ。一緒に食べよう」

和也「え？明久さんの誕生日は昨日だったんじゃ・・・」

明久「和也と一緒に食べようと思ってとって置いたんだよ。ほら」

明久さんが冷蔵庫を開けるとそこには切り分けられたケーキが残っていた

明久「でも先にご飯を食べてからだね。持ってくるからちょっと待っててね」

和也「うん。ありがとう・・・『お兄ちゃん』」

翌日から僕とお兄ちゃんは空手道場に通い始めた

大切な人を守る為に・・・

第八十二問　僕も強くなれるかな・・・（後書き）

なんか明久がカッコイイ・・・

次回より文月学園一年生編に突入予定

第八十三問　優子、翔子との出会い（前書き）

和也ちゃんが高校生になりました

第八十三問　優子、翔子との出会い

ＳＩＤＥ　和也

僕が吉井家に引き取られて数年が過ぎ、僕と兄さんは来週から高校一年生
文月学園って所に入学することになっている
で、今日は・・・

母「本当は入学式を見てから行きたかったんだけどね・・・」

和也「仕方ないよ。お仕事だもん」

両親と姉さんが海外に出張することになった為、兄さんと一緒に空港まで見送りに来ているところだ

玲「うぅ・・・アキ君とカズ君の晴れ姿が・・・」

母「はいはい。しかし・・・和也は本当に文月学園でよかったのかい？アンタならどんな名門校でも余裕で合格だっただろうに・・・」

和也「うん。兄さんと一緒の学校の方が楽しそうだし」

母「ならいいけど・・・」

確かに中学校の先生からはこの辺で一番偏差値の高い名門校を進められた
でも・・・名門校の学費はとても高い
ただでさえ今まで育ててもらった恩があるのに、これ以上金銭面で迷惑をかけたくなかったので試験高で学費の安い文月学園を選んだのだ
・・・ちなみに今は『お兄ちゃん』ではなく『兄さん』と呼んでいるさすがに高校生にもなってお兄ちゃんって呼ぶのは恥ずかしいからね

母「さて、それじゃ留守は任せたよ・・・和也」

明久「ちょっと待って！それは普通、兄である僕に言うセリフじゃない！？」

母「アンタに任せたら家が廃屋に変わっちまうよ」

和也「あはは」

母「っと・・・ちょっと明久を借りていくよ」（ズルズル）

そう言って母さんは兄さんを引きずってどこかに行ってしまった

玲「カズ君、困ったことがあったらすぐに姉さんに言うんですよ。
そしたら姉さんは世界のどこにいてもすぐに駆けつけますから」

和也「うん、ありがとう、姉さん」（ニコ）

玲「／／／」

？

なんで顔を赤くするんだろう？

それにしても・・・

兄さんたちはどこまで行ったんだろう？

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　明久

母「・・・アンタから見て和也はどうだい？」

明久「・・・やっぱりまだ何かと遠慮してるような気がするよ」

昔は朝起きると家族の夢を見てよく泣いてたのに最近は泣かなくなった

でも・・・いつも朝は顔色が悪くて、僕が事情を聞いても『大丈夫、何でもないよ』って言うし、和也の部屋から、たまにうなされてる声が聞こえてくる

きっと僕たちに心配かけないようにしてるんだろう

進学についてもそうだ

和也は中学の成績は三年間ずっと学年二位だった（一位は瑞希ちゃん）

どんな名門校にでも入れるはずなのに学費の安い文月学園を選んで

いる
そうやって和也はいつも僕たちに気を遣っている

母「・・・やっぱりね・・・もっと甘えてくれてもいいんだけどね・・・」

明久「そうだね・・・」

母「わかってるだろうけど・・・和也のこと、ちゃんと守ってやるんだよ」

明久「うん」

和也を守る?当然だよ
僕はあの日、ひとりぼっちが寂しいと泣いている和也を見て、何があっても僕が和也を守る。そう心に決めたんだから・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

母さんたちが海外に行ってから一週間が経った
今日は文月学園の入学式だ

?「あっ、明久君、和也君、おはようございます」

明久「あ、瑞希ちゃん」

和也「おはよう、瑞希さん」

この人は姫路瑞希さん。僕が吉井家に引き取られてから初めてできた友達だ

瑞希さんも名門校を進められていたが、自宅から近いという理由で文月学園に入学した

・・・と、いうのは建前で、本音は兄さんと同じ高校に行きたいからだということを僕は知っている

瑞希「いよいよ入学式ですね。緊張します・・・」

和也「そうだね。同じクラスになれたらいいね（兄さんと）」（ボソ）

瑞希「！か、和也君！／／／」

明久「？」

僕が耳元で囁くと瑞希さんは顔を真っ赤にした

わかりやすい人だなぁ

瑞希「あっ、そういえば入学試験の結果、上位５０名だけ張り出すらしいですよ」

明久「へぇ～」

とまあそんな話をしているうちに学園に到着した
するとそこには大きな先生と思われる人物が立っていた

？「ん？お前ら新入生か？」

和也「はい、おはようございます」

明久＆瑞希「「おはようございます」」

？「そうか、俺は生活指導の西村だ。そこの掲示板にクラス表が張り出してあるから自分のクラスを確認して教室に行ってくれ」

明久「えっと・・・僕はDクラスだね」

和也「僕はCクラスだ」

瑞希「え？和也君Cクラスですか？私と一緒です」

明久「あっ、入学試験の成績も載ってるよ」

掲示板に目を向けると上位五十人の成績が張り出されていた
この学園のテストは変わっていて、点数に上限が無く、制限時間内であれば何点でも取ることが可能になっている

入学試験もそうだった

一位　吉井和也
二位　霧島翔子
三位　姫路瑞希
四位　久保利光
・
・
・

瑞希「和也君一位じゃないですか！凄いです！」

和也「そう言う瑞希さんだって三位じゃん」

明久「二人とも凄いなぁ・・・」

和也「さて、そろそろ教室に行こうか」

そう言って僕たちは教室へと向かった

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　翔子

翔子「・・・私はＣクラス。雄二は？」

雄二「俺はＤだな（助かった）おっ、入学試験の結果が出てるぞ。
お前は・・・二位か」

二位・・・
上には上がいる
この時はそう思っただけだった
・・・が、次の瞬間、私は驚愕する

四位　久保利光　３８５９点
三位　姫路瑞希　４２９６点
二位　霧島翔子　４３０３点
・　・　・　・　・
一位　吉井和也　４８００点

圧倒的な点差
入学試験で私は全力を出し切った
なのにこの点差

・・・凄い
私は・・・この人に勝ちたい
そう思っ・・・

翔子「・・・雄二？」（きょろきょろ）

・・・逃げられた

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　優子

優子「・・・」

なんなのよ・・・この化物みたいな点数は・・・
ちなみにアタシは３２４６点で９位
トップを取れるとは思ってなかったけど、まさかトップ３に１０００点以上差をつけられているとは思わなかった
特に主席の吉井君は圧倒的だ
どんな人なんだろう？
・・・あっ、三人とも同じクラスだ
どんな人なのか・・・楽しみね・・・

☆教室☆

？「一年間このクラスを受け持つことになりました。福原慎です。よろしくお願いします。ではまず、自己紹介を始めます。廊下側の人からお願いします」

順に進んでいき、次はアタシの番だ

優子「木下優子、趣味は読書です。よろしくお願いします」

まぁ、こんなもんかな？

翔子「・・・霧島翔子です。よろしくお願いします」

っと、たしか次席の人ね。どれどれ・・・

・・・綺麗な人・・・黒髪を方まで伸ばした日本人形のような少女

瑞希「あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

！確か三位の人だ

・・・小柄で可愛らしい、小動物のような子

身体のある一部は大きく成長している

・・・羨ましい

和也「吉井和也です。Ｄクラスに兄がいて、苗字だと紛らわしいので気軽に和也って呼んでください」

・・・出たわね学年主席
周りがざわついてる・・・無理も無い。あの成績を見れば誰だってどんな奴なのか気になる
アタシもその一人だ
しかし・・・みんながざわついてる理由はそんなことじゃなかった

優子「・・・は？」

吉井君を見てアタシは思わずそんな声をあげてしまった
小柄な体型（多分アタシより小さい）に幼い中性的顔立ち、その姿はまるで中学生・・・いや、小学生と言っても通じる。そんな少年がそこには立っていた

優子「（・・・可愛い）」

こんなに可愛い美少年が実在するなんて・・・

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

ＳＩＤＥ　和也

入学式が終わってもう下校時間だ
あっ、帰りにスーパーに寄って帰らなくちゃ・・・

？「吉井君」

和也「ん？」

優子「学年主席の吉井和也くんよね？初めまして、木下優子よ。よろしくね」

和也「あ、うん。よろしく。あと、僕のことは和也でいいよ」

優子「わかったわ。それにしても凄い点数だったわね」

和也「暗記が得意なんだ。日本史と世界史が両方７００点位」

優子「７００！？凄いわね・・・」

和也「ま、その代わり数学が苦手で５０点くらいだったけどね・・・」

優子「極端ね・・・」

？「・・・吉井」

和也「ん？」

翔子「・・・私は霧島翔子、よろしく」

和也「うん。よろしくね。あと僕のことは和也でいいよ」

翔子「・・・わかった。今回は私の負け。でも、次は負けない」

それだけ言うと霧島さんは去っていった

優子「どうやらライバル視されてるみたいね」

和也「あはは。あ、僕は買い物に行かなきゃいけないからこれで・・・」

優子「わかったわ。また明日ね」

そう言って木下さんと別れて教室を出る

木下さんに霧島さんか・・・

二人とも悪い人じゃなさそうだし、仲良くなれたらいいな

そんなことを考えながら僕はスーパーに向かった

※『第二十問　美波との出会い』へ続く※

第八十三問　優子、翔子との出会い（後書き）

う～ん・・・

なんかうまくまとまらないな・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4082t/

バカと義弟と召喚獣

2011年12月3日14時55分発行